

推
進
事
業
学
術
フ
ロ
ン
テ
ィ
ア

劣
化
画
像
の
再
生
活
用
と
資
料
化
に
関
す
る
基
礎
的
研
究

研
究
代
表
者
國
學
院
大
學
日
本
文
化
研
究
所
杉
山
林
繼

平
成
十
六
年

劣化画像の再生活用と 資料化に関する基礎的研究

平成 11 年度～平成 15 年度私立大学学術研究高度化推進事業
（「学術フロンティア推進事業」）研究成果報告書

平成 16 年 5 月 15 日

学校法人名 学校法人 國學院大學

大 学 名 國學院大學

研究組織 國學院大學日本文化研究所

研究代表者 杉 山 林 繼

（國學院大學日本文化研究所所長）

劣化画像の再生活用と

資料化に関する基礎的研究

平成11年度～平成15年度私立大学学術研究高度化推進事業
（「学術フロンティア推進事業」）研究成果報告書

平成16年5月15日

学校法人名 学校法人 國學院大學

大 学 名 國學院大學

研究組織 國學院大學日本文化研究所

研究代表者 杉 山 林 継

（國學院大學日本文化研究所所長）

刊行にあたって

國學院大學学術フロンティア運営委員会

委員長 杉山 林継（日本文化研究所所長）

第1段階の5年が終わった。すぐに申請して第2段階へ入りたいと考えたが、大学の渋谷再開発計画が進行中で、これと合わせるためには2・3年のずれが生じてきた。同時に第2段階を、これまでのものをベースとしながらも、飛躍的に新しいものとするためには、準備が間に合わなかったことも事実であった。

平成10年度に文系にこの学術フロンティアの事業が当時の文部省によって開かれた時、大学人の内でも事の重要性を理解している人は残念ながら少なかった。既に理科系ではこれ以前から実行されていたのであるが年度途中の実施に応募することができず、平成11年度に申請したのであった。一方、本学ではこの時まで、拠点を渋谷に集中化する計画も、渋谷の再開発計画も本格化していない状況であり、昭和32年建設の老朽化した校舎の建て直しも進行していなかった。そのような中で、一部施設の改造による研究室増設によって、事業を興すことにした。最小の施設で最大と言わないまでも大きな成果をあげてこられたのは前学長阿部美哉氏のリーダーシップによる所が大きかったし、当研究所のこれまでの累積があったことにもよる。

大学が高等教育の場であると同時に最新の研究をする場でありその研究を開発する時に若手を養成していく、特に研究を中心とした大学院大学の拡充は、大学の足腰を強くする必須の条件であり、その後文部科学省が全額補助金による21世紀COEプログラムを組み、国立大学の民営化時代とも重なって大学存続問題とも合せ考えられるようになって始めて、今後の大学のあり方、国の大学助成の方向性が認識されはじめた。

國學院大學がこれまでに築いて来た学問は、日本的なものの考え方であり、日本人のあり方であった。創立以来120年という近・現代を私立の大学で小さいながらも日本一を維持して来られたのは、その中核にこの学問があり、神道という日本的生きざまを幅広く追求して来たからと言えよう。

これから新しい学問も望まれるところだが、これまでの膨大な学術資料は活かして使わなければならない。大学における学術資産であり財産であるこれらの運用は、今後の研究者養成のための重要な部分を占めることになる。

小規模ではあったがこの5年間にその学術資産のごく一部であり、現代人でも理解できる画像という問題をとりあげて、その今風なデジタル化、あるいはインターネットによる利用など自分たちの研究だけでなく、開かれたデータとして活用に耐えうるものと検討し、実行化して来た。この方法論を次期には、多量の文書、記録、絵画、民俗、考古等々様々な媒体によるデータ利用の基礎として演繹して行くことによって、さらには共同研究機関等の連携を密にすることによって、全国的にネットワークを拡め、研究活動の拠点となることを考えて行きたい。

ともかく、文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業 - 学術フロンティア推進事業の補助金を受けられた効果は本学本所にとって大きなものであった。

この事業によって、21世紀COEプログラムと合せて、大学院生を中心とする若手研究者が活力を得て動き出していることは事実である。この力をさらに飛躍させることをおし進めなければならない。

平成16年5月1日

はじめに

國學院大學學術フロンティア事業実行委員会

委員長 小川 直之（日本文化研究所教授）

平成11年度に文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業として指定を受けた学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」は、平成15年度に最終年度を迎え、ここに5年間の総括報告書を刊行する。

人類が、文字に加えて表現手段としての映像を手に入れたのは、1839年にフランス人のマンデ・ダゲールによってダゲレオタイプの写真法が発明されてからであった。現在の写真技術につながるこの発明は、ものやことを二次元世界に表現するばかりでなく、撮されたものやことを後世に伝える手段ともなり、精神世界にも大きな変化をもたらしたといえる。

日本に写真技術が伝えられたのは幕末のことであったが、その当初から肖像写真は主要な撮影主題であった。肖像写真は、単に人物の画像としてではなく、その肖像が社会化されることによって特異な政治性や精神性が付与されていったのである。写真技術の普及は、位牌に加えて肖像を祭祀の対象ともし、誕生からの家族写真アルバムは家族の歴史を表象するものになっている。写真技術の歴史は、その成立からまだ170年足らずであるが、精神世界においても大きな位置を占めるようになっている。

学術世界においても、人類の文化や歴史の研究は長い間、文字記録と造形物が対象とされてきたが、写真技術の普及によって文字記録や造形物では資料化が困難なものやことが資料化できるようになった。しかもこの画像は、ものやことを視覚化するだけではなく、ものやことが置かれている情景をもあらわすことで、文字記録や造形物とその背景とをつなぐ資料ともなる。ある場面を写し取った写真は、撮影者の意図を超えた情報が盛り込まれてもおり、学術資料としての有用性は極めて高いのである。こうした価値をもちながらも、写真の資料的位置づけについては十分な議論がなされてこなかったし、文字記録や造形物に対する二次資料という認識に留まっていた。

國學院大學には、大場磐雄博士撮影の諸写真、折口信夫博士にかかる写真や画像資料、柴田常恵による諸写真をはじめとして、多くの画像資料が所蔵されている。これらは明治時代以降の、日本の文化や歴史に関する画像資料であり、本事業では、こうした劣化画像を最新のデジタル技術によって再生させ、学術的な再評価を行うことで資料化をはかるものであった。画像資料の調査研究は、春日大社資料、武田塾資料、宮地直一博士資料など、学外資料にも及んでおり、研究成果は『柴田常恵資料目録』、『大場磐雄博士資料目録』、『國學院大學学術フロンティア事業研究報告 人文科学と画像資料研究』第1集、さらに Web 上でも公開している諸論文に結実している。

平成16年度からは、さらに本事業の2ヶ年の継続が決定されており、さらなる研究の進展と幅広い活用に向けての資料公開が進められることになる。こうした活動を通じて、画像資料の一次資料としての認識を深めることが急務である。

目 次

刊行にあたって	杉山 林継 ...	i
はじめに	小川 直之 ...	ii
目次		iii
様式1 平成11年度～平成15年度私立大学学術研究高度化推進事業 「学術フロンティア推進事業」研究成果報告書概要		1
学術フロンティア事業発足にあたって - 第1回実行委員会の記録から -		35

研究成果報告

資料デジタル化事業の方法と成果	中村 耕作 ...	49
大場磐雄博士資料の研究	山内 利秋・加藤 里美 ...	53
- 1 大場磐雄博士写真資料の概要	荒井 裕介・中村 耕作 ...	54
- 2 大場磐雄博士資料の目録作成	深澤 太郎・山添 奈苗 ...	57
- 3 ガラス乾板の劣化について	遠藤 美穂 ...	61
- 4 被写体の現地調査	高野 晶文 ...	63
柴田常恵資料の研究	田中 秀典 ...	66
- 1 近代日本の文化財保護行政における柴田常恵	田中 秀典 ...	67
折口信夫博士写真資料の電子情報化	小川 直之 ...	70
櫻井満博士画像資料のデジタル化	齋藤ミチ子 ...	76
杉山林継博士保管資料の電子情報化	加藤 里美 ...	88
- 1 杉山林継博士写真資料 - 神坂峠・入山峠について -	関根 信夫 ...	89
- 2 杉山林継博士写真資料 - 中央高速自動車道関連遺跡資料 - ...	加藤 里美 ...	90
外部機関所蔵資料の調査	加藤 里美 ...	91
- 1 短報：春日大社所蔵の写真資料について	川口 拓広・関根 信夫 兼古 健吾・山内 利秋 ...	92
- 2 武田塾所蔵の写真資料について	加藤 里美・山内 利秋 橋本 陽子・石田 成年 ...	95
- 3 宮地直一博士資料について	田中 秀典 ...	98

歴史系雑誌に掲載された写真についての研究	平澤加奈子	...100
画像資料からの試み 銅鐸の出土状況をつたえる一枚の写真	井上 洋一	...101

研究成果の公開活動

研究成果の公開	加藤 里美	...105
We bサイトによる成果公開	中村 耕作	...107
国際シンポジウム		
『画像資料からよみがえる文化遺産』について	山内 利秋	...110
講演記録『大場磐雄博士と登呂遺跡』	大塚 初重	...112
講演記録『記録資料を後世に残す - 写真画像の保存 - 』	荒井 宏子	...132
講演記録『峠の祭祀 - 神坂 - 』	杉山 林継	...151
- 1 補論：1 神坂峠の現状と景観	中村 耕作	...164
- 2 補論：2 古代東山道と神坂	宇野 淳子	...169
刊行物	加藤 里美・中村 耕作	...172

研究成果と今後の展望

研究成果と今後の展望	小川 直之	...175
------------------	-------	--------

(様式1)

平成11年度～平成15年度私立大学学術研究高度化推進事業 「学術フロンティア推進事業」研究成果報告書概要

- 1 学校法人名 学校法人國學院大學 2 大学名 國學院大學
 3 研究組織名 國學院大學日本文化研究所 4 プロジェクト所在地 東京都渋谷区東4丁目10番28号
 5 研究プロジェクト名 劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究

6 研究代表者	研究代表者名	所属部局名	職名
	杉山林 継	國學院大學日本文化研究所	所長

- 7 プロジェクト参加研究者数 31 名 8 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

9 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
杉山 林継	國學院大學 日本文化研究所・所長	考古学画像史料の復元	代表者
小川 直之	國學院大學 日本文化研究所・教授	民俗方法論	実行委員長
茂木 栄	國學院大學 日本文化研究所・助教授	劣化スライドフィルムの補色	実行委員
齋藤ミチ子	國學院大學 日本文化研究所・助教授	探訪地の原風景との比較	実行委員
黒崎 浩行	國學院大學 日本文化研究所・講師	画像資料の公開	実行委員
粕谷 崇	國學院大學 日本文化研究所・兼任講師	資料画像処理・保存修復担当	実務担当
山内 利秋	國學院大學 日本文化研究所・兼任講師	資料画像処理・保存修復担当	実務担当
大島 敏史	國學院大學 写真室・嘱託	資料画像処理・保存修復担当	実務担当
加藤 里美	國學院大學 日本文化研究所・兼任講師	資料画像処理・保存修復担当	実務担当
平澤加奈子	國學院大學 日本文化研究所・共同研究員	資料画像処理・保存修復担当	実務担当
田中 秀典	國學院大學 日本文化研究所・共同研究員	資料画像処理・保存修復担当	実務担当

(共同研究機関等)

宮家 準	國學院大學大学院・教授	修験道・山岳宗教の検討	実行委員
藤本 強	國學院大學大学院・教授	考古学画像史料の復元	実行委員
小林 達雄	國學院大學大学院・教授	考古学画像史料の復元	実行委員
倉石 忠彦	國學院大學大学院・教授	民俗画像資料に見る都市化	実行委員
熊谷 常正	盛岡大学文学部・教授	東北考古資料の検討	実行委員
藤沼 邦彦	弘前大学人文学部・教授	東北考古・民俗資料の検討	実行委員
伊藤 幹治	元成城大学文学部・教授	宗教人類学からの検討	実行委員
青木 繁夫	東京文化財研究所・修復技術部長	劣化資料の保存・修復の検討	実行委員
井上 洋一	東京国立博物館 事業部教育普及課・課長	考古資料の比較検討	実行委員
池田 栄史	琉球大学法文学部・教授	南方文化資料の検討	実行委員

< 研究者の変更状況（研究代表者を含む） >

旧	プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	総括（画像資料利用法）	國學院大學 日本文化研究所・所長	阿部 美哉	代 表 者
	文書資料のデジタル化と補正	國學院大學大学院・教授	大谷 貞夫	実 行 委 員

（変更の時期：平成13年4月1日）

新	変更前の所属・氏名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	國學院大學 日本文化研究所・教授 杉山 林継	國學院大學 日本文化研究所・所長	杉山 林継	代 表 者
	國學院大學 日本文化研究所・共同研究員 加藤里美	國學院大學 日本文化研究所・兼任講師	加藤 里美	実 務 担 当

（変更の時期：平成14年4月1日）

新	変更前の所属・氏名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	新潟大学・教授 藤本 強	國學院大學大学院・教授	藤本 強	実 行 委 員

（変更の時期：平成15年4月1日）

新	変更前の所属・氏名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	國學院大學大学院・教授 小川 直之	國學院大學 日本文化研究所・教授	小川 直之	実行委員長
	國學院大學大学院 博士課程後期在学 平澤加奈子	國學院大學 日本文化研究所・共同研究員	平澤加奈子	実 務 担 当
	中央大学大学院 博士課程前期課程在学 田中 秀典	國學院大學 日本文化研究所・共同研究員	田中 秀典	実 務 担 当

（変更の時期：平成15年12月1日）

新	変更前の所属・氏名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	國學院大學・学長 阿部 美哉		阿部 美哉	死 没

（変更の時期：平成15年12月30日）

新	変更前の所属・氏名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	國學院大學大学院・教授 大谷 貞夫		大谷 貞夫	死 没

10 研究の概要

（1）研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

日本文化研究所は、日本文化に関する清深な研究を行い、これを汎く世界文化と比較しつつ、民族的伝統の本質と諸相とを把握することを目的として、昭和30年に設立された研究所である。以来さまざまな研究を行い、その研究紀要は91輯まで刊行し、また『神道要語集』『ユーカラ集』『校本日本書紀』の刊行など多くの実績をあげてきた。当研究所を中心に設置された研究プロジェクト「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」は、従来からの文字テキストならびに伝承文化資料等の研究に加え、幕末期以降に蓄積されてきた、人文分野における古写真を中心とする画像資料について、総合的、専門的な見地からその保存と再生に関する基礎的な研究を行い、新たな研究分野を確立する目途を立て、さらに画像資料の学術的価値の再認識と幅広い活用の促進をはかることが、目的と意義である。

いわば画像資料学ともいえる分野の確立を目指すのであるが、本学には創立以来120年間に蓄積された学術資料として、多くの写真資料や遺跡測量図、スケッチ、土器・石器等の拓本などがある。具体的にはこうした写真資料を中心としたこれら画像資料について、関連する研究者や企業との連携・協力を得ての再生・保存法に関する研究開発を土台に、画像資料の学術的有効性に関する諸分野からの研究と検討を行う。そして、これを踏まえて学問融合をはかり、さらには、古写真を所蔵している全国の諸機関・神社などとの連携によって各地に埋もれている画像資料を発掘しつつ、日本の風土や伝統文化・歴史についての当該資料の現代的活用を進める研究活動を展開していくことである。

(2) 研究組織

当研究プロジェクトに関する研究組織は、全学的な立場からこの活動を調整・推進していく運営委員会と、研究活動を実施していく実行委員会の2段階からなっている。運営委員会は学長・法人常務理事・大学院委員長・事務局長・日本文化研究所所長(委員長)・同事務・学術フロンティア事業実行委員長などによって構成されている。このもとでの実行委員会は、日本文化研究所教員5名・共同研究機関である大学院文学研究科教員5名、他大学等共同研究者6名、ならびに実務担当者で構成され、日本文化研究所所長と委員長が年度事業の推進にあたってきた。研究代表者は、運営委員長である日本文化研究所所長があたり、事業を推進してきた。具体的には、研究代表者である日本文化研究所所長杉山林継教授による総括のもと、研究部門としては、劣化画像の再生・保存・活用に関する部門、劣化画像の同定とデータベース(目録)化に関する部門、劣化画像の資料化と活用に関する部門、劣化画像資料の所在等情報収集に関する部門という4部門を定めた。ただし、研究プロジェクトの第一義的な目的と意義は、劣化画像の再生保存・資料化にあるため、研究推進組織は、対象資料の特性を最優先して、上記については、画像資料コレクションごとに事業組織を編成し、これに前述研究部門の を加えて活動を行ってきた。

画像の再生保存・資料化は、大場磐雄博士資料班、柴田常恵資料班、折口信夫博士資料班、櫻井満博士資料班、杉山林継博士資料班という5グループを組織した。大場・柴田・杉山資料については杉山林継教授、折口資料については小川直之教授、櫻井資料については齋藤ミチ子助教授のもとで実務担当者が主導しながら、上記の再生保存、の同定・目録作成などを進めた。については、劣化画像の学術資料化に関する部門であるので、実行委員が個別にあるいは共同して研究を進める体制をとり、考古学、歴史学、民俗学、宗教学、文化財学、地域資料学の立場からの資料論研究、学術利用・博物館等における展示利用、Web上における公開利用などについての研究を進め、それぞれを実行委員会や当該プロジェクトのシンポジウムやフォーラムで融合・統合するという組織体制をとってきた(別紙1参照)。

また、当該プロジェクトでは研究代表者のもとにリサーチ・アシスタントを置き、さらに上記研究部門に大学院生、学外研究者などを日本文化研究所臨時雇員として適宜配置してきた。これらの者たちが、実行委員のもとで実務作業にあたりながら研究活動を行い、研究会・フォーラム・シンポジウムへの参加と発表、年間の事業報告書への執筆も担当するなど、若手研究者の育成も行ってきた。

これらの研究活動支援については、大学事務局である日本文化研究所職員ならびに平成15年度からは研究協力課職員が参加し、円滑な庶務・会計事務を担当してきた。

(3) 研究施設・設備等

研究施設としては日本文化研究所施設の他、資料デジタル化研究室を新たに設置した。当施設の整備計画は画像資料のデータベース化と劣化画像の補正を目的とし、さらにオリジナルの写真資料保存を視野に入れ、一方で大学敷地の制限も考慮して整備計画を立案した。その結果、従来写真室として使用されていた作業空間を改造し、コンパクトかつ効率のよい「資料デジタル化研究室」を設け、現在に至っている。

資料デジタル化研究室の面積は54㎡、使用者人数は20名となっている。設備は劣化画像の処理、及び画像データベース管理システムとしてのコンピューターで、サーバ：1、Dvd-Ramライブラリ：1、クライアント：3、スキャナー：2、フィルムスキャナー：1、モノクロプリンター：1、カラープリンター：1から構成されている。利用時間数は1日約8時間である。日本文化研究所施設には、画像処理を初めとする作業用のコンピューター：2、モノクロプリンター：1が設置されている。

(4) 研究成果の概要

研究プロジェクトの計画や目的・意義と関連づけて、当初の目標をどれだけ達成したか記述するとともに、新たに得られた知見などについても具体的に記述してください。

國學院大學には、創立以来120年の間に蓄積された学術資料が膨大に保存されている。こうした学術資料の内、図書・文献類は図書館が管理・活用し、土器、祭祀用具などの実物資料については学内の考古学資料館と神道資料館が管理・活用してきた。しかし、図書・文献類と実物資料のはざまにある写真類・図面類などの画像資料は、その活用の途が十分につけられてきたとはいえない。従来の研究では調査研究にともなう画像資料は、いわば一次資料としての扱いがされてこなかったかの観があり、こうした状況は全国の各研究機関でも同様であるといえる。しかし、写真技術が我が国に伝えられてから150年程がたち、しかもこの間、自然環境、生活景観、生活様式が大きく変貌し、写真を中心とした画像資料の有効性については、さまざまな分野で議論がはじまっている。

従来、等閑視されたことが多く、十分な保存・活用が行われてこなかった画像資料、中でも劣化が進んでいる古写真の再生保存と学術的な資料化、さらに現代社会のなかでの活用について、基礎的な研究を進め、今後の更なる利用を期そうというのが当該プロジェクトの目的と意義である。

これを踏まえて前記のような組織を編成し、具体的には次のような研究成果をあげることができた。研究組織の劣化画像の再生・保存・活用に関する部門、ならびに劣化画像の同定とデータベース（目録）化に関する部門に関しては、本学所蔵資料の特性を鑑み、大場磐雄博士資料、折口信夫博士資料などコレクション別に研究活動を進めたので、まずこれに従ってその成果をあげていく。ついで劣化画像の資料化と活用に関する部門、劣化画像資料の所在等情報収集に関する部門における成果を、具体的事業別にあげていく。

1、大場磐雄博士資料の研究

大場磐雄博士は、我が国の神道考古学の創始者であり、その研究は現在に至っても大きなものがある。従来から考古学関係者をはじめとして、大場博士が発掘調査にかかわった地域などから、その画像資料についての閲覧が要望されていた。そこで、当該プロジェクトでは、まずはじめに大場博士による画像資料の再生保存作業から進め、ここでの一連の作業経験を踏まえて柴田常恵資料、折口信夫博士資料など、順次再生保存の作業を進めた。

画像資料の再生保存は、ガラス乾板など原版のクリーニング、デジタル化の作業から始めたが、この作業の立ち上げから習熟段階では、堀内カラー、コスモスインターナショナル、日立製作所といった企業と連携し、人文分野における画像資料の再生保存の方法について研究を行い、資料デジタル化研究室の整備を進めた。これに基づく成果概要は次の通りである。

1) 写真資料（ガラス乾板・硝酸セルロースフィルム）のデジタル化

大場磐雄博士ガラス乾板資料は対象資料数4276枚のデジタル化を終えた。ガラス乾板という厚みのある資料の性質からフラットヘッドスキャナーによるスキャニングを行い、データをDVDに保存する方法をとった。研究開始当初はDVDを保存の媒体とすることが最も確実であり、リスクを伴わない方法であったためこの方法を採用したが、DVDとコンピュータ - 間に不具合が生じ、外付けのハードディスクを予備の記憶媒体として設置し、対応してきた。データ化については当初の目標を達成した。しかし、作業終了間際となって他機関に長期に亘って一括貸し出ししていた資料826枚が当研究室とは別の個所で保管されていることが明らかとなった。従って、これらについてはクリーニングおよびスキャニング等の作業は今後行うこととし、枚数と状態の確認を済ませた後に、研究室で保管している。

2) 乾板の保管箱にみられる文字資料の編集（大場磐雄博士直筆メモ書き）

大場磐雄博士ガラス乾板資料には、大場博士自身が乾板を整理し保管した封筒や紙類に被写体について書き記した、いわゆるメモ書きの資料が付随している。この内容は撮影者である大場博士本人の直筆によるものであり、ガラス乾板を活用していく上では不可欠な情報であることから、解読困難なメモ書きについても、書籍調査や大場博士ゆかりの方々との共同研究を重ねることで、これらを読み解き、テキストデータ化し作業を終了した（平成15年12月10日現在）。

3) 被写体の現地調査

大場磐雄博士資料にはフィールドワークによる各地の調査記録が含まれている。例えば登呂遺跡や平出遺跡、神坂峠遺跡などの現在遺跡公園や博物館として活用されている箇所も少なくない。こうした資料に関しては、各地に保存されている資料と大場磐雄博士資料を比較検討する作業を経ることで、大場博士資料を再評価すると同時に学界における研究促進をうながすものである。

4) 冊子・拓本・実測図等の周辺資料のデータ化

大場磐雄博士資料には、現地調査を行った際に収集した各地の地図や小冊子、および遺跡や遺物の実測図等があり、これらのデータ化を進めた。保存されている資料は、写真を撮影した際に収集されているものが大部分を占めており、これらをデータ化することは大場博士資料の有効利用を促進するために非常に重要な位置をしめている。作業成果は12年度事業報告に縄文時代編、13年度事業報告に弥生時代編、14年度事業報告に古墳時代編、15年度事業報告（平成16年3月刊行予定）に歴史時代前編・旧石器時代編を公開した。この成果公開に伴って、各研究機関や研究者から資料の問い合わせや資料調査の申請があり、学界への寄与が認められた。

5) ガラス乾板の保存作業

ガラス乾板は、支持体であるガラスとその上に塗布された乳剤層から成り立っている。乳剤は、ゼラチン中に感光性のハロゲン化銀が懸濁したものである。従って、ガラス乾板の劣化は、まず、ガラスの劣化と乳剤層の劣化に分けられる。

ガラスの支持体の欠点は、その物理的な弱さにあるが、大場博士資料は、10枚か20枚ずつ未露光の乾板を包装していた頑丈な乾板箱内に、2枚ないし3枚ずつ紙袋（現像時の写真袋、もしくは封筒）に包まれて保管され、互いに擦れて傷つく事が防がれていたため、保存状態は良好であった。しかし、銀鏡、黄変色や剥離ひび割れといった劣化の兆候が観察されたことから、表面に付着したホコリなどを丁寧に除去した後、ガラス乾板保存用の特注保管箱を用意し、一枚一枚が接触することのないように収納した。また、保管箱は温度変化の少ない場所に安置し、保存に努めている。

6) ガラス乾板資料とメモ書きの検索システム

データ化したガラス乾板とガラス乾板の保存袋上に見られるメモ書きを、データ上で同時に検索して閲覧できる方法を株式会社堀内カラーとの共同研究により作成した。これにより蓄積されてきた画像資料をデータ化し、加えて資料の持つ一次情報を同時に検索するシステムが確立された。

また、この検索システムは現在作成中である成果報告書にCDとして添付し、研究者へ配布することを計画している。

2、柴田常恵資料のデータ化

大場磐雄博士ガラス乾板資料の検索システム開発に到達するまでの一連の作業は、他の蓄積資料についても応用することが可能で、これに基づいて柴田常恵資料（紙焼き写真資料）のデータ化を開始した。柴田資料は、文学部史学科の考古学研究室に所蔵されていた資料で、写真アルバムにして47冊、手帳83冊、拓本資料およそ6,000枚、ノート100冊等である。このうちアルバムにある写真（紙焼き）をスキャニングし、紙焼き写真の裏側などに記された書き込みなどを資料化する作業について、5,837点が終了した。

柴田常恵は大正から昭和初期にかけて文化財保存に大きく関わった人物であり、その画像資料は考古学分野のみならず、広く文化財分野においても重要なもので、強い関心が示されている。画像資料の再生保存が終わり、我が国の文化財保護の歴史や視点の研究にも有用で、多くの活用が予測できる。

成果の公開として、これらのうち資料の約半数（2,733枚）にあたる東日本の資料を中心に『柴田常恵写真資料目録 1』を刊行する（平成16年1月刊行予定）。残りの半数の資料については、以後順次資料目録を発行し、大場博士資料同様にデータ配信を実現する計画である。

3、折口信夫博士資料

国文学や民俗学の分野で独自の境地を拓いた折口信夫博士は、約6,000点にのぼる画像資料を残している。これらは本学文学部の付置研究所である折口博士記念古代研究所に所蔵されており、当該プロジェクトではこのうちの歌舞伎関係写真（絵葉書）を研究対象とした。すべてが第二次世界大戦前の大正・昭和初期のもので、コレクションとしては貴重なものである。その点数も2,452点があり、我が国の歌舞伎絵葉書コレクションとして有数のものであることがわかった。

当画像資料については、デジタル化がすべて終了したが、これについては立命館大学アトリサーチセンター（学術フロンティア推進研究「京都演劇・映像デジタルアーカイブス」代表・赤間亮教授）との共同研究を進めてきた。

折口博士による歌舞伎絵葉書については、その演目・俳優・文字情報についてのデータベース化も進めており、平成15年度中には完了する予定である。このデータベース作成の途次で、戦前の歌舞伎絵葉書には英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語・イタリア語、さらにハンガリー語・チェコ語による「郵便はがき」印刷があり、極めて国際性の高いものであったことも判明した。明治33年から作成されるようになった絵葉書については、近年ようやく学術研究の対象となり始め、重要な資料群の一つとして提供できる準備ができた。

約2,500点の歌舞伎絵ハガキのデータベースは終了し、3月末にはホームページ上に公開を始める予定である。

4、櫻井満博士資料のデジタル化

櫻井満博士による画像資料は303点のリバーサルフィルム資料があり、これについてデジタル化を進めた。櫻井博士資料には、現在では行われなくなっている、12年に一度の沖縄県知念村久高島のイザイホーの写真が83枚含まれる。昭和41年に撮影されたもので、昭和55年を最後に行われていない祭りの写真として貴重である。35mmリバーサル写真はすでに退色が進んでいるが、現状でデジタル化し、そのカラー版を保存することができた。

この資料については、平成13年から当該プロジェクトのホームページ上で公開しており、東京外国語大学からその使用が申請され、外部利用が始まっている。

5、杉山林継博士保管資料の複写（デュープ）とデータ化

大場磐雄博士が中心となって実施した発掘調査記録は、ガラス乾板の製造停止以後は35mm リバーサルフィルムへと変化する。これらの資料は当該プロジェクトの杉山林継博士が長期間にわたり保管してきた。未だに十分な資料が公開されていないものも存在するため、継続して保管することと学界の公開責務があると認識し、写真資料のデジタル化と公表を実施した。

現在までに神坂峠遺跡（203点）、入山峠遺跡（321点）、中央道関連遺跡（464点）について当該作業を終了し、Web上で公開している。オリジナルのリバーサルフィルムの保護のため、劣化したマウントを交換し、さらに複写（デュープ）した資料およびデジタルデータ（CD-ROM）を作成した。資料利用には複写（デュープ）したものかデータ（CD-ROM）版を用い、オリジナルを保護する一方で資料の有効活用を図ることができた。

6、外部機関所蔵資料の調査

本学所蔵の資料以外に、平成13年7月に春日大社所蔵の写真資料、平成14年8月に大阪府柏原市武田塾所蔵の写真資料、平成15年2月に東京都世田谷区宮地直一資料の調査を行った。こうした調査の依頼は当該プロジェクトの研究結果が公に認知されつつある傾向として捉えることができる。

6-(1)春日大社所蔵資料の調査

奈良市に所在する春日大社はダンボール箱に5箱、各箱に300枚程度、総計約1,500枚のガラス乾板が収蔵されていることが判明した。保存状況は比較的良好であり、写真は祭事に関する記録が中心で、中には現在では行われていない祭事も含まれる。詳細な目録作成は今後の課題であるが、春日大社以外にもこうした資料を所蔵する神社が想定され、画像資料研究と本学の独自性ともいえる神道学に大いに寄与することが指摘できる。

6-(2)武田塾所蔵資料の調査

大阪府柏原市に所在する社会福祉法人武田塾は、大阪府立修徳館の創立者で、大阪府警察曾根崎署長となった武田愼次郎氏によって大正15年に設立され、現在にまで続く、我が国における初期の感化教育施設として極めて重要な位置づけにある。柏原市によって平成11年に旧施設の調査が実施され、武田氏の日誌や金銭出納帳などとともに画像資料が多く含まれていることが分かった。当該プロジェクトでは、画像資料の位置づけや性格などの調査を行った。

武田塾所蔵の画像資料は、写真資料（プリント636点、ガラス乾板103点）、絵葉書（195種965点）の他、16mmフィルム4本がある。これらの内容は、施設内の児童の様子や催し物の記録、記念写真など多岐にわたっており、分析にはさらに時間を要する。

6-(3)宮地直一博士資料の調査

宮地直一博士は近代における神道史学の第一人者であり、先駆的な研究者として位置づけられており、現在においても高い評価を受けている。宮地博士資料は東京都世田谷区にある宮地邸に所蔵されていた資料で、蔵書、文化財調査報告書、軸物、葉書類、自筆原稿とともに調査時に撮影した写真とガラス乾板がある。特に当時の調査を物語る貴重な資料が多く存在し、質・量ともに個人蔵としては特筆すべきものがある。現在詳細な目録を作成中であるが、これらの資料は國學院大學日本文化研究所で保管・管理することとなり、今後の整理によってさらに高い評価を受けることが予想される。

7、研究成果の公開

7-(1)Webページによる活動報告と資料の公開

平成15年から開設予定であったWebページを平成13年6月から開始し、測定を開始した平成14年10月から平成15年10月までの1年間のアクセス数は4,363件、月平均約350件であった（<http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/>）。掲載内容は主として事業報告、資料デジタル化事業の成果である画像データを中心としたものであるが、その他に研究成果の発表の場である研究会やシンポジウム等の発表要旨、講演会などのテキストデータを順次公開している。また、平成15年8月より試験的に英文ページの作成を開始し、さらに現在、中国語翻訳ページを準備しており、平成16年3月には公開を始める計画である。

7-(2)シンポジウムの開催

研究成果公開の一環として、平成12年度から毎年学内外の研究者を招いてシンポジウムを開催している。平成12年度は「画像資料の考古学」と題し、考古学・美術史学・地域史学などの各分野における画像の資料的価値や保存科学的見地からの資料保存方法に関する議論を行った。

平成13年度には「画像資料と近代生活誌」「無形文化の記録保存に関する動画像の過去と未来」と題する2本を開催した。これらは主として民俗学・近代生活史・無形文化財の分野に関わるもので、近代生活における写真の意義や、その資料的価値、今後の活用方法などをめぐって議論が行われた。

平成14年度は「画像資料からよみがえる文化遺産」と題し、画像資料の活用事例が報告された。これにより、戦争・災害等によって消失した文化遺産の再現・復元に、画像資料が大きな力となるという現代的意義が改めて明らかになった。

平成15年度は「画像資料論の可能性」と題し、5年間の総括や実行委員の研究分野における画像資料の位置づけが報告された。

これらのシンポジウムでは、人文科学系の各分野における画像資料の持つ高い資料的価値が指摘される一方、資料化や公表にあたっての課題も指摘されており、画像資料をめぐる現状が明確になったと言える。なお、これらの成果の一部については公刊が予定されている。

7-(3) 座談会・講演会の開催

本プロジェクトに関わって外部講師を招いての、座談会を1回、講演会を3回開催した。

平成11年度には、稲生典太郎氏・林陸朗氏・小出義治氏の3氏による座談会「大場磐雄先生の思い出 - 平出遺跡を中心に -」、大塚初重氏による講演会「大場磐雄博士と登呂遺跡」を開催し、本プロジェクトの中核となる大場博士資料の背景について、直接大場博士を知る各氏から貴重な証言を得た。

平成12年度には荒井宏子氏による講演会「記録資料を後世に残す 写真の劣化と保存方法」を開催し、写真の保存に関する具体的方法の最新情報の提供を受けた。

平成13年度には金子隆一氏・富重清治氏による講演会を開催した。テーマである「近代化と写真師 - その地域的展開 -」は、同年度に行ったシンポジウムとも関連するものである。

なお、これらの講演記録の一部は、事業報告および Web 上で公開している。

7-(4) 研究会・フォーラムの開催

平成14年度から新たに研究会を開始した。14年度は「画像資料と近代史」と題し、各地の研究者による大場磐雄博士資料を用いた実践的な報告や、実務担当者による柴田資料・大場博士資料の位置づけに関する報告、保存科学や近代初期の学術雑誌における写真記録に関する研究報告などが行われた。

平成15年度からは画像研究フォーラムと改称し、「人文科学と画像資料研究」のテーマのもと3回開催している（第3回は平成16年1月開催予定）。各回、実務担当者による整理報告と、実行委員等の研究分野における画像資料研究についての発表・討論を行っている。

これらは小規模ながら、画像資料を媒介に各部門間・各研究分野間で認識の共有が行われたという点で意義を持つものであり、今後も継続して成果の公開を予定している。

7-(5) 出版刊行物

冊子体による研究成果の公表としては、以下の図書を刊行した。

平成11年度より毎年『事業報告』を刊行している。これは、当該年度の事業概要のほか、論考篇として外部機関所蔵資料の調査報告、講演会等の記録、関連論考、資料編として大場磐雄博士資料目録、大場磐雄博士写真資料などを掲載している。

平成12年度のシンポジウムでは、予稿集である『シンポジウム 画像資料の考古学』を刊行した。

最終年度である平成15年度には、資料整理の最初の成果報告として『柴田常恵資料目録1』、研究会・フォーラムの記録集である『研究報告1』の刊行を予定している。

なお、これらの内容の大部分は Web や CD - ROM 等のデジタル媒体でも提供されるものである。

<優れた効果があがった点>

すでに述べたことであるが、中でも特に成果の上がった点を列記すると次のようになる。

- 1、劣化画像の再生活用にあたって、喫緊な課題であるガラス乾板の保存法ならびにそのデジタル化について、大場磐雄博士資料約4,000点の処理から具体的な方法を確立できたこと。
- 2、画像資料の資料化ならびに Web 公開の準備の過程で、画像と文字情報をリンクさせたかたちでの検索方法が確立できたこと。
- 3、祭祀考古学分野の先駆者である大場磐雄博士画像資料、文化財保護分野で先駆的な役割を果たした柴田常恵画像資料、民俗学・国文学分野で多くの理論提示を行った折口信夫博士画像資料などについて、一般公開の準備を整えることができたこと。従来、これらの学術資料は、全集や著作に部分的に使われているだけであり、今後の学術研究への利用が大きく進展した。

- 4、当該プロジェクトの諸活動を通じて、各地の教育委員会・博物館・神社などでの劣化画像・古写真の保存、再生と資料化についての取り組みの重要性が喚起でき、今後の学術研究ならびに文化財保護における画像資料の位置づけを高めることができたこと。
- 5、國學院大學が所蔵する人文科学分野の諸資料について、学術資産として統括的に位置づけていくための基盤整備が進んだこと。

<問題点>

当該プロジェクトの推進過程でなし得なかった問題点としては、施設・設備面では、取り扱った画像資料についての専用収蔵庫の設置が予算的な制約で行えなかったことである。ガラス乾板ならびにフィルムについては、低温のしかも恒湿の専用収蔵庫に保管することで劣化を止めることができるのであり、これについては緊急な課題となる。

画像デジタル化に関連するハード面での向上が日進月歩であり、しかもこれについては産学共同の技術開発が必要になるが、これについての開発費が不十分であったことである。今後は産学共同による専用機器類やソフトの開発、さらにこれらの特許化と普及が課題となる。

劣化画像の再生保存の実作業は当初の目的を実現でき、人文科学分野、なかでも考古学・民俗学・宗教学・文化財学での画像資料の資料化に関する問題点の析出ができ、基礎的な研究は進んだが、さらに画像資料についての資料学としての深化と統合が不十分で今後の課題となる。海外における劣化画像の再生活用などに関しての情報収集ならびに連携を行うことができなかったのが問題点となる。とくに我が国は文化財保護技術については世界のトップクラスにあり、各地に技術指導に赴いている研究者も実行委員となり、研究を推進したが、海外機関との連携までには至らなかった。

当該プロジェクトの自己点検・評価については、学術フロンティア事業運営委員会、日本文化研究所所員会議、同研究所運営委員会、さらに学内の自己点検・評価委員会の評価ならびに大学基準協会による相互評価を受けているが、数値によって明示されるような自己点検・評価を実施できなかったのが問題となる。人文科学分野では、研究の自己点検・評価は、その方法などとともに数値化が難しいが、今後は何らかの基準を設けて実施することが必要となる。

<評価体制>

(研究プロジェクトの目標等に照らした自己評価の実施や、その結果を研究費等の資源の配分へ反映させるためのルールの適切な設定、また、本プロジェクトに係る費用対効果(かけた費用に見合う効果が見られるか)について、どのように分析しているか。また、それらについて、外部(第三者)による評価を受ける体制ができていないか等 について記述してください。)

当該プロジェクトでは、独立した第三者評価機関は設置していない。しかし、当該プロジェクトを推進する実行委員会の上部組織には学長・常務理事などによる運営委員会があり、また、当該プロジェクトは本学の日本文化研究所プロジェクトとして推進されており、活動内容・成果については日本文化研究所所員会議ならびに同研究所運営委員会で審議され、点検評価を受けている。

さらに当該プロジェクトについては、学内に設けられている恒常的委員会である自己点検・評価委員会によって日本文化研究所プロジェクトとして独立した点検・評価を受けており、とくに平成13年度には大学基準協会による相互評価も受けた。

なお、シンポジウムなどの開催にあたっては、当該プロジェクトの予算には表れないが、参加企業からシンポジウムポスターなどの提供を受けており、これも社会的な評価の一部をなすと考えている。

研究費等の資源配分への反映ルールについては、当該プロジェクトでは、まず画像資料の再生保存が第1の作業となるので、各画像資料コレクションの点数を基準とした。各年度の作業進捗状況を点検しながら各コレクションごとに予算案を立てて進めた。この予算案については実行委員会、運営委員会、さらに日本文化研究所所員会議ならびに同研究所運営委員会で審議されており、適切な配分が行えた。

<研究期間終了後の展望>

(本プロジェクト終了後における研究の継続希望の有無、有の場合は今後の研究方針、無の場合は当該研究施設・装置・設備の活用方針を記述してください。)

平成15年度で当該プロジェクトは終了するが、平成16年度・17年度の2ヶ年にわたる研究の継続を希望する。

当該プロジェクトは学内外に所蔵されている劣化画像・古写真資料を再生し資料化することで、これを学術資産として捉えなおすことができ、大きな成果があがった。再生・資料化した劣化画像は、我が国の人文科学ならびに文化財保護の進展に寄与できるもので、16・17年度には共同研究機関等を一部変更して、次のような研究方針と目標で継続する。

- 1、平成11年度から15年度にかけて再生保存処理を行った劣化画像資料については、その一部を印刷物やWeb上で公開し、学術研究・文化財保護上の共有資産化を行ってきたが、これを、CDなどによる電子媒体化も含めて加速して進める。共有資産化にあたっては、データベースとしての機能も強化していく。
- 2、平成15年度に本学の保管あるいは収蔵されることになった宮地直一博士資料、他機関に一括貸出を行って平成15年度に返却された大場磐雄博士資料など、劣化画像資料の再生と資料化の作業を継続する。
- 3、学外機関・施設などが所蔵する劣化画像コレクションに関する情報収集ならびに連携を強化するとともに、産学共同による画像資料の再生活用・資料化に関する機器・ソフト開発を進展させる。
- 4、当該プロジェクトのWebのホームページには英文版も作成されているが、他言語版も作成するなど、国際化を進展させる。
- 5、5年間のプロジェクトで行ってきた劣化画像の再生活用と資料化に関する研究成果を中核にして、学内に所蔵されている学術資料全体を資産化し、統括的な活用ができる組織・システムについての調査研究を、当該プロジェクトの継続年次（2ヶ年）で完成させる。
- 6、上記5による学術資料全体を総括的に活用する組織・システムの研究を踏まえて、平成18年度には、渋谷キャンパスの再開発と連動させて、新規学術フロンティア事業として仮称「國學院大學学術センター・総合資料館」の建設ならびに「近代学術資産の再構成と活用に関する研究（仮称）」の組織化と始動を計画している。

< 研究成果の副次的効果 >

（研究成果の活用状況又は今後の活用計画（実用化・企業化の見通しや、特許の申請があれば、その申請状況・取得状況等）について、記述してください。）

劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究であったが、画像資料の保存再生を基礎作業とするため、現在の画像資料の保存活用についてのシステム構築が行えたのが第一の副次的効果であった。デジタルアーカイブ技術やデータベースシステムといった成果の公開や活用に関する手法が得られたことである。

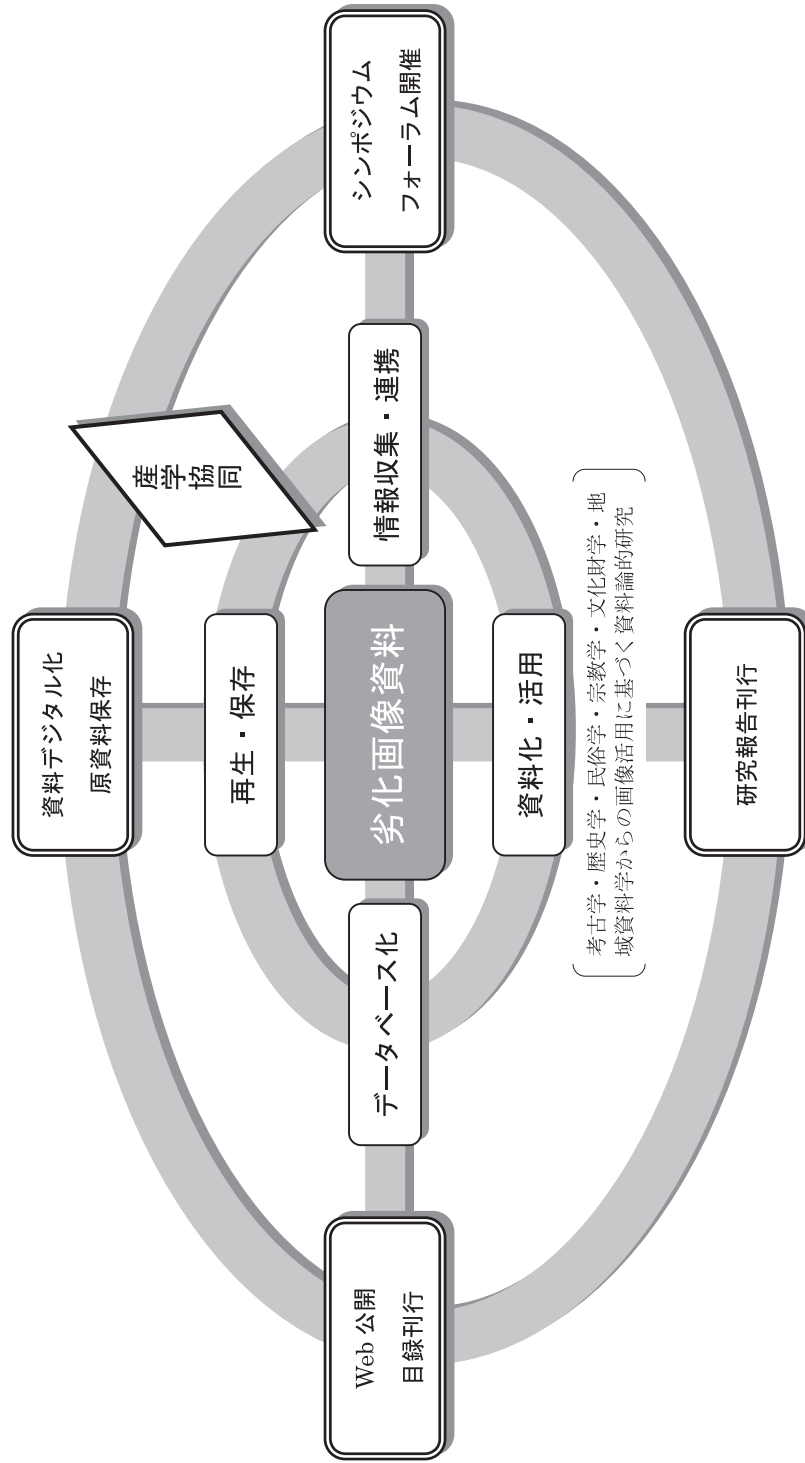
大場磐雄博士資料、柴田常恵資料、折口信夫博士資料などの再生と資料化によって、考古学、民俗学、文化財学、博物館学などの諸講座で使用する教材開発のための資料提供ができるようになったのが第二の副次的効果である。これについては教材商品としての開発にまでは至っていないが、プロジェクト参加研究者による講義等での教材活用が行われており、これについては別途、特色ある大学教育システム構築に向けての研究も可能な段階になっている。

劣化画像を対象としたが、関連資料として文字資料なども含まれており、人文科学資料全体に関する総合的な資産化の方法について検討する基盤ができたのが第三の副次的効果である。これについては上記<研究期間終了後の展望>に記したように、研究継続年次においては、当該プロジェクトの方針・目標に加え、本格的な検討を行う。

11 キーワード（当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。）

- (1) 劣化画像資料 (2) 画像再生保存 (3) 画像データベース
(4) 画像デジタル情報 (5) 文化財保護 (6) 人文資料学
(7) 考古学 (8) 民俗学

國學院大學学術フロントティア事業研究組織図



12 施設・装置・設備・研究費の支出状況（実績概要）

（千円）

年度・区分		支出額	内 訳						備 考
			法 人 負 担	私 学 助 成	共同研究 機関負担	受 託 研究等	寄付金	その他（ ）	
平成 11 年度	施 設	14,805	7,405	7,400					
	装 置								
	設 備	14,605	8,398	6,207					
	研究費	10,281	(注)	12,800				(注)平成11年度「算定基礎数の実績見直し」調書で「設備関係支出」と重複申請した旨を報告。	
平成 12 年度	施 設								
	装 置								
	設 備								
	研究費	11,280	5,108	5,500	672				
	リサーチ・ アシスタント	672	0	0	672			共同研究機関は本法人の大学院。全額負担	
	研究費	10,608	5,108	5,500	0				
平成 13 年度	施 設								
	装 置								
	設 備								
	研究費	12,330	5,370	6,000	960				
	リサーチ・ アシスタント	960	0	0	960			共同研究機関は本法人の大学院。全額負担	
	研究費	11,370	5,370	6,000	0				
平成 14 年度	施 設								
	装 置								
	設 備								
	研究費	13,197	5,913	6,800	484				
	リサーチ・ アシスタント	984	0	500	484			共同研究機関は本法人の大学院文学研究科	
	研究費	12,213	5,913	6,300	0				
平成 15 年度	施 設								
	装 置								
	設 備								
	研究費	11,657	5,607	5,500	550				
	リサーチ・ アシスタント	1,050	0	500	550			共同研究機関は本法人の大学院文学研究科	
	研究費	10,607	5,607	5,000	0				
総 額	施 設	14,805	7,405	7,400	0				
	装 置								
	設 備	14,605	8,398	6,207	0				
	研究費	61,263	21,997	36,600	2,666				
	リサーチ・ アシスタント	3,666	0	1,000	2,666				
	研究費	57,597	21,997	35,600	0				
総 計	90,673	37,800	50,207	2,666					

平成15年度は予定額。

13 施設・装置・設備の整備状況（私学助成を受けたものはすべて記載してください。）

《施設》（私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。）

施設の名称	整備年度	研究施設 面積	研究室 等数	使用者数	事業経費	補助金額
國學院大學 画像 データベース管理室	平成11年	108.0m ²	1室	9名	14,805,000	7,400,000

私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

_____ m²

《装置・設備》（私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。）

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額
（研究装置）						
（研究設備） 劣化画像の処理及び 画像データベース 管理システム一式	平成11年	PC-D1402- 2H3021他	一式	週約40時間	14,605	6,207
（情報処理関係設備）						

14 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平成 11 年 度			
小 科 目	支出額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消耗品費	581	写真、録画等記録用材料費	581	フィルム、ビデオテープ、トナー、コピー用紙代
用品費	836	写真乾板保存ケース	836	写真乾板保存ケース製作
光熱水費	0	電気・ガス・水道代	0	大学経常会計で支出
旅費交通費	602	調査等出張旅費	314	出雲大社、福岡市、奈良県吉野郡
		地方在住実行委員、旅費	127	第1回実行委員会地方在住委員の旅費
		その他	161	
図書資料費	150	『数値地図ユーザーズガイド』他	140	「図書費」は発生していない
		『広辞苑 CD-Rom 版』	10	
印刷製本費	1,704	デジタル写真 CD-Rom 制作	496	
		建造物マイクロ撮影代	544	赤塚邸マイクロ撮影
		その他	664	『平成11年度研究成果報告書』他
通信運搬費	0		0	大学経常会計で支出
賃借料	468	ニコンデジタルカメラ一式リース料	300	
		その他	168	マイクロ撮影機材一式リース料
支払手数料・報酬	595	乾板資料処理業務指導謝金	390	
		平出遺跡調査講師謝金	105	
		その他	100	講演会講師謝金
委託費	500	写真乾板保存装置リース料	500	
会費	198	第1回実行委員会懇親会費	108	
		その他	90	プロジェクト立ち上げの会食、講演会講師昼食代
機器備品費	0	(注)	0	研究費の支出状況(実績概要)に注記
計	5,634		5,634	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	4,647	資料整理、パソコン入力作業	4,647	
教育研究経費支出				
計	4,647		4,647	
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	0		0	
図書費	0		0	本欄「図書」は発生しない。図書資料費に計上
計	0		0	
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出				
研究支援推進経費				
計	0		0	

14 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平 成 12 年 度			
小 科 目	支出額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	864	研究資料のコピー	864	資料コピー、フィルム、文具他
用 品 費	504	写真乾板保存ケース	504	特殊プラスチック製品
光 熱 水 費	0		0	大学經常会計で支出
旅費交通費	616	古写真関連資料他の調査	500	熊本市、奈良市、美濃加茂市、塩尻市他
		シンポジウム参加旅費	116	本学で開催、地方在住研究員の上京旅費
図書資料費	125		125	資料、参考図書代「図書費」は発生していない
印刷製本費	1,472	事業報告書作成	670	
		乾板資料ネガ作成・現像代	650	ポジフィルム デジタル化代を含む
		その他	152	春日祭礼行事ネガ撮影代
通信運搬費	0		0	大学經常会計で支出
賃 借 料	500	デジタルカメラ一式賃貸契約	500	事業用デジタルカメラ一式リース料
支払手数料・報酬	730	シンポジウム等講師謝金	370	シンポジウム、公開講演会講師謝金
		資料鑑定指導者謝金	360	
委 託 費	498	劣化画像処理	498	劣化画像再生・活用作業委託
会 合 費	141	シンポジウム懇親会費	100	
		公開講演会 茶菓子代他	41	
計	5,450		5,450	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	5,158	資料整理、パソコン入力作業	5,158	
教育研究経費支出				
計	5,158		5,158	
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品				
図 書 費	0		0	本欄「図書」は発生しない。図書資料費に計上
計	0		0	
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	672	リサーチ・アシスタント1名	672	本法人が全額負担
ポスト・ドクター				
研究支援推進経費				
計	672		672	

14 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平 成 13 年 度			
小 科 目	支出額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消耗品費	508	CD - RW50枚購入	155	
		その他	353	プラスチック スライドマウント、乾板資料感光材料他
用品費	1,204	写真乾板保存ケース	1,195	特別注文製作品
		その他	9	スキャナー用補助ガラス
光熱水費	0		0	大学経常会計で支出
旅費交通費	675	調査等出張旅費	440	
		シンポジウムパネラー旅費	153	
		その他	82	
図書資料費	137	『日本の写真家』	82	全30冊
		その他	55	資料、参考図書代「図書費」は発生していない
印刷製本費	1,082	『平成13年度年次報告』	998	『劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究』
		その他	84	シンポジウム ポスター
通信運搬費	0		0	大学経常会計で支出
賃借料	496	デジタルカメラ周辺機器リース	496	
支払手数料・報酬	810	シンポジウム講師謝金	690	
		資料鑑定指導者謝金	120	
委託費	484	フィルム クリーニング処理	484	
会合費	200	シンポジウム後の懇談会	200	年3回実施
計	5,596		5,596	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	5,776	資料整理、パソコン入力作業	5,776	
教育研究経費支出				
計	5,776		5,776	
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品				
図書費	0		0	本欄「図書」は発生しない。図書資料費に計上
計	0		0	
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	960	リサーチ・アシスタント1名	960	本法人が全額負担
ポスト・ドクター				
研究支援推進経費				
計	960		960	

14 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平 成 14 年 度			
小 科 目	支出額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消耗品費	358	インクカートリッジ	26	キャノンプリンター
		デスクトレイ	16	20個
		その他	316	主に写真関係(フィルム、ファイル等)
用品費	1,591	写真乾板保管ケース	1,428	注文製作
		ハードディスク	100	50,190×2台
		その他	63	
光熱水費	0		0	大学經常会計で支出
旅費交通費	887	調査等出張旅費	608	那覇市、奈良市、長野市他
		シンポジウムバネラー旅費	200	沖縄県、京都市、奈良市(2回)
		その他	79	地方在住の委員(琉球大)招聘旅費
図書資料費	184	研究・調査資料	18	『廣重畫五拾參次現状寫真對照東海道』
		研究・調査資料	26	『帝国地名辞典』
		その他	140	資料、参考図書代
印刷製本費	1,401	平成14年度事業報告書	683	
		画像資料複写・保存	460	
		スライドフィルムデジタル化	213	祭祀考古学関連調査資料フィルムのデジタル化
		その他	45	
通信運搬費	0		0	大学經常会計で支出
賃借料	0		0	
支払手数料・報酬	670	シンポジウム講師謝金	690	2回開催、延べ13名
		資料鑑定指導者謝金	240	乾板フィルムの撮影、整理、内容他の指導
委託費	649	劣化画像処理契約	649	
会費	200	シンポジウム後の懇談会	200	2回実施、参加者延べ50名
計	5,940		5,940	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	5,842		5,842	時給830円×7名, 850円×17名, 1,000円×2名 年間の勤務時間は、各人により異なるので、個人毎の(別表2)を添付 実人数26名
教育研究経費支出				
計	5,842		5,842	
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	432	デスクトップ型パソコン	221	IBM NetVista M42 slim 三菱15型ディスプレイ他
		ノートパソコン	211	IBM ThinkPad R40 2681-BGJ メモリ増設
図書費	0		0	本欄「図書」は発生しない。図書資料費に計上
計	432		432	
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	984	リサーチ・アシスタント1名	984	大学院文学研究科
ポスト・ドクター				
研究支援推進経費				
計	984		984	

14 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平 成 15 年 度			
小 科 目	支出額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消耗品費	400	プリンター用カートリッジ	200	カラーレーザー用、モノクロレーザー用
		CD - RW メディア他	80	フロッピーディスクを含む
		その他	120	写真用消耗品(ランプ他)カードリーダー他
用品費	220	カラーレーザープリンター	190	富士ゼロックス Docu Print C1616
		モノクロレーザープリンター	30	
光熱水費	0		0	大学經常会計で支出
旅費交通費	900	地方在住研究者上京費	460	琉球大・吉備国際大より各3回招聘
		シンポジウム参加旅費	210	岡山他 延べ4名派遣
		研究員の出張調査	180	北大図書館他へ調査
		その他	50	
図書資料費	50	『帝国行政区画便覧』	14	
		その他	36	資料、参考図書代
印刷製本費	3,300	『柴田常恵写真資料目録』	2,205	
		『平成15年度事業報告』	700	
		『平成15年度研究報告』	395	
通信運搬費	30		30	
賃借料	50	学外の会議室等借用料	50	渋谷校地再開発工事中に伴う諸施設の借用
支払手数料・報酬	800	戦前歌舞伎絵葉書データベース化	300	折口信夫博士歌舞伎絵八ガキの演目同定とデータベース化
		ホームページ作成者謝金	300	英語版・中国語版作成の各翻訳者への謝金
		資料鑑定指導者謝金	120	乾板フィルムの撮影、整理、内容他の指導
		その他	80	フォーラム講師謝金
委託費	470	成果報告のCDマスター製作	470	
会費	280	シンポジウム等の懇親会費	150	シンポジウム2回、フォーラム2回を予定
		諸会議時の昼食代	50	年間計4～5回を予定
		その他	80	
計	6,500		6,500	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	6,600		6,600	時給830円×2名 850円×7名 870円×1名, 890円×8名,1000円×2名 年間の勤務時間は各人により異なるので、個人毎の(別紙3)を添付 実人数20名
教育研究経費支出				
計	6,600		6,600	
設備関係支出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品				
図書費	0		0	本欄「図書」は発生しない。図書資料費に計上
計	0		0	
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	1,050	リサーチ・アシスタント1名	1,050	大学院文学研究科
ポスト・ドクター				
研究支援推進経費				
計	1,050		1,050	

15 研究発表の状況

(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

《雑誌論文》 (注)左欄外の()はレフェリー付き論文

著者名	論文標題		
杉山 林継	建鉾山祭祀遺跡と儀鏡		
雑誌名	巻	発行年	ページ
考古学ジャーナル	446	平成11年	2~5

著者名	論文標題		
杉山 林継	古墳時代の祭祀の成立とその性格		
雑誌名	巻	発行年	ページ
祭祀考古学	2号	平成12年	27~37

著者名	論文標題		
杉山 林継	飛鳥時代の祭祀遺跡		
雑誌名	巻	発行年	ページ
神道宗教	180号	平成12年	1~35

著者名	論文標題		
近世社家文書研究会 (代表 杉山林継)	相馬地方における平田鋏胤 - 解題と翻刻 -		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學日本文化研究所紀要	89号	平成14年	281~364

著者名	論文標題		
杉山 林継	吉田家国掛役人について		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院雑誌	103巻5号	平成14年	1~17

著者名	論文標題		
杉山 林継	峠の祭祀 - 神坂 -		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學学術フロンティア構想 「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告		平成14年	20~33

著者名	論文標題		
小川 直之	「地域博物館」の行方		
雑誌名	巻	発行年	ページ
博物館問題研究	27	平成12年	16~24

著者名	論文標題		
小川 直之	折口信夫研究の資料群		
雑誌名	巻	発行年	ページ
日本文学論究	61	平成14年	15~23

著者名	論文標題			
小川 直之	社寺奉納絵馬・絵額の変遷 - 神奈川県秦野市の場合を中心に -			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
伝統と創造の人文科学 - 國學院大學大学院文学研究科創設五十周年記念論文集 -		平成14年	383 ~ 401	
著者名	論文標題			
小川 直之	地域博物館における民具の保存と活用			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
平成13年度文化財セミナー - 報告書 文化財保護の方策とその課題		平成14年	8 ~ 25	
著者名	論文標題			
茂木 栄	国府総社の鳥瞰数量的解析 - 『神社明細帳』の記述を中心として -			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學日本文化研究所紀要	85号	平成12年	1 ~ 120	
著者名	論文標題			
茂木 栄	隠岐国分寺と蓮華会舞			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
民俗芸能研究	32	平成13年	142 ~ 174	
著者名	論文標題			
茂木 栄	国府総社の祭りとしての暗闇祭 - 比較の視点から -			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院雑誌	102巻9号	平成13年	20 ~ 34	
著者名	論文標題			
茂木 栄	全国国府総社の由緒及び基礎資料集成			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學日本文化研究所紀要	88号	平成13年	217 ~ 321	
著者名	論文標題			
茂木 栄	CD - ROM 『山の祭』の製作			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學日本文化研究所報	223	平成13年	3 ~ 4	
著者名	論文標題			
茂木 栄	全国国府総社の由緒及び基礎資料集成			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
悠 久	第84号	平成14年	54 ~ 69	
著者名	論文標題			
茂木 栄・島田 潔	筒粥神事の分布に関する覚書			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學日本文化研究所報	231	平成15年	1 ~ 4	

著者名	論文標題		
茂木 栄	祭り研究の一指針 - 社叢学構築のためのメモ -		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院雑誌	104巻11号	平成15年	77~91

著者名	論文標題		
齋藤ミチ子	オルドス地方の食習俗と儀礼		
雑誌名	巻	発行年	ページ
民俗文化研究	4号	平成15年	1~29

著者名	論文標題		
黒崎 浩行	日本宗教におけるインターネット利用の社会的文脈		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學日本文化研究所紀要	85	平成12年	579~592

著者名	論文標題		
黒崎 浩行(共著)	高度情報化社会における「公共圏」と伝統宗教 神社神道のインターネット利用		
雑誌名	巻	発行年	ページ
高度情報化社会と宗教に関する基礎的研究 平成11年度~14年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書		平成15年	65~74

著者名	論文標題		
山内 利秋	書評「祭祀空間・儀礼空間」		
雑誌名	巻	発行年	ページ
季刊 考古学	68号	平成11年	102

著者名	論文標題		
山内 利秋	批評「冷たい社会」を越えて - 佐藤宏之編『ロシア狩猟文化誌』 -		
雑誌名	巻	発行年	ページ
考古学雑誌	82巻1号	平成12年	53~64

著者名	論文標題		
山内 利秋	農耕開始期における洞穴/岩陰遺跡の生業活動 - 長野県湯倉洞穴遺跡と福島県塩喰岩陰遺跡を事例として -		
雑誌名	巻	発行年	ページ
先史考古学論集	9	平成12年	29~62

著者名	論文標題		
山内 利秋	大場磐雄のグラフィズム - 近代日本考古学と画像資料 -		
雑誌名	巻	発行年	ページ
画像資料の考古学		平成12年	25~33

著者名	論文標題		
山内 利秋	文化遺産としての画像資料		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學日本文化研究所報	Vol. 37-5	平成13年	8~11

著者名	論文標題		
山内 利秋	水辺にみる縄文社会の終焉		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學日本文化研究所報	Vol 38-2	平成13年	3~5

著者名	論文標題		
山内 利秋	画像資料は使えるのか？		
雑誌名	巻	発行年	ページ
帝京大学山梨文化財研究所報	42	平成13年	13~15

著者名	論文標題		
山内 利秋	試論：晩期安行式、前葉から中葉への研究史 - 安行3b式・3c式と姥山式系土器群に関して -		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學考古学資料館紀要	18	平成14年	165~182

著者名	論文標題		
山内 利秋	画像資料と近代アカデミズム・文化財保護制度		
雑誌名	巻	発行年	ページ
日本写真学会誌	65-2	平成14年	89~97

著者名	論文標題		
山内 利秋	文化財化する画像記録（上） - 1960年から1985年までの企画展示を軸に -		
雑誌名	巻	発行年	ページ
吉備国際大学社会学部研究紀要	13	平成15年	101~110

著者名	論文標題		
山内 利秋	写真はコトバをつかった - 画像資料にみる近代の構築 -		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學日本文化研究所報	Vol 40-2	平成15年	11~13

著者名	論文標題		
山内 利秋	画像記録の考古学 - 視覚的情報としての文化財・歴史・近代 -		
雑誌名	巻	発行年	ページ
日本写真芸術学会誌（入稿済み）			

著者名	論文標題		
小林 達雄	史跡整備の主体性確立		
雑誌名	巻	発行年	ページ
公園緑地	62	平成13年	21~26

著者名	論文標題		
小林 達雄	言語ゲームとしての博物館展示		
雑誌名	巻	発行年	ページ
博物館研究	37巻4号	平成14年	5~7

著者名	論文標題			
大谷 貞夫	近世前期における下利根川流域の治水事情			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
佐原市史研究	創刊号	平成13年	1~15	

著者名	論文標題			
倉石 忠彦	道祖神祭りのいろいろ・うまひき行事の分布			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
戸沢のねじとうまひき行事		平成13年	4~5	

著者名	論文標題			
倉石 忠彦	渡御する道祖神			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
信濃	52巻1号	平成12年	1~13	

著者名	論文標題			
倉石 忠彦	仏教と人生儀礼			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
金沢市史 会報	13巻	平成13年	1~4	

著者名	論文標題			
倉石 忠彦	飛田絵の念仏講			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
調布の文化財	31巻	平成14年	4~5	

著者名	論文標題			
倉石 忠彦	田の神			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大学神道資料館館報	3巻	平成14年	8~9	

著者名	論文標題			
宮家 準	役行者伝の形成と発展			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學大学院紀要 - 文学研究科 -	31	平成12年	1~22	

著者名	論文標題			
宮家 準	今なぜ民族宗教か - 民俗宗教概念の再検討 -			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
宗教研究	325	平成12年	145~167	

著者名	論文標題			
Hitoshi Miyake	The way of Mountain Asceticism			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
A History of Japanese Religion		平成13年	314~332	

著者名	論文標題			
宮家 準	府中大國魂神社暗闇祭りにおける持続と変容			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院雑誌	102 - 9	平成13年	1 ~ 19	

著者名	論文標題			
宮家 準	新羅明神信仰と役行者像			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
神道宗教	188	平成14年	1 ~ 33	

著者名	論文標題			
宮家 準	法蓮の伝承と修験道 - “八幡宇佐御託宣集”を通して			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
伝統と創造の人文科学 - 國學院大學大学院文学研究科創設五十周年記念論文集 -		平成14年	25 ~ 42	

著者名	論文標題			
宮家 準	民俗宗教としての四国遍路 - 貞享元禄期を中心に			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
頼諭僧正七解御遠忌記念論集 新義真言教学の研究		平成14年	1111 ~ 1133	

著者名	論文標題			
宮家 準	牛頭天王信仰と修験道			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院雑誌	103巻11号	平成14年	233 ~ 248	

著者名	論文標題			
宮家 準	伏見稻荷と熊野修験			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
新嘗の研究5 稲の文化		平成15年	135 ~ 160	

著者名	論文標題			
宮家 準	吉田神道と修験道 - 大元宮と柱源・柱松を中心に			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院雑誌	104巻11号	平成15年	233 ~ 248	

著者名	論文標題			
宮家 準	形から心へ 宗教民俗学の視点から			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
儀礼文化	33	平成15年	2 ~ 7	

著者名	論文標題			
熊谷 常正	地域考古学史研究と写真資料 - 岩手県博蔵小田島禄郎コレクションの事例を中心に -			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
画像資料の考古学		平成12年	11 ~ 15	

著者名	論文標題			
熊谷 常正	鳥海柵建碑考			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
東北文学の世界	10	平成14年	1~4	

著者名	論文標題			
井上 洋一	銅鐸の出土状況を伝える一枚の写真			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學学術フロンティア構想 「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告		平成14年	42~43	

著者名	論文標題			
青木 繁夫	考古調査資料の保存			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
画像資料の考古学		平成12年	35~39	

著者名	論文標題			
青木 繁夫	デジタルオルソ画像を用いた文化財(壁画)修復履歴情報管理システム			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
空間情報技術の実際		平成14年	171~179	

著者名	論文標題			
青木 繁夫	考古学資料の保存と修復 発掘調査資料の保存を中心として			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學博物館学紀要	17	平成14年	139~145	

著者名	論文標題			
木下 直之	古写真の中の日本			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
画像資料の考古学		平成12年	1~10	

著者名	論文標題			
富田 紘一	熊本城と城下町の変遷を古写真に探る			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
画像資料の考古学		平成12年	17~23	

著者名	論文標題			
丸山 士郎	美術史と写真			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
画像資料の考古学		平成12年	41~52	

著者名	論文標題			
塚田 良道	上州富岡町における小川一真の写真資料について			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
画像資料の考古学		平成12年	53~59	

著者名	論文標題			
関根 信夫	大場磐雄と平出遺跡 - 写真資料を中心として -			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
画像資料の考古学		平成12年	61～69	

著者名	論文標題			
大塚 初重	大場磐雄博士と登呂遺跡			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學學術フロンティア構想 「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告		平成13年	10～33	

著者名	論文標題			
荒井 宏子	記録資料を後世に残す - 写真画像の保存 -			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學學術フロンティア構想 「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告		平成13年	33～61	

著者名	論文標題			
川口 拓之・関根 信夫・ 兼古 健吾・山内 利秋	短報：春日大社所蔵の写真資料について			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學學術フロンティア構想 「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告		平成13年	62～65	

著者名	論文標題			
加藤 里美	遺跡領域分析から見た弥生時代集落研究			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院雑誌	101巻3号	平成12年	15～36	

著者名	論文標題			
加藤 里美	海岱地区新石器時代磨盤・磨棒			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
中国東北地区古代社会文明化進呈国際學術討論会 予稿集（中国語）		平成15年		

著者名	論文標題			
加藤 里美	食品加工具にみる精神文化の変容			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
國學院大學紀要（入稿済み）	42	平成16年		

著者名	論文標題			
平澤加奈子	古代国家の展開と地域社会			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
歴史学研究	775	平成15年	51～52	

著者名	論文標題			
平澤加奈子	『日本の古代国家』と古代史研究の現在			
雑誌名	巻	発行年	ページ	
歴史学研究	782	平成15年	2～6	

著者名	論文標題		
中村 耕作	補論1：神坂峠の現状と景観		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學學術フロンティア構想 「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告		平成14年	34～38

著者名	論文標題		
宇野 淳子	補論2：古代東山道と神坂		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學學術フロンティア構想 「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告		平成14年	39～41

著者名	論文標題		
加藤 里美・山内 利秋・ 橋本 陽子・石田 成年	短報：武田塾所蔵の写真資料について		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學學術フロンティア構想 「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告		平成14年	44～46

著者名	論文標題		
田中 秀典	近代日本の文化財保護行政における柴田常恵		
雑誌名	巻	発行年	ページ
國學院大學學術フロンティア構想 「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告		平成14年	47～49

《図 書》

著者名	出版社		
杉山 林継・粕谷 崇・ 佐々木幹雄・篠原 祐一	國學院大學日本文化研究所刊		
書名	発行年	総ページ	
子持勾玉資料集成	平成14年	268	

著者名	出版社		
小川 直之（共著）	茨城県立歴史館		
書名	発行年	総ページ	
茨城の三十六歌仙絵額	平成15年	172	

著者名	出版社		
小川 直之（共著）	慶友社		
書名	発行年	総ページ	
技と形と心の伝承文化	平成14年	470	

著者名	出版社		
齋藤ミチ子（共著）	雲南人民出版社		
書名	発行年	総ページ	
『稲作与儀礼』『神饌中の稲米諸相』共著（中国語）	平成15年	564	

著者名	出版社		
國學院大學学術フロンティア編 代表：杉山 林継	國學院大學学術フロンティア事業実行委員会		
書名	発行年	総ページ	
柴田常恵写真資料目録 (平成16年1月刊行予定)	平成16年	373	

著者名	出版社		
黒崎 浩行(共著)	みち書房		
書名	発行年	総ページ	
大学生のための情報リテラシー	平成11年	178	

著者名	出版社		
黒崎 浩行(共著)	黒崎 浩行		
書名	発行年	総ページ	
電子ネットワーキングの普及と宗教の変容	平成12年	196	

著者名	出版社		
黒崎 浩行(共著)	ハーベスト社		
書名	発行年	総ページ	
構築される信念：宗教社会学のアクチュアリティを求めて	平成12年	189	

著者名	出版社		
山内 利秋(共著)	同成社		
書名	発行年	総ページ	
用語解説 現代考古学の方法と理論 2	平成12年	265	

著者名	出版社		
山内 利秋(共著)	同成社		
書名	発行年	総ページ	
縄文社会論 下	平成14年	239	

著者名	出版社		
山内 利秋(共著)	財団法人総南文化財センター		
書名	発行年	総ページ	
下太田貝塚	平成15年	579	

著者名	出版社		
倉石 忠彦	郷土出版社		
書名	発行年	総ページ	
『定本 信州の石仏 北信編』総解説 信州の石仏(一)	平成12年	261	

著者名	出版社		
倉石 忠彦	郷土出版社		
書名	発行年	総ページ	
祭のある風景(信州の原風景 4)	平成13年	155	

著者名	出版社		
倉石 忠彦	郷土出版社		
書名	発行年	総ページ	
暮のある風景（信州の原風景 5）	平成13年	147	

著者名	出版社		
倉石 忠彦	郷土出版社		
書名	発行年	総ページ	
暮のある風景（信州の原風景 6）	平成13年	139	

著者名	出版社		
倉石 忠彦（共著）	浦安市		
書名	発行年	総ページ	
浦安市史 生活編	平成11年	309	

著者名	出版社		
倉石 忠彦	長野県下諏訪町		
書名	発行年	総ページ	
下諏訪町誌 民俗編	平成12年	939	

著者名	出版社		
宮家 準	春秋社		
書名	発行年	総ページ	
修験道組織の研究	平成11年	1494	

著者名	出版社		
宮家 準	図書刊行会		
書名	発行年	総ページ	
修験道章疏解題	平成12年	416	

著者名	出版社		
宮家 準	岩田書院		
書名	発行年	総ページ	
羽黒修験：その歴史と峰入	平成12年	287	

著者名	出版社		
宮家 準	吉川弘文館		
書名	発行年	総ページ	
役行者と修験道の歴史	平成13年	209	

著者名	出版社		
宮家 準	講談社学術文庫		
書名	発行年	総ページ	
修験道 その歴史と修行	平成13年	364	

著者名	出版社		
宮家 準	丸 善		
書名	発行年	総ページ	
宗教民俗学入門	平成14年	229	

著者名	出版社		
大島 敏史(共著)	神社新報社		
書名	発行年	総ページ	
現代人のための祝詞	平成14年	125	

著者名	出版社		
加藤 里美	國學院大學大学院刊		
書名	発行年	総ページ	
中国新石器時代における食品加工具の考古学的研究	平成14年	198	

《学会やシンポジウム等の実施状況》

< 既実施のもの >

<p>平成11年7月31日(土) 國學院大學華道学術講座 発表者：倉石忠彦(國學院大學教授)「花の民俗誌」 主催：國學院大學 会場：國學院大學</p>
<p>平成11年11月18日(木) 座談会「大場磐雄先生の思い出 - 平出遺跡を中心に - 」 話者：稻生典太郎・林 睦朗・小出 義治 主催：國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 会場：「いくせ」</p>
<p>平成12年2月26日(土) 熊野学シンポジウム 基調講演：宮家 準(國學院大學教授) 表題：「熊野修験と海上交通」 会場：熊野 主催：和歌山県</p>
<p>平成12年2月27日(日) 相模原市立博物館 民俗学講座 発表者：倉石 忠彦(國學院大學教授) 表題：「道祖神」の歴史と性格 主催：相模原市立博物館 場所：相模原市立博物館</p>
<p>平成12年3月25日(土) 講演会 講師：大塚 初重(明治大学名誉教授・山梨県立博物館長) 表題：「大場磐雄博士と登呂遺跡」 主催：國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 場所：國學院大學常磐松2号館3階大会議室</p>
<p>平成12年7月4日(火) 飯能市中央公民館 生活文化講座 発表者：倉石 忠彦(國學院大學教授) 表題：「生活の中の民俗学」 主催：飯能市中央公民館 場所：飯能市中央公民館</p>
<p>平成12年7月15日(土) 講演会 講師：荒井 宏子(東京都写真美術館) 表題：「記録資料を後世に残す - 写真の劣化と保存方法 - 」 主催：國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 会場：國學院大學百周年記念館3階 AV 教室</p>
<p>平成12年7月27日(木) シンポジウムにおける研究報告 発表者：山内 利秋(國學院大學日本文化研究所共同研究員) 表題：「大場磐雄写真資料の研究成果」 主催：塩尻市平出博物館 会場：長野県塩尻市中央公民館 シンポジウム名：「平出遺跡発掘調査50周年シンポジウム 平出遺跡を考える」</p>

<p>平成12年 8月19日(土) 学会発表 発表者：齋藤ミチ子（國學院大學日本文化研究所助教授） 表題：「神饌と穀物」 学会名：「第2回 中日民俗文化国際学術討論会 - 稲作と祭儀 - 」</p>
<p>平成12年 8月27日(日) 葛飾区立郷土と天文の博物館 民俗学講座 発表者：倉石 忠彦（國學院大學教授） 表題：「民俗世界の発見」 主催：葛飾区郷土と天文の博物館 会場：葛飾区郷土と天文の博物館</p>
<p>平成12年12月2日(土) 神道宗教学会学術大会シンポジウム「出雲大社をめぐる問題」 基調講演：平野 邦雄（横浜市歴史博物館館長・東京女子大学名誉教授）「出雲大社と古代日本」 報告：千家和比古（出雲大社）「高屋神殿をめぐる象徴性」 杉山 林継（國學院大學日本文化研究所教授）「祭祀考古学からみた出雲大社」 藤澤 彰（芝浦工業大学助教授）「建築史から見た出雲大社」 関 和彦（共立女子第二高校）「古代出雲の世界 古代出雲人の世界観」 岡田 莊司（國學院大學教授）「出雲と大和の神社神殿の創建」 主催：神道宗教学会 会場：國學院大學</p>
<p>平成12年12月9日(土) シンポジウム「画像資料の考古学」 講演：木下 直之（東京大学大学院）「古写真の中の日本」 報告：熊谷 常正（盛岡大学文学部） 「地域考古学史研究と写真資料ー岩手県博蔵小田島禄郎コレクションの事例を中心にー」 富田 紘一（熊本市教育委員会）「熊本城と城下町の変遷を古写真に探る」 山内 利秋（國學院大學日本文化研究所）「大場磐雄のグラフィズム-近代日本考古学と画像資料-」 青木 繁夫（東京国立文化財研究所）「考古調査資料の保存」 誌上報告：丸山 一郎（東京国立博物館）「美術史と写真」 塚田 良道（行田市郷土資料館）「上州富岡町における小川一真の写真資料について」 関根 信夫（國學院大學日本文化研究所学術フロンティア事業実行委員会） 「大場磐雄と平出遺跡-写真資料を中心として-」 主催：國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 共催：東京都写真美術館・國學院大學画像資料研究会 援：文化庁 協賛：日立エンジニアリング株式会社・株式会社アイシーシー・株式会社堀内カラー 会場：國學院大學百周年記念館4階 AV 教室</p>
<p>平成13年 3月24日(土) 研究会報告 発表者：山内 利秋（國學院大學日本文化研究所共同研究員） 表題：「つくられた文化財 - 伝統・メディア・歴史 - 」 会場：立命館大学アート・リサーチセンター 研究会名：第10回 デジタル環境下の芸術研究会</p>
<p>平成13年 4月2日(月) 講演 発表者：宮家 準（國學院大學教授） 表題：國學院大學における民族宗教研究 主催：ハーバード大学ライシャワー研究所 会場：ハーバード大学ライシャワー研究所</p>
<p>平成13年 5月12日(土) 講演 発表者：山内 利秋（國學院大學日本文化研究所共同研究員） 表題：「水辺にみる縄文社会の終焉」 主催：國學院大學日本文化研究所 共催：渋谷区教育委員会 会場：國學院大學百周年記念館3階 AV 教室 講座名：第22回 日本文化を知る講座</p>
<p>平成13年10月27日(土) 講演 発表者：齋藤ミチ子（國學院大學日本文化研究所助教授） 表題：「牧畜社会の儀礼食 - モンゴルの正月行事から - 」 主催：國學院大學日本文化研究所 共催：渋谷区教育委員会 会場：國學院大學百周年記念館3階 AV 教室 講座名：第23回 日本文化を知る講座</p>
<p>平成13年10月27日(土) 講演会「近代化と写真師 - その地域的展開 - 」 発表者：金子 隆一（東京都写真美術館） 表題：「近代の幕開け - 街の写真と写真館 - 」 発表者：富重 清治（富重写真工房） ディスカッション参加者：金子 隆一（東京都写真美術館）・富重 清治（富重写真工房）・高橋 則英（日本大学） 主催：國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 会場：國學院大學百周年記念館3階 AV 教室</p>

<p>平成13年12月8日(土) シンポジウム 画像資料と近代生活誌 報 告: 小川 直之(國學院大學教授)「趣旨説明・折口信夫と画像資料」 香月洋一郎(神奈川大学教授)「渋沢敬三のこした写真資料」 須藤 功(民俗学写真家)「写真を読む」 斉藤多喜夫(横浜開港資料館)「史料としての写真」 田邊 幹(新潟県立歴史博物館)「画像メディアと近代」 パネルディスカッション: 全員 司 会: 小川 直之・山内 利秋(國學院大學) 主 催: 國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 共 催: 國學院大學画像資料研究会 特別協賛: (株)堀内カラー,(株)コスモスインターナショナル,ナカシャクリエイティブ(株) 会 場: 國學院大學百周年記念館3階 AV教室</p>
<p>平成14年1月24日(金) 講演 発 表 者: 小林 達雄(國學院大學教授) 表 題: 「歴史系博物館の課題」 会 場: 新潟県立博物館 研究会名: 博物館指導者研究協議会</p>
<p>平成14年2月23日(土) シンポジウム 「無形文化の記録保存に関する未来」 報 告: 栄久庵憲司(インダストリアルデザイナー、道具学会会長)「有形、無形の文化を考える」 星野 紘(東京文化財研究所)「民俗芸能の記録保存の歩み」 孝寿 聡(博物館映像研究所)・茂木 栄(國學院大學日本文化研究所) 「映像資料批判の試み 新野の雪まつりを例に」 上映映画: 「新野の雪まつり」S 28制作 長瀬 一男(たざわこアートファクトリー)「無形文化のデジタル映像記録と表現」 ディスカッション: 栄久庵憲司・星野 紘・茂木 栄・孝寿 聡・長瀬 一男 司 会: 山内 利秋(國學院大學日本文化研究所兼任講師) コメンテーター: 大島 暁雄(文化庁伝統文化課) 主 催: 國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 共 催: 研究プロジェクト「無形の文化の記録保存に関する基礎的研究」 会 場: 國學院大學百周年記念館3階 AV教室</p>
<p>平成14年6月29・30日 研究会報告 発 表 者: 齋藤ミチ子(國學院大學日本文化研究所助教授) 表 題: 「神饌に見る神社の特質」 会 場: 国立歴史民俗博物館・第一会議室 研究会名: 国立歴史民俗博物館「神社資料の多面性に関する資料論的研究」</p>
<p>平成14年9月22日(日) 学会発表 発 表 者: 杉山 林継(國學院大學日本文化研究所教授) 表 題: 「神坂峠の祭祀遺跡」 会 場: 長野県下伊那郡阿智村中央公民館 学 会 名: 祭祀考古学会</p>
<p>平成14年11月30日(土) シンポジウム 「画像資料からよみがえる文化遺産」 基調講演: 樋口 隆康(奈良県立橿原考古学研究所所長)「パーミヤーンの破壊と保存」 報 告: 當眞 嗣一(沖縄県立博物館館長)「よみがえる琉球の文化遺産」 坂本 勇(吉備国際大学社会学部教授) 「残された写真が語ること - 阪神・淡路大震災と震災記録 - 」 大久保 治(元興寺文化財研究所)「写真資料修復の現状」 パネルディスカッション: 「人類共有の財産を享受するうえで、残された画像資料の果たす役割とはなにか？」 参 加 者: 當眞 嗣一・坂本 勇・大久保 治 司 会: 井上 洋一(東京国立博物館) 総合同会: 山内 利秋(吉備国際大学社会学部/國學院大學日本文化研究所) 主 催: 國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 共 催: 國學院大學画像資料研究会 後 援: 日本ユネスコ協会連盟、日本考古学協会、全日本博物館学会、全国大学博物館学講座協議会 文化財保存修復学会、日本文化財科学会 特別協賛: (株)堀内カラー、コスモス・インターナショナル(株) 会 場: 國學院大學百周年記念館3階 AV教室</p>
<p>平成14年12月21日(土) 学会例会発表 発 表 者: 加藤 里美(國學院大學日本文化研究所共同研究員) 表 題: 「中国新石器時代における『すりうす』研究」 会 場: 東京大学 学 会 名: 日本中国考古学会</p>
<p>平成15年3月1日(土) 講演 発 表 者: 小林 達雄(國學院大學教授) 表 題: 「遺跡を活かした街づくり」 会 場: 鹿児島県国分シビックセンター 研究会名: 上野原縄文の森シンポジウム</p>

<p>平成15年3月15日(土) 研究会「画像資料と近代史 - 歴史学研究における記録資料の役割 - 」 報 告: 山内 利秋 (吉備国際大学専任講師・國學院大學日本文化研究所兼任講師) 「文化財担当者柴田常恵の記録 - 大場磐雄との関係性を軸に - 」 光江 章 (財団法人君津郡市文化財センター)・酒巻忠史 (木更津市教育委員会) 「"楽石雑筆" にみる君津地方の遺跡調査」 中野 宥 (静岡市教育委員会)「登呂遺跡にみる記録写真と大場磐雄」 大久保 治 (元興寺文化財研究所)「保存科学における記録」 加藤 里美 (國學院大學日本文化研究所共同研究員) 「登呂遺跡関連大場磐雄資料 - ガラス乾板と大場資料」 平澤加奈子 (國學院大學大学院博士課程後期) 「近代初期における学術雑誌の写真利用 - 『考古学雑誌』を事例として - 」 総合討論: 全員 司 会: 杉山 林継 (國學院大學日本文化研究所教授) 場 所: 國學院大學常盤松1号館 第2演習室 主 催: 國學院大學学術フロンティア事業実行委員会</p>
<p>平成15年3月21日(金) 研究会報告 報 告: 加藤 里美 (國學院大學日本文化研究所共同研究員) 表 題: 「縄文時代遺跡出土の植物遺体集成の中間報告」 場 所: 国立歴史民俗博物館会議室 主 催: 国立歴史民俗博物館 研究会名: 国立歴史民俗博物館基盤研究 『農耕社会の形成と環境への影響』「縄文・弥生農耕と環境への影響」第9回研究会</p>
<p>平成15年6月14日(土) 講演 発 表 者: 山内 利秋 (吉備国際大学専任講師・國學院大學日本文化研究所兼任講師) 表 題: 「写真はコトバをつくった」 主 催: 國學院大學日本文化研究所 共 催: 渋谷区教育委員会 会 場: 國學院大學百周年記念館3階 AV 教室 講 座 名: 第26回 日本文化を知る講座</p>
<p>平成15年6月21日(土) 学会発表 発 表 者: 山内 利秋 (吉備国際大学専任講師・國學院大學日本文化研究所兼任講師) 表 題: 「文化財担当者 柴田常恵 (しばたじょうえ) の残した写真」 主 催: 日本写真芸術学会 会 場: 東京工芸大学 学 会 名: 日本写真芸術学会平成15年度年次大会研究発表会</p>
<p>平成15年7月12日(土) 画像資料研究フォーラム「人文科学と画像資料研究」 報 告: 荒井 裕介 (國學院大學大学院博士課程前期修了) 「学術フロンティア作業報告 - 大場磐雄資料編 - 」 倉石 忠彦 (國學院大學教授)「画像資料と民俗誌」 小林 達雄 (國學院大學教授)「考古学的情報としての画像」 討 論: 全員 司 会: 小川 直之 (國學院大學日本文化研究所教授) 主 催: 國學院大學学術フロンティア事業実行委員会 会 場: 國學院大學120周年記念1号館1401教室</p>
<p>平成15年9月5日(金) 学会発表 発 表 者: 宮家 準 (國學院大學教授) 表 題: 「吉田神道と修験道」 会 場: 天理大学 学 会 名: 日本宗教学会第62回学術大会</p>
<p>平成15年10月11日(土) 公開講座 発 表 者: 宮家 準 (國學院大學教授) 表 題: 「熊野と熊野曼荼羅」 会 場: 東洋英和大学大学院 主 催: 国際宗教研究所</p>
<p>平成15年10月17日(日) セミナー報告 発 表 者: 山内 利秋 (國學院大學日本文化研究所兼任講師) 表 題: 「文化財系画像資料の保存から活用へ - 國學院大學での取り組みを例として - 」 主 催: 日本写真学会 会 場: 東京工芸大学 学 会 名: 平成15年度画像保存セミナー</p>
<p>平成15年10月25日(土) 画像資料研究フォーラム「人文科学と画像資料研究」 報 告: 田中 秀典 (國學院大學日本文化研究所共同研究員)「柴田常恵資料の保存・整理作業」 青木 繁夫 (東京文化財研究所)「画像資料と民俗誌」 宮家 準 (國學院大學教授)「かたちとところ - 柱の信仰と儀礼をめぐる - 」 討 論: 全員 司 会: 小川 直之 (國學院大學日本文化研究所教授) 場 所: 國學院大學120周年記念1号館1401教室 主 催: 國學院大學学術フロンティア事業実行委員会</p>

<p>平成15年10月26日(日) 中国東方地区古代社会文明化進程国際學術討論会国際シンポジウム発表 報 告: 岩崎 厚志(國學院大學文学部助手)「大汶口遺跡の副葬石器」 加藤 里美(國學院大學日本文化研究所兼任講師)「海岱地区新石器時代磨盤・磨棒」 他多数 会 場: 中華人民共和国山東大学 主 催: 山東大学考古学センター</p>
<p>平成15年11月1日(土) シンポジウム「画像資料論の可能性」 報 告: 杉山 林継(國學院大學日本文化研究所教授)「學術フロンティア事業の成果と今後の展望」 池田 栄史(琉球大学教授)「沖縄県における映像資料の保存と活用の現状」 小川 直之(國學院大學教授)「画像資料と民俗学」 齋藤ミチ子(國學院大學日本文化研究所教授) 「記録されたイザイホー - 画像から見た祭祀状況と聖域の変容 - 」 黒崎 浩行(國學院大學日本文化研究所教授)「メタデータ配信による画像資料活用の可能性」 討 論: 全員 総合司会: 粕谷 崇(國學院大學日本文化研究所兼任講師) 討論司会: 小川 直之(國學院大學日本文化研究所教授) 主 催: 國學院大學學術フロンティア事業実行委員会 会 場: 國學院大學120周年1号館1105教室</p>
<p>平成15年11月8日(土) 研究会報告 発 表 者: 山内 利秋(吉備国際大学専任講師・國學院大學日本文化研究所兼任講師) 表 題: 「文化財記録関連画像資料の現状と課題 - 保存と活用へむけて - 」 主 催: 吉備国際大学文化財総合研究センター 会 場: 吉備国際大学11号館2F デジタルアーカイブ室 研究会名: 吉備国際大学文化財総合研究センター第2回研究会</p>
<p>平成15年11月14日(金) 公開講座 発 表 者: 宮家 準(國學院大學教授) 表 題: 「日本の山岳信仰」 主 催: 愛知学院大学人間文化研究所 会 場: 愛知学院大学</p>
<p>平成15年11月22日(土) 公開講座講演 発 表 者: 宮家 準(國學院大學教授) 表 題: 「日本の山岳信仰」 会 場: 朝日カルチャーセンター横浜 主 催: 朝日カルチャーセンター</p>
<p>平成15年11月24日(月) シンポジウムによる報告 発 表 者: 山内 利秋(吉備国際大学専任講師・國學院大學日本文化研究所兼任講師) 表 題: 「狩猟活動空間の可能性」 主 催: 明治大学・早稲田大学 会 場: 明治大学 学 会 名: 第4回大学合同シンポジウム 縄文と弥生 - 多様な東アジア世界のなかで</p>
<p>平成15年11月29日(土) 記念講演 発 表 者: 宮家 準(國學院大學) 表 題: 「峰入と験の思想」 会 場: 慶応大学三田校舎 主 催: 慶應義塾大学 文学部国文学研究会</p>
<p>平成15年11月29日(土) 学会発表 発 表 者: 平澤加奈子(國學院大學日本文化研究所共同研究員) 表 題: 「八世紀後半の日羅関係 - 宝亀十年新羅使を中心として - 」 学 会 名: 白山史学会 会 場: 東洋大学白山校舎新1号館20502教室</p>
<p>平成15年12月13日(土) 講演 発 表 者: 小林 達雄(國學院大學教授) 表 題: 「人類の記念物」 会 場: よみうりホール 研究会名: 奈良発世界遺産学事始 - 歴史を体感する講演会 -</p>
<p>平成15年12月15日(月) 特別講義 発 表 者: 宮家 準(國學院大學) 表 題: 「民族宗教と環境」 会 場: 日本大学文理学部 主 催: 日本大学</p>

<これから実施する予定のもの>

<p>平成16年1月24日(土) 学会例会発表 発 表 者: 山内 利秋(吉備国際大学専任講師・國學院大學日本文化研究所兼任講師) 表 題: 「考古学関連記録写真資料をどう扱うか?」 主 催: 考古学研究会 会 場: 岡山大学 学 会 名: 考古学研究会 岡山例会</p>

平成16年1月30日(金) 画像資料研究フォーラム「人文科学と画像資料研究」
 報告：高塚 明恵(國學院大學大学院特別研究生)「折口信夫資料の整理作業」
 山内 利秋(吉備国際大学専任講師・國學院大學日本文化研究所兼任講師)
 「記録に残された文化財をいかに現代に生かすか？」
 茂木 栄(國學院大學日本文化研究所助教授)「戦後日本の映像記録について」
 討論：全員
 司会：小川 直之(國學院大學日本文化研究所教授)
 主催：國學院大學学術フロンティア事業実行委員会
 会場：國學院大學120周年記念1号館1401教室

16 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項とその対応

< 「選定時」に付された留意事項 >

該当なし。

< 「中間評価時」に付された留意事項 >

平成11年度「学術フロンティア推進事業」に係る研究進捗状況調査では、平成14年7月25日の総合所見として「先の実地調査の指摘事項を踏まえ、研究体制、内容を一層充実させているものと認められるが、取り組みが総論的で具体性に欠けており、今後、積極的に取り組まれることを期待したい。計画期間中に所期に成果を挙げるとともに、これを契機に、当研究所が、一層の人的・物的充実を図り、考古学等の分野における「劣化画像の再生利用と資料化」の拠点として機能することを期待したい」という指摘を受けた。

< 「中間評価時」に付された留意事項に対する対応 >

平成14年度の中間評価を受けて、前記「研究組織」で述べたように研究代表者のもとに、劣化画像の再生・保存・活用に関する部門、劣化画像の同定とデータベース(目録)化に関する部門、劣化画像の資料化と活用に関する部門、劣化画像資料の所在等情報収集に関する部門、の4部門を明確化し、全体の基礎となるでの実務作業を、大場磐雄博士資料班、柴田常恵資料班、折口信夫博士資料班、櫻井満博士資料班、杉山林継博士資料班の5グループ分担制を敷き、責任者を明確にするるとともに、については参加研究者が独自に研究を進めながらシンポジウム・研究会・フォーラムでの融合・統合を図りながら、研究代表者が統括していくという体制を、再確認するとともに、中間評価後の平成15年度からは運営委員長と実行委員長の兼務は廃止し、実行委員長を別に置いて事業の進展を図った。

については途中、機器・ソフトのトラブルもあったが、中間評価前の平成13年度からは実務担当者1名を増員し、さらに中間評価後の平成15年度には実務担当者2名増員(当初より3名増員)することで進展を図り、所期の目標を遂げることができた。

研究成果の外部への公開については、平成11年度は劣化画像の再生保存システムの構築と、その活用・資料化に関しての内部討議を進めたため、成果の外部公表は低調であったが、12年度以降は順次、研究公表の進展化をはかった。インターネットによる成果公開を予定より1年早めて13年度から開始したことは中間評価時に評価されているが、平成14年度にはシンポジウム1回、研究会1回、平成15年度にはシンポジウム1回、画像研究フォーラム3回を行い、研究成果の公開を行ってきた。一方、印刷物としては平成14年度は「事業報告」の論考編、資料編の充実をはかり、15年度には柴田常恵資料の再生活用と資料化の具体的成果を単行本『柴田常恵資料目録1』として刊行し、さらに研究成果をまとめた論集として『研究報告1』を刊行して成果の外部公開を進めた。

これらとは別に、プロジェクト参加研究者へ研究成果の外部公開の積極化を促し、「研究発表の状況」にある通り、多くの成果公開が実現していった。

学術フロンティア事業発足にあたって

- 第1回実行委員会の記録から -

参加者

阿部 美哉・池田 栄史・井上 洋一(研究室見学のみ)・大島 敏史・大谷 貞夫・岡本 重男・
小川 直之・熊谷 常正・倉石 忠彦・黒崎 浩行・小林 達雄・齋藤ミチ子・杉山 林継・
樋尾 誠・茂木 栄・宮家 準・山内 利秋
以上、敬称略50音順

杉山 國學院大學学術フロンティア実行委員会の第1回会議を開催いたします。

学術フロンティアは、基本的には日本文化研究所が補助を受けた訳ですが、その中には大学院を中心に本学の研究者が参加すると同時に、他大学の研究者を交えて共同研究という形をとるようにとの指導もあり、今後さらに他の研究機関も加わる可能性もあるのですが、現在の所ではお集まりいただいた方々のみで開始する事になります。後は、経過等でご説明致します。はじめに日本文化研究所の所長でもあります、本学学長の阿部先生からご挨拶を頂きたいと思っております。

阿部 お忙しい所お集まり頂きましてありがとうございます。この文部省の先端フロンティアの研究で最初の実行委員会でございます。

全国の大学の中で学術フロンティアの拠点が93校ございますが、そのうちで理系と文系がどのくらいかというと、だいたい文系でもらった大学は多分理系の3分の1はあるかないかでしょう。それからまた私立でもらったのもたぶん半分はないでしょう。という意味では、杉山さん大変面白いものに着目して頂きまして、そのような所へ足がかりができたのは大変ありがたいと思っています。

杉山さんが着目された資料のデジタル化に関して先行的な研究をやらせておられますのは、東京国立博物館等の機関でございますが、その一方で、國學院は私学で素材を持っている事から資料のデジタル化、そしてその公開というような事が国で認められたというのはとてもありがたいと思っています。

それから今年度の第2次補正予算がまもなく決定します。景気回復を目指した補正予算が大体18兆円付きますけれど、その中で文部省関連のものが大体3,000億円でございます。その3,000億の文部省関連の補正予算から私学関連のものというのは100億しかございません。その100億のうち30億が学術フロンティア関連という事になります。

こうした事からも、学術フロンティアについては国が重視しているという事がわかります。そして今回は日本文化研究所が中心になりまして、特に杉山先生が中心になってこの事業を実施される訳ですけれど、大学のほうにもご協力頂く、また、他の大学等の所属しておられる方に共同研究者になって頂くという点も御礼申し上げます。また、それをサポートして頂く、実質的にサポートして頂く方々にもよろしく申し上げたいと思っております。

杉山 次に大学院委員長の小林先生から。

小林 ただいま学長の話の中にもありましたように、文部省の方から率先して学術フロンティア推進事業に応募するようにとの通達がありまして、名乗りをさっそく挙げさせてもらいまして、2年目ですけれども、採用に至った訳です。

これにつきましては、大学院としては一つ新しいアプローチの仕方を構想している所でありまして、大学当局にもお願いしないといけない訳ですが、ポストドクターとかRAといった、こういう人たちが研究に加わる形を構想しており、学長先生よりお認め頂いております。これによって若い研究者がひとつ共同研究に加わる事で履歴になり、自信にも繋がるという重要な意味を含んでおります。

経過と内容について杉山さんのほうから説明して頂きますが、当面手がける内容としては、本学で所蔵しております大場磐雄先生をはじめとする画像資料がある訳で、こうした関連の写真資料の劣化、あるいはそれを防止する、さらにはデジタル化して広く公開していく事を視野に入れていきます。ゆくゆくは本学に収蔵されているこれらの資料を整備とデジタル化だけで終わらせず、新しい重要な研究テーマの一つとして、必要かつ重要な資料について積極的に取り組んでいくという事を考えていかなければいけないのではないかと思います。

そういう点を考慮すると、研究計画の期限がきて本学に収蔵されている資料の扱いが終了すればこれ全て終わりという訳ではなく、そうした長期的な展望を持って学外の研究者の方にもお関わり頂いたという意味がある訳です。これからおおいに力をあわせてこの事業がうまく進捗するように、そして成果があがるようにと願っておりますので、皆様のご協力とご鞭撻のほどをお願いしたいと思っております。

杉山 どうもありがとうございます。議事進行ではメンバーのご紹介は後にしてありますが、実は今お見えの方も途中でご予定がある方もありますし、大変申し訳ありませんが、お名前をお呼びしますので、ご起立の上一言お話頂きたいと思えます。

大谷 授業がありまして遅くなりました。大谷です。

小川 日本文学科の小川です。写真につきましては、文学部の研究所としてございます折口信夫古代研究所、今「閉鎖中」と要覧には掲載されていますけれども、折口の研究所に写真資料が約6,000点位ございます。そのうち私の研究に関わります民俗関係の写真が約2,000点ございまして、数年前に学部共同研究費をいただいて複写だけをしましたが、すでにかなり劣化が進んでおりまして、撮影地の特定等もしていかなければいけないものも随分ありまして、こういう機会に整備が進んだら、と思えます。

池田 琉球大学へ行きましたけれども、國學院大学の考古学研究室で助手をしていた事もございます。お久しぶりですという感じですが、このプロジェクトに何らかの形でご協力できる事があればと思ひまして、参加させて頂きました。どうぞよろしくお願ひします。

熊谷 盛岡大学の熊谷でございます。本学の出身でございます。よろしくお願ひします。個人的な話でございますが、10年以上前に乙益重隆先生がお元気な頃、杉山先生、小林先生等に力添えを頂きまして、柴田常恵先生のガラス乾板あるいはその複写資料について調べさせて頂いた経緯がございます。そういった事でお招き頂いたと思ひますが、現在岩手の方に住まいしており、そちらのほうもやはり明治・大正・昭和期の考古学関係研究者の資料を扱っている所でございますので、いろいろ勉強させて頂きたいと思ひます。よろしくお願ひ申し上げます。

茂木 日本文化研究所の茂木と申します。よろしくお願ひ申し上げます。何か一言というふうにおっしゃられましたのですが、これがはじめての会合でこれからどういう材料があつて、それをどう組み立てていくかというような事で、お手伝いできる点をお手伝いしていきたいというふうにお願ひしております。以上です。

齋藤 日本文化研究所の齋藤ミチ子と申します。

黒崎 日本文化研究所の黒崎と申します。コンピュータ・インターネット関係でこちらのほうに関わるといふ事になっておりますのでどうぞよろしくお願ひします。

大島 写真室の大島です。どうぞよろしくお願ひします。

山内 山内と申します。よろしくお願ひします。

樋尾 樋尾と申します。よろしくお願ひします。

杉山 山内君は研究所の共同研究員という事でお願ひしています。また、その他のスタッフは後では

研究室でご説明しますが、何人かの方に手伝ってもらっています。それから、本日このメンバーでないですが、日本文化研究所の事務長の岡本さんに来て頂いております。一応メモして頂くようにという事で、運営委員会の方では幹事をやって頂いております。

岡本 この4月より日本文化研究所の事務長をやっております、岡本でございます。どうぞよろしくお願い致します。

(この後遅れてご出席の宮家先生、倉石先生一言)

倉石 文学部の日本文学科に所属しておりまして、伝承文学コースというコースに所属しております。専門は一応民俗学という事になっておりまして、民間信仰とかあるいは都市の現代化・近代化を扱っております。時間がなくて失礼しておりますけども、よろしくお願い致します。

宮家 宮家でございます。今年の4月1日からこちらの國學院さんにお世話になりまして、まだ正直言っているんな事が不案内でございます、この情報化の問題もまったくちんぷんかんぷんですが、小林達雄先生のお手伝いもありまして、国立歴史民俗博物館の情報システム委員会の委員にもなっています。よろしくお願い致します。

杉山 それでは少し経過報告をさせていただきます。経過につきましては先程小林先生の方からご説明がありましたように、当初、平成10年度の途中に補正予算が下りるからそういうものを申請しないかと案内がきまして、これを緊急に打ち合わせをしました。

それは平成10年の6月の段階でした。そして実はここにお見えの池田さん熊谷さん等にも電話で履歴書を送って欲しいと頼みました。色々検討した結果、これは補助事業ですので大学でも経費を出さなければいけない、それから経費だけの問題ではなく、体制関係でどうも対応しきれないという経過となり、それでは次年度に向けて準備作りをしようという形ですぐに同じ平成10年度に秋には再び申請書を作成しましたところ、6月と10月でしたからほとんど同じ状態だったのですが、11年度用の申請書を提出しました。

そしてその結果11年4月23日付で平成11年度私立大学学術フロンティア推進拠点の選定についてという通知が文部省高等局長名でまいりました。

研究組織名としましては、國學院大學日本文化研究所、研究組織の代表者は日本文化研究所所長阿部美哉、研究プロジェクト名『劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究』という事で通知がきました。この一通の通知がありましたので、大学としては予算執行よしという事になりました。

で、実際にどのようにするか。申請書に従って写真室を改造し、そこに施設を設定するという事で、ほぼ決まり始めまして、その7月に運営委員会を開催しました。運営委員会のメンバーにつきましては準備委員会から開いてすぐ運営委員会に切り替えた訳ですが、別に1枚の参考資料としてお配りしてあると思いますが、その第2条の組織の所に運営委員をこのように決めさせていただいています。

大学の学長、それから研究所の所長、大学院の委員長、日本文化研究所の主事それから理事、1名ですが現在事務局長です。また、私が入行委員長として加わります。そして幹事としましては日本文化研究所事務長という事で、まず委員会をおいて概要について検討して頂きました。そしてその後実際の写真室の改造等もあったのですが、それに前後しまして日本文化研究所に推進拠点を置くという事に文部省の指示がありますので、研究所の規則の付則にこういうものを置くという事をまず付けまして、それに伴うプロジェクト運営上の内規を作成しました。

これについてもまだ多少訂正もあるのですが、一応お手元にお配りしているものを資料にして頂きたい。そして位置付けをしましてから準備作業に入った訳でございます。

現在は写真室の改造を終わりました、それに伴う施設と設備とかを設置いたしました。設置が秋口に入りました。内容につきましては後ほど説明して頂く事にしますが、それが終わったという事で、その後準備作業に入ります。

準備作業が年度途中からですので基本的には色々問題があるのですが、実際には体制的なものが整っていない段階ではじめています。しかし予算についてはあくまでも今年度予算は年度内で処理しなければいけない。それだけの仕事をしなければいけないという事で進めており、これに伴う研究費、教育研究費および人件費等が付いておりますので、本年度分としてその作業を進める事にしております。

そのような体制ではありますが、大島さんの所で写真乾板、特に大場磐雄先生の資料ですが、約4,000点の乾板資料について、クリーニングしたり、あるいはナンバリングをする、あるいは一部焼付けを行う。一部焼付けを行う事は、実は前々から少し大島さんをお願いして進めていたのですが、基本的には乾板資料をフィルムに置き換え、もう一つは焼付けをして整理するという事を考えて前からやってきたんですが、それにつきましては、予算がまだつけにくいという事がありまして、今までのびのびになっていた訳です。

今回のような新しい形でのデジタル化という事ならばこれだけの予算がつくという事も含めまして、それに伴う作業として写真の処理も行いたいと思っております。そのデジタル化というのは5年計画ですが、その4年度になるかいずれは5年度になるかそれまでにはある程度の情報をインターネットで提供しないとイケませんので、それまでにはおよそ作業をどこまで進められるかを考えていかなければいけないと思います。

そして現在実際にデジタル化の実験的な作業も行っておりまして、それにつきましては現場で、ここでも少し説明してもらいますが、現場でもって説明を受けたいと思います。

先ほど小川先生からお話頂きました、折口先生の資料につきましても、是非このプロジェクトで整理・分析して頂きたい。この資料につきましては、折口先生ご自身が撮影になった写真ですと著作権が問題ないと思うのですが、資料の中にはその他の方々が撮影にしたものも含まれており、その場合少し考えなければいけない部分を含んでいると思います。

これは大場資料やその他の資料についても同じなのですが、折口先生の写真資料としての出来るものならばいずれデジタル化を実施したい、少なくとも本学の中で扱う分には問題はないかと思っておりますので、そういう事を含めて幅を広げたいと思っております。

一応、そのような事、それから写真資料・被写体の確認作業という事で入れてございますが、大場先生などのお撮りになったものについては我々の生まれていない頃からのものがありますので、なるべくご存知の方、諸先輩方でなければわからないというような事もあります。全国という訳ではございませんが、大場先生が調査されたそれぞれの所でご存知の方がいれば、という事もありまして、出来るならばそういう方々がお元気なうちに少しでも見て頂こうじゃないかという事も考えておりまして、実は寒くならないうちにという事でこの会議に一つ先行したのですが、一度稲生典太郎先生・小出義治先生・林陸朗先生にお越し頂きまして、一部、長野県塩尻市の平出遺跡関連資料を中心に見て頂いて、作業を進めております。

これは、今後も継続して人を変え、あるいは同じ方にも来て頂きますけれども、色々な人に混じって頂きながら進めていきたいと思っております。一応経過につきましてはそのような事でございます。何かご質問等、お気付きの点がございましたら後ほど頂く事にいたします。

システムの設備の説明と管理運用に関する説明を黒崎さんの方から。

黒崎 それでは画像データベースシステムの構成図、それから3枚目の内規案について。今回資料デ

デジタル化研究室という名称で写真室を改造してコンピュータを設置した訳ですけれども、それがこの図にある通りです。もっとわかりやすく説明した資料も後ろの方にあります。これはまた後程説明があります。これをめくって頂くとこういう図（画像データベースシステムネットワーク構成図）が出てきます。それで、その資料デジタル化研究室で、この図にあるような画像を入力するためのスキャナそれから画像データベースを構築するためのサーバとDVD-RAMが置かれています。

現在は大場磐雄資料の画像データベースを構築するためにシュウマップされていて、基本的には文書作成とか画像のスキャニングとかそういう事が出来るのですが、画像データベース構築に特化した形でシュウマップされていますので、いきなり調整なしに他のソフトをインストールしたりとか設定を変えたりしますと、メインの作業が滞ってしまうという事が言えます。そこで、このシステムの管理運用というのを実行委員会で常に運用状況を把握できる状況で進めていかなければいけないという事で、内規案というのを提示したいと思います。

これを簡単に言うと、目的「本内規はプロジェクトが画像データベースシステム設備を円滑に管理運用するために必要な事項を定める」で、定義として「画像データベースシステム設備とは資料デジタル化研究室に設置されたコンピュータ設備を指す。画像データベースシステムの管理運用とはシステムの設定、ソフト類の導入・保守、利用の申請の手続きを指す。本来は管理課長が管理する」となっています。ここではそのソフトを導入したり、いろんなシステムの設定等そういうものをそれからどう利用しているかのチェックを管理する、という事にしています。

その権限は、「実行委員会が持つ」「利用にあたっては本プロジェクトの研究計画に基づく旨の申請書を実行委員会に提出し、許可を得る」つまり、データ化された形でどのような目的で利用するのか、その利用形態を含めて把握できる形にしなければいけない。さらに禁止行為、これは当たり前です。そして「この内規の改・廃止については実行委員会の意を得て運営委員会で行う」このような内規を作成いたしました。これについて、ご検討頂きたいと思います。

杉山 この内規につきましてはまた実行委員会で検討しながらやっていく事になると思います。だいたいこれでよろしいかという事ですので、これはもうがっちりしたものという事ではなくてこういう形で進めていきたいという事でございます。ソフトにつきましても、いろんなソフトがありますので、あまりみだりに入れられても困るという事も含めまして、また、その利用方法につきましても当座この委員会が承知していないものは、ちょっと待ってくれという方がいいかと思います。

年中この会議が開ける訳ではありませんが、他からもし何か言われたときに、このような形でやっております、という事にしていきたい。また、インターネットのほう動き始めますと違った色々な問題が出てくると思いますので、いかがでございましょうこんな事でよろしいでしょうか。一応承認頂いたという事にします。

その次が乾板写真のデータベース化という事で、山内さん。

山内 今回は、大場磐雄博士の資料をデータ化するという事にあたりまして、まず、はじめにどういう構成にしていけばいいかという事を考えてみました。

まず、ガラス乾板がどのような状態になっているかと申しますと、乾板を約10枚から12枚を組にいたしまして、手札版あるいはもう少し大きいサイズ-いくつかのサイズがあるのですが-を小さい箱にまとめてあります。さらにその箱を5箱から10箱程度まとめた中型の箱と申しますが、その箱にまとめてあります。そして、さらにそれがダンボール箱にいくつかまとめて入っているという状況です。それで、それらの中箱、あるいは一番小さい箱に大場先生の筆跡と思われるメモ書きがございましたが、また、現在本当に整理するにあたっては、一つ一つ判読していくという一つの作業行程としてあると思います。

もう一つには、今の、現在の我々の目で見ると写真の内容に何が写っているのかを把握していこうと努めました。「乾板から見た撮影内容」というのは、こちらで見て判断しました写真の内容です。いくつかの乾板を見ていきますと、「装束」、「春日大社」とか、あるいは、「諸磯c式」といった風にこちらの方で推定した内容が書かれています。

さらに乾板自体を保存していく、あるいは場合によっては修復していくという事も含まれるかと思いますが、そういった事を考慮するにあたって、現在乾板がどのような劣化状態にあるのかも資料に書いておきました。

例えばゼラチンが劣化している - ガラスの上にはってあるゼラチンですね -、また、その表面に傷がある下の方にその「銀鏡」(ミラーリング)と申しまして、乾板面がてかてかと光ってしまっている状態です。

いくつか整理してまいりましたが、考古学的分野に限らず実にさまざまな内容が撮影されていて、非常に驚きました。それで、今度は大場先生ご自身の方でメモされた内容というものがどういうものであるかという事ももう少し認識しながらいこうと思います。表をご覧ください(大場磐雄写真資料(例))。各項目にどのような内容が書いてあるかという事は、この資料にあります。『資料コレクション種類』といますのは、箱、中くらいの箱に入っている内容として、「岡山県調査」という事が書かれていました。その他日付等が書かれている場合がございます。

『撮影対象の種類』とした、「景観」とか「石器・石製品」というのは、こちらの方で見るとこれはなんだろうというふうに分類したものです。また、右をご覧ください。右から2番目『覚書』という項目です。メモ書きなのですが、「竹島・岩竹石器」とか「下石器ダブリしもの」とか、全て大場先生ご自身が書かれた内容です。またその左の「資料の状態1」、「資料の状態2」というのは、資料の保存状態を表しています。良好であるとか、虹がでているあるいは資料がどのような状態でケースに入っていたか、特に一度ガラス乾板を1枚1枚袋に入れてそれをさらに10枚セットで箱に入れておりましたので、こういった事も含めて劣化の状況を将来的に検証していく上で微妙な情報になってくるのではないかと考えています。これは今後のこういったものに関する「修復カルテ」になっていくものです。

このような我々の、現在の我々の目でみたような内容の項目と、大場先生の書かれたメモをもとにして検索項目のいくつかを書いてみました。

「管理情報」(表1:『画像データベースの管理情報』)をご覧ください。ここに「フルナンバー」という項目があります。これは大島先生の方で添付されましたガラス乾板のナンバーの事です。「資料一貫ナンバー」とありますが、大場磐雄先生が撮影された乾板 - 非常に長い期間いろんな場所を撮影しておりますので - は、いくつか小分類が出来ますが、分類をまったく無視して通し番号をつけたもの、また、将来的に折口先生の資料を含めた場合でも通し番号としていくのも一つの可能性ではないかと思えます。それで、「資料コレクション種類」としました。例えば、1としたら大場資料、2であれば折口資料である、というふうにつけております。また、下に「分類ナンバー」とここでは書いてありますが、「1: ~遺跡踏査」であるとか、例えば「2」は「國學院大學考古学資料館」であるとかといった所で一度一度の、一回一回の撮影機会ごとに分類していければというふうに考えまして、この番号を振っていきました。

また、このページの真中あたりに書かれている撮影場所、地名等ですね、あるいは遺跡の名称と撮影年月日、これは西暦と和暦を用意しております。特にお祭り、儀礼に関しては日にちがかなり重要になると杉山先生からご指摘を受けまして、ここは「昭和 年」と書いてありますが、物によっては「月」・「日」を添付する事としました。

「撮影対象の種類」としましたのは、そのまま撮影した対象の種類という意味です。古墳散布地集落地その他色々書いてありますが、これは先ほどの乾板資料の内容と大場先生のメモ書き等から分類したものです。この撮影対象の種類はその検索項目のときにキーワードとして重要になってくるのだと認識しております。それらの乾板写真をもとにして、計測項目のキーワードとしてつけましたのが「キーワード情報」です。

土器、縄文時代、弥生時代、古墳時代等、現在少し名称を変えたりしておりますけど、大きくは考古学と宗教・信仰、美術工芸、民俗、人、風景、集合写真等があります。いくつかの大分類のキーワードを設定しました。その中でさらに細かい設定ですね、写っている対象が実際具体的に何であるのかをここで書いてあります。これからのものには複数の項目にまたがるものもあります。例えば美術工芸にでてくる装束とか仏像と申しますのは、その上の宗教・信仰という大分類の項目でも検索できるようにと考えました。

さらに、もう一つですがこれはその他大学、他の研究機関等のその同様のデータベースを参考にいたしますと、特に注目したいのが地理的情報、地図等によりその検索が可能であるようなものがいくつかございました。たとえば、日本地図の中のどこかをクリックする事によって、データが出てくるというような事が可能であればと思いました。

日本全国の市町村を全部一つ一つ地図を載せていったりする事はデータとして容量が大きくなってしまいますので、集中的に大場先生が踏査された場所を選びました。生年から没年まで全て抜き出す事は今の段階では無理ですので、ランダムに昭和10年から24年に大場先生がどこにいかれたかという記録です。大場先生の略年譜ならびに著作目録から取り上げましたが、実際昭和10年から24年以降大場先生は各所にご踏査されてはいますが、ここは一応中心であると思われる所をピックアップいたしました。岩手県、宮城県、福島県、東京都等様々な所があって、個別のその項目から引き出しまして、どこの県を細かくすればいいか、さらにその県のうち市町村、あるいは地域として選び出せばいいのかを考慮しました。例えば県別では関東各県、静岡県等、また、市町村地域別という所で、東京都渋谷区、國學院大学とございます所、また、神奈川県・千葉県 - 千葉県が一番多いようです - と、様々な所があります。で、こういったいくつかのデータに関する検討を行った結果、特に今回 ICC さん及び日立エンジニアリングさんの方に依頼をいたしまして、データベースを構築する事にいたしました。

今回、「管理情報」と「検索項目」(表3:『画像データベースの検索』)を別にしましたが、実際に管理する情報とユーザー、使って頂く方に見て頂く情報とを分けているからです。使って頂く方に見て頂く情報は、保存状態とかそういったものは省いてあります。あくまでも管理情報は多めに考えております。また今回、コンピュータは Windows によってシステムを構成していますが、これは画像処理の分野で以前は多く使われていた Mac と比較して、現在では Windows の方がより多くのユーザーに支持されている点、アプリケーションもより多くデータのコンバートがし易い点などといった現在の趨勢を考慮し、よりデータを多くの人々に共有してもらおうという意味をこめております。

実際のデータ入力画面というのは、後で実物をご覧に頂きたいと思えます。スキャナーでとり込みました画像データをズームして見てみたいとか、縮小・拡大・回転してみたりとかができますし、印刷も可能です。印刷した資料につきましては、本紙の一番後ろのほうに4枚ほど用意してありますので、後でご覧ください。先ほどキーワード情報としてどのような事を載せたかをご説明しましたが、最終的にこのように載せてみましょう、と書きましたのが5ページです。キーワード情報には大分類の考古学・宗教信仰・美術工芸・民俗・人・風景というふうにあります。

画像データは文字データに比べると、はるかに情報量が多いので、あまりデータがきれいであるか

らといって、なんでもかんでも大きいデータを取りこんでしまうと、すぐに受ける容器である、DVD - RAM やハードディスクの方がいっぱいになってしまいます。それで使うものをランク分けをしてスキャンングする方針で考えております。A・B・C・D・E ランク、だいたい多くはBランクでございます。Bランクと申しますのは、現在1000dpi程度と、大きめに設定しております。スキャンングのレベルを下げると、拡大したり美術写真印刷等ですと印刷屋にデータをまわした場合に少々画像の鮮明度が落ちてしまうという恐れがあったり、逆に鮮明度にこだわりすぎるとデータ容量が大きくなりすぎると、またそのデータを配信する時に、例えば外部のネットワークには時間がかかりすぎてしまうという風に色々な問題点があります。この画像、実物をご覧になった方が早いと思いますので、後程。

次は地図検索ですね。先ほど選びましたこの地図、日本地図の中で選んでいただいて、さらに細かく市町村の地図、というふうな感じです。で、具体的にどういう地図があるかという事は、11ページでございます。今はあくまでも仮の地図を入れていまして、実際ご覧になって頂くとこのままでは必ずしも見やすいものではございません。あくまでも現在は仮の図面を入れてあって、細かい、たとえば渋谷区なら渋谷区の地図を写した場合でもぜんぶ現在の地図、道路地図になってしまいます。非常にそれだと見にくいので土地条件図と国土地理院が発行している土地条件図等、あるいは鳥瞰図等を利用していければと考えております。その後実際に4枚の写真資料がございますが、これも平出遺跡のデータです。撮影日というのが「昭和23年」とか「昭和29年」と入力していますが、ここだけはちょっと検討していませんので、報告書が出たのが昭和29年なのかな、その辺なのでそれにあわせて仮に入力したものです。キーワードという所で、いくつか4つか5つ、最高で10個まで検索できますが、10個も入る事はなかなかないようで、3つ・4つくらいのキーワードが多いようです。

今後細かく検討していく事によって、そういったキーワードが増えていったりとか、検索項目もどんどん改変する事も出てくる事と思います。それに関しても色々幅が利くように随時、逐次変更できるように業者の方と検討している次第です。私の方からのご説明は以上です。

杉山 まだ稼働していない状態なのですが、この中で検索項目などははじめから決めていかなければいけないものですが、この検索項目につきましてなるべく早く固定化したいと思います。そうしませんと後に変更しないといけないとあまり得策でないと思います。できましたら検索項目等につきましてはいろいろご意見を述べてもらいまして決めていきたいと思っております。

会議の後ほどでも結構でございます。特にこの中では考古関係とか民俗関係とか色々な方がおられますが、民俗の方を倉石先生、小川先生、研究所の茂木先生、斎藤先生で話し合っただけだとありがたいんですが、それで、考吉の方は、熊谷先生、池田先生ご慧見がありましたら、小林先生でも私でも結構ですから言って頂ければありがたいと思っております。

それから、大谷先生には文書関係を少し見て頂こうと思っておりますのでその辺につきましても、少しまだ入っていないのですが、どういうふうにしたら便利だろうかという事をちょっとお話頂ければありがたいですし、宮家先生から信仰関係の事についてご意見を伺えればまたありがたいと思っております。

一応そのような事ですが、これだけはなるべくある程度で、当分の間は変更しないような形でもって進めたいというふうに思っております。よろしくお願ひしたいと思います。その他の事につきましては多少変更が可能なものにつきましてはそのときそのときでもなんとか動かせるかと思っております。特に大分類的なものについてはぜひお目通し頂きたいと思っております。

小林 今の図面の中で、地図検索ですが、都道府県から市町村地図となっておりますが、国土地理院から今50mメッシュで、あれとの関係はどうします。

山内 それはですね、今これでは入ってございませんけど、実はちょっと昨日日立の方へ行ってまいりまして、その話が出ました。かなり使えるのではないかという話になりまして、ソフトとしてかなり安い値段で出ておりますので…。

小林 そう、かなり安いですよ。僕たち縄文ランドスケープ研究会でそれ全部使っていますけど、50m といえど遺跡特定できる。神社だったら神社特定できる、これやりますか。

山内 はい。

小林 そのかわりこれ、緯度経度がきちんとしている必要がある。それは5万分の1とか元にあたってやれば大丈夫、入ります。それを重ねていけばそこから見る景観も全部、東を見ると何々山が見えるとかテーマが全部出ますので、それを是非日立のほうとつめて頂きたい。

大谷先生の所ではマイクロフィルムがかなりあるんじゃないですか？ああいうものの使い勝手をちょっと。

大谷 ちょっとお尋ねしますが、この大分類、小分類という事ですが、5ページのキーワード情報の大分類ですね、この大分類で例えば今回ご説明いただいているのは大場先生の資料という事なんですが、他の先生方の資料もこの大分類にもとづいてやっていくという考えですね。

山内 いや、これはあくまでも大場先生のというふうにご考えて頂ければと思います。他の先生のはこれでいくのかどうかまだ検討しておりません。

大谷 まだ、他の先生方の管理情報といいましょうか、分類システムというのはまた別にお作りになる。

山内 そうですね。

杉山 今まで検討したのは大場資料についてだけなものですから、先ほどもちょっと言った、民俗の方で折口先生なんかの事を見たらちょっと違ってくると思うんですよ。そういう事を今のうちにある程度補っておいて、ある程度その資料を知っている人に聞きながら民俗の資料にこんなものがあるのだというようにしないと、何が引っ張り出したいんだと。

これ検索ですから全部をなんていいますか、丁寧に図書館の分類のように十進分類なら十進分類で全て網羅するという事ではなくて、利用する人が利用しやすい検索のキーワードですから、それからもう一つキーワードで予想されるもの、折口先生なり大場先生なりでキーワードとして予想されるものを入れといて、とりあえず、予想されないものははずしておいてもいいと思うんですよ。そういう事のなかでのものだと考えて頂いた上で、これ足りないぞ、こんなものが欲しいぞと、これやっていくときに必ず必要になるぞというものは是非言って早くから入れて欲しいと思います。

小林 今の事とても大事でね、たとえば佐倉の歴博等でもだいたい公開している訳ですね。その時に、いずれはお互いに乗り入れ出来るようじゃないとせっかくこっちでやってもすれ違ったりしても問題なので、たとえば大場資料の中に入っているに決まってるんだけど、「鏡岩」がなければならないとはっきり出るようになってないと、他所ではいっぱいある個所が大場先生はたまたまそれについてはないんだ、という事でこちらではデータ化されていないという事にならないように、ある程度の横断的な分類ですね、これを視野に入れておかないといけません。

その他に細かい、特定の資料についてはどんどん深まっていくというそれはその後の話なんで、やっぱりせっかくですので、その辺りが例えば都道府県でしたらどんな分野でも共通しているみたいですね、どの分野にも共通するもの、そういう分類は一つ頭の中に入れておかないといけません。とりあえず今年は大場先生のを一回やってみて、そして他とのアクセスでどうなるかという事をやってみる。

杉山 今年の最後については出来るところからやる事にして、今の検索キーワードにつきましては、

今年度中はあまり決めたくないです、実は。それはある程度皆さんと相談の上でそれぞれの専門分野でもって今のお話のように佐倉との連絡がどうかという事はいずれ出てくるはずですので、そういう所のキーワードがどうなっているのかという事も表にしていけないと後で横断性がないという事になってきますと、あとで無駄も出てくると思いますのでいずれ、オープンするという事をいつている訳ですから、その辺もやっぱり考えていかなければいけないと思うんです。是非その辺は皆さんのお知恵を拝借した上でやっていきたいと思っています。

大谷 大分類の所に文書なんてものはないからね(笑)。小分類の所に文書ってあるんですけど、それではちょっとね、古い所から今まである訳ですから、ちょっと大分類の所に入れて頂きたいですね。もちろんです。

齋藤 今、集中的に大場先生のをやっていますけど、相対的に柱がどんなものがあるかあらかじめ決めて、今日は折口先生と大場先生と同じ事、その他にまだある訳ですよ。民俗の事だけでいえば個人的に収集したものもありますから、柱をどうするかそれは今から立てられると思います。例えば、今集中的に大場先生のをおやりになるとして、我々民俗班はその間どういう事が出来るかとかその間いろんな分類をね、私は今映像じゃなくて資料の方を残す為やっているんですけど、最初がすごく肝心という事を実感している訳ですね。痛いほど。後でごちゃごちゃにならないように分類をしっかりとしておく、後でそういう事が少なくて済むんです。

そのために時間をしっかりとかけておくとかそういう大方針をちょっと立てて頂きたいという事と、それと、いま杉山先生だけがおおもとになって一本の木にぶらさがったような組織になっていますけど、それをもう少しきちんと作らないと機能的にちょっと弱いと思うんですね。そういう事をはじめにして頂きたい。

杉山 わかりました。実は今日のメインの所ですが、それではまた、進めたいと思います。

宮家 歴博とか民博からはもう取り寄せているのですか。こういう資料につきましては。

杉山 必ずしも資料収集が完璧という訳ではありません。報告書等で押さえられる部分に限られています。

宮家 それもちゃんとやらないといけない。

杉山 一応まだいろいろな事があるかと思いますが、この後で話を進めたいと思います。最初乾板を進めてまいりましたが、乾板につきましては実は東大の資料編纂所とか東京国立博物館とかそういう所の乾板資料の整理の状況といいますが、現在の状況につきましても実は少しずつ見せていただいております、乾板については実は今のところ本格的にデジタル化とかそういう事についてまだ軌道に乗っている所はほとんど無いようでして、今みんな試行錯誤しながらやりはじめている事だけは事実です。一番進んでいるのは東大の資料編纂所とか…。

小林 総合博物館も。鳥居龍蔵の乾板とか。目録は出ている。

山内 東大の総合博物館とそして資料編纂所でやろうかなという話が出ていますが、一番国内ですごいなと思ったのが、長崎大学図書館で持っている幕末から明治期の絵付けの写真ですね。これはガラス乾板ではないですけど、このデータベースというのは非常に面白いです。インターネットに公開されています。大分類・小分類という発想も長崎大学のデータベースに多く拠っています。

他の写真関係はやはりアメリカがものすごいです。アメリカのピーボディーミュージアムにEメールで運営状況を色々質問してみました。

後はデンマークのマーブルグ大学のミュージアムでもかなりやっているようなのでそこでも聞きましたけど、メールは返ってきておりません。相対的に海外の方がかなり進んでいるようです。

杉山 そのような状況です。予算の事を申しませんでしたがけれども、本年度だいたい14,700万円位入っ

ておりまして、改装費と設備費が大部分なんです。5年間でも、来年度からは1,100万位づつの予算です。1億まではいかない状態です。ですから、早稲田大学とかその他の私立文科系でも数カ所は年間億単位で進めています。あるいは10何億という状況で進んでおりますので、規模としてはそれほど大きくないものです。少しずつでも立ち上げないと、やれる所からやらないと遅れをとるといような事態が出はじめておりますので、先ほど学長がちょっと申しましたように、補正予算でまた付くんだと思いますが、そのとき既に学術フロンティア拠点に指定されていない機関は今後予算申請が出来ないという事ですので、そういう意味では去年申請をしておいてよかったという感じはしています。さて、どんな資料があって今後どういう事が出来るのかがまだ細かく出ておりません。

ただ、プロジェクト運営内規の活動の所に入れてあるんですが、実はデータ源としては写真乾板だけではありませんで、カラーフィルムあるいはモノクロフィルム、それからマイクロフィルム等の事も考えなければいけない。いまここには焼付け資料については書いてありませんが、古い焼付け資料につきましても当然考えなければいけないと思います。それから現在は動画までは考えていないんですが、一応静止画像を考えておりますが、これについてもいずれ考えなければならぬ時期がくるかと思えます。

現在は静止画像についての操作という風に考えておりますので、実は先ほど斎藤先生がおっしゃったように研究所には研究所で調査したもの、個人で調査したものの中にも今では撮れないカラーフィルム等もかなりありますので、それらはもう色が失われているものは、相当ある。そういうものにつきまして後から、機械の中で補正をするなり、あるいはデータの中で使えるような形で、どういう形で使うか、ビデオ的に使うかどういふふうにするかは別にしても、そういうような事も含めて考えていかなければいけない。特にカラーフィルム、マイクロフィルムにつきましては十分考えなければいけないと思います。また、折口先生の事は先ほど申しましたが、まだ民俗につきましては、全体像を把握していない状況ですのでこれからも、まずどんなものがあるかを出していかなければいけないと思えます。それが一つと、もう一つ大谷先生からありました文書関係なんです、これもまだ把握してない、これまで把握してない為にほとんど載ってないんですが、文書資料で、これもまた、著作権の問題その他があるかと思えますが、出せるものまた出して意義があるものについていずれ大学としてインターネット上に公開していく必要があると思えます。その辺の事を一つ大谷先生にも是非こんなものが出せるじゃないか、これはみんなが欲しがるといふものを是非柱として出して頂く事が一番ありがたいかと思うんです。一つ是非そんな事でそれぞれの先生方にそれぞれの専門とそれぞれの資料それと共同研究という形でやり始めましたので、池田先生のような琉球大学の方で、こういう事をここでやったら面白いだろうという事を一つ是非出していただいて、もう少しちゃんとした書き込みで、本当は抜本的な計画書がないといけないんですけど、そこらへんを一つ含めてご意見を伺いながらまとめていきたいと思えます。斎藤先生の言われましたように、杉山の所だけというような事ではいけないと思えますし、困ると思えますので、これもなんとかして組織的にも方法を考えていかなければいけないかと思えます。その点もお願いしたいと思えます。

小林 役割分担なんてものを今日ここでという訳ではなくて、一応杉山さんがここまでやってくださったので、杉山さんの方でそれぞれあたって頂いて、この辺りについての仕事といいますか準備、あるいは資料調査等そういうものも含めてどうだろうかという事を考慮してもらいたいと思えます。

それです。大谷さんの方にはこういうのをお願いしたい、大谷さんの方でやりきれないときにはこういう問題があるのでちょっと、事務局といいますか実際やったださっている山内君の方にちょっと研究してくれというような事をちょっと、そういう束ねを杉山さんにやって頂くといふような事で今日のところは。

杉山 とりあえず出席者名簿というようなものをお配りしてありますが、先ほど申しましたように運営していくにはどうしても入って頂かないといけない方がまだいらっしゃると思いますので、その辺も、それから研究課題も細かく検討していかなくてはならないと思います。

先ほど言いましたように考古学関係は何人かの方がおられますし、民俗学関係の方もおられます。あるいは宮家先生のように修験あるいはその他の神道関係の事もまたお願いできるかと思います。大谷先生には文書史料といいますが、そういうものの事を少し分担してお願いできればありがたいかと思っておりますので、いや私はこれをやってみようという事があれば一つお願いしたいかと思っております。一応そんな形でもって、私はあくまでも取りまとめ役的にさせていただこうかと思っています。

本当にやり始めたら大谷先生も一人じゃね、やっぱりきつと思いますし、宮家先生にも一つ場合によっては誰か入れようという事になってくるかと思うんです。当座でしたものですから、少し荒っぽい、本当にそれを考えて全部を含めたり、という事でもなくてまずは考古と民俗中心に立ち上げてみるかという雰囲気やり始めましたので。

小林 まさに杉山さんの話のとおりでして、実はフロンティア推進事業の事を知ったときにですね、まず手を上げようという事で慌しく動き回ってそれを杉山さんがまとめてくださったという経緯がございますので、まず手を上げて指定されたという事が第一段階の実績であろうと思っております。

それから先ほどちょっとお話させて頂きましたけれども、これにつきましては少し余分など、言いましょうか、また、別の角度からこの推進事業を相乗りしたいという事が大学院の方でも考えておられてTAという制度があります。すでに、ティーチングアシスタント(TA)につきましては大学当局から認めて頂きまして、今年度からちゃんと実施に移しているところですが、この次はRAを設けたいと思っております。このRAにつきましては大学の研究のプロジェクトがあって、そしてそこに参加するというような事が必要最小限になっておりますので、それにこれをうまくオーバーラップさせたらどうかという事でありまして、どうせ大学から出る金は一箇所です。こっちのフロンティア事業の方に申請する場合と、RAのメンバーとしてまた申請するというような使い分けを考えていきたいというふうに思っている所でありまして、先ほど申しました所のくり返しなんですけれども、これは皆さんご存知のとおり大学院を出たらすぐに就職がある訳ではありませんので、そういう時の一つ待機といいましょうかそういう時のつなぎのためにも、ただ浪人中という訳ではなくてきちんと履歴になるようなそういう形で若い研究者を育てていきたいという事がひとつにはある訳です。そういう事もちょっと含み置き頂きたいと思っております。さっそく少なくとも来年度にはRAというものを認め頂きたいという大学当局に働きかけている所でございますので、ま、なんとかうまくいくのではないかと希望的観測を得ているところなんですけれども、それをちょっとご了承頂きたいというふうに思っております。

文部省が一生懸命でポストドクターとかそれをやれというような事をやっていますからね、だからやっぱりそういうような事も答えられるようにしていかないとと思うのですけどね。ま、たまたまこれは共同研究プロジェクトですから、そういう意味ではかなり使えると思っておりますので。

それからたとえば民俗の方でもこういう仕事をするという事ですね、ちょうどRAを一応後期課程以上じゃないと対象にはならないのですが、一応RAとして任用してその人にその仕事をやらせよう事もありますし、文献の方でも同じような事があります。

—以下略—

(平成11(1999)年12月2日)

研究成果報告

資料デジタル化事業の方法と成果

1. はじめに

画像資料の「活用」「資料化」を表題に掲げる本プロジェクトの中核となるのが資料デジタル化事業である。これは、資料の持つ情報をデジタルデータという形に置き換えることで、保管・加工・活用を容易にすることを目的とするものである。

以下、5年間の作業を通じて蓄積したノウハウの概要と、新たに認識された課題について述べたい。

2. 対象資料

本事業で対象としたのは、大場磐雄、柴田常恵、折口信夫、櫻井満、杉山林継、宮地直一の各氏が収集した資料のうちの画像資料である。この画像資料には写真（原板・プリント）、拓本、絵画、スケッチ・実測図等が含まれる。

各コレクションの内容については次節以降で詳しく紹介されるが、資料の多くは各氏の研究者・行政官としての職務に伴って集められた記録資料であること、各コレクションとも千点単位の量を持つものであり、また、多様な学問領域に渡っていることなど、共通の特徴が認められる。こうした特徴は、従来のデジタルアーカイブの多くが国宝・重要文化財級の資料あるいは特定少数の一括資料を対象としたものであったのは大きく異なる。また、図書のように目録規則が定められているものや、土器石器や民具、文書などのように博物館で一次資料とされるものとも異なる。デジタル化による資料化にあたっては、これらの点に留意した方法を確立する必要がある。

3. デジタル化の方法

画像資料は画像そのものの部分と、撮影対象・撮影者・撮影年代・サイズ・材質・付されたメモ類などの部分とに分けることができる。デジタル情報としては、前者は画像データ、後者はテキストデータとして管理される。プロジェクト開始当初は、この両者を一括して入力・検索するシステムを構築したが⁽¹⁾、その後の実際に作業を進める過程で、作業効率やデータ管理の容易さの点から入力作業段階では両者は分離して行う方法に改めた。

作業はコレクション毎に行なったため、その作業内容の詳細についても次節以降コレクション毎に述べられるが、ここでは一般化して作業工程の概要を示したい（図1）。

画像については、クリーニングその他必要な処置を行なった後、整理番号をふる。これは各コレクション、あるいはその中での一括資料毎に与えられた略号（ob、os、sj等）と、その中での通し番号を組み合わせたものである。次に、スキャナーもしくはデジタルカメラを用いた入力作業を行なう⁽²⁾。ここで得た高画質のデータは外部ハードディスク、DVDなどに保存する。さらに、サイズを落としたデータを公開用に作成する。なお、カラーリバーサルフィルムについては外部委託し、複写とフォトCD化を行なった。

テキストデータについては、資料に残されたメモ類の読解や、サイズ計測・材質確認などを行なう。撮影年代や撮影場所などの項目に関しては、資料そのものから得られる情報が少ない場合、他の資料を参照して項目を埋める必要があるが、資料性の観点からこの両者は区別すべきであろう⁽³⁾。

実際の作業にあたっては、どの部分を採用するか、どのように表現するかなど判断に迷う場合も少なくないため、作業を複数の人数で行う場合は資料数による分担よりも項目毎に分担することが、作業場の一貫性を保つ点で効果的である。また、旧字や記号・色などデジタルデータとして不向きな情

報も記録する必要があるため、紙媒体の台帳を作成した上で、デジタル入力を行うことが望ましい。入力はコピー・ペースト、並び替え、抽出、自動入力などが可能で、しかも一般に普及していることから市販の表計算ソフトを用いた。

なお、この2つの工程は画像データの方を先に行う方が効果的である。資料に残されたメモ類が少ない場合、テキストデータに関する作業は画像データを手がかりに行わなければならないが、その際、既に画像のデジタル化が完了していればオリジナル資料が受ける負担は少なくなる。

また、作業は基本的に資料デジタル化研究室で行なったが、この他にも折口資料については文学部付置研究所である折口博士記念古代研究所で、また、Web運営を含む事務作業は日本文化研究所第5研究室でも行なった。これらは、学内基幹LANで結ばれ、データのやり取りが可能である(図2)。

4. 資料の公表

このようにしてデジタル化した画像データおよびテキストデータを統合し、Webサイト、写真資料目録、データベースの3つの形で資料の公表を行なった。

Webサイトでは、大場磐雄博士写真資料、折口信夫博士写真資料、櫻井満博士写真資料、杉山林継博士写真資料の一部を公開した。いずれも全体の公開ではなく、コレクション内でも比較的まとまった量の資料群について、試験公開として公表したものである。現状は、サムネイル画像による一覧から、解像度150dpi・最大長700ピクセルの画像データへのリンクを張る形式であり、収録データ量・システムとも低いレベルであるが、いち早く掲載できる点、修正が容易である点、カラー写真の掲載に制限がない点、そして何よりもアクセスのしやすさの点から重要な意味を持っている。

紙媒体の写真資料目録としては『柴田常恵写真資料目録』を刊行した。文字の検索や並び替えなどはデジタルデータの方が勝れているが、紙媒体の利点としては一覧性の高さや書き込みのしやすさなどが挙げられる。また、長期保存を考慮し、中性紙ベースのコート紙を使用している。デジタル媒体と併用し、それとは異なった形で保存・活用する方法として位置づけることができる。

データベースについては、上記2種類の媒体の利点を活かす形で設計を行なった。本書に添付した「大場磐雄博士写真資料データベース」がそれである。市販のソフトを元に設計しているため汎用性も高いものになっているが、キーワード検索とともに、ページをめくるように順番に閲覧することも可能な仕様としているほか、気づいた点などを書き込む場として利用者用のメモ欄も設けている。また、パスワード入力による管理者モードでは、テキストデータの書き換えやその一括エクスポート、公開・非公開の設定などが可能となっている。なお、画像は解像度1000dpi・最大長1000ピクセルとし、これらを別フォルダに格納し、データベースから参照する構成となっている。

5. 成果と課題

以上のように、5年間の資料デジタル化事業によって、大量の画像資料の整理・公開システムをある程度確立することができた。

整理作業のうち、画像データについては、デジタル化の機器や保存形式・保存媒体など理工系の技術的な点で課題を残すものの⁽⁴⁾、概ね当初の予定通りの成果をあげることができた。

問題は、テキストデータの整理である。人文科学において資料として用いる場合、画像データとともに、いつ・どこで・何を記録したのか、というテキストデータは不可欠である。しかし今回扱った画像資料にはしばしばこの記述が欠けていた。また、今回のような膨大な量を抱える資料群の場合、適切な検索機能を備えることは本来必須であるが、画像内容をテキストに変換するにあたっては視点によって様々な描写が可能であるが、何を「撮影対象」として抽出するかという点については今後の

課題である。また、他の人文系資料と同様、「分類」の問題も課題として残されている。

成果公表については、一度のデジタル化で複数の媒体での公表が可能になるというデジタルデータの特性を活かし、複数の媒体での公表を行い、それぞれの媒体の性質にあった用いられ方がなされている。技術的な方法もある程度ノウハウを蓄積し、デジタル媒体については、今後の Web を含めたデータベースシステム構築への手がかりが得られている。

一方、何をいかに公表するか、という点については課題が残されている。特に神社・寺院所蔵資料や民俗資料などについては宗教上・倫理上の問題を検討しなければならない。

このように、整理段階・公表段階の両段階において、技術的には一定の成果が得られたものの、新たに資料論的な、あるいは運用面での課題が浮き彫りになってきた。これらはまさに人文科学的な研究分野であり、既存の学問分野にとらわれず、本プロジェクトの他の部門と連携しながら、学際的・産学協同的な視野から解決すべき課題といえよう。

(中村耕作)

註

- 1) 平成11年度事業報告で報告したもの。
- 2) デジタルカメラよりもスキャナーを用いることの教育的効果については山内利秋「文化財系画像資料の保存から活用へ - 國學院大學での取り組みを例として - 」(日本写真学会主催 平成15年度 画像保存セミナー講演原稿 <http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/research/yamauchi03.html> 参照。
- 3) この点については、プロジェクトが後半に差し掛かった段階で認識されたため、必ずしも完全に実施できた訳ではない。
- 4) 保存の問題では、ファイルの破損という自体が発生し、DVD と外付けハードディスクで複数のバックアップデータを作成した。

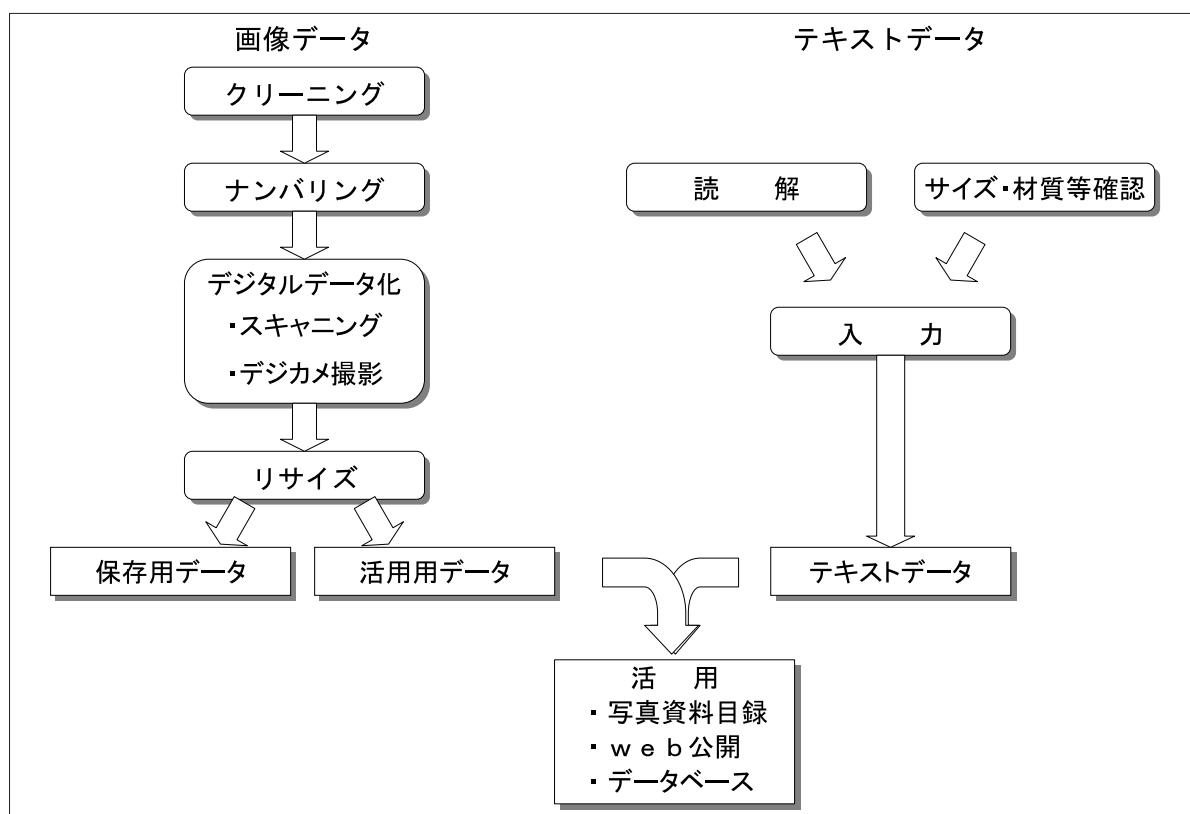


図1 写真資料のデジタル化の流れ

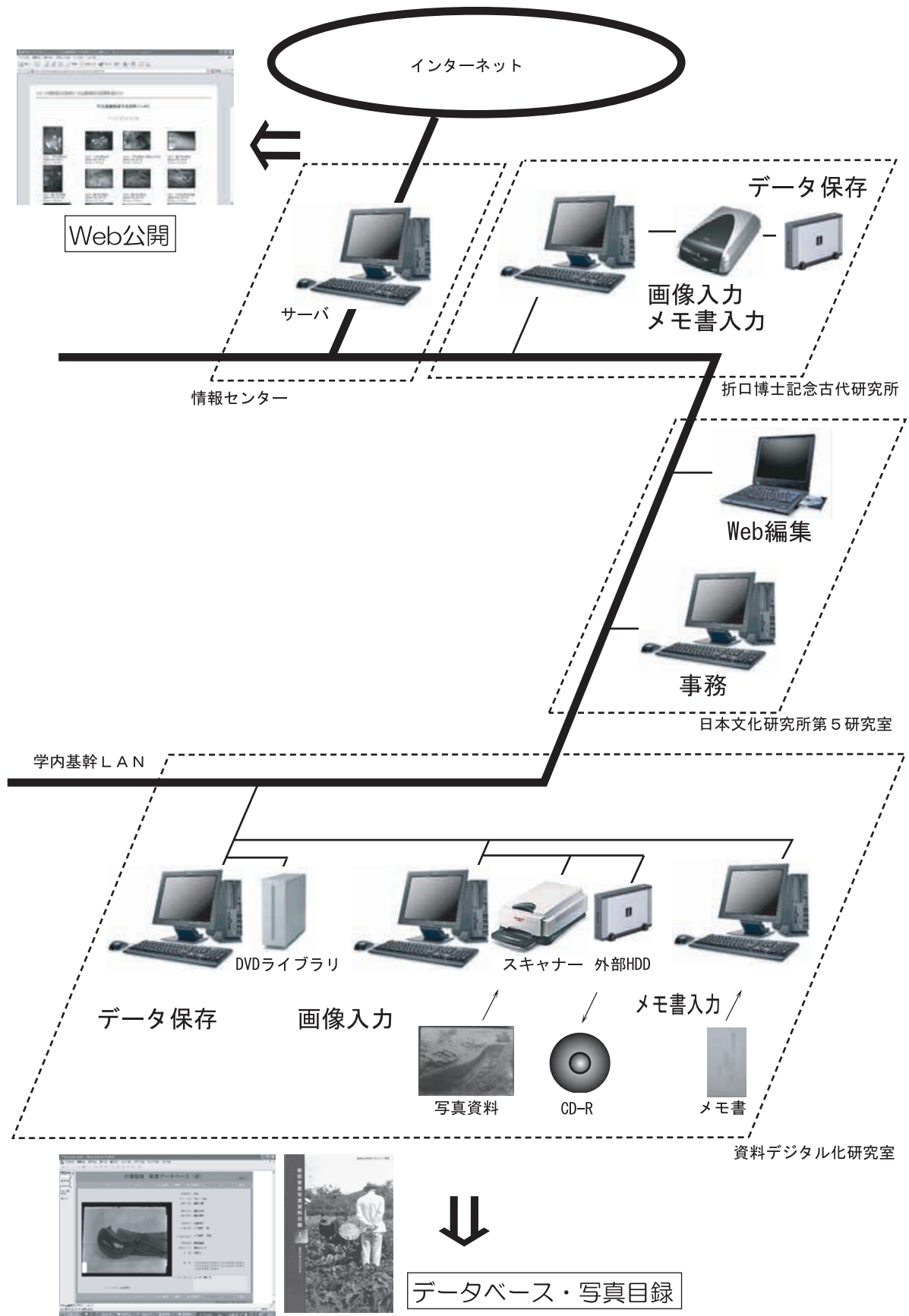


図2 作業環境概念図

大場磐雄博士資料の研究



大場磐雄博士（1899～1975）は、我が国における考古学上極めて独創的な研究体系を打ち建てた研究者として学史にその名を刻んでいる。博士は大正7（1918）年に國學院大學に入学する以前から考古学を志し、初期の頃は特に先史考古学を中心に研究を行っていた。現在の時代区分で縄文時代前期にあたる諸磯式土器を型式設定するなど、学史上記念すべき成果を残している。

大正14（1925）年に内務省嘱託となり神社局考証課に勤務、昭和2（1927）年に伊豆吉佐美洗田遺跡から三倉山を望んだ事がきっかけとなって神道考古学への第一歩を踏み出した。以来、安房神社洞穴遺跡（昭和7）、日光二荒山神社（昭和9）等数々の遺跡を調査している。また、博士の研究にとって重要な分野となる神社関係の調査も盛んに行い、宮地直一博士の下で『考古学講座 第16巻 神社と考古学』を作成し、昭和4年の遷宮を前にした神宮神宝の調査、鹿島神宮、香取神宮等著名大社の宝物調査を行い、『石上神宮神宝誌』『香取神宮宝物誌』等の編纂を行っている。

第2次世界大戦後の昭和22（1947）年からは静岡県登呂遺跡を調査、また、昭和25（1950）年からは長野県平出遺跡の調査を継続的に実施した。

大場博士と國學院大學とのかかわりは、大正7（1918）年に同大学に入学、大正11（1922）年に国史学科を卒業している。教歴としては昭和8（1933）年に附属高等師範部講師、昭和9（1934）年に予科講師、昭和10（1935）年学部講師、さらには昭和19（1944）年国学研究所研究員を経て、昭和24（1949）年に文学部教授に就任している。

大場博士はその研究資料の中に大量の写真等画像資料を残しており、これらは博士の学問的軌跡を辿れると同時に、現在ではすでに失われてしまった文化財や景観、日本考古学史上を彩る著名な研究者達の交流の軌跡を記録した資料として極めて重要な情報を今に伝えている。写真には考古学的な対象はもちろんであるが、建造物・美術工芸品・民俗芸能・人物など、神道考古学という極めて複合的、かつユニークな分野を確立した博士の研究成果を裏付ける、様々な貴重な対象が撮影されている。

大場博士の没後、これらの資料は一括して國學院大學に寄贈され、保管されてきた。資料は、ガラス乾板を主体とする写真資料（大場磐雄博士写真資料）冊子や拓本、実測図などの周辺資料（大場磐雄博士資料）の大きく2つに分けることができる。

従来から、大場博士の日記である『楽石雑筆』との互換研究ができることから、考古学研究者をはじめとして、大場博士が発掘調査に関わった地域から画像資料についての閲覧が要望されるなど学術的価値の高い資料である。そこで、当プロジェクトでは、大場磐雄博士写真資料の画像資料の再生保存に関する作業と、大場磐雄博士の目録作成作業を開始し、これらの過程においてそれぞれのテーマに即した研究活動を行なった。研究成果は、Webページの作成をはじめとして、シンポジウム・フォーラム・研究会、目録や研究論文集の刊行という形で公にすることに努めてきた。詳細は次項以下と研究成果の公開活動を参照されたい。

（山内利秋・加藤里美）

- 1 大場磐雄博士写真資料の概要

大場磐雄博士写真資料は、ガラス乾板・硝酸セルロースフィルム・35mm ネガフィルム等からなる主として博士が撮影した原版資料である。これまでに、ガラス乾板3,960点・硝酸セルロースフィルム313点、三酢酸アセテートフィルム3点の計4,277点について画像およびメモ書のデジタル化を終え、本書に添付した「大場磐雄博士写真資料データベース」を作成した。なお、この他に整理途上の資料として35mm ネガフィルム322本、別置されていたガラス乾板約820点がある⁽¹⁾。

写真資料の内容

データベースに収録した項目は、画像データ、資料番号、グループ名、撮影対象、撮影場所、撮影年代、時代、メモ書(箱)、メモ書(包紙)、原板種類、原板サイズ、文献、備考の13項目であり、画像データおよびメモ書(箱)～原板サイズの5項目が資料オリジナルの情報、それ以外は今回の整理によって付与したものである。後者についてはメモ書および関連文献に基づいているものの、全てを網羅しえたものではない。漏れも多いと思われるが、検索の目安として作成したものである。

前述したように必ずしも完全なものとは言えないが、今回作成したデータベースをもとに写真資料の特徴を簡単にまとめておきたい。なお、原板以外のデータは今後も修正を行なっていく予定であり、今回は概数を提示するに留めたい。

資料は、個々の遺跡・神社あるいは1回の調査旅行ごとにまとまっており、今回の整理ではこれを「グループ」として扱った。家族・知人等のポートレートや記念写真の類約400点は一括して人物写真としたため最も多いグループになっているが、これを除くと長野県平出遺跡関係400点を筆頭に、神宮調査関係140点、茨城県大生古墳関係120点、羽黒鏡、東京都亀塚古墳、神社境内林関係、静岡県登呂遺跡、長野県上原遺跡、東京都伊興遺跡各100～80点、長野県浅間古墳群・茨城県鏡塚古墳各50点、埼玉県猪山遺跡、新潟県千種遺跡、秋田県大湯環状列石各30点などをつづく。

次いで、撮影場所であるが、長野県700点が最も多く、三重県、東京都、静岡県、茨城県、千葉県、奈良県、神奈川県、群馬県、山形県、埼玉県と続く。長野県は現地調査の数も多く考古学関係の資料が殆どである。三重県は伊勢神宮関係、静岡県は伊豆地方の神社と祭祀遺跡、奈良県は神社関係、東京都・茨城県・千葉県・神奈川県は大正期からの遺物写真も多いが、まとまったものとしては古墳時代関係が多い。山形県は殆どが羽黒鏡である。一方、北海道、青森県、富山県、長崎県、鳥取県、徳島県、高知県、沖縄県の資料はみられない(表1)。

撮影年代については大正11(1923)年から亡くなる前年の昭和49(1974)年までみられる。大正11年は神奈川県立横浜第二中学校の教師となった翌年であり、國學院大學卒業直後から利用していることが伺える。その後大正14(1925)年に内務省に入るが、この間、年間30～70点程度を撮影している。その後、学部講師となった昭和10(1935)年には年間100点を超え、昭和12年～14年には年間200点程度を撮影している。この多くは各地の神社調査の際に撮影されたものである。戦後はやや減るものの、大学教授に昇格した昭和24(1949)年以降は再び年間100点を超え、平出遺跡・上原遺跡・亀塚古墳などの調査が行われた昭和26年には年間500点を撮影している。ガラス乾板の使用は大正11年(1923)～昭和38(1963)年と長期的であるのに対し、硝酸セルロースフィルムは大正11年、昭和13(1938)年～昭和17年、26年、32年と短期的・断続的である。整理途上の35mmフィルムは昭和32(1957)年～昭和48(1973)年のものが残っている。今回扱った使用のうち昭和49年の資料は他者から提供された3点の三酢酸アセテートフィルムのみであり、昭和30年代にガラス乾板から段階的に35mmフィルム

に切り替えたようである⁽²⁾。

原板の種類およびサイズについてはガラス乾板3,960点(手札版が3,141点、キャビネ版が655点、6×9版が149点等)、硝酸セルロースフィルム313点(6×6版233点、4×5版58点、8×10版58点等)、三酢酸アセテートフィルム3点(4×5版カラー)である。これらの使い分けについては別途検討したいが、キャビネ版は点数の多いグループに多く、大規模な調査に使われたものと位置づけられそうである。

(中村耕作)

整理の方法

乾板等の資料は、既に博士自身あるいは弟子によっておおむね年代順に、小箱および大箱に整理されていた。今回の整理は、基本的にその順番に従って一連の資料番号を付与している。これらは従来の箱から取り出し、60枚を一箱に収め、箱の蓋にはシリカゲルを備えている。35mmフィルムは専用のファイルに、その他の資料類は箱のまま保管している。

まずクリーニングと整理番号割り振りを行なう。整理番号はガラス乾板・硝酸セルロースフィルムについては一連の番号を付している。次に、透過原稿スキャナで取り込み、画像の明るさや陰影の補正等を行ない保存する。解像度1000dpi、保存形式はJPEGである。保存先はDVDライブラリを採用してきたが、現在ではさらに万全を期すために外付けハードディスク2個をバックアップとして利用している。

画像処理作業自体はこれに留まるが、併行して以前保管されていた様々な包み紙に残された“メモ書き”を読み起こすことで資料のテキストデータ化作業を行なっている。本作業においては複数方向からのクロスチェックとして大場資料の確実性が増すため単に“メモ書き”を読み起こすに留まらず、『楽石雑筆』『神道考古学論攷』『祭祀遺蹟』『神道考古学講座』といった大場氏の著作や年譜、各種報告書などから事実確認、撮影日時・場所・資料の特定といった補足作業も進めた⁽³⁾。テキストデータは、稲生典太郎氏・小出義治氏ら大場氏を直接知る方々の協力を得ながらノートに書き起こし、そこから項目を選択し、エクセルを用いてデジタルデータ化する。なお、35mmフィルムについては、複写および“メモ書き”の読み起こしは終了しているが、それらのデジタルデータ化については未着手である⁽⁴⁾。

(荒井裕介)

註

- 1) 菅生遺跡関係約580点、昭和28年代の資料(大生古墳群、大室古墳、児玉石神事、伏見稲荷、大門峠・雨境峠)約100点、栃倉遺物関係約40点、砧緑地内古墳関係、忌部玉造関係、北高森古墳関係、福井関係など。
- 2) この昭和30年代以降の正式な調査写真については大場氏自ら撮影・保管することなく、小出義治氏や杉山林継氏などが保管してきた。従って、35mmフィルムは大場氏の個人的な資料と位置づけられそうであるが、未発表資料も少なからずあり、今後の整理を期したい。
- 3) 『楽石雑筆』等は大いに利用したが、一方で文字や日付が食い違っている資料や、該当する記載がない資料も少なからず見受けられた。そうした点で、大場博士の足跡あるいは学史を辿る上での本写真資料、大場磐雄博士資料、および未整理の草稿・カード・私信類を含む本資料群の価値は高い。
- 4) 本節は荒井裕介「学術フロンティア作業報告 - 大場磐雄資料編」『國學院大學学術フロンティア事業研究報告 人文科学と画像資料研究』第1集の一部をもとに加筆したものである。

地 域	概数	内 容
長 野 県	730	平出遺跡、上原遺跡、秋宮経塚、柴宮銅鐸、伊那地方
三 重 県	330	伊勢神宮関係、柚井貝塚、大山田貝塚、名張地方
東 京 都	330	亀塚古墳、伊興遺跡、井萩遺跡、大田区周辺
静 岡 県	270	登呂遺跡、伊豆関係（見高遺跡、吉佐美遺跡、三島大社、伊豆山等）
茨 城 県	250	大生古墳群、常陸鏡塚、鹿島神宮
千 葉 県	190	安房神社洞窟、粟島台遺跡、九十九坊廃寺、富岡村古墳、二子塚古墳
奈 良 県	170	三輪山、檀原遺跡、鳥見霊時、唐古遺跡、諸神社
神奈川県	160	加瀬山古墳、相模国府祭、登尾山古墳、横浜市周辺、茅ヶ崎～伊勢原周辺
群 馬 県	160	桐生賀茂神社、姥石、檀石、埴輪
山 形 県	140	羽黒鏡、酒田周辺、寒河江
埼 玉 県	130	猪山遺跡、西別府遺跡、美里村祭祀遺跡、埼玉古墳群
福 島 県	60	棚倉・建鉾山、阿武隈考古館、後作田古墳
岐 阜 県	60	那比新宮社、多岐神社、飛騨地方
京 都 府	60	神社境内林（貴船、北野、賀茂ほか）
愛 知 県	50	砥鹿神社・本宮山、北設楽郡
新 潟 県	50	千種遺跡、糸魚川周辺
福 岡 県	40	大宰府付近、宗像神社、宮地嶽
山 梨 県	40	日下部遺跡、諸古墳
愛 媛 県	40	大洲周辺
栃 木 県	40	二荒山、二荒山神社
秋 田 県	30	大湯環状列石
兵 庫 県	30	各社磐座
滋 賀 県	30	日吉大社
鹿 児 島 県	30	鹿児島神宮
宮 崎 県	30	宮崎徴古館
大 分 県	30	宇佐神宮
山 口 県	20	遺物類
島 根 県	20	出雲地方の神社等
大 阪 府	20	誉田神社
岡 山 県	10	吉備路周辺
香川県、佐賀県、和歌山県、岩手県、宮城県、広島県、熊本県、福井県：10点以下 分類不可・不明等：680点		

表1 都道府県別主要撮影対象（数値は概数 撮影対象は概ね10点以上のもの）

- 2 大場磐雄博士資料の目録作成

大場磐雄博士資料は、博士が自ら調査・蒐集した資料と、寄贈を受けた資料の双方が含まれており、紙焼き写真・実測図・拓本のほか、報告書等の書類・地図・カード・新聞等の切り抜き・絵葉書・書簡などからなる。保管ケースにはその内容毎に名称が付されており、各ケース内には更に内容物を細分した分類袋が納められている。整理にあたっては従前の箱番号・名称等を尊重し、目録の目次はこれに従った。全体で約150箱存在しており、これまでに . 旧石器時代編1箱・ . 縄文時代編18箱・ . 弥生時代編13箱・ . 古墳時代編32箱の整理が完了している。その実態は、本書を通観することによって御理解頂けるものと思う。

また、 . 歴史時代編についても、全56箱のうち前半26箱までの目録は平成15年度の年次報告として公開した⁽¹⁾。今や、整理作業も祭祀編・外国編などを残すのみである。その全貌については、全資料を整理した暁に、改めて紹介することにしたい。

これらの資料は整理が済み次第、順次電子情報としても公開している。以下、各編の概要について略記するが、目録の詳細は学術フロンティアホームページ⁽²⁾、並びに旧石器時代編から古墳時代編までは『大場磐雄博士資料目録』を参照されたい⁽³⁾。

(深澤太郎)

1. 旧石器時代編の概要

旧石器時代編は、大場資料の中で最も資料数が少なく、1箱6袋に過ぎない。もっとも、大場博士の研究対象を鑑みれば当然の数量であろうか。

全体的に見れば、長野県下の資料が比較的纏まった形で収められている。唯一、日付が明記されている資料も、長野県和田村男女倉遺跡と池ノ平白樺湖畔遺跡(- 3)の写真である。略年譜を参照すると、これは三笠宮崇仁親王殿下の随行として、昭和32(1957)年6月26日から28日にかけて尖石遺跡・諏訪大社・桜ヶ丘古墳・平出考古館などを歴訪した際に撮影されたものであることがわかる⁽⁴⁾。

また、「 - 4 武蔵野のポイント」は、全て宮崎純氏から寄贈されたものであり、他にも直良信夫氏から贈られた石器の写真などがあるように、本編に属する資料は贈呈を受けたものが多く含まれている。

なお、「 - 1 石器」に収める拓本の両面調整尖頭器は、同種の石器の中では極めて大型の部類に属するものである。出土地は記されておらず、石材にもよるが、恐らくは北海道から出土したしたものと考えられる。

一覧表中の種別は、**遺跡・石器・その他**の3種に細別することとした。

(深澤太郎)

2. 縄文時代編の概要

縄文時代編は保管ケース18箱分が存在し、遺物の種別毎に分類された箱(- 1 - 4)と、遺跡・遺構によって分類された箱(- 5・6)、地域毎に分類された箱(- 9 - 14・17)、時期毎に分類された箱(- 15・16)そして雑(- 7)の5種がある。

大場博士は、昭和初期まで縄文時代を中心的に研究してきたが、その後は神道考古学の分野に比重を重くしていった。しかし、遺跡の調査や『北安曇郡誌』・『下伊那郡誌』、そして『信濃史料』などの編纂に中心的な立場として携わった関係から、縄文時代の資料と縁が切れることはなかったのである。

大場磐雄博士資料の興味深いところは、純粋な学術資料とともに、今や失われてしまった景観を写した風景写真、人物写真、或いは古い絵葉書なども含まれている点にある。本編には、発掘調査時の写真や実測図・拓本などに加え、珍しいものでは採集資料を前にした大場少年のポートレートが見られる（ - 12 - 10）。恐らく、中学生時代に撮影したものであろう。当時の博士は、毎月収集した遺物を自宅で開陳し、考古会と称する展覧会を開いていたという⁽⁵⁾。約30年後に千葉県粟島台遺跡（ - 12 - 12）で撮影された50代の大場博士と比べてみるのも面白い。また、東京帝室博物館に勤務していた神林淳雄氏から送られた絵葉書（ - 2 - 9）などは、学史資料としても貴重なものである。

このように、年月日や地名が記された資料は、年譜と照合することによって、時間的・空間的な位置づけを行なうことが容易であり、博士が資料を収集した意図や、寄贈された経緯についても推察することができる。

なお、一覧表中の種別は縄文時代には属さない資料も含んでいるため、**遺跡・遺構・貝塚・土器・土偶・土製品（土版・土面を含む）・石器・石偶・石棒・石剣・石冠・石製品（岩版を含む）・木製品（独木舟を含む）・貝製品（貝輪・貝器・貝を含む）・装身具（玉類・耳飾など）・骨角器・獣骨・人骨・植物遺存体・その他（書簡・メモ・文書・地図など）のほか、寺院・窯・青銅器・鏡・埴輪・馬具・瓦・経筒の28種を設けた。**

（山添奈苗）

3. 弥生時代編の概要

弥生時代編は13箱からなり、遺構や遺物の種別毎に分類された箱（ - 1・3・8・10～13）と、地域毎に分類された箱（ - 5～7）そして特定の事項によって分類された箱（ - 2・4・9）に大別できる。「 - 2 弥生文化（農耕・生産・宗教関係）」には日本のみならず、英国やサイパン島などの資料も含まれており、また、アイヌの民俗資料や神社関連の資料も見られ、幅広い地域の資料を収集している点が特徴的である。

大場博士の弥生時代研究に関して言えば、銅鐸についての論文を多く発表しており、銅鐸・銅矛・銅剣文化圏や、銅鐸を使用した氏族の問題など、ユニークな視点から考察し、常に関連諸科学の方法を盛り込んだ学際的な研究の必要性を説いてきた。塩尻市大門字柴宮の銅鐸（ - 3 - 12）は、同市より調査を依頼され、昭和35（1960）年11月4日に小出義治氏とともに自ら調査したものである⁽⁶⁾。さらに、昭和34年の考古学協会大会に参加する途上、広島県木の宗山の銅鐸出土地（ - 4 - 1）を、森貞次郎氏・乙益重隆氏・入江英親氏とともに訪れるなど、現地調査も欠かさなかった。

また、「 - 11 方形周溝墓」には、東京都八王子市宇津木向原遺跡例を中心として、千葉県・茨城県など各地の方形周溝墓に関する資料が収集されている。方形周溝墓の名称は、大場博士が宇津木向原遺跡の調査後に命名したことは周知の通りであるが、同遺跡の調査に関する資料には「方形環濠状特殊遺構」と記されていた。発掘調査を経て「方形周溝墓」という名称に至るまでの経緯を窺うことができる。

「 - 13 弥生（登呂遺跡）」は、登呂遺跡の資料に一箱を当てている。パンフレットや絵葉書なども存在するが、大場博士が登呂遺跡発掘調査会の主要メンバーであったことから、発掘風景や、報告書図版・実測図が多く見られ、特に木製品に関する写真・実測図は全体の約半数を占めている。大場磐雄博士資料には、昭和18（1943）年に行なわれた第一次調査、昭和22（1947）年～昭和26（1951）年の第二次調査のほか、復原住居などの資料が認められるものの、その殆どは第二次調査に関連するものである。一方、大場磐雄博士写真資料では第一次調査時の資料が全体の約9割を占めており、遺物出土状況や発掘風景など、現場の作業状況を伝える資料が多数残されている。

このように、大場磐雄博士資料と大場磐雄博士写真資料とは、一体のものとして取り扱うことで、はじめてその真価を発揮するのである。

なお、一覧表中の種別は内容的に重複する部分もあるが、**遺跡・遺構・貝塚・土器・土偶・石器・石製品・石棒・石剣・青銅器**（銅剣・銅鐸・銅戈）・**鏡・鉄製品・木製品・貝製品**（貝を含む）・**装身具・織機・骨角器・獣骨・人骨・植物遺存体・その他**、並びに**埴輪・銭**の23種に分類した。

（山添奈苗）

4．古墳時代編の概要

大場資料のうち、古墳時代に関するものは保管ケースで32箱分に及び、大場資料の中核を占めるものと言えよう。

目次を瞥見すると、遺構や遺物の種別毎に分類された箱（ - 1～12・17～20・23・25～28）と、地域毎に分類された箱（ - 13～16・21・22・24・29・30）とに2大別することができる。中でも、「 - 14・16 千葉県内古墳」や「 - 27・28 玉作」には多くを割いており、単独の地域に対して1箱を当てているものには「 - 22 信濃」がある。また、「 - 15 武蔵・亀塚」と「 - 24 茨城県大生古墳」のように一調査について1箱を占めるものも目につく。

鏡の拓本も多く、旧宮内省諸陵寮所蔵の優品から個人蔵資料に至るまで、膨大な資料が存在する。注記を頼りに略年譜と対照した結果、産泰神社所蔵鏡のように（ - 10 - 9）群馬県赤城神社における昭和18（1943）年の調査に伴って採拓されたものであることが判明した例もある^{（6）}。また、発掘調査の際に作製した図面も多い。特に、茨城県常陸鏡塚古墳の調査に関する資料の中には原図が残されており、実測用紙にこびりついた土の色は生々しい。

このように、多数の資料が残されている分野は大場博士の研究フィールドや、本學関係者の手による調査成果と符合しており、資料蒐集の経緯を反映している。玉作関連遺跡・遺物に関する資料は寺村光晴氏の贈呈を受けたものが多く、常総地域の資料を中心に茂木雅博氏・杉山林継氏らの名が散見される。また、長野県の妙義山古墳群（ - 22）・鳥羽山洞穴（ - 22）や、東京都亀塚古墳（ - 15）そして茨城県大生古墳群（ - 24）・常陸鏡塚古墳（ - 13）の発掘調査も、大場博士をはじめとする國學院大學関係者が中心となって実施した事業であった。

一方、博士が直接関わった調査事例以外の遺跡等についても少なからぬ資料が残されており、古い調査事例の内、実態が明らかでなかったものや、各地の社寺所蔵品や個人所蔵の資料など、これまで一般の目に触れることのなかった画期的な内容を含んでいる。

なお、一覧表中の種別は内容的に重複する部分もあるが、**遺跡・遺構・貝塚・古墳・横穴・窯・埋葬施設**（石室・棺など）・**壁画**（装飾古墳・線刻など）・**土器**（土師器・須恵器など）・**土製品・石製品**（石製腕飾類・玉杖・琴柱形石製品・合子など）・**石製模造品・鏡・鉄製品・銅製品**（銅鏡・筒形銅器・巴形銅器など）・**武器**（刀剣・鏃など）・**武具**（甲冑など）・**馬具**（鈴の類を含む）・**木製品・貝製品・装身具**（玉類・耳飾・冠・釧など）・**埴輪・石人石馬・骨角器・人骨・その他**、並びに**石碑・神社・仏像・文書**の22種に細別することとした。

（深澤太郎）

5．歴史時代編の概要

歴史時代編は50箱を超え、大場資料中最多の資料数を誇る。資料の性質上、社寺の宝物など、「 . 祭祀編」と重複する部分が少なくない。特徴としては、仏寺関係の資料も充実している点をあげることができよう。全般的には鏡や瓦関係の資料が多数を占めているが、平成15年度までに整理が完了し

た部分は歴史時代編の前半に相当する - 26までであり、仏像・神像や金石文関係の資料が多く認められる。

大場資料には、氏の調査対象のほか、調査の主たる対象ではないが、それに附随して蒐集した資料や贈呈を受けた資料がある。年月日が記載されたものについては、『楽石雑筆』や略年譜を参照することにより、いかなる経緯で蒐集した資料であるかが、ある程度明らかになる。

試みに歴史時代編の内、これまで整理した資料を瞥見すると、その成果が論文などに直接反映された資料としては、昭和18(1943)年に実施した群馬県赤城神社の調査で得た鰐口(- 6 - 6)が古い。昭和24(1946)年の山梨県日下部遺跡(- 9 - 2)については、略年譜は12月17日から21日まで滞在したとあるが、資料自体には24日の日付が記されている。これは、帰京後に資料の贈呈を受けたものであろうか。このような資料は、公刊された論文・市史・神社誌などが知られており、追跡調査が比較的容易である。

一方、昭和37(1962)年7月に行なった岩手県・福島県の蕨手刀調査では、中尊寺の梵鐘(- 2 - 18)を調査し、昭和40(1965)年に実施した東京都南秋津遺跡の調査に際しては、近辺の神社(- 3 - 9)を調査している。

もっとも、大場資料はそれ自体に価値があることは言うまでもない。しかし、具体的な活用方法を見出すためには、このような作業を通じて資料の性格を見極める作業が求められよう。

一覧表中の種別は内容的に重複する部分もあるが、ここでは遺跡・神社・寺院・廟・学校・家屋・城柵・城館・庭園(チャシを含む)・土器(土師器・須恵器・陶器を含む)・磁器・蔵骨器・瓦・土製品・石製品・石造物・石碑・板碑・青銅製品・鏡・梵鐘・銭・鉄製品・武器・武具・馬具・木製品・貝製品・塔・瓦塔・鉄塔・塔婆・文具・木簡・文書・金石文・制札・棟札・印章・絵画・地図・仏像・神像・肖像・曼陀羅・懸仏(懸仏式の神像を含む)・仏具・鎮壇具・経巻・瓦経・経石・経塚・経筒・獣骨・植物遺存体・神事・その他の571項目に細分した。

(深澤太郎)

註

- 1) 國學院大學學術フロンティア実行委員会 2004 『平成15年度 國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』
- 2) <http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/>
- 3) 國學院大學日本文化研究所 2004 『大場磐雄博士資料目録』
- 4) 大場磐雄先生記念事業会 1975 『楽石 大場磐雄先生 略年譜並著作論文目録』
- 5) 大場磐雄 1975 『楽石雑筆』大場磐雄著作集6 雄山閣
- 6) 大場磐雄・原嘉藤 1961 「長野県塩尻市柴宮発見の銅鐸」『信濃』14 - 3
- 7) 註4文献に同じ

- 3 ガラス乾板の劣化について

ガラス乾板は、支持体であるガラスとその上に塗布された乳剤層から成り立っている。乳剤は、ゼラチン中に感光性のハロゲン化銀が懸濁したものである。従って、ガラス乾板の劣化は、まず、ガラスの劣化と乳剤層の劣化に分けられる。

1：ガラスの劣化について

ガラスの支持体の欠点は、その物理的な弱さにあるが、幸い、大場資料の乾板ではガラスの破損は少なかった。これは、10枚から20枚ずつの未露光の乾板を包装していた頑丈な箱に収められていた事による。また、乾板箱内でも、2枚ないし3枚ずつ紙袋（現像時の写真袋、もしくは封筒）に包まれており、互いに擦れて傷つく事が防がれていた点大きい。それでも、多くの乾板で、角や周縁に微少な「欠け」が確認されたが、画像を損なう程大きな損傷を与えたケースは少ない。

また、ガラス面（乳剤面の反対側）にアルカリ分の析出と考えられる白っぽい結晶性の物質や液滴が認められた乾板があった。これは、ガラスの表面に付着した水分がソーダ灰を加水分解して表面に残り、湿潤、乾燥をくり返す事によって起こるといわれており、乳剤層を軟化、剥離する場合がある事が指摘されている。大場資料においては、乳剤面の軟化や剥離との関係は認められなかったが、ガラス面にこのような結晶性の物質が付着したままプリントすると、この部分が白く抜けてしまうという問題はあった。

2：乳剤層の劣化について

1）銀鏡、黄変色

乳剤層では、ほぼすべての乾板に画像周辺で銀鏡（ミラーリング）が起きていた。銀鏡は画像を形成する銀粒子が酸性の雰囲気や湿度によって局部的に酸化されて銀イオンを拡散し、この銀イオンが表面に達して還元されて起こる現象である。

その名のとおり、反射光ではメタリックグレーがかかって見える。銀鏡が起きると光の透過を幾分かまたげてしまうために、プリントした際、周辺部分がムラになってしまうが、画像の解読を困難にする程ではないので大きな問題ではなかった。しかし、銀鏡が強く起きている部分では微少な空気孔が幾つも出来、乳剤層の剥離に至っていた乾板が多く認められた。一方、画像内部では、褐色および黄色の着色スポットや白く退色したスポット（プレミッシュもしくはマイクロスポット）が現れたり、局部的に退色および黄変色した乾板が多くみられた。これらの症状も銀鏡と同様、画像銀の酸化、還元の結果である。銀鏡が内部にも局部的に起きている乾板もあった。これらの劣化があらわれている場合、ハイライトディテールの消失が起きたり、白および黒のスポットとなり、確実に画像に影響が出ている。また、ごく数枚だが、画像の低濃度部分に濃い褐色のスポットとともに白い粉が吹いている乾板がみられた。これは、定着液であるチオ硫酸ナトリウムによる硫化作用により、画像銀が硫化銀に変化したものと推測された。

2）かび

かびが著しく生えている乾板と、かびがほとんど生えていない乾板があった。乳剤層を構成しているゼラチンは動物の骨や皮から抽出したタンパク質なので、もともとカビが生えやすい。相対湿度が60%以下ではかびの成長は止まるが、日本は年間を通じて多湿である。「1」で述べたように、乾板は2枚ないし3枚ずつ紙袋に包まれていたのだが、乾板間に紙が挟まれており、乾板の乳剤面同士がくっ

ついたり、乳剤面に擦り傷がつく事を防いでいた。この紙がかびの発生と重要な関係があると考えられる。

すなわち、間に挟まっていた紙が油紙であった場合、かびの成長が著しく、和紙および洋紙の場合にはかびの存在はほとんど認められなかった。油紙は、局所的に褐色に変色した箇所が認められ、この変色した箇所に触れていた乳剤部分にかびが認められた事、油紙の折れ目に沿ってかびが生えていた事から、油紙の場合、溜まった水分が蒸発しにくかった事が推測される。かびの生えている部分では、白抜け、黄変色が起きていた。

3) 剥離、ひび割れ

多くの乾板で、画像周辺部から内部にかけての剥離がみられ、剥離が起きている箇所をガラス面からみると必ず虹色の膜が出来ていた。乳剤層を構成しているゼラチンは高湿では湿気を吸って膨潤し、軟化する傾向が大きい。そして、この時にガラスと乳剤層の接着力が不十分であれば剥離が起きるが、応力が緩和されるため乳剤層の破壊は起きない。大場資料では、乳剤層が膨潤して波打ったような形状をあらわしながら、剥離しているものが多く、高湿の場所に保管されていた事が推測された。先に剥離が起きれば乳剤層の破壊は起きないと述べたが、剥離が起き、浮かび上がった膜は、乾板箱中で他の乾板と擦れ合ったりする事によって破壊されているものも多かった。また、取り扱うときに、手が触れてしまい、粉状になってしまった箇所もあった。

剥離が画像面全体にかけて起きている場合、画像の解読は不可能であった。一方、少数であるが、乳剤層のゼラチンが湿気によって盛り上がり山脈のようになり、山の部分に細かいひび割れが起きている乾板もあった。これは、ガラスとゼラチンの接着力が十分にあったため、ガラスに接着したまま乳剤層の破壊が起きたと考えられる。ゼラチンのひび割れは、一般には低温度のとき、もしくは低湿度方向へ温湿度が変化するときが発生する現象であるが、多湿時に起こった現象として報告しておく。

4) その他

ゼラチンが膨潤、軟化してベトベトになり、画像が破壊されている乾板や、この部分に紙が付着している乾板があった。ほとんどの乾板間には紙が挟まれており、乳剤面が傷つく事を防いでいたが、同じ乾板箱内に異なるサイズの乾板が収められていた場合など、擦り傷や、乾板の角による搔き傷が付いていた。

まとめ

今回の確認したガラス乾板の劣化の症状は多岐にわたっていたものの、同じ乾板箱に入っている乾板はいずれも同様の劣化症状を示す、という傾向が明らかであった。すなわち、ある乾板箱内のものは、黄変色が著しいのに、同じ時期の別の箱内のものはほとんど黄変色していない、または、ある乾板箱内のものは、ほとんどすべて剥離しているなどといった状況が認められた。この事は、乾板が置かれてきた環境や年数の他に、現像処理の善し悪しや乾板を構成しているガラスやゼラチンの材質がガラス乾板の劣化の程度に大きく影響する事を示しているといえる。

(遠藤美穂)

- 4 被写体の現地調査

菅生遺跡に関する写真資料は576枚にのぼり、『楽石雑筆(下)』の森貞次郎氏の解説にもあるように報告書『上総菅生遺跡』作成の際に利用されている。ここでは、本資料の概要を述べる共に、平成15年1月に行なった菅生遺跡の現状と発掘調査当時の環境を比較検討する周辺環境調査の成果を報告する。

菅生遺跡は当地を流れる小櫃川の河川改修の際に大量の遺物が発見された事を契機として、地元の宮本寿吉氏によって確認され、昭和11(1936)年正月に大場氏が報告したことから本格的な調査が行なわれた。大場氏が中心になった調査は、昭和12・13(1937・1938)年に数回にわたる第1次調査が、昭和23(1948)年に第2次調査、さらに昭和47・48(1972・1973)年に第3次調査を実施し、その成果は『上総菅生遺跡』の報告書として刊行されている。新出の大場氏所蔵資料は第1次調査以前の昭和12年の12月、13年の1月から3月まで行われた予備調査時の写真から始まっている。そして、第1次調査と第2次調査時の写真資料があり、『上総菅生遺跡』の報告書作成時に使用された第1次調査と第2次調査時のガラス乾板が資料の大半を占めている。大場氏の写真資料は『上総菅生遺跡』の報告書作成時に用いられた第1次・第2次調査のほぼ全ての写真である事からも、当時の調査の大枠としての体系を知ることができる資料と言えるであろう。

これまでに大場氏による菅生遺跡における調査の写真資料は昭和53(1978)年に出版された『上総菅生遺跡』の他、様々な論文の中で引用されており、その概要が窺える。写真資料に関しても、これらの論文に度々用いられており、ここではその内容の一部に触れてみたい。

調査当時の周辺環境がわかる遺跡の遠景写真・遺構写真は、戦後急速に変化した当地における開発が開始される以前の状況を知る上でも非常に示唆的である。例えば大場氏は『上総菅生遺跡』の報告書中の第1図、第4図、第12図などで、また、参考文献の幾つかの論文における遺跡遠望でも菅生遺跡を中心とした周辺環境を一瞥できる写真を利用している。また、河川改修によって流路を何度か変更している小櫃川の昭和初期当時の状況も窺える資料としての意義も看過できない。この他、発掘参加者による集合写真、遺物写真なども多数残されている。この中には人物を特定できる資料も多い。遺物写真は報告書中に未掲載の遺物出土状況の写真も多数含まれており、土器はもとより大きな成果をあげた木器や木製品などの出土状態なども伺える。

本調査と併せて大場氏は周辺の他の遺跡に関しても調査を行っており、今回の資料中にいくつか認めることができた。確認できた中で2、3例を挙げると相里古墳は昭和13年5月の菅生遺跡第1次、第3回調査の際に大場氏が調査を行っている。『楽石雑筆』の記事からは遺物の出土も認められているが、当資料の中には主に石室の状態を写した写真が含まれている。

また、大場氏は当調査中、双魚佩や環頭太刀の出土で著名な松面古墳の調査の調査を実施している。松面古墳は調査当時、産業組合病院裏古墳とされ、のち大場氏による『日本古文化序説』の中では元新地古墳、『上総菅生遺跡』中では君津病院内古墳(周辺遺跡の図中では松面古墳)と称されている。調査は菅生遺跡第1次、第4回調査の昭和13年7月に実施されているが、他に当古墳の概要を記した報告等がなされていないため、今回の資料中に存在している石室や墳丘の写真資料は、かなり破壊を受けた段階ではあるが公開する意義が大きい。この他にも菅生遺跡のすぐ北側に位置する古代寺院の大寺廃寺など木更津付近一帯の調査を行っている資料も存在する。

次に菅生遺跡の現況について述べてみたい。現在、菅生遺跡では大場氏が調査した地点はその大部分が小櫃川の流路中にあり、原形を留めていない。また、詳細な調査地点に関しても、第1次調査時

から65年の時を経て、現地の地理的状況は河川の流れを含めて全く変わってしまい、正確な位置に関する知見を得ることは出来なかった。

菅生遺跡周辺では、大寺浄水場建設に伴う菅生第2遺跡の調査の後、菅生遺跡も千葉県、木更津市による調査がされており、資料の蓄積が進んでいる。一方で、大寺浄水場や菅生の西側を南北に伸びて小櫃川をまたぐ東京湾アクアライン連絡道などの開発によって菅生遺跡の取り巻く環境は大きく様変わりしている。また、大きな手掛かりとなる小櫃川の流路が変わってしまい、旧流路が消滅してしまった現在では、遺跡の原状を考察する事は非常に困難である。しかし、遺跡の遠景写真で見られるような高千穂古墳群が存在する丘陵などはそのまま確認する事ができる。そして遺跡現場自体は、大寺浄水場の南側の小櫃川が北側に大きく屈曲する部分のやや東側の河床であることは、報告書等の図上から推測可能であり、今回はこの地点の現在の実地調査を行なうこととした。

調査は平成15年1月18日に実施し、撮影はそれぞれ遺跡の北側、西側、南側から行なった。図1、図3に見える高架の道路が東京湾アクアライン連絡道であり、図2はその上から撮影した。図2では小櫃川が大きく屈曲している箇所が確認でき、菅生遺跡の場所が比較的分かり易い。また、図2右手側は高千穂古墳群のある丘陵、左手側は大寺浄水場である。正確な遺跡の位置に関しては問題もあるが、菅生遺跡周辺の21世紀初頭の様子を「定点撮影」とするという意義をこめている。また、近年活発に議論され、本フロンティア事業内においても懸案の一つとなっている画像資料の活用という面からも、遺跡調査時と現状の比較という事で現況の報告をした。

菅生遺跡の大場氏が発掘を行った正確な位置に関しては、遺跡の失われてしまった現在トレンチの位置など正確には不明な点が多いが、残された写真資料は調査地を特定する手掛かりとなる情報が多く含まれている。こうした細かい調査区がどの部分にあたるかなど、残された課題は大きい。また、考古学ばかりではなく昭和13(1938)年当時の菅生における「定点撮影」として他の多分野の利用も想定できる。当新出資料に限らず広汎にわたる研究利用に供するよう、これからも作業を継続していきたい。

なお、菅生遺跡の現地調査や文献収集にあたっては君津都市文化財センターの光江章氏、木更津市金鈴塚遺物保存館の稲葉昭智氏に多大なるご助力を頂いた。記して謝意を表したい。

(高野晶文)

〔参考文献〕

- 大場磐雄1938. 3 「上総菅生遺跡(予報第一回)」『考古学』9 - 3, p109~116, 東京考古学会
大場磐雄1938. 5 「地底の宝庫 清川遺跡を発掘して」『科学画報』27 - 5, p50~51・105~111, 誠文堂新光社
大場磐雄1938. 10 「上総菅生遺跡(予報第二回)」『考古学』9 - 10, p469~480, 東京考古学会
大場磐雄1938. 11 「上総清川村菅生遺跡発掘日録」『上代文化』16, p1~9, 上代文化研究会
大場磐雄1939. 1 「上総菅生遺跡の一考察(一)」『考古学雑誌』29 - 1, p1~8, 考古学会
大場磐雄1939. 3 「上総菅生遺跡の一考察(二)」『考古学雑誌』29 - 3, p154~169, 考古学会
大場磐雄1943. 2 『日本古文化序説』明世堂
大場磐雄1948. 10 「千葉県木更津市菅生遺跡の研究」『上代文化』18, p1~10, 國學院大学考古学会
大場磐雄1951. 4 「菅生遺跡回顧」『房総展望』5 - 4, p2~4, 房総展望社
菅生遺跡調査団・木更津市教育委員会1973. 6 『上総菅生遺跡 - 昭和47年度第1期調査速報 - 』
大場磐雄1977. 1 『大場磐雄著作集第八巻 楽石雑筆(下)』雄山閣出版
木更津市菅生遺跡調査団編1980. 3 『上総菅生遺跡』中央公論美術出版

写真 1
菅生遺跡現況 1
(北側から)



写真 2
菅生遺跡現況 2
(西側、アクアライン連絡道上
より)



写真 3
菅生遺跡現況 3
(南側から)



柴田常恵資料の研究



大場博士資料の検索システムの開発に到達するまでの一連の作業は、他の蓄積資料についても応用することが可能で、これに基づいて柴田常恵氏の資料のデータ化を開始した。柴田氏の資料は文学部史学科の考古学研究室に所蔵されていたもので、写真アルバム47冊、手帳83冊、拓本資料およそ6,000枚、自筆原稿類約100冊、写真乾板等である。

47冊のアルバムには、県別に分けられ写真が収められているが、1つの県が複数のアルバムにわたっているものや、1冊のアルバムに複数の県が収められているものも多い。また、県別の分類に含まれなかったものについては、「雑」・「補遺」・「不明」として収められている。写真には、柴田氏の手による撮影のものと、第三者から譲り受けたと思われるものとの混在がみられる。被写体については、考古遺物や遺跡・仏像・寺院建築が大部分を占めており、それ以外のものは僅かである。また、必ずしも書式が統一されているわけではないが、写真の多くには、裏面等に撮影場所、撮影日時、対象物の種類・名称・由来等が記載されている。記載者については、筆跡から柴田氏自身と思われるものが多いが、それ以外の人物によると思われるものもある。

フィールドノートは、通し番号を付したラベルが貼付されている。これは、柴田氏が全国の遺跡や寺院等を調査した際に記録したものであり、その性格上、断片的なメモ書きや対象不明のスケッチなどが多く、解読するのが困難な部分が多く存在する。

拓本は、対象物ごとに分類して封筒に入れられ、その名称、採取した場所、日付等を記載した上で保管されている。

自筆原稿類・乾板等は、ほぼ未整理のままで保管されている。その中には、第一次世界大戦後、柴田氏がパラオに行った際の調査日記のようなノートもある。これには、調査の準備段階での出来事、船の中で見た島の絵、島々の通過月日・時刻、島の住人の様子や人数・男女比率などが、細部にわたって記載されている。

当事業では、まずこの中の写真資料についてデジタル化を行った。はじめに写真を全てスキャナーで取り込み、印刷や Web 公開といったさまざまな活用方法への対応を考慮して解像度600dpi・24bitRGB カラーの TIFF 形式で保存した。次いで、この画像情報を、Web 公開のため150dpi（長辺700ピクセル・JPEG 形式）に圧縮する作業を行った。同時に、データのバックアップとしてハードディスクに保存した。写真には元々アルバム内での通し番号が付されていたが、電子情報化するにあたっては、扱いやすくするため県ごとに固有のファイル名と通し番号をつけて整理した。また、写真の裏や台紙等に記載されているメモ書きの読み取りを行い、写真の検索・整理等のために、アルバム上の通し番号・保存ファイル名の通し番号・写真の裏書の対照表を作成した。

成果の公開としては、写真資料のうちの約半数（2,733枚）にあたる東日本を中心に収めた『柴田常恵写真資料目録』を刊行した。残りの半数については、以後順次目録を発行し、大場博士資料と同様にデータ配信を実現する計画である。

柴田常恵氏は明治後期から昭和初期にかけて活躍した考古学者であり、文化財保護に大きく関わった人物でもある。よって、柴田氏の資料は考古学分野のみならず、広く文化財関連分野等の研究においても有用なもので、多方面より強い関心が示されている。当事業において、この中の画像資料についての再生保存が終わり、今後多くの活用が予測できる。

（田中秀典）

- 1 近代日本の文化財保護行政における柴田常恵

柴田常恵は、明治後期から昭和にかけて活躍した考古学・文化財保護行政の専門家とされている。しかし、行政機構の中でどのような立場にあり、どのような役割を果たしていたかということについては、これまであまり触れられて来なかった⁽¹⁾。本論は、その柴田の立場、役割について、整理・確認することを目的とする。

近代日本の文化財保護行政は、明治4(1871)年の太政官布告「古器旧物保存方」を発したことに始まる。以下、近代日本における文化財保護行政の制度的な変遷を概観する。

有形文化財については、その後いくつかの個別の法令が出されたのち、明治30(1897)年の古社寺保存法で本格的に制度化される。これは、社寺の古建築物等を法的保護の対象としたものであり、社寺以外の所有物についてはその範囲とされていなかった。それらは、昭和4(1929)年の国宝保存法で初めて法的保護を受けるようになる。続いて、昭和8(1933)年には「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」が制定されてその完成をみる。

記念物については、明治7(1874)年の太政官達「古墳発見ノ節届出方」など個別のものがいくつか出された後、体系的なものである史蹟名勝天然記念物保存法が大正8(1919)年に制定される。

これらを所管する部局もまた、さまざまな変遷を辿る。有形文化財関係は、当初、内務・宮内両省が担当していたが、古社寺保存法の制定とともに内務省社寺局に一元化される。そして、社寺局から分かれた宗教局が大正2(1913)年に文部省に移されると、それに伴って、文化財についても文部省の所管となる。記念物関係は、史蹟名勝天然記念物保存法の制定以来、内務省の大臣官房で地理課が所管していたが、昭和2(1927)年に地理課が廃止されたことに伴って、文部省宗教局へ移管される。「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」の制定後は、それについても同局の所管となる。

また、それらの諮問機関として、古社寺保存会、国宝保存会、重要美術品等調査委員会、史蹟名勝天然記念物調査会が調査・審議に従事した。

柴田常恵は、東京帝国大学理学部人類学教室の助手等を経て、史蹟名勝天然記念物保存法が施行された大正9(1920)年に史蹟名勝天然記念物調査会の考査員となり、ここで文化財保護行政との関わりが始まる。それと同時に、内務省地理課の嘱託となり、昭和2(1927)年、事務の移管に伴って文部省の嘱託となる。また、その間、大正10(1921)年には東京帝国大学文学部標本調査嘱託を兼務し、その後は、昭和7(1932)年から慶応義塾大学講師、昭和11(1936)年から重要美術品等調査委員会委員、帝室林野局嘱託を務める。本論においては、この中で、史蹟名勝天然記念物調査会について検討する。

史蹟名勝天然記念物調査会の組織については、史蹟名勝天然記念物調査会官制で定められている⁽²⁾。これによれば、史蹟名勝天然記念物調査会は、会長・委員・臨時委員・幹事・考査員・書記からなる。会長のもとで、高等官と学識経験者からなる定員20名以内の委員と定員外の臨時委員が調査・審議を行う。そのもとで調査の実務を担ったのがこれも学識経験者から任命される考査員であり、事務を掌ったのが幹事と書記である。

この官制にもとづいて成立した、史蹟名勝天然記念物調査会の初年のメンバーは69ページの表の通りである⁽³⁾。

会長は、実際は歴代の内務大臣が就任しており、この調査会が内務省における史蹟名勝天然記念物についての事実上の最終的な決定機関として機能していたことがわかる。官僚を除いた委員・臨時委員と考査員が学識経験者である。この中で、委員・臨時委員は帝大教授もしくはそれに準ずる人々で

あり、前述の「官制」にもあるように、審議に参加して決定に与る立場であった。それに対し、考查員の多くは若手研究者であり、この人々が実際に調査の中心となる立場であったと考えられる。

また、史蹟名勝天然記念物保存法の対象は多岐にわたるため、委員・臨時委員・考查員には生物学・歴史学等、様々な分野の人物が任命されている。この中で、考古学を専門とする人物は、考查員である水木要太郎と柴田の2名であり、各地へ赴いての実際の考古学的な調査は主に水木と柴田が中心となって行ったと考えられる。また、委員・臨時委員には考古学を専門とする人物は見られず、審議・決定段階においても二人の影響力があつたことが想像される。

以上のことから、柴田の文化財保護行政への関与は、考古学の分野に関しては大きなものであつたと考えられる。その柴田が残したノートや写真などの資料を分析することによって、柴田の足取りや行動が明らかになり、近代日本の文化財保護政策の決定過程や行政機構のしくみを解明するための一助となるであろう。また、大場磐雄も言うように⁽⁴⁾、柴田のノートや写真の中には現在亡失した貴重な資料も多くあり、その柴田資料を整理・分析することは考古学界の発展に寄与するものでもであろう。

(田中秀典)

註

1) 文化財保護行政全般を扱っているものとして、最近では高木博志『近代天皇制の文化史的研究 - 天皇就任儀礼・年中行事・文化財』(1997年2月、校倉書房) 枝川明敬「我が国における文化財保護の史的展開 - 特に、戦前における考察」(『文化情報学：駿河台大学文化情報学部紀要』第9巻第1号、2002年6月) などがあるが、柴田を中心に扱っているものは、山内利秋「画像資料と近代アカデミズム・文化財保護制度」(『日本写真学会誌』65 - 2、2002年4月) が見られるのみである。

2) 史蹟天然記念物調査会官制(抄)

第一条 史蹟名勝天然記念物調査会ハ内務大臣ノ監督ニ属シ史蹟名勝天然記念物ノ保存ニ関スル事項ヲ調査審議ス

第二条 調査会ハ史蹟名勝天然記念物ノ保存ニ関シ内務大臣ノ諮問ニ応シテ意見ヲ開申シ又ハ内務大臣ニ建議スルコトヲ得

第三条 調査会ハ会長一人及委員二十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
前項定員ノ外必要アル場合ニ於テハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第四条 会長、委員及臨時委員ハ関係各庁高等官及学識経験アル者ノ中ヨリ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス

第五条 会長ハ会務ヲ総理ス
会長事故アルトキハ内務大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第六条 調査会ニ幹事並考查員及書記若干人ヲ置ク
幹事ハ内務省高等官ノ中ヨリ、考查員ハ学識経験アル者ノ中ヨリ内務大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ス
書記ハ内務省判任官ノ中ヨリ内務大臣之ヲ命ス

第七条 幹事ハ会長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス
考查員ハ上司ノ指揮ヲ承ケ考查ニ従事ス
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス (『法令全書』大正8年)

3) 『職員録』等をもとに作成。こののち、臨時委員・考查員の若干の増員や、一部のメンバーの入れ替えが随時行われる。なお、この翌年には臨時委員に新島善直(北海道帝国大学農学部教授・林学)・原熙(東京帝国大学農学部教授・農学)・八田三郎(北海道帝国大学農学部教授・動物学)・関野貞(東京帝国大学工学部教授・建築史)が加わり、その後も、農商務省技師の伊原敬之助(地質学)、小倉勉(地質学)、早尾丑麿(林学)が考查員に加わるなど、おもに理科系の分野で増強がはかられる。

4) 大場磐雄『日本考古学選集12柴田常恵集』1971年11月、築地書館

役職	氏名	官職等	専門分野	役職	氏名	官職等	専門分野
会長	床次竹二郎	内務大臣	—	臨時	荻野仲三郎	女子高等師範学校教授	古代史
委員	岡野 昇	鉄道省工務局長	—	委員	南部 光臣	宮内省参事官	—
	山口鋭之助	諸陵頭	—		幹事	山田準次郎	内務省参事官
	小橋 一太	内務次官	—	渡部 信		内務省参事官	—
	塚本 清治	内務省神社局長	—	調査員	佐藤 伝蔵	東京高等師範学校教授	地質学
	添田敬一郎	内務省地方局長	—		棚橋源太郎	東京教育博物館館長	理科教育
	赤司鷹一郎	文部省普通学務局長	—		水木要太郎	奈良女子高等師範学校教授	考古学
	柴田駒三郎	文部省宗教局長	—		田子 勝弥	農商務省技師	動物学
	鶴見左吉雄	農商務省商務局長	—		黒田 長礼	宮内省主猟官	動物学
	神保 小虎	東京帝国大学理学部教授	地質学		中野 治房	鹿児島高等農林学校教授	植物学
	三好 学	東京帝国大学理学部教授	植物学		宮地 直一	内務省考証官	神道史
	川瀬善太郎	東京帝国大学農学部教授	林学		増田 于信	内務省御用掛	国文学
	三上 参次	東京帝国大学文学部教授	近世史		内田清之助	農商務省技師	動物学
	渡瀬庄三郎	東京帝国大学農学部教授	動物学		国府 種徳	宮内省囑託員	漢文学
	徳川 頼倫	日本図書館協会総裁	—		戸川 安宅	日本女子大学国文科教授	国文学
	白井光太郎	東京帝国大学農学部教授	植物学		吉井 義次	—	植物学
	三宅 秀	東京帝国大学名誉教授	医学		柴田 常恵	内務省囑託	考古学
	福井 三郎	衆議院議員	—		書記	荒井亀太郎	内務属
黒坂 勝美	東京帝国大学文学部教授	古代史	山田 英吉			内務属	—
井上禧之助	農商務省技師	地学	一尾 力	内務属		—	
臨時委員	松平 頼平	宮内省御用掛	—	矢野 寛	内務属	—	

『平成14年度 國學院大學学術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』より

折口信夫博士写真資料の電子情報化

資料研究の概要と成果

本事業は、本学文学部の付置研究所である折口博士記念古代研究所（以下、「折口古代研」と略記する）所蔵の写真画像資料を対象としたもので、平成12年度から基礎的作業を実施してきた。

折口古代研には、折口の蔵書である折口記念文庫、自筆あるいは他の者の浄書などによる著述資料、書簡資料、折口自身の撮影写真も含む画像資料、折口の収集品や遺品などの有形資料、折口研究書誌など合計で約2万8,500点の資料が所蔵されている。

本事業で対象となるのは、このうちの画像資料であり、この中には折口自身の撮影による民俗写真資料、折口が収集した歌舞伎関係画像資料、芸能関係画像資料、各地景観等絵葉書資料、さらに折口にかかる人物写真（年譜写真）資料などがある。画像資料は全体を一括して「折口写真コレクション」と通称しており、民俗写真は約2,250点、人物写真（年譜写真）は約1,100点、演劇写真は約2,700点ある。このほかに各地の絵葉書などもあるが、事業対象としたのは、演劇写真のうちの歌舞伎関係画像と人物写真（年譜写真）であり、このうち歌舞伎関係画像については14・15年度に絵葉書・プロマイドのすべてである2,547点のデジタル化を完了した。人物写真については、撮影年次の判明しているものの整理が完了した。

歌舞伎関係画像資料は、絵葉書が2,374点、プロマイドが173点であり、これらのなかで作成年次の判明しているものが139点ある。それは明治43年から昭和8年までであり、これら絵葉書・プロマイドが明治末から戦前までのものであることをうかがわせている。また、折口自身が役者の台詞などを書き込んだものが163点ある。

日本で絵葉書が作成されるようになったのは明治33年（1900）からであり、大正期のものを大半としながら明治末から昭和初期までの歌舞伎絵葉書が、これだけまとまっているのは稀であり、日本の歌舞伎史、近代演劇史研究にとっては重要な資料といえることができる。

平成12年度からの研究活動・デジタル化をもとに、平成15年度には國學院大學学術フロンティア事業のホームページに「折口信夫写真資料・歌舞伎絵葉書資料 Photographic materials collected by ORIKUCHI Shinobu KABUKI Picture Postcard Collection」と題して資料紹介の頁を掲載した。

歌舞伎関係画像資料の概要について、点数の多い役者名リスト、点数の多い発行所リストなどを示しておく次のようになる。

コレクション点数の多い役者名 / 最終名跡（上位12名）

役者名（最終名跡）	役者名（以前）	枚数
15代目市村羽左衛門		146
5代目中村歌右衛門	中村芝翫	140（15）
6代目尾上梅幸		121
7代目澤村宗十郎	澤村訥升	81（6）
7代目松本幸四郎	市川高麗蔵	78（23）
初代中村吉右衛門		75

役者名（最終名跡）	役者名（以前）	枚数
11代目片岡仁左衛門		74
7代目市川中車	市川八百蔵	74（6）
13代目守田勘弥		50
初代中村鴈治郎		47
2代目実川延若	実川延二郎	42（31）
6代目大谷友右衛門	中村東蔵	38（34）

（ ）内は以前の役者名名義の枚数

コレクション点数の多い発行所とその裏面（宛名面）のデザイン

発行元	言語	主な切手絵	枚数	備考
銀座上方屋	英 + 仏 / 仏	大入 / 扇 大入	1579	富士山の切手絵も見られる
東京銀座上方屋本店	仏	星の縁飾り	44	
銀座上方屋平井	仏	大入	14	
TONBOYA	仏 / 仏・英・独・伊・露	蜻蛉 /	125	年代が古いものと思われる
		無		
東京本郷矢吹高尚堂	仏	無	91	帝劇で上演
新富町森山	仏 / 独・仏・伊・英・露	無	39	
演芸写真館	無	大入	15	
松竹演芸写真部	英	松竹	10	
松竹写真部	英	無	10	
演芸書報社	仏	大入 + 燭台	6	
福山島田製美堂	仏	薔薇	4	中村成太郎
大阪中村屋	無	巣箱	3	

歌舞伎関係画像のうちの大半を占める絵葉書は、半数以上が銀座上方屋のものであり、「葉書」の表示言語を見ていくと、上記のように英語、仏語、独語のほかイタリア語、ロシア語などがある。国際性が意識されていたのがわかる。絵葉書には画像化された歌舞伎の上演劇場名も記されており、歌舞伎座・帝国劇場などの大歌舞伎が演じられる劇場から、本郷座・御国座などの小芝居の劇場まで、幅広く見られるのが特長である。

歌舞伎関係画像資料はデジタル化が完了したのと同時に、データベース化も進めており、1点ごとに表面(画像面)にある種類/題目/演目/場面名/役名/役者名/最終名跡/劇場名/人数/カラー

or モノクロ / 日付 / 自筆書き込み、裏（宛名面）にある発行元 / 印字色 / 言語 / 切手絵 / 自筆書き込みの一覧化を行った。

デジタル化ならびに資料研究にあたっては、従来、資料がB4厚紙を台紙として糊付けされていたのを台紙から剥がし、Lシートホルダーに1点ずつ収納して劣化の進行を止めるようにした。Lシートホルダーというのは、保存用ポリエステルフィルム2枚の間に無酸ガス吸着紙とアルカリ供給紙を挟んだもので、2枚のポリエステルフィルムは2面が熱厚着され、ホルダー状になっている。この中の真ん中にアルカリ供給紙を入れ、その両面に無酸ガス吸着紙を入れて、絵葉書などの画像資料は1つのホルダーに2点ずつ入れることができる。Lシートホルダーに資料を収納し、さらに専用の保存箱に入れている。ポリエステルフィルムの厚さは50ミクロンのものを使用している。この製品は株式会社大入製のものであり、ホルダーはA5サイズの特注品である。

なお、歌舞伎関係画像資料については立命館大学アトリサーチセンターとの共同研究を進めており、デジタル化資料は立命館大学学術フロンティア推進研究プロジェクト「京都演劇・映像デジタルアーカイブプロジェクト」（研究代表者：赤間亮 文学部教授）と資料・情報の共有化をはかった。

資料デジタル化の手順

歌舞伎関係画像資料のデジタル化については、次の手順で作業を進めた。

1. 資料番号付与

資料の大半は、画用紙状の台紙に糊付けされて、一部折口の自筆があるものに関してのみ、裏面が確認できるような配慮がなされている。台紙には時々与えられた番号があった。だが、枝番、欠番、同じフィルムからの焼き付けで重複しているものに番号を与えていない等の問題点があることから、以後使用するのに不適切と判断し、ナンバリングで資料番号に該当するような一資料一番号を原則とする番号を新たに与えた。

歌舞伎関係画像資料には、デジタル化の過程で1点ごとに「os-e (番号)」を与えた。これは「折口信夫 演劇」の意である記号と資料番号である4桁の数字で、同じフィルムからの焼き付けなど、明らかに複写であるものには枝番をあたえることにした。この作業によって歌舞伎関係画像資料は当初把握されていた2,202点ではなく、2,547点のコレクションであることが確認できた。

2. デジタル化作業

研究用、データベース用として200dpi、TIFF形式のファイルを作成した。その後、データ交換用として、TIFFファイルを元に、JPGファイルを作成した。また、大きさがまちまちである各資料の縦横比を固定し、プリントサイズを長辺14センチメートルに統一した（不定形の写真などは、元のサイズを知るため操作しなかったものもある）。歌舞伎関係画像資料については、まず当初、確認されていた2,202点、ついで追加分の順で2,547点すべての作業を終了させた。

作業過程で生じた問題点について

1. 台紙に貼りつけられた資料の管理

かつて一般的であった、紙資料をでんぷん糊で台紙に貼りつける資料整理方法は、今日では資料保存の観点から、問題があることが明らかになっている。本事業で対象とした資料の中にも、裏面に塗られた糊が表面ににじみ出て、しみ状に変色しているものが確認できた。裏面に印刷されていることの多い発行所などの情報が確認できないという問題もある旨、立命館大学アート・リサーチセンターより指摘をうけた。裏面数箇所が糊付けされている場合が多いことから、慎重に資料を台紙からはがしていった。

自筆がみられるため糊付けをしていない資料であっても、四隅を固定する枠を台紙に設け、取り外して裏面確認できるようにしているため、度重なる取り外しによる損傷が生じている場合がある。これらについても適切な管理を検討しなければならない。

2. 台帳管理方法

資料から台紙を除去した後の資料整理方法の大きな課題であるが、まずは酸性化をくい止めることが重要で、上記のLシードホルダーに収納していった。ホルダーに収納して、資料番号をホルダーに記載して方法をとっている。ホルダーであるので資料を取り出すのは容易であるが、しかし脱落する可能性があり、扱いは慎重に行う必要がある。後の混乱を防ぐためには資料に直接資料番号を記載したほうがよいのであるが、これは資料汚損にもなり、現状ではホルダー収納が最善といえる。

今後の課題

折口信夫によって収集された歌舞伎関係画像資料は、上記のようにデジタル化が完了し、さらにデータベース化がほぼ完了したのであり、今後は資料情報とデジタル画像を合体させたデータベースの構築が課題となる。文字による資料情報と画像とが同時に検索できるシステムの構築であり、これによって Web 上でのデータベース検索もできるようになる。

(小川直之)



(左図) 帝国劇場「戻り橋(一条戻り橋の場)」
 渡邊綱(松本幸四郎)と娘小百合(悪鬼)(尾上梅幸)
 (大正14年6月上演)
 (銀座上方屋製絵八ガキ)



(右図)「忠臣蔵三段目」
 師直(市川団蔵)と判官(尾上梅幸)
 (絵八ガキ)



歌舞伎座「紅葉狩」侍女碓氷(中村兎太郎)
 (銀座上方屋製絵八ガキ)



歌舞伎座「女暫」息女巴御前(中村歌右衛門)
 (銀座上方屋製絵八ガキ)

写真図版 1



帝国劇場「心中天網島」紙屋治兵衛（澤村宗十郎）
（銀座上方屋製絵八ガキ）
（書き込みは折口信夫による）



帝国劇場「祇園祭礼信仰記」
此下藤吉（中村吉右衛門）
（銀座上方屋製絵八ガキ）



帝国劇場「身替座禅」山陰右京（尾上菊五郎）
（銀座上方屋製絵八ガキ）
（書き込みは折口信夫による）



帝国劇場自由劇
ナスチャ（市川松蔭）と男爵（石川寿美蔵）
（銀座上方屋製絵八ガキ）

写真図版 2

櫻井満博士画像資料のデジタル化

当該画像資料の再生と保存の経緯

博士は折口信夫の弟子高崎正秀を師とするいわゆる學統にたち、日本文学を研究領域として、民俗学的アプローチをそなえた研究展開をされた。それゆえフィールドワークの足跡を多く残され、その折の画像資料も少なからず残された。これらの資料の整理と保存を、本フロンテア企画にご遺族からお預かりしたのを機に、この企画は発足したものである。

託された画像資料は平成13年7月現在下記のごとくである。

【櫻井満所蔵画像資料（プリント・スライド）一覧】

番号	内 容	地 域	年 代	冊数・枚数
1	第一回南島調査	南西諸島	昭和37～39年	アルバム1冊(写真210枚)、バラ13枚
2	沖縄本島および久高島 アマウルシ・イザイホー	沖縄県	昭和40年代、および 昭和41年	バラ12枚、アルバム1冊 (写真63枚)
3	久高島イザイホー	沖縄県	昭和53年	アルバム1冊(写真110枚)
4	久高島(イザイホー)他	南西諸島	年代未詳	アルバム1冊(写真211枚)
5	阿南・諏訪神社・神楽	長野県	年代未詳	青表紙アルバム(A5)1冊 (写真54枚)
6	和合念仏踊り	長野県	昭和49年	赤表紙小アルバム1冊 (写真20枚)
7	東大寺お水取り	奈良県	昭和55年	黄表紙小アルバム1冊 (写真16枚)
8	三穂神社祭礼	静岡県	年代未詳	赤縦長表紙小アルバム1冊 (写真34枚)
9	伊雑宮・天満祭	三重県・大阪府	年代未詳	バラ29枚
10	赤穂船祭	兵庫県	昭和57年	バラ19枚
11	箱根湯立獅子舞	神奈川県	昭和35年	バラ56枚
12	諏訪御柱	長野県	年代未詳	バラ18枚
13	八王子車人形	東京都	年代未詳	バラ15枚
14	紀州大島	和歌山県	年代未詳	バラ71枚
15	しょうが祭・紀州万葉 の旅	和歌山県他	年代未詳	白表紙小アルバム2冊(写 真43枚)、猫イラスト付表紙 小アルバム1冊(写真15枚)
16	熊野本宮祭礼	和歌山県	昭和46年	カラーおよびモノクロ・バ ラ105枚
17	お綱かけ・お田植え	奈良県	年代未詳	バラ87枚
18	山辺・武田・鷲神社 (オドロキ神社か?)	奈良県他	年代未詳	バラ45枚
20	神倉	未詳	年代未詳	バラ82枚
21	吉野蔵王堂カエル飛び 神事・万葉旅行	奈良県	昭和40年代	バラ36枚
22	嵯峨大念仏	京都府	昭和47年	バラ32枚

番号	内 容	地 域	年 代	冊数・枚数
23	アイヌ	北海道	昭和35年ごろ	バラ14枚・ インデックス2枚
24	萩・鷺舞	島根県	昭和30年代後半～ 40年代	バラ12枚
25	未詳	未詳	未詳	大判バラ3枚
26	正月作り物	未詳	未詳	バラ15枚
27	葵祭・ 石清水八幡宮祭礼	京都府	昭和44年ごろ	バラ110枚
28	八重山プーリー他	南西諸島	昭和30年代後半	【スライド】24枚
29	宮古島	南西諸島	昭和30年代後半	【スライド】14枚
30	沖縄本島	南西諸島	昭和30年代後半	【スライド】26枚
31	未詳	南西諸島	昭和30年代後半	【スライド】15枚
32	美保神社	島根県	年代未詳	【スライド】65枚
33	久高島イザイホー	沖縄県	昭和41年	【スライド】83枚
34	春日若宮おん祭	奈良県	昭和43年	【スライド】75枚
35	強飯祭事	未詳	未詳	バラ19枚

これらの画像における劣化画像の再生の経緯は、次のごとくに行われた。

まず表1の 28～ 34のスライドの部に着手した。ネガフィルムをポジフィルムにしたものは退色が甚だしく、補色が困難であるため、かなり貴重と考えられるものに限って、限定的に補色を施すことにはかったが、仕上がりが不自然で納得がいかなかったため、あえて補色の手法は用いぬことにした。洗浄過程に入る前の状態は、マウントの接触部分に生じた黴は除去し難く、また、くもりがひどくなっており、この点も可能な限りの再生を試みることにした。この過程を表に纏めると以下のごとくである。

【櫻井満コレクションフィルム管理状況一覧】

これらオリジナルのスライドは業者によって、洗浄、デューブ（2組）、フォト・CD 1組が作成され、後日、オリジナルのスライドの返却のさい、これに添えてデューブ1組分を櫻井家に納め、他のデューブ1組、フォト・CD 1組は学術フロンティアの成果物として國學院大學におさめられた。

次いで、 1～ 27、 35のプリントはフォト・CD を2部作成、1部をオリジナル返却のさいに櫻井家に納め、他の1部はフロンティアの成果物として國學院大學に納められた。

上記のうち、リバーサルフィルムについてはデジタル化が進められ、平成13年度から、フロンティア・プロジェクトのホームページ上に公開しており、すでに外部からの利用も順調になされている。「再生後の画像資料の活用 - 探訪地の現風景との比較 - 」と題した劣化画像の再生と保存に関する作業に次ぐ段階では、その存在意義を確かめ、深める作業が求められよう。画像の活用もこの範疇に入る。活用において、有効な結果を得るには、まず各画像それぞれについての詳細なデータが必須であることは言うまでもない。

「櫻井満画像資料」は、博士の慮外の他界のゆえと思われるが、ご自身の画像は未整理で、キャプションの記入が皆無にひとしい。従って、おおよその見当はついて、画像一葉一葉についての詳しい状況については、他者には正確な説明は附記できない。これらを補うには、息の長い調査が必要である。余裕のある時間と人手の投入ができれば、ある程度の補足は可能であろうが、諸般の事情から目下のところ望むべくもない。そのため、数ある画像のうち、画像撮影の現場において、同様の調査

および撮影の経験をし、博士の画像についての確認が可能な資料に限定して、活用を試みることにしたのである。

本例のように、与えられた標題に画像資料をリンクさせて、若干の考察をはかろうとするとき、画像にともなうデータの充足度は切実な前提条件となる。ここでは、筆者が博士とたまたま同道の経験があり、また、自らのフィールドとしても、調査研究を続行してきた、沖縄県島尻郡久高島に関する博士の画像資料をとりあげながら、以下のような試みを展開した。

まず「記録されたイザイホー - 画像から見た祭祀状況と聖域の変容 - 」(シンポジウム「画像資料論の可能性」における報告、後に報告書『人文科学と画像資料研究第1集』に掲載)において、文字表現と視覚に訴える画像表現における、それぞれの表現力の特性と可能性、両者の適切な兼ね合いについて、イザイホー関係の事象を介して、若干の考察を行ったものであるが、そのさいにもちいた画像は主に櫻井、筆者所有のものを援用した。

通しNo	グループ番号	内 容	地 域	年 代	マウントNo	フィルムコンディション
1	28	八重山プーリー他	南西諸島	昭和30年代後半	1 - 7	カビ少なめ
2					1 - 8	マウント周囲よりカビ発生、指紋跡よりカビ発生
3					1 - 9	ベース面全体に薄っすらカビ
4					1 - 10	ベース面かなりの汚れ
5					1 - 11	ベース面かなりの汚れ、乳剤面少しカビ
6					1 - 14	ベース面マウント周囲にカビ
7					1 - 15	ベース面マウント周囲のみ少しカビ
8					1 - 16	ベース面マウント周囲のみ少しカビ、指紋跡よりカビ発生
9					1 - 17	ベース面マウント周囲のみ少しカビ
10					1 - 18	ベース面マウント周囲のみ少しカビ
11					1 - 19	ベース面マウント周囲のみ少しカビ
12					1 - 20	ベース面全体にカビ発生
13					3 - 1	ベース面乳剤面とも少しカビ
14					3 - 2	ベース面乳剤面とも少しカビ、マウント周囲多し
15					3 - 3	ベース面マウント周囲のみ少しカビ
16					3 - 4	ベース面マウント周囲のみ少しカビ
17					3 - 5	ベース面乳剤面とも少しカビ
18					3 - 6	ベース面乳剤面とも少しカビ
19					3 - 7	ベース面マウント周囲のみ少しカビ
20					3 - 8	ベース面マウント周囲のみ少しカビ
21					3 - 9	ベース面マウント周囲のみ少しカビ
22					3 - 10	ベース面全体に汚れカビ発生
23					3 - 11	ベース面全体に汚れカビ発生
24					3 - 12	ベース面全体に汚れカビ発生
25	29	宮古島	南西諸島	昭和30年代後半	2 - 4	ベース面全体にカビ、乳剤面カビ多し
26					2 - 5	ベース面全体に少しカビ、乳剤面カビ多し
27					2 - 6	ベース面全体に少しカビ、乳剤面カビ多し
28					2 - 7	ベース面マウント周囲のみ少しカビ、乳剤面カビ多し
29					2 - 8	ベース面乳剤面とも全体に少しカビ
30					2 - 9	ベース面マウント周囲のみ少しカビ、乳剤面カビ多し
31					2 - 10	乳剤面にカビ

通しNo	グループ番号	内 容	地 域	年 代	マウントメモ	フィルムコンディション
32					2 - 12	ベース面少し汚れ、乳剤面カビ
33					2 - 13	ベース面マウント周囲と中央に少しカビ、乳剤面カビ
34					2 - 14	ベース面マウント周囲と中央に少しカビ、乳剤面カビ
35					2 - 15	ベース面マウント周囲と中央に少しカビ、乳剤面カビ
36					2 - 16	ベース面マウント周囲と中央に少しカビ、乳剤面カビ
37					2 - 17	乳剤面にカビ
38					18	ベース面マウント周囲と中央に少しカビ、乳剤面カビ
39	30	沖縄本島	南西諸島	昭和30年代後半	1 - 1	ベース面全体にカビ、乳剤面マウント周囲にカビ
40					1 - 2	ベース面全体にカビ、乳剤面マウント周囲に若干カビ
41					1 - 3	ベース面全体にカビ、乳剤面マウント周囲にカビ
42					1 - 4	ベース面乳剤面マウント周囲カビ
43					1 - 5	ベース面乳剤面マウント周囲カビ
44					1 - 6	ベース面乳剤面マウント周囲カビ
45					3 - 15	ベース面乳剤面マウント周囲カビ、ベース面汚れ
46					3 - 16	ベース面乳剤面マウント周囲若干カビ
47					3 - 17	ベース面乳剤面マウント周囲若干カビ
48					3 - 19	ベース面乳剤面マウント周囲カビ、乳剤面中央カビ
49					3 - 20	ベース面乳剤面マウント周囲カビ
50					4 - 1	ベース面全体カビ乳剤面中央付着物あり
51					4 - 2	ベース面乳剤面マウント周囲若干カビ、ベース面中央上部付着物あり
52					4 - 3	ベース面全体カビ、乳剤面ところどころカビ
53					4 - 4	ベース面全体カビ、乳剤面ところどころ少しカビ
54					4 - 5	ベース面、乳剤面ところどころ少しカビ
55					4 - 6	ベース面全体カビ、乳剤面ところどころカビ
56					4 - 7	ベース面全体カビ、乳剤面ところどころ少しカビ
57					4 - 8	ベース面全体カビ、乳剤面ところどころ少しカビ
58					4 - 9	ベース面全体カビ、乳剤面少しカビ
59					4 - 10	ベース面全体少しカビ、乳剤面少しカビ
60					4 - 11	ベース面全体少しカビ、乳剤面マウント周囲少しカビ
61					4 - 12	ベース面マウント周囲と中央に少しカビ、乳剤面カビ
62					4 - 13	ベース面マウント周囲と中央に少しカビ、乳剤面カビ
63					4 - 14	ベース面乳剤面全体カビ
64					4 - 15	ベース面全体カビ、乳剤面少しカビ
65	31	未詳	南西諸島	昭和30年代後半	1 - 12	ベース面マウント周囲乳剤面全体にカビ
66					1 - 13	ベース面全体乳剤面ところどころにカビ

通しNo	グループ番号	内 容	地 域	年 代	マウントメモ	フィルムコンディション
67					2 - 1	ベース面全体乳剤面ところどころにカビ
68					2 - 2	ベース面マウント周囲乳剤面全体にカビ、マウント逆入れ
69					2 - 3石垣島 平得	ベース面全体乳剤面少しカビ、マウント逆入れ
70					2 - 11	ベース面乳剤面マウント周囲と中央にカビ、逆入れ
71					2 - 19	ベース面全体、乳剤面マウント周囲にカビ、逆入れ
72					2 - 20	ベース面マウント周囲乳剤面全体にカビ
73					3 - 13	ベース面マウント周囲カビ、乳剤面ところどころにカビ
74					3 - 14	ベース面全体、乳剤面マウント周囲にカビ
75					3 - 18	ベース面乳剤面全体にカビ
76					与那原の大綱引	ベース面乳剤面全体にカビ、カット不良による短フィルム
77					4 - 18	ベース面全体乳剤面部分的にカビ
78					4 - 19	ベース面全体乳剤面マウント周囲下部にカビ
79					4 - 20	ベース面全体乳剤面部分的にカビ
80	33	久高島イザイホー	沖縄県	昭和41年	1 S41イザイホー No60まで	ベース面一部カビ
81					2	ベース面マウント周囲下部カビ
82					3	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
83					4	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
84					5	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
85					6	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
86					7	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
87					8	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
88					9	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
89					10	ベース面一部カビ
90					11	乳剤面マウント周囲一部カビ
91					12	ベース面一部カビ
92					13	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
93					14	ベース面マウント周囲一部カビ
94					15	ベース面乳剤面全体にカビ
95					16	乳剤面ベース面マウント周囲カビ、乳剤面スクラッチ
96					17	ほとんど汚れなし
97					18	ほとんど汚れなし
98					19	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
99					20	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
100					21	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
101					22	乳剤面中央に汚れ
102					23	乳剤面マウント周囲一部カビ
103					24	乳剤面マウント周囲一部カビ
104					25	ベース面一部カビ
105					26	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
106					27	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
107					28	ベース面一部カビ

通しNo	グループ番号	内 容	地 域	年 代	マウントメモ	フィルムコンディション
108					29	ベース面一部カビ
109					30	乳剤面マウント周囲ベース面一部カビ
110					31	ベース面一部カビ
111					32	ベース面一部カビ
112					33	乳剤面一部ムラ
113					34	乳剤面一部カビ
114					35	乳剤面マウント周囲一部カビ
115					36	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
116					37	ほとんど汚れなし
117					38	ほとんど汚れなし
118					39	ベース面一部カビ
119					40	ベース面一部カビ
120					41	乳剤面一部ムラ、マウント周囲カビ
121					42	乳剤面一部カビ、ベース面マウント周囲カビ
122					43	ベース面一部カビ
123					44	ベース面マウント周囲一部カビ
124					45	ベース面マウント周囲一部カビ
125					46	ベース面マウント周囲一部カビ
126					47	ベース面マウント周囲一部カビ
127					48	乳剤面一部カビ
128					49	乳剤面マウント周囲一部カビ
129					50	乳剤面マウント周囲一部カビ
130					51	乳剤面マウント周囲一部カビ
131					52	ベース面指紋跡
132					53	乳剤面マウント周囲一部カビ
133					54	ベース面マウント周囲一部カビ
134					55	ほとんど汚れなし
135					56	ほとんど汚れなし
136					57	ベース面スクラッチ
137					58	乳剤面一部ゴミ付着
138					59	乳剤面一部カビ
139					なし	ベース面マウント周囲一部カビ
140					60 イラ ブガマ	乳剤面マウント周囲ベース面一部カビ
141					1 久高島 以下その他	ベース面一部カビ
142					2	ベース面根深いカビ
143					3	ベース面大きいカビ
144					4	ベース面マウント周囲一部カビ
145					5	乳剤面付着物、ベース面一部カビ
146					6	乳剤面付着物、ベース面マウント周囲カビ
147					7	乳剤面大きいカビ、ベース面マウント周囲カビ
148					なし	乳剤面根深いカビ
149					イ	乳剤面ベース面マウント周囲一部カビ
150					ロ	乳剤面マウント周囲一部カビ
151					ハ	乳剤面ベース面マウント周囲一部カビ
152					ニ	乳剤面マウント周囲一部カビ

通しNo	グループ番号	内 容	地 域	年 代	マウントメモ	フィルムコンディション
153					ホ	ベース面一部カビ
154					へ	乳剤面マウント周囲根深いカビ
155					なし	乳剤面ベース面一部カビ
156					なし	乳剤面ベース面一部カビ
157					なし	乳剤面ベース面一部カビ
158					なし	乳剤面ベース面一部カビ
159					なし	乳剤面マウント周囲一部カビ
160					なし	乳剤面マウント周囲一部カビ
161					なし	乳剤面一部、ベース面根深いカビ
162					なし	乳剤面マウント周囲一部カビ、ベース面根深いカビ
163	32	美保神社	島根県	年代未詳	40	乳剤面マウント周囲にカビ
164					41	乳剤面マウント周囲にカビ
165					64	ベース面マウント周囲にカビ
166					65	ベース面マウント周囲に少しカビ比較的美しい
167					66	ベース面全体乳剤面部分的にカビ
168					67	ベース面全体乳剤面中央にカビ
169					9	乳剤面全体にカビ、ベース面角にカビ固まり
170					18	ベース面マウント周囲下部少しカビ
171					20	乳剤面全体カビ、ベース面一部カビ
172					22	ベース面乳剤面少しカビ
173					2	乳剤面マウント周囲カビ、中央付着物
174					5	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
175					3	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
176					4	乳剤面マウント周囲下部にカビ
177					19	ほとんど汚れなし
178					1	乳剤面全体のカビベース面一部カビ
179					8	乳剤面全体のカビベース面マウント周囲カビ
180					6	乳剤面マウント周囲カビ
181					7	乳剤面マウント周囲カビ
182					10	乳剤面ベース面マウント周囲少しカビ
183					13	乳剤面マウント周囲カビ
184					12	乳剤面マウント周囲カビ
185					11	乳剤面マウント周囲カビベース面付着物あり
186					23	乳剤面全体にカビ、ベース面一部カビ
187					27	乳剤面マウント周囲カビ
188					29	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
189					25	乳剤面マウント周囲カビ
190					30	ベース面マウント周囲カビ
191					26	ベース面マウント周囲カビ乳剤面角に大きいカビ
192					28	乳剤面マウント周囲カビ
193					31	乳剤面ベース面マウント周囲少しカビ
194					33	ベース面マウント周囲少しカビ
195					34	ベース面マウント周囲カビ
196					35	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
197					36	乳剤面ベース面マウント周囲少しカビ

通しNo	グループ番号	内 容	地 域	年 代	マウントメモ	フィルムコンディション
198					37	乳剤面ベース面マウント周囲少しカビ
199					32	乳剤面ベース面マウント周囲下部一部カビ
200					60	ベース面線上の汚れ
201					51	乳剤面ベース面マウント周囲少しカビ
202					53	ほとんど汚れなし
203					38	乳剤面マウント周囲カビ
204						乳剤面ベース面マウント周囲カビ
205					48	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
206					49	乳剤面マウント周囲一部カビ
207					54	乳剤面マウント周囲一部カビ
208					57	乳剤面中央にカビ
209					56	乳剤面マウント周囲下部カビ
210					52	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
211					45	乳剤面マウント周囲ベース面中央カビ
212					44	乳剤面マウント周囲カビ
213					47	ほとんど汚れなしマウント糊跡
214					39	乳剤面マウント周囲カビ
215					43	乳剤面マウント周囲カビ
216					55	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
217					14	乳剤面マウント周囲カビ
218					16	乳剤面マウント周囲カビ、ベース面 付着物
219					17	乳剤面マウント周囲下部カビ
220					15	乳剤面マウント周囲カビ
221					42	乳剤面マウント周囲カビ
222					58	ほとんど汚れなし、マウント糊跡
223					59	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
224					61	乳剤面マウント周囲カビ
225					62	ほとんど汚れなし
226					50	ほとんど汚れなし
227					63	乳剤面マウント周囲カビ
228	34	春日若宮おん祭	奈良県	昭和43年	1	ベース面乳剤面全体にカビ
229					2	乳剤面ベース面マウント周囲少しカビ
230					3	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
231					4	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
232					5	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
233					6	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
234					7	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
235					8	乳剤面全面カビベース面マウント周 囲カビ
236					9	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
237					10	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
238					11	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
239					12	乳剤面マウント周囲カビ、ベース面 全面カビ
240					13	乳剤面中央にカビ、ベース面マウン ト周囲カビ
241					14	乳剤面マウント周囲カビ、ベース面 中央周囲カビ

通しNo	グループ番号	内 容	地 域	年 代	マウントメモ	フィルムコンディション
242					15	乳剤面中央注意にカビベース面マウント周囲カビ
243					16	乳剤面周囲にカビ、ベース面全面カビ
244					17	乳剤面周囲にカビ、ベース面全面カビ
245					18	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
246					19	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
247					20	乳剤面中央カビ、ベース面マウント周囲カビ
248					21	乳剤面中央カビ、ベース面マウント周囲カビ
249					22	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
250					23	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
251					24	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
252					25	乳剤面ベース面中央マウント周囲カビ
253					26	乳剤面ベース面中央マウント周囲カビ
254					27	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
255					28	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
256					29	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
257					30	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
258					31	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
259					32	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
260					33	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
261					34	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
262					35	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
263					36	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
264					37	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
265					38	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
266					39	乳剤面ベース面中央マウント周囲カビ
267					40	乳剤面ベース面中央マウント周囲カビ
268					41	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
269					42	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
270					43	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
271					44	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
272					45	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
273					46	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
274					47	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
275					48	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
276					49	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
277					50	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
278					51	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
279					52	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
280					53	乳剤面マウント周囲カビ、ベース面全面マウント周囲カビ
281					54	乳剤面マウント周囲カビ、ベース面中央マウント周囲カビ
282					55	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
283					56	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
284					57	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
285					58	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
286					59	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
287					60	乳剤面ベース面マウント周囲カビ

通しNo	グループ番号	内 容	地 域	年 代	マウントメモ	フィルムコンディション
288					61	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
289					62	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
290					63	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
291					64	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
292					65	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
293					66	乳剤面マウント周囲カビ、ベース面中央マウント周囲カビ
294					67	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
295					68	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
296					69	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
297					70	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
298					71	乳剤面マウント周囲カビ、ベース面周囲一部カビ
299					72	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
300					73	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
301					74子供	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
302					75子供	乳剤面ベース面マウント周囲カビ
303					76子供	乳剤面ベース面マウント周囲カビ

(齋藤ミチ子)



前日の準備。御殿庭や神道に白砂を敷く。



アシャギの入口前に設置した七つ橋。



11月15日早朝。洗い髪姿で新たな香炉をたて、タマガエノウプテシジを貰う儀式。掟神、ヤジクは白装束、鉢巻き姿で陪席。



11月15日夕刻。夕神遊び。



イザイホーに陪席するオクリガミ。



七つ橋渡りの儀式を終えて籠もり小屋へ帰るナンチュウ。



11月17日。朱付けの儀式。ナンチュウのイキー（兄弟）が染を届ける。



11月17日。花挿し遊び。ナンチュウは髪を結び、紙花を挿して、輪になって舞う。

久高島イザイホー（1）



東方遙拝。



11月18日。アリクヤ - の綱引き。



ゲキマーイ（御家廻り）。



外間根人が先導する。



11月18日。ウケマーイ（桶廻り）。



扇（ナンチュウ用はクバば葉製）を持って輪になって舞う。



神事が終了し、くつろいで舞う。



白衣装、白鉢巻きをつけ、イチャテ扇を持つ久高ノ口。

久高島イザイホー（2）

杉山林継博士保管写真資料の電子情報化

杉山林継博士保管写真資料とは、大場磐雄博士の資料のうち大場博士自身が携わった調査記録である35mmリバーサルフィルムを、本学日本文化研究所所長であり当プロジェクト実行委員長である杉山林継氏が保管してきた資料を指す。撮影はガラス乾板が使われなくなる昭和30年代から、大場磐雄博士が國學院大學を退職する昭和45年までの調査記録であり、ネガ・ポジフィルム（マウント加工を施したコマ数にして）およそ10,000枚である。

フィルム類の保管状況は比較的良好であるものの、リバーサルフィルムのマウントが紙質であり、マウントとフィルムが接触している部分にホコリやチリがたまり、マウント自体も劣化が進んでいることから、フィルムに付着したホコリやチリを取り払うと同時にマウントを交換した。これらの資料は撮影されてから既に30から40年の年月が経過しており、各社が提示するリバーサルフィルムの耐久年数が100年であることも受けて、今後の画像の保存と活用を目的としてリバーサルフィルムのデュープ版の作成と電子情報化を行なった。

撮影対象は、いずれも学史に残る遺跡であるうえに報告書に未掲載の資料も多く、今後も資料の利用価値の高いものであることが想定される。

平成13年度に「神坂峠」「入山峠」資料の一部、平成14年度には中央自動車道設置に伴う緊急発掘調査関連の資料うち「宇津木向原遺跡」「檜原遺跡」の資料について上記の作業を行った。このうち「神坂峠」資料については、平成14年9月22日に祭祀考古学会大会において杉山林継が研究発表を行ない、昭和48（1973）年の発掘調査当時の現地との景観比較や遺跡の保存状態を検討するなど、研究への活用を試みた。詳細は、本書「研究成果の公開活動 峠の祭祀 神坂」、補論1、補論2を参照されたい。

（加藤里美）



神坂峠発掘調査（右側 大場磐雄博士）



写真資料配架状況（一部）

- 1 杉山林継博士写真資料 - 神坂峠・入山峠について -

神坂峠は、長野県下伊那郡阿智村と岐阜県中津川市の境、神坂山山中の標高1,570mに位置する。昭和43(1968)年8月に大場磐雄博士と杉山林継博士、阿智村教育委員会が中心となって発掘調査が行われた。峠の長野県側は緩傾斜となっており、その鞍部東麓から磐境と考えられる石畳状の敷石遺構が確認された。敷石遺構内において大量の有孔円板、刀子などの石製模造品や勾玉、管玉、白玉といった祭祀遺物をはじめ、須恵器、内面黒色土器などが出土し、それまで判然としなかった峠祭祀の形態を解明する端緒となった。

大場博士と杉山博士は神坂峠の発掘成果を受け、翌年の昭和44(1969)年9月に長野県北佐久郡軽井沢町と群馬県碓氷郡松井田町の境、標高1,035mに位置する入山峠の調査を行なった。神坂峠を信濃国の西端とするならば、その東端の役割を担う入山峠は、やはり前者と同様に、長野県側に広がる緩傾斜の鞍部に、敷石遺構こそ確認できなかったものの、石製模造品や玉類を中心とした祭祀遺物の散布集中区を南北方向に2群確認し、大場博士らは集中区間に東西方向に走る古道の存在を想定した。

この2つの峠祭祀遺跡は、大場博士の晩年にあたる時期に調査されており、その写真資料は両遺跡の調査に深く携わった杉山博士が一括して保管されていた。今回のデジタルデータ化に伴い確認した写真資料は、すべて35mmリバーサルフィルムで構成され、神坂峠203点、入山峠321点で、両遺跡とも遺跡遠景、近景、調査風景、遺構、遺物写真など、報告書に使われたすべての写真と、遺跡周辺の民俗に関するカットが若干含まれている。

信濃国は古くから東山道の間ルートとして認識されていたが、あくまでも文献上でのことであり、それまで考古学調査から裏付けられることはなかった。大場博士は、若い頃から両遺跡に関心を寄せしており、特に神坂峠では戦前の鳥居竜蔵氏の踏査をもとに、丹念な分布調査を行ない遺跡の位置を特定することに成功した。大場博士は、それまで行ってきたフィールドワークと発掘調査の成果、そして『記紀』の記載などから総合して、神坂峠を東山道の信濃御坂、入山峠を碓氷坂と比定し、古代東山道における峠祭祀の様相を明らかにした。古墳時代より畿内と東国を決定的に分ける意味をもっていた信濃国の東西国境で、このような峠祭祀遺跡が調査されたことは僥倖に近く、全国的にみてもここまで明らかな事例は少ないだろう。文献史学で茫漠としていた古代交通史を、はじめて考古学的見地から解明した点からも、両遺跡の価値は高いものと位置付けられる。

(関根信夫)

- 2 杉山林継博士写真資料 - 中央高速自動車道関連遺跡資料 -

遺跡調査概要

昭和39（1964）年に日本道路公団の中央高速自動車道建設計画に際して東京都八王子市の北側丘陵地帯を大きく東西に縦貫することが決まった。それを受けて八王子市は石川地区、大谷地区、宇津木地区、中野地区、檜原地区、元八王子地区に分割し9遺跡の緊急調査を実施する運びとなった。本資料はその際の記録写真である。

調査は大場磐雄氏を団長に、副団長に国立音楽大学教授甲野勇氏、調査員には吉田 格、小出義治、寺村光靖、坂詰秀一、杉山林継、塩野半十郎、梶 國男、渡辺忠胤、中村 威、秋間健郎、樋口豊治、池田和夫、和田 哲、佐々木蔵之助の各氏で編成され、昭和39年3月に調査が開始された。この9遺跡の発掘調査のうち、宇津木町向原、石川町塚場、檜原町鹿島、元八王子町滝原台遺跡の4箇所を本学が調査した。画像資料は元八王子町滝原台遺跡を除く3遺跡が主である。この他、早稲田大学助教授桜井清彦氏が中心となって調査が進められた大谷遺跡、中野甲の原遺跡の写真も僅かながら含まれているが、担当調査地ではないことから撮影枚数が極めて少なく、被写体に関する情報が乏しい。本学調査の各遺跡の発掘調査では下記の通り多くの遺構や遺物が検出された。

（1）宇津木向原遺跡

宇津木向原遺跡は八王子インターチェンジ用地として最初の調査地となり、第1次（中央高速道八王子地区遺跡調査団1964）、2次調査を通じて縄文時代中期の竪穴住居跡19軒、その他15基、弥生時代後期の竪穴住居跡54軒、方形周溝墓4基、古墳1基、その他遺構3基が検出され、遺物は縄文中期の土器、石器、弥生土器の他、弥生時代の青銅製素文鏡1面、管玉、ガラス小玉などが出土した。

（2）石川町塚場遺跡・同天野遺跡

石川町塚場遺跡・同天野遺跡は弥生時代終末期の竪穴住居跡1軒、縄文時代早期の炉跡1基と縄文時代前期の竪穴住居跡1軒を検出した。

（3）檜原町鹿島遺跡

檜原町鹿島遺跡は縄文時代中期住居跡11軒以上、土坑墓13基、弥生時代住居跡1軒を検出し、それに伴い縄文土器、石器、琥珀平玉、滑石製大珠、土偶土鈴が出土した。

調査が終了しておよそ40年の間に調査事例が増加し八王子市とその周辺地域の縄文時代中期、弥生時代後期の様相は『多摩考古』誌上で檜原遺跡特集が組まれるなど（多摩考古学研究会2000）徐々に明らかになってきた。しかし、上記の遺跡の調査成果は公開されている部分が十分でなくその実態は明らかにされていない。そのため、研究的見地から本資料を十分に活用できないまま現在に至り、調査資料も次第に散逸しつつある。さらに、杉山博士が保管してきた本資料はまとまった記録写真であり大部分に撮影内容が書き添えられていることから、資料の活用や研究目的としても必要性が高いものと予想される。こうした現状を踏まえて、本資料のWebサイト上での公開を開始するものである。

（加藤里美）

〔参考文献〕

- 1) 1964 . 4 『中央高速道路 八王子地区遺跡調査概報 第1次』中央高速道八王子地区遺跡調査団
- 2) 2000 . 5 『多摩考古』30、40周年記念号檜原遺跡特集、多摩考古学研究
- 3) 1973 . 9 『宇津木遺跡とその周辺 方形周溝墓発見の遺跡』中央自動車八王子地区遺跡調査団

外部機関所蔵資料の調査

当研究においては、本学所蔵の画像資料の電子情報化と保存・研究活動を中心に実施しており、その成果を年刊の事業報告やWeb上で随時公開し、シンポジウムや研究集会、フォーラムなどを実施して研究の促進と公開につとめた。これに伴って、外部諸機関からデータ利用に関する問い合わせや、資料調査・閲覧などの希望が持ち込まれるようになった。これについては各々のケース毎に対処し、本学所蔵の資料が外部機関の研究活動に貢献できるよう心がけてきた。一方で、当プロジェクトにおいて進めてきた画像の電子情報化のノウハウを生かして、画像資料という側面に加えて、さらに視野を広げて文化財活用の視点から本学以外の外部機関所蔵資料についての調査を実施した。調査対象は、奈良県春日大社資料、大阪府武田塾資料、東京都世田谷区宮地直一博士資料である。

いずれも、短期間の調査により序所に成果を挙げており、今後も研究の継続が必要である。特に、宮地直一博士資料は平成15年に本学へ寄贈となった。

各調査及び資料詳細は次頁以降を参照されたい。

(加藤里美)



武田塾資料 写真台紙



武田塾資料 紙焼き写真



武田塾資料 文書保管箱



武田塾資料 武田塾資料調査風景

- 1 短報：春日大社所蔵の写真資料について

はじめに

平成13年7月7日に、奈良県春日大社で所蔵されている写真資料の収蔵状態及び撮影内容について実見した。調査は國學院大學学術フロンティア事業実行委員会の山内利秋・関根信夫と奈良市写真美術館の兼古健吾・川口拓之が合同で実施した。以下、所見は兼古と山内に文責がある。

酒蔵で収蔵されている写真資料について

酒蔵で収蔵されている写真資料は、キャビネ版・手札版を主体としたガラス乾板がほとんどであった（写真1）。

ガラス乾板は日本では1870年頃から1960年代後半頃に至るまで幅広い分野で活用されていた。この方法は、極めて画像の安定性が高く、部分的に経年変化を起こしていたとしても、隣接する状態の良い部分を焼きつけてみると鮮明な画像が浮かび上がる。

現像後のガラス乾板は、厚紙で作成された乾板購入時の箱に現像後も保存されている場合が多いが、今回の事例も同様であった（写真2）。

箱には大体、製品を示すラベルが貼られているが、この事は年代を確定する上で重要であり、さらには今後、日本各地にある同じ製品の経年変化傾向を比較・認識する上でも注目される。1箱に10枚前後のガラス乾板が収納されており、乾板同士は直接接触しているのではなく、薄紙がサンドされていた。この箱は、さらに30箱程度が段ボール箱に収納され、段ボールは確認しただけで5箱程存在していた事から、大まかに見積もって1,500~2,000点程度のガラス乾板の個数が考えられる。



写真1



写真2

宝物殿収蔵庫で収蔵されている写真資料について

宝物殿収蔵庫（写真3）において保管されている写真資料には、ガラス乾板以外に台紙に貼った状態の写真（オーバーマート）が多数存在した。これらの資料には、奈良市周辺の写真館によって撮影された資料が多い。資料中にはゼラチンに卵白乳剤を使った鶏卵紙と呼ばれるプリントも含まれている。鶏卵紙は1850年代から1890年代にかけて使用されたもので、プリント自体が薄いために台紙に張られた状態のものが多い。また硝酸セルロース、ナイトレートベースと呼ばれるフィルムが確認された。



写真3

ナイトレートベースのフィルムの取扱いについて

<識別法>

自然発火する恐れのあるナイトレート（ニトロセルロース）ベースのフィルムは品質低下が始まらないと見分けが容易ではない。1950年以前に生産されたフィルムはその可能性が高いが、コダック社の場合、コードノッチの近くに“Kodak Safety Film”の標記がないものはこのフィルムである。その他のフィルムについては、肉眼での識別は出来ない。このフィルムの特徴は独特な酸の匂いが発生する事で、トリクロルエチレンにこのフィルムを入れ、試料が沈殿するとナイトレートベースでありアセテートないしはポリエステルベースの場合は浮くという識別法もある。

<最終製造年>（コダックの場合）

X-Ray フィルム（1933）・135ロールフィルム（1938）・シートフィルム（1939）・航空写真用フィルム（1942）・パックフィルム（1949）・616/620サイズのロールフィルム（1950）・35mm 映画用フィルム（1951） 16mm / 8mm の映画用フィルムには使用されていない。

<自然発火>

ナイトレートベースフィルムの場合、分解が進行した状態では38℃以上の温度が長時間持続すると自然発火を起こす。自然発火は相対湿度が低く、温度が高い状態が継続したり、分解の進行で発生した熱エネルギーを放出出来ない状態の場合発生する。特に密封状態の容器に大量のフィルムが入っている時に発生しやすい。テストでは分解した映画フィルム1,000フィートロール1本が41℃の温度で17日間置かれた後、発火したという結果もある。

<保存>

このフィルムの保存方法としては次の注意点が挙げられよう。

- (1) ひどく反り返っていたり、粘性が高くなっているものは分解の進行した状況にあるものなので、複製を作るか良質の包材に入れかえる必要がある。
- (2) 水に濡らすとゼラチンが軟化して溶けるケースがあるので、注意を要する。ベースは極めて脆弱になっているので曲げないようにする。
- (3) 通気性のない密封容器に包入すると分解速度が早くなるので、通気性のある容器に入れ、他のフィルムとは分けて保存する。
- (4) 保存場所は21℃を越えないように、相対湿度が45%以下に保てればその方がよいが、乾燥が進みすぎるとベースが脆くなる恐れがある。

資料から確認出来た奈良市内の写真師・写真館について

北村太一：安政3（1856）年長州に生まれ、東京にて写真術を修得後、明治18（1885）年、奈良市菩提町（猿沢池東畔）で北村写真館を開業。当時の撮影料は、ガラス写しで桐箱入り1枚普通10銭、小が6銭、大が15銭。紙写しは3枚30銭。湿板にて撮影していた。明治30年には金紙写真機を海外から購入し、5人掛りで吉野の山林を撮影し、明治36年大阪四天王寺今宮で開催された第5回内国勸業博覧会に出品された。明治44年享年56歳にて病没。

北村武：北村太一の養嗣子。信州松本に生まれ、芝田氏に師事し写真術を修めて嗣となる。奈良県写真師会の初代会長を昭和5～8年まで勤める。明治42年に北村写真館は同所にて新築され、昭和9年に閉店。

三条通 松岡写真館：名前は松岡光夢。北村武に師事し、門下生となりのちに三条通（芝辻町）にて洋館の松岡光夢写真館を開業。仏像などを撮影していた。

桜井町 中川東雲館：大和高田市にあった中川写真館の屋号をもらい桜井市に開業。本名は田中松

太郎（奈良県写真師会 4 代目会長で昭和13～17年まで勤める）。高田市の中川写真館とは直接の関係になかったようです。

道馬軒 中村朝太郎：明治 8 年開業。現在は高畑町にて営業。中村朝太郎は道馬軒の 2 代目。奈良県写真師会 5 代目会長を昭和17～19一年まで勤める。

西口写真館：奈良市登大路町にあったと思われる。店主は西口国憲。

総括

全体的な状況を大まかに実見した限りでは、当初予想していたよりも保存状態が良好であった事は注目すべきであった。ある程度の環境管理が施されている宝物殿収蔵庫ならばそれも予想できた範囲だが、特に興味深いのは酒蔵において収蔵されていた資料である。通常、写真資料のうちガラス乾板は、銀が利用されているため乾板の周辺部分から酸化して銀色ないしは虹色になっていたり（銀化・ミラーリング）、ゼラチン層が剥離したりするが、当該資料にはこの影響が少ない。また、ゼラチン部分はタンパク質で形成されているので、一定以上の湿度を帯びるとかびを生ずる傾向がある。特に今回の場合資料がダンボールに収納され、さらに蔵の構造上天窓が拭き抜けになっているとの知見を得ていたため、この点を注意していたのだが、このかびによる影響もほとんど確認されなかった。



写真 4

恐らくこうした良好な保存状態が保たれたのは、極めて機能的に設計された、温湿度変化の少ない伝統的な蔵造りが環境に対して有効に働いた為であると考えられる（写真4・5）。また、このように機能的に管理された蔵内環境において、通常は湿度が高くなりやすい段ボールが、反対にある程度乾板周辺に溜まった湿気を外部に逃がす働きをした可能性が高い。

しかしながら、将来的にも良好な保存状態を確保し、活用の利便性を考えるのならば、現状では問題点も多い。例えばかびによる影響が少なかったとは言え、今回実見できなかったが段ボールの下部の方には塵埃が溜まりやすく、そこに吸収された水分が抜けにくい可能性も高い。また乾板を横にして積み上げるのは圧力をかけやすく、自重に耐えきれずに損傷を与えてしまう場合が多い。そもそも段ボール自体が資料にとって有毒な過酸化物を発生するので問題が多い。

このような条件を改善していくには、一例として日本工業規格(JIS)で規程されている写真保存に関する別紙の規格を参照し、中性紙性包材等を利用する必要があるだろう。



写真 5

なお、今回の調査にあたっては春日大社禰宜中野和正氏と荒井清志氏、春日大社宝物殿秋田信吾氏にお世話になった。記して感謝する次第である。

川口 拓之^{*}・関根信夫^{**}・兼古健吾^{*}・山内利秋^{**}
(^{*}奈良市写真美術館・^{**}國學院大學日本文化研究所)

- 2 : 武田塾所蔵の写真資料について

はじめに

大阪府柏原市に所在する社会福祉法人武田塾は、大阪府立修徳館の創立者で、大阪府警察曽根崎署長となった武田慎次郎氏によって大正15（1926）年に設立された。大阪府知事宛の設立許可申請書に記載されたこの塾の設立目的には、「不良児童の感化教育及びその他一般児童の教化に関する施設」とあり、現在まで続く、我が国初期の感化教育施設として極めて重要な位置付けにある。

平成11（1999）年に柏原市教育委員会によって移転に伴う旧施設の調査が実施され、この成果は『建造物調査概報 - 武田塾木造塾舎 - 』として纏められている（細見・石井・石田編2000）。この調査の際、同塾内で所蔵するさまざまな資料も調査され、その中には、写真を中心とする多くの画像資料が含まれていた。今回、これら写真を中心とする画像資料について、その概要を検討した。

本報告は石田の実施した基礎調査をもとに、加藤・橋本・山内が一部資料の詳細調査を行い、四者で検討した事項を記載した。なお、本文は「食卓を囲む写真資料から」を加藤が、それ以外の「はじめに」・「写真資料について」・「総括」を山内が執筆した。

写真資料について

旧施設内で保管されていた資料には、塾内での日常的な衣・食・住にかかわる生活用具類がある。これらは武田慎次郎氏や妻ひさ氏のもの为主体である。また、重要な資料としては、慎次郎氏が修徳館館長に就任した大正2（1913）年から、その後武田塾を設立した後の昭和11（1936）年まで継続して記載された日誌や、金銭出納簿・台帳・名簿・設計書等が残されていた。

画像資料には写真資料（プリント636点・乾板103点）、絵葉書（195種965点）の他、16mm フィルム4本が存在し、特に16mm フィルムには昭和4（1929）年頃に撮影された塾内のさまざまな活動の様子が記録されており、この時期の感化院の実体を明らかにする上でも重要である。

写真資料には塾内での日常の様子やさまざまな行事、個人の肖像写真等ごく一般的な写真のみならず、児童養護施設という性格を極めて端的に表した写真資料が存在する。肖像写真は、慎次郎氏が明治22年から33年に鹿児島へ転出するまでの間、警視庁巡查教習所受業生・警視庁巡查・同警部として東京に滞在していた頃のものや、明治27（1890）年に眞次郎氏と結婚したひさ氏に関連するものが多い。眞次郎氏は警視庁浅草猿屋町警察署・浅草警察署に勤務し、また、ひさ氏は京橋区三十間堀町に住居があったが、明治20年代において、現在の台東区から中央区にあたるこの地域は、乾板写真の普及とともに多くの写真館が勃興し、営業活動を展開していたのであった。実際、資料の中には日本国内で始めて乾板写真を使って営業した江崎礼次郎写真館等、東京市内の当時著名な写真師によって撮影された写真が確認出来る。

また、写真資料には肖像写真のみならず、塾関係者が撮影したと考えられる大量のネガ（主にガラス乾板）類が含まれている。

例えば塾施設や塾内での授業風景、塾内で栽培されていた多くの菊といった写真は開塾以来の武田塾の様子を伝える上で極めて重要なものだが、特に注目されるものには、入塾した児童個人々々を撮影した多くの写真が挙げられる。これらの写真の特徴は、撮影対象である児童を正面・両側面・背面からそれぞれ撮影している点である。撮影年代については今後の検討を必要とするが、こうした撮影方法は、感化院という施設で児童を受け入れるに際して、感化の必要性を有する「要感化児童」には欠陥が形態的特徴に現れる、という当時の認識を表出したものと理解出来る⁽¹⁾。

これらの写真資料の保存状態は、乾板については部分的にミラーリングなどの劣化現象が確認されるが、現状は比較的良好であった。しかしながらプリントについては画像の希薄化が進行しているものもあり、今後さらに劣化していく可能性は高い。これらの資料についてはその保存を実施する必要がある。

食卓を囲む写真資料から



写真 - 1

昭和62（1987）年に武田塾の60周年を回顧して編纂された『共に在る - 武田塾六十年のあゆみ - 』には、「創設当時の塾生風景」（同書 p 37）として2点の写真が掲載されている（社会福祉法人武田塾1987）。このうち1点は塾での食卓風景の写真である（写真 - 1）。この写真を通して、武田塾の教育姿勢を再考してみよう。

さて、写真には武田夫妻と、慎次郎氏のもとで職員として勤務し、後に養女となって塾経営の中心となったきし氏、そして数人の児童が西洋式テーブルを囲ん

で食事を取っている情景が撮影されている。こうした情景は資料が撮影された昭和初期には一般的ではないものであった。ちゃぶ台と置が中心であった当該時期の事情と照らし合わせると、この事は非常に洗練され、かつ裕福な食事風景ともいえるが、慎治郎氏が掲げた「感化七想」にも述べられた姿勢、「五、家族舎主義と寄宿舎主義」の項には、感化活動に寄宿舎主義ではなく、常に家族の定員に近い形で寄宿し互いの距離を保ちながら人間関係を築きあげていく事の重要性が述べている。こうした理念は、慎次郎氏が修徳館以来感化院事業に長く関わった経験から生み出されたものであり、そしてそれを実践していた事が見て取れよう。

食生活との関係からは、資料中の帳簿類と併せての検討が可能である。例えば食料品の購入伝表には細目とその金額までが詳細に記されており、献立名こそ記入されていないものの、そこから栄養バランスの統計を取る事も可能であるし、当該時期の物価と比較する事で武田塾における食生活充実へのこだわりが浮かび上がってもくるのである。

人間の食生活はいつの時代でも社会の変化や生活様式に左右され、それに適合するように変えられてきたものであり、その本質は我々の生活の質や社会や文化のあり方を問うものでもある。味覚形成は人格形成と大きく関係する事はすでに多くの研究者が指摘してきた。「食べる」という行為は体格の向上のみならず、精神的なもの、感情や人格の発達をも促進する。また、「家族」という共同体において親の願いや心づくし、さまざまな思いの本当の意味を、心の中で味わい、日常生活のなかで子供が食事作りに参加しともに食べるという生活様式や人間関係を確保する。子供はそうした中で、自己形成をし、生きる力を蓄えていくのである（新村編著1983）。

戦前の学校給食は恩恵的、救済的な慈善事業として位置づけられ、昭和に入って戦時体制になると虚弱児童の救済が掲げられるようになる。そうした背景の中で武田慎次郎氏は食生活を重視する事が児童の身体的な発育だけでなく精神的な発達を促す事に着目していた。

総括

以上のように武田塾所蔵の写真資料には、資料的価値の極めて高いものが数多く含まれている。これらの資料を検討していくとともに、保存・活用していく事によって、広く武田慎次郎氏をはじめ、

同塾で蓄積されてきた多くの経験を周知していく事が可能となるだろう。

加藤里美（國學院大學日本文化研究所）・山内利秋（吉備国際大学社会学部）

橋本陽子（中央大学総合政策学部）・石田成年（柏原市教育委員会）

註

1) 受刑者の記録化にも実施されるこうした撮影手法は、近代解剖学と写真技術との関連性を理解する上でも検討する必要がある。美術解剖学を専門とする宮永美知代氏の教示によると、統計的に有意な絶対数のデータを必要とする形質人類学ないしは解剖学的研究においては、対象の記録撮影に際してこのような撮影手法は少なくとも第2次世界大戦後にも実施されていたとの事である。

〔参考文献〕

社会福祉法人武田塾1987『共に在る - 武田塾六十年のあゆみ - 』

新村洋史編著1983『食と人間形成 - 教育としての学校給食 - 』青木教育叢書

細見久視・石井賢一・石田成年2000『建造物詳細調査概報 - 武田塾木造塾舎 - 』

柏原市教育委員会・社会福祉法人武田塾

- 3 宮地直一博士資料について

宮地直一博士資料調査

平成14年12月17日、東京都世田谷区北沢の宮地直一博士邸において、博士の事績に造詣の深い岡田莊司氏・菊田龍太郎氏の助力を得て蔵書・蔵品の調査を行い、平成15年2月22日よりその搬出作業を行った。総点数は現在調査中であるが、蔵書には和装本・洋装本・小冊子、蔵品には神像・人形・軸物・鏡・絵馬などが含まれており、これらの資料は國學院大學日本文化研究所で保管・管理することとなった。

1. 宮地直一博士と大場磐雄博士

宮地直一博士（1886～1949）は、近代における神道史学の第一人者である。東京帝国大学を卒業後、明治42（1909）年に内務省に入省して神社考証を担当し、明治神宮造営局参事、内務省神社局考証課長などを歴任した。神社行政・文化財保護行政において活躍すると同時に、國學院大學や東京帝国大学においても講義を行い、のちに東京帝国大学教授となって神道講座を担当した。そして、終戦後の昭和21（1946）年3月に東京帝国大学を退官したのち、昭和24（1949）年に長野県穂高町で没した。

宮地博士の研究は、実証主義に基づいた精緻なものであり、神道史学の先駆的な業績と位置づけられ、現在においても高い評価を得ている。当時の内務省神社局考証課には、文献史学や考古学などを専門とする若手の研究者が在籍しており、大場磐雄博士もその中の一人であった。

大場磐雄博士は、大正14年（1925）に内務省神社局考証課に嘱託として勤務するようになった。このときの考証課長が宮地博士である。その後、大場博士は神社との接触が多くなり、神社の文化財や神社祭祀の源流の調査など、神社・神道を研究のひとつの柱とするようになる。のちに大場博士は祭祀遺跡の研究を中心として神道考古学を確立するが、神社局考証課における宮地博士の指導が大場博士の学問的基礎の構築に影響を与えたとも考えられる。

2. 宮地直一博士資料について

現段階は初期調査の段階であるが、宮地博士邸母屋の応接用玄関、玄関隣接廊下、母屋の1階応接間、2階の1部屋に蔵書（洋装本）及び天神像等を確認した。また、書庫の1階と2階には作り付け書架が設置され、そこに宮地博士自身が整理・分類したままの状態の蔵書（和装・洋装本）、文化財調査報告書、軸物、葉書類、自筆原稿、調査時に撮影した写真や乾板などを確認した。特に、書庫の中は当時の調査を物語る貴重な資料が多く存在していた。また、天神関係の資料（写真・神像・軸物・和書）は質・量ともに、個人蔵のものとしては特筆すべきものがある。

これらは、今後の整理・分析によって、高い評価がされていくものと考えられる。さらに、現在の研究の中では十分になされているとはいえない、研究史における宮地博士の位置づけ、宮地博士を中心とする大場博士ら研究者間の交流など、明らかにされるであろう課題は多い。また、宮地博士資料は大場博士資料との研究上の関係が大きいことも推測され、今後の宮地博士資料の整理によって大場博士資料の研究の幅も広がっていくものと考えられる。

（田中秀典）



宮地直一博士邸玄関



宮地博士書庫二階の状況



宮地博士天神像コレクション



宮地博士所蔵ガラス乾板類



宮地博士書庫の和書箱



書庫内調査中の岡田教授

歴史系雑誌に掲載された写真についての研究

本研究では、日本における近代印刷技術による画像資料の導入期である明治～大正期を対象とし、歴史学系の雑誌における画像資料の使用時期とその展開、また、その中で用いられた印刷技術についてのデータを収集し、当時の日本の画像資料における近代技術の変遷との対比、技術者（写真師など）から研究者、一般へとつながる技術の拡がり、当時の歴史学会における画像資料導入への取り組み、文化財保護制度や大学などの研究機関の動向との関係を明らかにすることを目的としている。平成13年度は特に日本考古学会の発行する『考古学雑誌』について画像資料のデータベース化（以下画像資料データベースとする）を進め、若干の検討を行った。以下にその概略を述べる。

最初に、画像資料データベース作成における設定項目について触れたい。本データベースでは雑誌名、巻号数、発行所、印刷所、発売所、page 1（総合）page 2（単独）タイトル、撮影・印刷者、印刷技術、関連論文、その他、出版年月日、備考の14項目を設定した。上記の項目は、一雑誌内における画像資料の導入・展開と、その技術のあり方を詳細に確認することを目的として設定した。

『考古学雑誌』の前身である『考古学会雑誌』は明治29（1896）年12月に創刊されたが、その後明治33（1900）年4月に『考古』、明治34（1901）年6月に『考古界』という誌名の変遷を経て、大正元（1911）年9月より『考古学雑誌』として発刊され、現在に至っている。次に本データベース作成上に於いて気がついた点をいくつか述べたい。

まず第1点として、『考古学会雑誌』1編1号（1896年12月）から2編9号（1899年2月）においては、全ての図版は木版であり、コロタイプや写真石版・網版などは全く採用されていない点が挙げられる。

第2点として、『考古学会雑誌』上でコロタイプが使用されたのは2編10号（1899年6月）の口絵写真「扇面写経地紙畫」が最初であるが、その後コロタイプは『考古界』5編1号（1905年9月）まで使用されていない。また、『考古学会雑誌』2編10号以降、「写真」という言葉を雑誌上において使用するようになる。

第3点として、『考古学会雑誌』2編10号以降、口絵写真に写真石版と網版を用いるのは『考古』1編7号（1900年11月）までであり、それ以後『考古界』1編1号（1901年6月）～4編12号（1905年6月）までの口絵写真には写真銅版の技術が専ら使われている。さらに、『考古界』5編1号（1905年9月）以降は、口絵写真はすべてコロタイプ製版となっていることを指摘しておく。

最後に、現在データベース化の作業途上であり、先に述べた知見はあくまでも一案に過ぎないことをお断りしておきたい。

（平澤加奈子）

研究成果報告は平成15年度3月発行の『研究論集 人文科学と画像資料研究 第1集』を参照されたい。

画像資料からの試み 銅鐸の出土状況をつたえる一枚の写真



写真：伊奈銅鐸出土状況（『歴史地理』第45巻第3号より）

1

左の写真は、大正13年12月22日、愛知県宝飯郡小坂井町伊奈字松間から発見された銅鐸の出土状況の写真である。正確には、翌大正14年1月15日に現地を視察した元京都帝国大学の喜田貞吉氏の要請により、その出土状況を復元した折に撮影されたものである。撮影者はいち早くこの銅鐸の発見記事を書いた名古屋新聞豊橋支局の丸地古城氏あるいは彼が手配したカメラマンと考えられる。写真に写る青年は、この銅鐸を掘り出したひとりでもあり、この復元を手伝った横里富三郎氏であろう。しゃがみ込み、伏し目がちに一点を見つめるその姿には純朴な好青年のイメージが漂う。地下約1mから発見された銅鐸は3個。いずれも横に倒され鱗を上下にし鈕の方向を互い違いにしながら埋められていた。脇に立てかけられたスコップと青年の服装にその時代が感じられる。これは銅鐸の出土状況を伝える最初の写真である。

2

丸地氏は大正13年12月27日付の名古屋新聞の朝刊に「宝飯郡松間の麦畑から銅鐸を発掘 而も三口些の欠損も無く」と表題に謳い、「懸下宝飯郡前芝村大字前芝林豊治氏は去る二十二日同郡小坂井村伊奈字松間の麦畑から銅鐸大小三口を発掘し前芝駐在所に届け出たので附近からの見物引きも切らずといふ有様だが何れは学界の参考資料となり研究されることとなろう」とこの銅鐸の発見をその観察記録と共に伝えた。その後、豊橋の市川藤五郎氏ならびに豊田伊三美氏からこの発見の知らせを受け、喜田氏は現地に赴くこととなる。さらに、東京帝室博物館の後藤守一氏も先の豊田氏から同様の知らせを受けたが、現地を訪れたのは喜田氏から現地調査の様子を聞かされてから11日後の1月26日のことである。その時、後藤氏に同行したのが東京高等師範学校の森本六爾氏、朝鮮総督府博物館の藤田亮策氏そして京都帝国大学の梅原末治氏であった。当時の考古学界を代表する錚錚たるメンバーである。

3

きわめて興味深いことだが、現地を訪れた彼らは、ほぼ同時に全く同じこの写真を別の雑誌の口絵

として使用し、この発見をそれぞれの立場から学界に報告している。すなわち、喜田氏は『歴史地理』第45巻第3号（大正14年3月1日発行）に「三河新発見の銅鐸」、梅原氏は『歴史と地理』第15巻第3号（大正14年3月1日発行）に「三河宝飯郡松間発見銅鐸調査報告」、そして森本・後藤両氏は連名で『考古学雑誌』第15巻第3号（大正14年3月5日発行）に「三河国宝飯郡小坂井村発見の銅鐸に就いて」と題して発表したのである。しかし、この三者の聞き書きによる銅鐸発見の経緯には微妙なずれがある。特に喜田氏以外は同時に現場に居合わせながら、なぜこうした齟齬が生じたのであろうか。それぞれの文章を読み比べ、さらに警察の書類に照らし合わせてみると、そこには銅鐸の所有権をめぐる複雑な駆け引きが展開されていたことが推測できる。情報の発信・受信そして伝達の在り方について深く考えさせられる現象である。ただ誰が発見したかは別にして、地下約1mのところからまず1号鐸が、そしてしばらくして2号鐸・3号鐸が写真のような状態で発見されたことは確かなようだ。

4

喜田氏は言う。「其の発掘の蹟攪拌せられずに保存せられ、其の状態が発見者の記憶になお新なる際に於て、それを原状に復して三個まで相並んで存する所を写真に止め得たというが如きは、学界稀有の好機会であったと謂はねばならぬ。その研究上裨益する所の大なるは申すまでもない」と。まさにその通りであって、この写真は、銅鐸の出土状態を明確に示した最初の写真として、歴史的かつ学問的に重要な資料といえる。こうした観点からあえてこの一枚の写真を「古写真」として採り上げた。

銅鐸は弥生時代の終わりにはすべてのものが地中に埋められ、その後、人々の記憶からまったく忘れ去られてしまう。なぜ埋められたのか。これが銅鐸最大の謎である。だからこそ、その出土状態が重要とされるのである。この伊奈銅鐸の発見から今日に至るまで、発掘調査によって銅鐸が発見されることが度々あったが、その多くが伊奈銅鐸と同様の状態で発見されている。これは単なる偶然ではない。そこには型式・地域を越え、銅鐸埋納に関し一定の法則があったことを意味する。こうした考えの根底には必ず伊奈銅鐸の存在があった。喜田氏が残したこの一枚の写真の存在は大きい。

ちなみに、この銅鐸は、様々な問題を経て、大正15年2月26日、国により購入されることとなり、現在東京国立博物館の所蔵品となっている。

井上洋一（東京国立博物館）

補記：掲載写真は本学所蔵の柴田常恵写真資料 sj2271 に同様の資料が存在する。同様の写真を複数人が持っていることから、本写真の重要性を指摘できよう。

研究成果の公開活動

研究成果の公開

本プロジェクトでは、前編に述べた活動を総括し成果を公開する活動として、種々の活動を実施した。以下に年度別一覧表にまとめ、掲載場所なども表記した。各活動の詳細については、本書と平成15年度3月発行の研究論集『人文科学と画像資料』を参照されたい。

平成11年度

日 時	事 柄	備 考
平成11年11月18日	「大場磐雄先生の思い出 - 平出遺跡を中心に - 」 話者：稲生典太郎・林陸朗・小出義治（座談会）	平成11年度学術フロンティア事業報告掲載
平成11年12月2日	学術フロンティアに関する討論 参加者：阿部美哉・池田栄史・井上洋一・大島敏史・大谷貞夫・岡本重男・小川直之・熊谷常正・倉石忠彦・黒崎浩行・小林達雄・齋藤ミチ子・杉山林継・樋尾誠・茂木栄・宮家準・山内利秋（第1回実行委員会）	本書35～46ページに掲載
平成12年3月25日	「大場磐雄博士と登呂遺跡」 講師：大塚初重（講演会）	本書112～131ページに掲載
平成12年3月15日	平成11年度事業報告刊行	内容は本書各項に掲載

平成12年度

平成12年7月15日	「記録を後世に残す - 写真の劣化と保存方法 - 」 講師：荒井宏子（講演会）	本書132～150ページに掲載
平成12年12月9日	シンポジウム「画像資料の考古学」 講演：木下直之 報告：熊谷常正・富田紘一・山内利秋・青木繁夫	発表要旨集『学術フロンティアシンポジウム 画像資料の考古学』
平成13年3月	平成12年事業報告刊行	内容は本書各項に掲載

平成13年度

平成13年6月19日	学術フロンティアWebページ公開開始	
平成13年10月27日	「近代の幕開け - 町の写真と写真館 - 」 報告：富重清治 ディスカッション参加者：金子隆一・高橋則英（講演会）	
平成13年12月8日	シンポジウム「画像資料と近代生活誌」 報告：小川直之・香月洋一郎・須藤 攻・齊藤多喜夫・田邊 幹	
平成14年2月23日	シンポジウム 「無形文化の記録保存に関する未来」 報告：栄久庵憲司・星野 紘・孝寿 聡・茂木 栄・長瀬一男	
平成14年3月31日	平成13年事業報告刊行	内容は本書各項に掲載

平成14年度

日 時	事 柄	備 考
平成14年9月22日	「神坂峠の祭祀遺跡」 報告：杉山林継（学会）	本書151～163ページに 掲載
平成14年11月30日	シンポジウム 「画像資料からよみがえる文化遺産」 基調講演：樋口隆康 報 告：當眞嗣一・坂本 勇・大久保保次	本書110～111ページに 掲載
平成15年3月15日	「画像資料と近代史 - 歴史学研究における記録資料の役割 - 」 報告：山内利秋・光江 章・酒巻忠志・ 中野 宥・大久保治・加藤里美・ 平澤加奈子（研究会）	『人文科学と画像資料 研究 第1集』掲載
平成15年3月31日	平成14年事業報告刊行	内容は本書各項に掲載

平成15年度

平成15年7月12日	フォーラム「人文科学と画像資料研究」Ⅰ 報告：荒井裕介・倉石忠彦・小林達雄	『人文科学と画像資料 研究 第1集』掲載
平成15年10月25日	フォーラム「人文科学と画像資料研究」Ⅱ 報告：田中秀典・青木繁夫・宮家 準	『人文科学と画像資料 研究 第1集』掲載
平成15年11月1日	シンポジウム「画像資料論の可能性」 報告：杉山林継・池田栄史・小川直之・ 齋藤ミチ子・黒崎浩行	平成16年単行本発行予 定
平成16年1月30日	フォーラム「人文科学と画像資料研究」Ⅲ 報告：高塚明恵・山内利秋・茂木 栄	『人文科学と画像資料 研究 第2集』掲載予 定
平成16年1月21日	『柴田常恵写真資料目録 』刊行	
平成16年3月20日	『人文科学と画像資料研究 第1集』刊行	
平成16年3月30日	『大場磐雄博士資料目録 』刊行	
平成16年3月31日	平成15年事業報告刊行	内容は本書各項に掲載

（加藤里美）

Web サイトによる成果公開

1. はじめに

資料デジタル化事業をはじめとする本プロジェクトの事業成果を広く公開するため Web サイトを開設している。当初は、資料のデジタル化が完了しはじめる平成15年度から開設する予定であったが、その途中経過や、それ以外の事業成果の公開も必要であるという考えから、平成13年6月から公開を開始した。ここでは、製作の基本方針と内容について紹介し、その意義と課題について概観したい。

2. 経過

平成13年度4月から Web サイトの公開にむけて作業を開始すると共に、方針および内容についての基本的な枠組みを確定した。同年6月に、大場磐雄博士写真資料（平出遺跡編）を含む基本的なコンテンツの試験公開を始め、翌月の実行委員会での承認を経て正式公開を開始した。その後、シンポジウム予稿集や、Web サイトオリジナル資料である櫻井満博士写真資料を掲載した。

平成14年度には、大場磐雄資料目録や各講演録などを含む12年度・13年度『事業報告』の内容を掲載し、また、Web 独自に杉山林継博士写真資料の公開を開始した。

平成15年度には、前年度事業報告内容を掲載したほか、Web 独自に折口信夫写真資料（歌舞伎絵葉書資料）を公開した。また、英語版および中国語版の公開も開始している。

この間、シンポジウム・フォーラムなどの開催告知やその簡単な報告などを随時掲載してきた。

3. 基本方針

他の媒体と比較した時の Web サイトの特徴として、容量・カラー使用の制限が少ないこと、逐次更新が可能なこと、全世界から閲覧可能なことなどが挙げられる。これらを踏まえ、以下のような基本方針を定めた。

まず、対象については専門研究者向けとした。これは事業成果として発表するデータをそのまま掲載し、新たに一般向けの文章等は製作しないという製作便宜上の措置からであるが、実際に公開して

みると専門家研究者以外からの問い合わせも多く、さまざまな装飾を施した付加価値よりも、資料の基礎データを確実に公開したデータそのものの重要性が見えてくる（山内2003）。

内容については、資料デジタル化事業の成果のみでなく、刊行物をはじめとして、本プロジェクト全体にわたるデータを掲載することとした。成果の一部のみを公開する広報窓口的网站も多々、発表資料を全面的に Web 公開した本サイトは、常に最新の状態にあるプロジェクト全体の報告書の機能を果たすことになった。

製作・運営については、外部委託は行わず、実行委員会が直接行なうこととした。元データさえあればすぐに掲載可能であり、ま



た修正も容易である。

また、製作技術上の問題については付加価値を省いた質実剛健、軽くて・早い、コンテンツを目指し、シンプルな構造としている（山内2003）。これにより、ワープロソフトや表計算ソフトで作成したデータを手作業で素早くWeb公開することが可能である。また複雑なプログラムも使用していないため、ポータルサイトの検索エンジンで全文検索が可能となっている。利用者の多くが、キーワード検索で情報を得るという現状に適したものといえよう。

4. 内容

《トピックス》

ここでは、フォーラム・シンポジウム等の開催告知・簡単な開催報告を中心に、最新情報を逐次公表している。

《事業報告》

年刊の事業報告の内容を中心に、事業のコンセプト、名簿、年度毎の事業概要、実施したシンポジウム・講演会等の一覧、関連刊行物の紹介を行っている。

《資料デジタル化事業の成果》

本サイトの中心的コンテンツであり、大場磐雄、柴田常恵、折口信夫、櫻井満、杉山林継、宮地直一の各氏旧蔵資料の内容、作業内容、その成果などを公表している（表1）。それぞれ作業進度に差があるため、一定量の成果を公表しているものから、資料概要のみであるものまで幅広いが、容易に掲載・修正可能というWebの利点を活かし、作業中であってもその状況を公表し、逐次更新していくという方針に則ったものである。メモ書き等がなく内容の解説を新たに執筆する必要があることからこれまで紙媒体では公表していない櫻井満博士写真資料についても、画像データのみ公表している。同様に、紙媒体では殆ど公開していない杉山林継博士写真資料・折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料についても、Web独自のコンテンツとして資料公開を行っている。

通常、Webデータベースというと図書館の蔵書検索に代表されるようなキーワード検索型をとるものが多いが、試験公開では比較的少数であることと、テキストデータの未整備という状況から現在は全体を数ページに分けて閲覧するページ構成をとっている。本サイト独自の検索機能は用意していないが、現在はポータルサイトの検索エンジンが発達しているため外部からの検索が可能である。

《調査・研究会・論考等の成果公開》

事業報告その他に掲載した講演記録や論考を中心に研究成果を公開している。事業報告等に掲載されたものが大半を占めるが、事業報告掲載時には省略した写真の全点掲載や、未刊行の講演原稿を掲

大場磐雄博士 写真資料	平出遺跡	328	493
	登呂遺跡	90	
	常陸鏡塚	46	
	浅間古墳群	34	
大場磐雄博士 資料	縄文時代資料目録	2,607	7,800
	弥生時代資料目録	1,384	
	古墳時代資料目録	3,809	
折口信夫博士 写真資料	歌舞伎絵葉書 (一部)	24	24
櫻井 満博士 写真資料	八重山プーリー他	24	300
	宮古島	14	
	沖縄本島	26	
	詳細不明	15	
	美保神社	65	
	久高島イザイホー	83	
杉山林継博士 写真資料	春日若宮おん祭	73	988
	神坂峠・入山峠	524	
	都内中央道関連	464	

表1 資料デジタル化事業のWebでの成果公開内容

平成16年4月現在公開資料点数である。但し、整理未了の資料群の全点数については今後変更の可能性がある。

載するなど Web の特性を活かしたページ作りも行なっている。

《外国語による発信》

平成15年度には、英語および中国語によるトップページとコンセプト紹介ページを公開した。今後、他の主要ページについても翻訳を行なう予定である。

5 . 反響・効果

トップページへのアクセス数は1日平均10前後であり、現在のところ本サイトの周知度は低いといわざるを得ない。これは、本学トップページからリンクが張られていないことと、本サイト内のリンクをたどってトップページにアクセスした場合はカウントしていないことが原因として考えられる。しかし、既に述べたように利用者の多くがトップページから順に見ていくのではなく、検索エンジンを使って直接各ページを参照する現状を考えれば、より多くの閲覧者の存在が想定できる。

前節で述べた資料利用や作業内容の問い合わせも、Web を通じて情報を得たという例が大半であり、こうした学術利用のほかにも、掲載内容への一般からの誤りの指摘や問い合わせも少なくない。

6 . Web 公開の意義と課題

このように、Web サイトは資料公開の有力な媒体であり、また本プロジェクトの広報媒体であり、学術データ集積の場でもある。現状では、データ量の関係からほぼ手作業で製作・運営を行なっている。しかし5年間を経て資料デジタル化事業、関連研究ともにデータ量の蓄積は増しており、今後は資料デジタル化事業の成果公開とその他のコンテンツは分離して管理していくことが必要となってきた。

前者について言えば、大場博士・柴田氏・折口博士らの写真資料が入力から公開へ作業が移行しており、目録・データベースに続き、Web 公開のシステム構築が必要となってくる。現在、汎用データベースソフトでの一括公開にむけて検討を行なっているが、従来個別に整理されてきたコレクションをいかに結びつけるかという課題が持ち上がっている。整理・管理のシステムの確立と、利用しやすいコンテンツの追求という2つの面に関わることであるが、学際的研究・産学協同研究というフロンティア構想の趣旨にかなった形での事業推進が望まれる。

後者については、成果論文の一層の Web 公開、関連資料の収集・公開など、資料の充実によって、より深みのあるコンテンツとしていくことが必要である。

(中村耕作)

〔引用文献〕

山内利秋2003「文化財系画像資料の保存から活用へ - 國學院大學での取り組みを例として - 」(日本写真学会主催 平成15年度 画像保存セミナー講演原稿) <http://www2.kokugakuin.ac.jp/frontier/research/yamauchi03.html>

国際シンポジウム 『画像資料からよみがえる文化遺産』について

はじめに

過去に調査された文化財の記録資料をデータベース化したり、プロジェクターやモニターで映し出して展示に使う事はどこでも当たり前に行われているが、展示に利用しないまでも、少なくとも、過去の資料をコンシューマー用であってもある程度精度の高いスキャナーで取り込んで自分のパソコンで使う程度ならば、時間さえあれば個人的な作業の部類として今では扱われているだろう。

文化財を活用するという現在進行形のテーマにおいて、資料のデジタル化は極めて重要な位置を占める、と考えられているし、実際その通りであろう。しかしながら、大々的に喧伝されるのはこのような地道な作業ではなく、矢継ぎ早に打ち出される巨大で高価なハードばかりである状況は、いったいいつになったら解消されるのだろうか？

こうした疑問を常日頃抱いているのは、実際に資料を扱っている専門家の側にはより多いと考えられる。資料のデジタル化を産業界や工学系の政治力で語るよりも、文化財の現場の認識から組み立てていくこと。この視点にたった「技術」や「知恵」について議論が行われる場合は、実は多いようで多くはないのではないか。

筆者はこうした考えから、平成11年度以来『劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究』というプロジェクトにかかわってきた。このプロジェクトに取り組んだ当初、いわゆる「古写真」に関する扱いは極めて作家的・芸術性が高かったり、珍奇なものに集中している状況が散見され、先行する歴史系の専門家による研究活動が行われてはいるものの、いまだ「手」のついていない領域が極めて多いという事に気がついた。文化財に関わる記録画像資料は実際の我々がそうであるように、写真家が撮影してきたものばかりではない。むしろ、そうでないほうが殆どだろう。今では名前もわからなくなった専門家による記録写真は、専門家の眼を通して見た文化財の重要な情報であり、また、後からみれば資料写真の視覚的な面白さをもさまざまな所で見出す事ができるのだ。

プロジェクトでは、まず地域社会に埋もれているこの画像資料を掘り起こし、そしてこの資料を活用する方法を考えてみる事からスタートした。過去この視点から3度のシンポジウムを開催し、そして今回、「では、具体的にこれら資料はどう活用できるか？」をテーマにしたシンポジウム『画像資料からよみがえる文化遺産』を開催した。

シンポジウムについて

文化遺産の消失が最も端的・劇的にあらわれるのは戦争・災害といった出来事においてであり、そしてこの事は、特に21世紀になってもなお、極めて先鋭な視覚的形態をもって我々の目の前に現れた。パーミヤーン大仏の破壊、そしてアメリカという国家において文化遺産に近い象徴性を持ったワールド・トレーディング・センターの破壊がそれである。

この企画は日本ユネスコ協会連盟をはじめ、全日本博物館学会、全国大学博物館学講座協議会、日本文化財科学会、日本考古学協会、文化財保存修復学会の後援を受け、2002年11月30日に東京渋谷の國學院大學百周年記念館で行った。

樋口隆康氏（奈良県立橿原考古学研究所）の講演は「パーミヤーンの破壊と保存」と題し、自身が調査を陣頭指揮したアフガニスタンのパーミヤーンを中心とする遺跡の重要性について述べ、タリバン以降、壊滅状態となった遺跡をさまざまな方法で復元していくに際して、過去の調査で記録された

資料の重要性と、活用される意義について力説された。バーミヤーン大仏の保存・復元についてはさまざまな見解があるが、現状ではまだスタンスを統一される前に議論を出し尽くす段階にある。

沖縄という土地は、日本でありながら、日本そのものをあたかも鏡のように客観的に写し出している土地であり、この意味で本土とは異なった場として位置付けることができる。當眞嗣一氏（沖縄県立博物館）は、沖縄戦で焼失した数々の文化遺産の調査と、その復元に自らが実際の担当者として携わってきた経験を述べた。この発表では、沖縄における文化財保護政策の極めて特殊なスタンスをうかがい知る事ができた（「よみがえる琉球の文化遺産」）。その話は過去の記録資料を具体的に利用し、復元した経緯が述べられたのみならず、復元を実施するに際してのさまざまな周辺的なプロセスもが理解されたのであった。「基地の中に沖縄がある」と言われるが、これは埋蔵文化財をはじめとする数々の文化遺産も例外ではない。文化財の所在が米軍敷地内にあり日本の法規が適用されなかったりする。グスクの復元整備事業が独特な振興政策で実施されたりする。そこには常に、「戦争」という二文字が見え隠れしているのだ。

阪神・淡路大震災からもはや8年が経過してしまっただけで、その記憶は今や急速に失われようとしている。坂本勇氏（吉備国際大学社会学部）は震災直後に自らNPOを組織し、被災した家々に取り残された写真をはじめとする文書をレスキューしていった経験から、このような街の記憶としての地域の記録を集めたアーカイブ構築を訴えた（「残された写真が語ること - 阪神・淡路大震災と震災記録 - 」）。氏が述べた「専門家の《構えた》写真よりも、地元住民が日常を捉えた写真のほうがどれだけ面白く、そして地域にとって重要か」という言葉には、ペーパーコンサバターとしての氏の確かな経験が裏づけられているように思えた。

劣化した写真資料はどのように保存されているか？実は現状を言うと、専門家の間ではオリジナルの写真資料の復元にはリスクの想定が先行されていて、ストレージボックスやいくつかの写真用包材で保存するといった事を除いて、実際に保存修復作業を行うことについては消極的だ。

こうした状況の中、元興寺文化財研究所の大久保治氏は、果敢にもほとんど手が付けられていない写真資料の化学的な保存処理方法について自ら実践し、この内容について発表した（「写真資料の現状」）。写真資料の保存処理は、その需要が増加すればするほど、従来型のパッシブな保存方法だけでは限界があると考えられる。大久保氏のような積極的な試みは注目すべきだろう。

小 結

さて、最初に述べたように記録資料の保存・活用のニーズは、新しく、そして数年で買い替えなければならないような高額なハードの構築にあるのでは必ずしもない。むしろ、今ある資料を担当者が確実に扱える技術をもって、持続的に構築していけるような性格でなければならないだろう。求められるのは、先端技術よりも適正技術なのだ。

（山内利秋）

講演記録『大場磐雄博士と登呂遺跡』

大塚 初 重

(明治大学名誉教授・山梨県立考古学博物館館長)

1. はじめに

こんにちは、大塚でございます。今日は、杉山教授からのご依頼で、「大場先生と登呂遺跡」という事でお話をするように承りました。大場磐雄先生と登呂遺跡という事になりますと、実は私よりは本学ご出身の小出義治先生とか、或いは私とほぼ同期の下津谷達男さんとかそういった先生方のほうが適任ではないかなという風に思って杉山先生には申し上げたんですが、ま、とにかくお前やれと、いう事でおっちょこちょいの私ゆえ、それじゃあっていう事でお引受する事に致しました。

私の学生時代、もう亡くなりました初代の日本考古学協会の会長をなさっていた藤田亮策先生が「大塚君、國學院大學の考古学は wet な考古学、明治のは dry な考古学だ」と言われた事を存じておりました。戦後の明治の考古学というのは芹沢長介さんとか岡本勇さんと杉原荘介先生等が中心に、旧石器とか、縄文時代の石器とか縄文土器の編年研究とかいう事に集中的に熱を入れておりました、拝島式がどうしたの、夏島式がどうしたの、菊名がどうしたの、と、縄文の型式論がさかんでありました。私は鏡や土師器の話などだと、すぐ頭に入んですが、何とか式っていうと嫌だったんです。どうも自分の肌に性格的にぴたっと来ないっていう事で、私は縄文時代の遺跡発掘にはたくさん参加しました。けれども縄文時代の研究ではない、弥生古墳時代の研究に入っていました。なるほど藤田亮策先生がおっしゃられるように戦後の、昭和20年代の明治の考古学っていうのはある意味では dry かな、なるほどなど。そこへいくと大場先生を中心とした國學院大學の考古学っていうのはやっぱりハートが在ったんじゃないかとしみじみ思ったことでした。

敗戦後のああいう時代の社会では、神々だとか神話に対してはアレルギーがあった事は事実です。しかし、今のような時代になってみると癒しの時代とか言われているように、古代の人間の恣意とか精神構造とかそういったものに対して、やはり考古学は目指さなきゃならないと、そういうような事が正しいとすると、私は大場先生を中心に行っていた國學院大學の考古学っていうのは、藤田亮策先生に言わせれば wet な考古学だというのは、言えてるな、と感心しておりました。

今日は、戦中戦後の日本の考古学史という事を、大場磐雄先生と登呂遺跡の発見と調査というふうなものを一つデータにしながら語ってみるといふか、お話をしようというふうになっております。私は大場磐雄先生に心酔していた訳ではないのです。ないのですけれども、私の恩師の後藤守一先生と、今も95歳とお元気の齋藤忠先生と大場先生と、この3方の先生が御相談されて國學院大學、次は明治、また國學院という風に、場所を変えて、日本の古墳を語る、古墳時代を語る、という、鼎談というのでしょうか、座談会というのでしょうか、そういう催しをずっとやっておりました、そういう研究会に出させて頂いて、そこでは國學院大學の亡くなられました佐野大和先生とかですね、いろいろな、我々の先輩同輩のみなさん、例えば今日も奥様がおみえですけれども、亀井正道先生とかそういう方たちと一緒に戦後勉強しておりました。

そういう意味では大場磐雄先生は私の恩師と、いってもいいのではないかな、と思っております。そういう事で、この栄えある國學院大學で大場磐雄先生の話ができるという事は、私の約50年間に近い研究生活の中で実は初めてのことですが、光栄に存じておる次第であります。

2. 戦後の登呂遺跡の位置付け

先ず、今日は前段と致しまして、静岡の登呂遺跡というものが戦後の日本の考古学史で、どういう意味を占めていたのか、或いは時代も社会も全く変わりました、従いまして、今の考古学研究の世界では信じられないような話がたくさんございます。皆様ご承知のように1947年、昭和22年から戦後の登呂の発掘が始まったのですけれども、その昭和22年には食べる米が無くて、衆議院が超党派で議決を致しまして、登呂遺跡発掘隊に米2俵、1俵60キ口ですから120キ口の米を特別配給するという事を、国会で超党派で決議して、登呂遺跡の発掘隊に2俵の米が運ばれてきて、我々は7月の末か8月のあたりから多少お米を口にすることができました。今からすると信じられないのですけれども、今思えば、今の若い方には大変失礼ですけれども、現場で、掘るといふか、気力といふか、意気込みといふか、目的意識といふか、それはもう今の若い学生諸君なんかには絶対負けない位ですね、遺跡に没入したといふか、すきっ腹を抱えて命がけで調査をやっておりました。

それが何かって言うと、私共、年を老いた者は小学校時代から『神武、綏靖、安寧 懿徳』というように、教室の黒板の上に124代の歴代天皇名の張り紙が有りまして、小学校の3年生か4年生位からは、毎日朝の授業が始まる前に全員立って、『神武、綏靖、安寧...』と今上天皇まで124代を全員で諳んじて、それから授業が始まった、という教育を、ずっと受けておりましたから、もちろん神武天皇の実在を信じておりましたし、考古学という学問がある事さえ私は知りませんでした。

そういう事ですから、「神国日本は不滅である」という事で、日本が戦争に勝つという事を信じていた訳ですけれども。それが何と日本の民族の歴史の中で空前絶後の敗戦といふか戦争に負けてしまった、という事であります。私は中国大陸、上海から、海軍の軍人だったので、復員して考古学の道に入るのですけれども。みんな学生たちは軍服でした。作業服でした。全部軍隊の作業服で登呂遺跡の発掘に参加しました。

大場磐雄先生の写真がそこにございますけれども、みんな学者たちも、ああいう作業ズボンで、亡くなりましたが、文化勲章を受けられた関西大学名誉教授の末永雅雄先生などは昭和22・23年の発掘に登呂に参加されておりました。末永先生は陸軍の騎兵の御出身でございまして、襟が無い陸軍の長袖の白いシャツを着て、騎兵用の下が膨らんだ乗馬ズボンを履いて長靴で登呂の現場に立っておりました。当時おいくつでしょうか、40代の後半でしょうか、凛々しくて、ハンサムで、あれが末永雅雄って言うんだと私なんかは遠くから仰ぎ見ておりました。そういう風な時代で、日本が負けて、敗戦の中で、どうやって日本が今後立ち行くのかといふところはわからないけれども、登呂遺跡に立って、あの静岡平野の扇状地形の、地下の伏流水が地上に出てくるあたりが、ちょうど登呂遺跡のあるところなんですね。自然堤防のある、あの地域がちょうど扇状地の末端地形になる訳です。そこで登呂遺跡へ行行って掘りますと、1スコップ、20cmか30cm掘ると木の杭がズーっとでてきて、住居も周壁が木の杭で囲いがしてあって、柱穴は床面から4～50cm下に4箇所、柱穴を掘っていくと、下に礎板が何枚も折り重なって出てきます。柱がめり込まないようにきちんと手を打ってあります。柱は抜いてますけれども、礎板が残っている。

そういう発掘を経験して、要は戦争に負けたけれども、2000年来の我々の先祖の生活は脈々静岡平野の土の中に生きている。戦争には負けたが、これが、私にとっては、生きるよすがでした。

日本は負けたけれども、ちょっと静岡平野を掘ると、我々の先祖の生活が生々しく確かに実態として残っている。これは、掘っていて、俺が目指す道はこれしかないといふふうに思いましたし、古代の日本を俺の手で明らかにするんだ、弥生時代の生活を俺の手で明らかにするんだ。と、心に誓いました。当時私20歳になる時でありました。それから、今日は奥様がお見えでございますけれども静岡の安西小学校の当時先生されていた安本博先生とかいろんな方がいらっしやいまして、今、鎌倉の極

楽寺におられる前の毎日新聞の静岡支局の森豊さん、私の知人が一週間前にお宅に行ったら、ちょっと体が弱っておられていた、という事ですが。その森豊さんが、新聞で登呂遺跡の報道をされる、という事ですね。

これが、毎日新聞とその他の新聞で報道されて、敗戦に打ちひしがれて、虚脱感、虚無感にあった、どん底にあった日本人にどれくらい生きる喜びを与えたかって事は、計り知れないものがあると思うんです。だから、登呂遺跡の重要性というのは東国の古代農村の姿を今に伝えるだけではなくて、別な意味で、戦争に負けた戦後日本の社会と学問、或いは戦後の日本人の生活、明日の生活、という事に勇気を与えた遺跡として、私は登呂遺跡は永久に継承されていくべきだと思っているのです。

前置きばかり長くなりましたけれども、登呂遺跡が今中学校の教科書、8冊あるんですけども登呂遺跡が出てくるのは2冊で、あと6冊の中学校の教科書からは今や登呂遺跡はなくなっているんです。代わりに吉野ヶ里遺跡がでているんです。

既に5年間に1,100万人以上の方が見学に行っているという、吉野ヶ里の重要性は、これはもちろんあるのですけれども、私は今日は別の意味で登呂遺跡というのは日本の社会にとって、我々日本人にとっても重要な意味を持つ遺跡だと、いうように思っております。その登呂遺跡に國學院大學の大場磐雄先生が実は、いろいろな意味で関わっているという事をですね、調べれば調べるほど出てきます。

もちろん登呂遺跡と大場先生の係わり合いって事を丹念に追求していくと、いろんな問題がそこにはある事も事実です。私はこの頃思うのですけれども、恐らく今後、大場磐雄先生のような、メモ魔というか、徹底的にご自分の行動を詳細に、メモにして後世に残すという、所謂、『楽石雑筆』に出てくるような大場メモというか、梅原末治先生の梅原メモというのも立派なものです。ごいものがあるのですけれども、それを上回るものなんですね。その、大場先生のメモを、ずーっと克明に読んで参りますと実は後ほどふれますけれども、行間に、読んでいて「あれっ」て思う事があります。

國學院大學の大場磐雄先生は昭和18年の8月2日から登呂との関係がでてくるんですね。大場磐雄と登呂遺跡って事になると、昭和18年の8月2日に愛知県西ノ宮町の蓬萊寺でしたか、そのこの調査に行った時に、帰りに静岡に来るんですね。夜11時頃に静岡駅に着くんです。大場先生が。ところが約束が間違ったか連絡が不備かで、迎えに来ているはずの安本博さんが駅にいないというので辻留と言う旅館に泊まるのです。そういうところから大場先生の登呂のメモが始まるんです。

その登呂遺跡ってものがどういうものか、大場磐雄先生に、細かい事にふれる前に、ふれておきたいと、思うんです。

3. 登呂遺跡の調査概要

今日用意いたしました資料が何枚かございます。1をちょっとご覧頂きますと、これは方々で皆さんご覧になった図面だと思えますけれども、上段は登呂遺跡付近図です。駿府城があり、静岡駅があって、この東海道線に沿って300m以上にわたって旧東海道が、最近の発掘で出てきたんですね。側溝の底から、常陸国の人の名前を書いた木簡が出てきたり、静岡平野の考古学の資料は、最近戦後の発掘の頃とは全く違ってきます。従いまして、左上にありますように、これは登呂遺跡があって、静岡平野のちょうど真中。で、私共が昭和22年、1947年の7月に静岡へ行く時、これも、東海道線の切符も簡単には買えないんです。前の日に東京駅の八重洲口の改札所に並んで予備券というか、整理券をもらって、翌日買いに行く。真夏の暑いときに何時間も並ばなければ、静岡へ行く切符さえ買えなかった、というのが、戦後昭和22年の段階です。

そして漸く静岡駅について駅の南改札口、木造平屋建の駅舎の、木の改札口を出ますと、すぐ目の

前に静岡の駅南銀座というのがあります。その駅南銀座、ちょっと横をどぶ川が流れておりまして、木川薬局とかいう薬局がある、その先の下駄屋さんがある。

ちょっと話が外れるんですけども、私は登呂遺跡の昭和23年、1948年からは登呂の書記というか登呂発掘隊のマネージャーを仰せつかって、出納帳簿をつけたり買出しに行ったりするんです。最後の昭和25年、1950年駅南銀座の下駄さんがなんて言うお宅かもう忘れましたが、その下駄屋さんの奥様が、日本舞踊の先生で、最後に我々が東京に帰るという前の日に静岡市石田の牧牛寺の本堂に踊りのお弟子さんたちを6、7人連れて来て、後藤先生や我々を前に慰問のためのいろいろな舞いを見せてくれました。

その下駄屋の奥さんから、家に婿にきてくれと、私言われた事があります。私、まだ結婚しておりませんでしたけれども、実は心に決めた人がおりましたので、お断りしましたが、そういう人がいなかったら私今頃静岡の駅前で履物店の経営者になっていたと思うんです(笑)。余計な事言いましたけれども、そういう思い出が、たくさんございます。

静岡の駅南から南方を見るとあとは、駅から5、60mの商店街を離れたところからは見渡す限り全部一帯が水田で、はるか南方の高松から敷地の海岸砂丘の亭々とした松の林と、そしてその北側の湿沢地、沼沢地の登呂遺跡一帯が見える以外何にもなかったんです。

今静岡に行きますと、高層マンションのビル、静岡放送局とか、立派なビル街があり、50年でこんなにも変わるか、という事なんです。

そして、登呂があって、有東(うと)第1遺跡とか、有東第2遺跡とか、曲金(まがりかね)遺跡とかありますけれども、実はこの他、周りに鷹の道遺跡・汐入遺跡とか登呂と前後する遺跡が沢山発見されております。従いまして、登呂遺跡と言うものの、発掘の終わった昭和25年、1950年頃と今とでは、理解の仕方が違う。資料も沢山増えている、という事であります。大場磐雄先生は、その頃の登呂について、いろいろとお書きになったり、ものを考えたり、されているわけです。

皆さんご承知のように 1の資料の右側を見ますと、これは、神明原・元宮川遺跡の報告書から抜いたものなんです、「軍需工場と登呂遺跡の位置」と言う地図であります。旧東海道線静岡駅が有りまして、道路がないんですけど、ずーっと真っ直ぐ行きますと、石田街道と言うのがあって、それが登呂遺跡に行くんです。そして実はこの真中に住友金属工業プロペラ製作所静岡工場があって、そこを良く見ますと水田の跡地の図が入っている。これが現在の登呂遺跡、つまりこの工場を建てるために、土を盛り上げて、土盛りをした時に遺構が発見されている。そして東方には久能街道があって、山沿いに大谷川が流れていて、大谷街道がある。そして、有渡山になるわけです。登呂遺跡の北側に、登呂川と名づけられた川がございまして、弥生時代の川です。

そして自然堤防上に登呂の住居址群がありまして、さらに南方に沼沢地・後背湿地、浜堤がある。後背湿地に水が入ったらもう沼なわけで、そこに水田があるというふうに考えられていたのですけれども、ずーっと調査をしてみると登呂人達は、その本当の泥沼のような所ではなくてその自然堤防に続く微高地、まさに高いところを水田として使っていると、いう事が後にわかります。

1の下のほうは昭和18年に実は作った図面、しかもこれは考古学者ではなくて、静岡市復興局の阿部喜之丞という方、地元の方で考古学に関心を持っていて、登呂の重要性を認識して出てきた杭を片っ端から、水準測量と輪郭の測量をしていたわけでありまして、昭和18年にこの畦畔、つまり、水田の跡がわかったのです。それでこの登呂の水田というものがはっきりしてくるわけです。左下の登呂の簡略図面をご覧頂きますと、北側に川の跡がある。これが後に登呂川と名づけられる川です。登呂川の支流は集落の中にずっと流れてくる。そして北のほうから、或いは北北東から、南南西に向かって流れるその自然堤防の上に、点々と丸いものが、これは住居址だと、或いは高床の倉庫、井戸、そ

ういうものが集落、生活の跡が発見される。ずーっと南のほうには森林の跡がある。という事で、いわゆる登呂村というものが先生方によって復元されるわけです。

登呂遺跡の調査で集落跡の発掘主任は明治大学の杉原荘介先生です。それから水田跡の発掘担当主任は八幡一郎先生です。

八幡一郎先生に、和島誠一先生がサブでつく。その上に後藤守一先生が実行委員長という事でこの体制です。

実は昭和22年、1947年に登呂遺跡の発掘がスタートした時は、登呂遺跡調査会ができて、会長は東大の西洋史の今井登志喜先生でありました。その下に実行委員会があって、その実行委員長を後藤先生がなさっておりまして。そのなかのメンバーに大場磐雄先生も入っておられました。

これもちょっと横道にそれる話ですけれども、翌、昭和23年に、当時、東大の文学部長をされていた、西洋古代史の今井登志喜先生が登呂にお見えになりました。私は背が低いのに、今井登志喜先生は1 m80何 cm という大変長身の先生であります。明治大学の杉原先生は私に命じて、この真夏の暑いときだから、東大の文学部長をかかん照りの元にさらしちやいかん、というんで、2時間位コウモリを今井登志喜先生の頭の上に掲げておくようにと。私はもう汗だくのびしょびしょで2時間位今井先生の上にコウモリを差しておりました。2年ほど前のことですが、その事のある雑誌の随筆欄に書きましたら、今井登志喜先生のお嬢様がそれをお読みになって、感謝の手紙を頂きました。

人生いろんな事があるもんでございまして、そういう事の中に、右下の「登呂の水田」というところをみて頂きますと、一番右上の17番という番号をふった水田は2,396㎡、33で割って頂けばこの坪数が大体出るので700坪を上回る、これを杉の杭や矢板で一区画に区画している。大型水田ですね。一番小さいの水田跡は、右下の方に46番の水田が409㎡、50番の水田が466㎡。という事になってはいますが、全体に、一筆一筆の区画の水田が大きいのです。大区画水田と言われているわけです。ところが世界で最初に発見された古代の水田跡の登呂遺跡について、日本でも例えば群馬県高崎の日高遺跡を始めとして、その他全国各地で、弥生時代や古墳時代の水田跡が発見されるといづれも小区画水田なんです。一区画が、例えば2 mと3 mとか、1 m50と2 m50というふうな小区画に畦が巡っているというのが普通になってまいりました。実は数年前に東名高速道路の真下の所を静岡市教育委員会が発掘致したところ、登呂時代の水田も実は周りに大きな区画があるけれども、実は、中は細かく2 m四方に小区画に畦が廻る事が明確になりました。

つまり、1947年以降の登呂遺跡の水田跡の発掘というのは、まだ排水ポンプなんか戦後でないのです。ですから水が沸くからひどいぬかるみで、軍歌にもある様な「どこまで続くぬかるみぞ」という歌を歌いながら掘った位ですから、あれでは、小区画の水田も分からなかったし、もちろん人の足跡とかそういうのもあったでしょうけれども、分からなかったですね。今は実に見事な発掘をしておりますから、登呂でもちゃんと小区画水田なんだと確認されています。京都大学の東南アジア研究センターの渡部忠世さん等の話を聞くと、ビルマでもインドネシアでも今でも行われている水田経営は大きな水田区画の中に手畦とか小畦とか呼ばれるような、それは青草とか或いは周りの土で、低い壁を作って、一枚一枚の小さな2～3 mの水田を今でも作ってやっている。ましてや2000年近くも前の弥生時代に700坪を越えるような広大な一枚の水田を、あの静岡平野で100mいって15cmか20cmの落差があるところに水平に水を張れるような水田を作る事は、まず、不可能ですよ。だから、渡部忠世さんによれば、登呂も絶対小区画水田だよ、とは言っていましたけれども、まさに渡部さんの言う通りでありました。

2枚目の資料をちょっとご覧頂きますと、その、この部屋の右側にも大場先生のお持ちになっていた、写真にもあるかと思えますけれども昭和18年の住友のプロペラ工場の建設に際して、その敷地

の全面の田んぼの土というか地面の土を掘りあげて、手前の北側の建設用地に土盛りをする。その時に出てきた、杭とか畦とか矢板の状況はこういう状況でございました。(42:09)で、色々な記録によりますと、当時もう、全部陸軍の憲兵が見張っている中で軍事工場の建設が進むわけでありまして、2月頃から工事が始まるようなんですけれども、実際にこういった杭の列や矢板の列がおびただしく出始めるというのは昭和18(1943)年の6月頃から。こういう風な発見があってこの杭とか矢板だけではなくて遺物その他にもろもろの考古学的な資料が発見されて注目をあびるようであります。

4. 登呂遺跡と大場磐雄先生

そこで実は登呂の発見という事で大場磐雄先生が登場されるわけであります。けれどもいろんな記録を見ますと、昭和18年の1月頃に軍需工場の建設に伴う採土工事がスタートして弥生の遺物が出土している事が知られ始めたようです。18年の1月頃、私旧制中学5年生でしょうかね。18年の6月中旬になりますと、これは大場磐雄先生が登場する前段階としてどうしても必要だと思ひましてちょっとふれたいんですけれども、18年の6月の中旬に、登呂の傍の、中田国民学校の、保護者会、今は保護者会と言わないと思ひますけれども、当時保護者会の会長であった、小長井孝太郎という方がいます。この方は鹿島組の下請けの小林事務所というところの、所長さんをなさっていたようです。この小長井孝太郎さんがですね、実は、現場でこういう遺物が出てくるって事を一番早くキャッチしたわけです。そこでこの方が出土遺物を中田国民学校で持って行って、中田国民学校にそれを収集いたします。当時の中田国民学校の校長は松木義郎という人だった。その松木義郎校長と、当時安西国民学校の先生をされていた安本博さんに連絡をすると、これが登呂のスタートであります。7月6日になりますとその知らせを受けた安本博先生がその中田国民学校に行き、採集された遺物をご自分の目で見てそして、これは大変だっというんで建設現場へ行って遺跡も見ると、これは大変な遺跡だっ事に注目をされています。

それを同じ7月6日から17日にかけて、この中田国民学校の松木先生は学校の先生方を引率して、現場で遺物を収集しています。恐らく憲兵などが見張る中で、やったんじゃないかと思ひます。さらに、昭和18年の7月7日から月末の31日まで、安本博さんは毎日のように遺物の収集にあたっておられます

同時に在京、東京に居た研究者に連絡を取っています。7月10日安本博さんは毎日新聞静岡支局の森豊さんに連絡をして遺跡発見の通報を致します。森豊さんは直ちに現場に行き取材をするんですけれども、これは奈良県唐古、京都大学の末永雅雄さんや小林行雄さんが調査した奈良県唐古池の弥生の遺跡に匹敵する、或いはそれを上回る大遺跡だっ事を直感して、森豊さんは大きな記事を書いて、本社に打電するんですけれども、出たのは僅かに10行くらいのベタ組みで、静岡で、弥生遺跡を発見、という事だった様です。その取材も非常に制限を受けたようであります。私が杉原荘介先生から伺った話では、東京にまだ兵隊に行かなかった杉原荘介先生も弥生時代の大遺跡発見ときいてカメラを持ってすぐ静岡に駆けつけて、現場で写真をとっていると憲兵に咎められて写真機のフィルムを抜かれたという事、或いは森さんも憲兵に殴られた、という話も聞いてます。森さんが、なんか殴った憲兵は後に直撃弾を受けて亡くなったという話も聞いてます。本当かどうか知りませんが、ただ杉原先生のお話なんですけれども、そういう色々なものがたりがございました。

そこで静岡県史編纂委員をなさっていた山田角蔵という方は中田国民学校にいてその収集した遺物の調査しています。そして7月の15日に静岡市臨時復興局、静岡市は確か昭和14年か15年に大火で殆ど焼けてしまいます。その静岡市臨時復興局長阿部喜之丞さんが露出していた杭等の杭列などの遺構や、自然の木の根っこというような位置を測量いたします。さらに7月24日に阿部さんがこの遺

跡の平面測量と高低、レベル測量しています。その出来上がった図面が先ほどの図で、1の資料の左下にあった、全体の図面と、それから右側の水田遺構の図面なんです。従いまして、この阿部喜之丞さんが考古学に関心があって、ご自分の立場、復興局の局長であるという立場もあったでしょうけれども、その測量をして図を作ったと、この図がなかったならば、また後の登呂遺跡の研究はかなり変わったんじゃないかな、と思います。

そこで昭和18年の7月24日以降、在京の諸研究者が度々実地調査に、静岡県に対して、遺跡の重要性や、発掘調査の必要性を説く。という事ですね。そして次は8月4日に静岡県は文部省に調査官の派遣方を公的に依頼をしています。文部省の囑託調査官上田三平さんが静岡に行っているのが18年の8月6日であります。更に8月9日になりますと、緊急発掘調査実施を決定、静岡県内政部長西井一高氏が、その指揮をとります。文部省からみえた、上田三平さんと静岡県史跡名勝天然記念物調査書記河合治江という方を担当として調査隊を組織。つまりこの二人が中心になって命令をうけて調査隊を組織して、市内の国民学校の職員、先生方、静岡高等学校、旧制の静高の学生さんを調査員にあてる。それに対して遺跡の名称を「駿河富士見が原原始農耕集落遺跡」というふうに統一して写真撮影を開始すると。そして8月9日から12日に平面測量や、高低測量に入っていったようです。昭和18年の8月14日、安本博さんと静高、静岡高等学校の教師であった、地質学の望月勝海氏の2名は、静岡県史跡名勝天然記念物臨時調査委員に委嘱される。8月16日発掘調査打ち合わせ会。そしてこの8月17日から29日まで、発掘調査が行われる。この間在京の諸機関、研究者が度々実地調査という事になってまいります。9月にも追加調査が行われるのですけれども、私がこれまでにいろいろ拝見した記録によりますと、この18年の8月の29日、本来は25日で静岡市内の学校の先生を動員した調査隊の登呂遺跡の調査は打ち切りだったんですけれども、いろんな願い、希望があって、8月29日までやったようです。これも今考える、考古学的なちゃんとした遺跡の発掘調査とはやや違って、もう現場で出てくる資料をその場で採集すると、いう事がほとんどの調査だったようです。

何10人いたか、小学校の先生方が、もうこれで終わりという8月の29日、明日からは調査が出来ない、という昭和18年の8月の29日に、先生方が、ハンカチーフに落ちている弥生土器とかそういうものを拾って、戦争はどうなるか分からない、たとえ勝ったとしてももう2度と登呂で調査する事はあるまい、というんで、皆さんハンケチにその資料を包んで涙をこぼして帰っていった、という記録がございます。

そういう動きのなかで、じゃあその問題の今日の主人公である大場磐雄先生は、何をしていたのかと、いう事になる訳ですね。3の資料をちょっとご覧いただけますか。実は大場磐雄先生の『楽石雑筆』第22巻、昭和18年のところから転写をさせていただいたものでございます。全てが登呂に関わる記述じゃございませんけれども、大場磐雄という先生の気質、或いは足まめ、筆まめ、行動力、何をお考えになって考古学の研究に没頭したかっという事を、この大場先生の『楽石雑筆』を読むと、胸にひしひしと訴えてくるものがあります。と同時に、私自身、俺は何をしていたのか、ちっとも記録が何にも残ってない。何冊かは私の戦後の記録がありますけれども、もう本当に言ってどうしたこうしたと、数行だけなんです。こういうふうに毎日毎日ご自身の行動を克明に書くななんて事は容易ならざる事だと、いうふうに私は思います。図版ちょっと詰めましたもんですから、右側と左側、昭和18年、「蓬萊寺と静岡」という同じテーマがあります。

実は私、戦後の昭和24年か25年頃に大場先生から「大塚君、君も銅鐸見に行きませんか」と声がかかりまして、「是非、お願いします。」と、私大場先生とご一緒に確か亀井正道先生と永峯光一先生もご一緒だったと思うんですけれども、愛知県の三河の砥鹿神社へ、ご一緒した事があります。よその大学、違う大学、明治の私を連れて行ってくださったというのは大変感謝しております。

大場磐雄先生って冒頭に言ったように dry な明治の考古学の世界にいた私にとっては、神道考古学、神社考古学とはなんだ、という思いがないわけではありませんでした。

戦後の日本の考古学の中で、wet な考古学に対する、なんていいますか、その反発のようなものは、戦前の皇国史観につながっていくもんだというふうな浅い理解しかしてなかったんですね。だから大場磐雄先生のご業績って言うものは私は知ってるつもりでしたけど、そんなに深く知りません。後に「銅鐸私考」とか國學院雑誌に発表される論文とか何かを拝読して、だんだん分かるんですけども。ところが砥鹿神社の神域に入って亭々とそびえる大木のあの神域を玉砂利を踏んで行くと、宮司さん以下がざっと並んで、最敬礼で大場先生を御迎えしました。神社の大宮司さん以下が一行に並んで最敬礼、その後にくっついて私もいきましたけれども。

昔諏訪にいた、亡くなりました藤森栄一先生が諏訪で考古学をやっているときに、伏見宮殿下でしようか考古学が大好きな皇族がおられて、諏訪へ行きました。その時に藤森栄一先生は諏訪の人間が御先導を申し上げろっていうので、オープンカーの第1号車、先導車に乗って、第2号車に伏見宮殿下が乗って、上諏訪の駅からずっと諏訪の町を沿道の人がみんな旗もって迎えたんですね。ところが藤森栄一先生が第1号車で伏見宮さんに間違えられて、最敬礼されて、伏見宮さんの時はみな旗を下げている、という事があったそうです。その今の砥鹿神社の時は大場先生が入っていくと砥鹿神社の宮司さんが最敬礼。砥鹿神社所蔵の銅鐸をみて、色々、大場先生はご説明を受けて、メモ帳に、野帳にデータを取っておられました。どうするのかわかったら、そのまま砥鹿神社に泊まるんですね。それで「君も泊りたまえ」というんで大場先生と一緒に泊まったら、夜大宴会でございまして、大場先生と行くところの神社でも大変、宮司さん以下、お酒がたくさんでね、「こりゃ大場先生といかなきゃいかな」と思ったくらいでした（笑）

冗談はそのくらいに致しまして、8月2日ですね、つまり、この3の資料の上段右側の下段です。そこに「8月2日（月曜日）午前中神社にて諸書を抜書し云々」と。「午後4時頃には、宝国文庫に行った」。その4行目ですね、「急ぎ、抜書して駅前に至り、夕食を喫し、8時頃の列車にて静岡に行く。11時頃駅につく。安本君の姿なし。やむなく国民車」これはタクシーです。「国民車にて旅館に行き、辻梅に一泊する」と書いてあります。こういった大場先生の一行のわずかな記録が昭和18年当時の静岡のタクシー或いは大場先生がどこにお泊りになったか、といった事がよくわかります。

そこで、この8月3日。ちょっとこれは大事なところですから読ませさせて頂きます。「8月3日（火曜日）6時半起床。7時頃国民車にて出発。中田本町の安本氏宅を訪う。」と。「余を、迎えに行かれたり」と。「又宮地博士」、これは宮地直一先生でしょうか、「宮地博士昨日より静岡に来たり居りて、遺跡を見たいと言う。やがて安本君来たり、挨拶の後、遺跡・遺物について見る。予想以上の珍物なり。」と。この辺がいいですね。昭和18年という時代の日本考古学の学問のあり方、あるいは大場先生の遺物の表現の仕方。これは珍品だ、なんて事は我々よく言いました。これは珍物だというふうに、これは大変なもんだと大場先生も思われた。という事ですね。で、遺物には弥生式土器（櫛目様式）として出土し、須恵と土師はここで須恵という漢字を使っております。当時京都大学を中心とした、関西の学界は須恵とは言いません。陶質土器か、祝部土器という言葉を使ったんです。須恵器という字は高橋健自先生と後藤守一先生が大正の終わりから昭和の始めに、日本書紀にでてくる、あの陶器と書いて「すえのうつわもの」と読ませるのは研究で混同するといけないからと言って、この須田町の須と、恵むという字を書いて、須恵器という字を当てるのです。戦後のしばらくは関西の大学は祝部土器、陶質土器という言葉が学術用語として使っておりましたけれども、大場磐雄先生は昭和18年には祝部とか陶器とか言わないで、もう、この時点で「須恵、土師」というふうに言っていたのです。これはやっぱり須恵器や土師器の学史、研究史の上では私は重要な資料だと、大場先生はこ

んな字使ってたんだと、いう風に思いました。

「木製品の事、三木、神林、長崎」亡くなった神林淳雄先生とか三木文雄先生とかという國學院出身の先生方だと思うんです。「この三氏は一昨日来たりしが、帰郷せんという」。だから博物館におられる若手の方や大学にいた若手の学生さんや研究者は結構情報が入って、ちょっと登呂へ静岡へ、富士見原へ行こうというんで、見にきてたわけですね。「さもあり得べし」で、氏の案内で遺跡へ行くと、「遺跡所在地は静岡市敷地遺跡登呂（俗称富士見ヶ原）にあり、最近住友金属株式会社にて工場を設立するに当たり、偶然遺跡の一部を開盤してその土を以って盛る事となれり。遺物の出土せるは本年6月頃なりしが、安本君が注目せしは、7月上旬頃よりなり。安倍川下流の大沖積平野にして東方に有度山有り、さらに北方は賤機山と、山彙有り、大体四方より南方にかけて少し傾斜有り。」と実に克明なんです。「標高」これ「10~15m」でしょうか、「の間にあり。遺物は西方、少流の辺りよりとし、次第に東方に及びて、頻度を増せり。大体に地層を見るに大体において菅生に似たり。」木更津のすでに大場先生は菅生遺跡調査に関わっておりましたから、「菅生に似たりと」こういう記述が残っている事によって昭和18年代における、木更津の菅生遺跡と登呂との大場磐雄先生の中における関係論、というものはわかると思うんですね。

「次に遺跡における遺物の出土状態云々」と。これも「大概黒土層の下部より、青色土層にかけて出土し下部の砂層には見えず」と。こういう記述は登呂の発掘経験をした私にとっては、実に層序の識別或いはつかみ方が菅生と関係していた大場磐雄先生はさすがの確な層位の見方をなさっている。というふうに思います。その後はずっと8本柱の事とかですね、プランが長方形であったとか、第2の柱が出てきてるとか。かなり重要な登呂村の集落遺跡の昭和18年度における、現況が克明に出てきます。これは登呂の報告書を読むについても実に貴重な、学術資料になるだろうと思います。上段の左頁の終わりから6行目に「次で再び安本氏宅に帰り、それより中田の国民学校に行く」と。「松木校長に面会の上、所蔵の品を見る。鹿角製の腰飾り、鹿角製の柄刀子、木製品には注口付きの槽、大小の槽形品、曲物蓋らしきものにて桜の皮をもって綴じたり。石器類は有溝石錘、石錘、磨石類無し」と。こういう大場磐雄先生の遺物の記述というようなことが実に物を良く見て、溝のある石錘、有溝石錘、なんてのは私は、見事な表現だなんていうふうに思いました。そして次いで安本君が吉野復興局へ来て、また復興局に集まっていたものを見るんですね。今度は下段の右ですけれども。ここには大型の木器類が多い」と書いてあります。独木舟の一部、小形な倉の柱板、及び床板、またはこれを受けりたと思しき木器、曲物製容器類の蓋類。石器には有溝石錘。おもしろし。」これはなかなかね。こういう記録をして最後にひらがなで「おもしろし。」なんていうのは、これはなかなか私にはできない。さすがだな。大場先生だなんて思いました。これから私も残り少ない人生を「おもしろし。」と、いう記録を残そうかなと思っているのであります。

そして「宮地先生出発の時間迫りければ急ぎ駅に行く」と。「先生に面会し、3時半の列車に乗らんとせしが、40分程延着せり。東京に入りしは午後9時頃になりき」とあります。まあ静岡 - 東京ずいぶん時間がかかって。今は静岡停車のひかりは一時間、ですから。そういう中で、「さて帰郷後三島、佐野両君に遺跡のことを物語るに、是非とも実査したしとのことゆえ、再調査の念切なりければ、すなわち国大付近の林伸光写真師を訪いてその都合を聞き、承諾を得たれば、8月6日夕方出発せんとして、大体の打ち合わせを整えおけり」です。帰ってきて、おい、登呂はすごいよって。佐野君、君もやっぱり現地行って見てこいよ。なんならちょっと調査に参加しておいで。というそういう順だと思うんですね。だからこれをみてて私も大場先生の身の速さ、対応するというか、かなり早い。で、次に8月6日です。「8月6日午後5時頃東京駅にゆく。列車に乗るに三島、佐野両君来り、共に出発。」一緒に行くんですね。「途中何事もなく静岡着10時過ぎる」んですね。だから5時間。駅にて安

本氏に迎えられ、中島旅館、今のホテル中島屋でしょうか、立派なホテルになってます。今齋藤忠先生の城となっておりますけども。中島旅館に行くと。「なお氏より聞くに一昨日後」、この辺から上田三平さんの名が出てくるんです。「なお氏より聞くに」安本さんから聞くところによると、「上田三平氏来たり」「県としても、大いに調査することなれりという。」「明日を期して別れ、同夜は就寝」8月7日という事で、これから大場先生がいろいろ住友金属株式会社について、庶務課長さんとか副所長に面会してこの遺跡は大事だ。工場建設もこの緊急事態の時に大事だけれども、ちゃんとした調査をしなきゃだめだと大場先生は必死に訴えていたようです。もちろん、大場先生のおっしゃる通り、よく分かっています。どうか、県のほうとも大場先生、十分に打ち合わせしてくださいよと逆に言われてるんですね。

そして、午後2時頃まで、この住友金属株式会社において、今度は県の河合さん、史跡調査の県史編纂の河合栄治氏に会うんです。河合氏は、「県として大いに調査を行い、実測と写真撮影並びに柵の中の発掘を行うべきことを話される。余は、別個の立場より、手伝いをなすべくと約束する」と。自分は自分で大いに応援しますよ、と。だけれども自分にかかる諸費用に関してはなんら静岡県への援助は要りませんよ、と。「援助の受けざる旨を言明し」。電話があつて、復興局長より「待ちいる旨なり」と。待ってるから、と。「又林やすみちと、佐野君を共に同所にいる旨にて、三島氏と河合両氏と三人、差廻しのタクシーにて、復興局へ行くと」。そこで、河部局長に面会。「同氏は考古学に興味を有し、理解がある」と。で、「調査に対してもすこぶる好意を持って迎え入れる」と。「大活動にて同日中に同氏の遺物を実測撮影すべしと奮闘す」と。さらに「その主要なる物につき写真の撮影順に記すべし。」それから、1、2、3、4、とどういうものを撮したのか、特徴を簡明直裁にお書きになっています。

そして、この下段の左側の上段ですけれども、「時に午後6時過ぎ、一同疲労甚だし。直ちに中島旅館に入り、一風呂浴びて夕食。種々対策を期して就床」。8月8日以降ここからまた、大場先生はいろんな、遺構の図面等を描いておられます。4の資料をちょっとご覧頂きたいんですけれども、ずっと、4の楽石雑筆22上段を見ますと、克明に、大場先生が実際に、見て、そして約束したり写真撮ったりした個々の遺物について書いています。このエネルギーというか、資料に対する大場磐雄先生の熱情というか学者としての姿勢は、並々ならぬものがあったと思うのです。これは私共常に経験しますが相当根性がないとそうはいかないんですね。そういう事をお書きになっています。

そして4の上段の右側のところの真中辺に「安本氏も来たり。また県の河合氏も来たり賑々し。夕方湯を浴び、心尽くしの夕食を喫して駅に来たりて7時17分発の列車に乗る。途中延着して帰宅せしは午前1時頃なりき。」と。これがね、8月8日だと思うんです。8月8日の午前1時頃にお宅に帰っているという事です。そして、そこに「鹿島神宮調査。宮地博士の委嘱による鹿島神宮の土壘調査を決行すべく、同じく佐野君と共に8月9日より午後1頃に両国駅に待ちあう。」ですから、いやーすごいですね。やっぱり学者として、大場先生は学問の道に生きて前日夜中に帰っても、宮地先生のご依頼で鹿島神宮土壘調査って事でもう早速翌日午後ですけども、両国駅から汽車で、出かけていくというわけですね。そして、「午後3時過ぎ4時発のバスに乗り込む。混雑はなはだしく、いと暑し。」ねえ、まあクーラーなんてない時代ですからね、「途中にて席を得たれど、暑さ変わりなし。5時少し過ぎ、神宮へ到着、社務所に挨拶し、土壘の實際を一瞥して宿舍『がんげ』に入る」とこういうふう書いて、いかに大場磐雄先生が東奔西走ですね。いや、夕べ帰ったばかりだからちょっと、もうちょっと1日2日休ませてよ、なんて事はないんですね。私だって、という事で、私も昨日、長野経由で山梨から家へたどり着いたのが10時過ぎなんですから、いや、やっぱり忙しくなきゃだめだつて言うくらいに、私も思っておりますから、こういう大場先生の日記を読むと、うーんすごいな、つていうふう思うのです。

さてそこでひたむきな大場先生が、いま、私なりに解釈すれば煮え湯を飲まされたというのか、大場先生の思う通りに事態は展開しなかったのです。戦争中の話です。というのは 4 の下段のところであります。

登呂遺跡第3回調査というのがあります。で、「前回に記述する登呂遺跡の調査はその後、静岡県、県の方針にて文部省の上田三平氏に依頼して、大体の計画を立てていって、状況を見ている」という事ですね、「20日の夜帰郷ただちに報告をうけ、大体において調査の状況を知れ、ゆえに」、赤城って赤城山ですが、「赤城調査の余暇を割いて、静岡に下ることとし、21日午後より数日を使わせた。8月21日、午後2時10分6時31分静岡着と。同夜は中島屋に投じ夕食後安本氏ととるに、三木、辻本両君も来たりて見学せり。荷物を預けおきて去り、旅館に帰る」。で、「8月22日、天気よろし、朝7時半頃宿を出て、安本氏を訪う。堀田君」これは堀田三津男(?)さんの事でしょうか「堀田君を待つ事しばし、見えじ。やむなく8時半頃現地へ行く。上田三平さんですね。

「上田、河合両氏と、小学校訓導十数名来たり居れり。9時ごろより発掘にとりかかる。今大体の現状を見に左のごとし。」って事で、その現状を書いておられます。そして「8月23日」一番今度下のほうですね。「月曜日天気よろし。今日も前と同様なれど、余はまず住友本社にゆきて発見遺物を見る。今発掘中の円形柵の付近より、最初出土するもの」という事で、大場先生は野帳の中に、描いた図面ですね。柵列がまわって、真中に六本柱ですか、掘立柱かな、ま、こういうふうな遺構をちゃんとお描きになっています。そこで次の 5 の資料を、開けていただきたいんですけども、5 の資料の右側の上段、いろんなものがでて、という事ですね。で、「以上を主なるものとす」と、「安藤庶務課長に面会して、上田、河合両氏の態度について聞き、大いに同感なり」、だからこの安藤庶務課長という、住友の課長さんでしょうか、が、この上田三平さんと河合千恵さんの現場における指揮や遺跡へのその接し方等について、ま、いろんな事を聞いたんですね。「故にこの由県に来て報告し、別に発掘せんと約す。その間一度タクシーにて復興局へ行き局長に面会、書物を渡して調査後援を依頼する」と。というような事で。そここのところの終わりから5行目「本日午後3時ごろ、県庁へ行き、杉谷祭務官に面会。西井内政務部長に面接の上、発掘に対する注意を言い。また上田、河合両氏の態度述べ、この発掘が両氏個人の発掘となる事を固く戒める。本日帰郷せんとせしが、明日原田氏が」原田淑人先生でしょう「原田氏来静の報有り。最初当初よりこの発掘につき余を推薦せられしという」。原田淑人先生は國學院大學の大場磐雄君に登呂の調査のいろんな事をやっぱりやってもらったらいいんじゃないかと、あれだけ熱心に現地へ何度も飛んだりしてお弟子さんを出していると、いうふうな原田淑人先生のアドバイスもあったという事がこれでわかります。「余を推薦せられしという。故に1日予定を延長する事とす。」もう1日静岡にいるんですね。そして、夜は杉谷氏の招待にて伊東属と共に、穴子屋に行き、夕食。」今でもあるんでしょうか、私も行きたいな。「穴子屋に行き夕食。うなぎを食して満腹せん」この辺はね大場先生のお人柄というか、人生の生き方に私は全く同感ですね。

そして「8月24日原田先生をお迎えする」。そしてその後半になると小さな弓が出てきたり、鉢形木器一個が出てきたりします。「余は先生と別れ」、つまり、これは原田先生でしょう「と別れて、県庁に至り、杉谷氏に大体の経過をのべ、且つ上田・河合二氏の硬化せるを告げ、他日を期して調査せんことを約す」つまり、駿河富士見原遺跡の現場においては微妙な人間関係と軋轢と県と文部省との関係論とそして民間の人間であった國學院大學の大場磐雄先生をむしろ排除していくというか、厄介者というか、俺たちがやるからま、あなたはいいよ、お引き取りください。っていうような、響きにもとれるような状況が昭和18年の8月の登呂最後の段階で現出していた、という事であります。

これは、こういう話は登呂遺跡の発掘ではあまり外に出ない話でございまして大場先生の名誉のためにも大場『楽石雑筆』を通じてやっぱり、相当行動力があって動いていたという事がわかります。

そこでこの、登呂から出てきた木器や石器について参考資料としてそこに挙げておきました。もう一つこれほどまで大場先生がこだわったそれは、木更津の菅生遺跡の発掘等があって、低湿地遺跡に対する、或いは、木器とかたくさんで、或いはその中に祭器、祭祀遺物がある。つまり古代社会におけるその祭祀的な側面というふうなものも、多分大場先生は非常に、研究の意欲をお持ちだったという事で、静岡の登呂遺跡に対しては研究上の情念というか、熱情をお持ちだったというふうに思います。ところが、そういうわけで、昭和18年の8月の末を持って工場建設が始まる。爆撃を受ける。で、19年、20年になって、そして実は安本さんは中国からだったかな、或いは森豊先生も九州か中国から復員されてくると。というような事。そして、上海、中国大陸へ行っていた杉原莊介とかそういう先生の皆さんがたが、日本に命ながらえて帰ってこられた。という事で、登呂の発掘が始まるのです。

私は登呂の発掘に参加して、今日お見えと思いますけれども、國學院大學の小出義治先生とか、或いは千葉県の野田におられた下津谷達男さんなんかともご一緒して。特に永峯光一さんや亀井正道さんとは同期で、一緒に同じ炊とんを食べて、登呂の発掘に関わっているわけです。私は昭和23(1948)年から登呂遺跡の発掘隊のマネージャーというか、書記をやっておりました。

私が商業学校出身だという事で、後藤先生などから、お前が帳簿つける、という事で現金出納の他にいろんな通帳があったんですけれども、記念に私の手元にありました帳簿を出して、今日大場先生の事について登呂の話をするんだって事で、見たのです。

ところが昭和24年、ですから1949年、登呂発掘3年目であります。そこに、左側のとこに現金の出納なんですけれども8月20日に大場磐雄旅費1,000円、大場先生に1,000円が支払われております。ずっと前からいる方、期間とかですね、いろんな事で、全部計算の基準が違います。亡くなりました後藤守一、東大の駒井和愛、八幡一郎、杉原莊介、現在も活躍中の齋藤忠先生、江坂輝彌さんに880円、10日間の手当てで払っております。そういうなかで、例えば、学生さんは10日ごとに一応交代するという風にして各大学の皆さんが来ました。第一期、二期、三期、牧牛寺宿舎、これは先生方も泊まっているんですけれども、80円かける18人で、1,440円をお支払いしているとかですね、もう亡くなりました慶応の清水順三さん、東大の曾野寿彦さん、東大の植物の前川文夫先生、そういう方が御見えでございました。下のほうに桜井清彦さん、525円なんてありますけれども、右側のほうを見ていただきますと、8月9日上から二段目、交代学生慰労のお酒2升90円です。1升45円、これ焼酎だと思っんですけれどもね、女子学生はお酒を飲ませるわけにはいかないって言うんでお菓子を、三袋買って240円ですね。お酒が、900円。炊事用の薪、50束1,100円。高いですね。牧牛寺の宿舎の卵が21個で294円とか洗濯用の練洗剤の1缶1,000円とかですね、写真乾板の現像焼付代金、4,700円ですか。お酒ばかり書いていてしょうがないんですが、「酒一升五合代慰労会用8月9日750円」そういうので当時の物価もわかりますし、学生さんはあの建設現場の飯場に泊まって掘っていたという事で飲まずにはいられない環境だったのです。

実は昭和22年の登呂の発掘の頃には、後藤守一とか駒井和愛、八幡一郎先生らと一緒に大場先生は実行委員のメンバーだったんです。しかし昭和24年にはちょっと登呂へお見えになっておられますけれども、実行委員のメンバーからは外れておられるんです。私も学生ですから細かい事は分かりませんですけれども、今私が大場先生の話をするために『楽石雑筆』をずっと見てみますと、事実を明らかにしようと思う、情念というか、その熱烈な気持ちというのは、私が今思えば、後藤守一、八幡一郎、駒井和愛、杉原莊介という先生と比べたら、問題にならないですね。大場先生が飽くなき学問的なエネルギーって言うんでしょうか。東大の駒井和愛先生は中国考古学のご専門でありまして、後藤先生などがお昼休みの食事が終わって、午後一時暑い遺跡の現場に牧牛寺をスタートされますと、全員先生方現場に出られてから、駒井和愛先生は牧牛寺の本堂で枕を出されてきまして、そして、アン

ペラのようなものをして「大塚さん、一緒に昼寝しましょうや」とね。中国の生活では、午後は昼寝が当たり前なんです。だから駒井和愛先生は1時間から1時間半たっぷり午後午睡をされます。午後3時になってはじめて駒井先生は半ズボンをはいて、帽子をかぶって、駒下駄をつっかけて、遺跡に出るんです。ですから、登呂の学生達は、駒井先生の歌を詠みまして、「駒井のごろちゃんトンボつり」てな、そういう歌がたくさん出来るんですけども、私はそういう先生方、一人一人の個性というものを牧牛寺の本堂で見る事が出来ました。

で、大場先生は、木器その他の資料が発掘されて宿舎に運ばれてくると、すぐそばで、ご自分の野帳にスケッチをされるわけです。これは、大場先生にとっては当たり前の事です。掘ってまもない資料について自分の資料としてメモ書きをとるわけですね。ところが他の先生方はみんな共同でやった、合同発掘だから、パブリックな、公的な段階に至るまではそういう写真とか、スケッチはとらない。けども、大場先生は私が行なった木更津の菅生なんかでは、木器なんかはどんどん変形していくから、早く自分でメモしておかなければと思っているわけですね。そういうメモをしていた先生が、『登呂の古代農村の復元』なんていう本を大場先生がおだしになるときに、そういうスケッチを出されるんです。それは正確な実測図ではなくて、自分がとったスケッチだから。という事で、お使いになるんですけども、登呂に参加したほかの先生方には十分納得が出来なかった、というか、共通の資料を大場先生が先にご自分でお出しになるという事が、多分問題になって、じゃあ、大場さんにはお引取り願おうよ、という事で昭和24年以降はもちろん調査員としてお見えになる事はあるとしても、登呂の実行委員からは、外れていく。と、というような事があったのではないかと、私は仄聞しております。

ですから今にして思うと、大場先生の、学問的な飽くなき挑戦への足がかりというか、その気持ちというふうなものがボタンの掛違いという事があると。学問の世界にはそういう事が往々にしてあるんですけども、私は大場磐雄先生から教わる事は多々ございました。

そういう事で、大場磐雄先生の目指した考古学というのは近年全国的に発掘されている、例えば群馬県の前橋の舞台古墳等は帆立貝型古墳の突出した前方部に、土師器の高杯がまとまって祭りの道具として出てきて、その高杯にはお団子が何かよくわかりませんが焼き付けてあるんです。高杯にお供えものを盛り付けたもの表現のものを一緒にくっつけて土器を焼いているんですね。そういう風な祭祀が日本の古代には、重要な場面としてあるという事です。wetな考古学の世界から、dryな考古学で型式学とかそういった事だけが考古学の全てではないって事が、このごろいろいろな資料でわかってきたという事です。大場先生の『楽石雑筆』はこれから考古学を学ぶ人たちは是非、あの膨大な資料ですけども読んでみると勉強になる事が多いのではないかなと思っております。

登呂遺跡は最近また静岡市教育委員会が、再発掘をしております。昨年も中心部を秋以降発掘しました。それは昭和22年から25年迄掘った遺跡の一部に重複するようにして、まだ掘っていないところを静岡市が掘っています。実は平成11年度の発掘で水田跡の畦畔、昭和22年に掘った所をだぶらせて掘ったんですけども、その畦畔から昭和22年のインク瓶が出てきました。それは、永峯さんが使ったのか亀井さんが使ったのか私が使ったのか、下津谷さんが使ったのか分かりませんが、当時はまだサインペンや、ボールペンはありませんでしたから、遺跡に出て、調査をしながら、ちょっとした記録や日誌を書くのに、みんなインク瓶でつけペン、Gと書いたあのGペンで、遺跡の現場で書きました。その時のインク瓶が弥生時代の畦畔の脇から出てきて、今静岡市教育委員会にいる若手が、「先生、これ」というんですね。やっぱり懐かしかったですね。

5.まとめ

そういう事で、日本の考古学もずいぶん変わりましたが、それに対してやはり大場磐雄先生等の業績は学史を踏まえれば踏まえるほど偉大だったと、いうふうに思います。その大場磐雄先生が、昭和18年、登呂で、ご自分も関心があって、もうちょっと関わりたかったのではないかと思います。なにしろ木更津の菅生遺跡の調査経験を持っていたのですからね。ところが、文部省と静岡県の相談で、大場さんはいいですよ、ま、見学にいらしてください、というふうに言って、文部省と県で登呂の最後の8月の調査をやったというあたりは、やっぱり大場先生としては辛かった気持ちもあるのではないかなと思っております。学問の世界は往々にしてそういう事があるんですけども、本当に大場先生は一生懸命この日記を見てもホントにもう行ったり来たり行ったり来たり、やっていたんだなあ、という事ですね。登呂遺跡に対する大場磐雄博士の情念というか飽くなき挑戦というか、これは我々今でも拳拳服膺というか十分学ぶべき面ではないかな、と思っております。

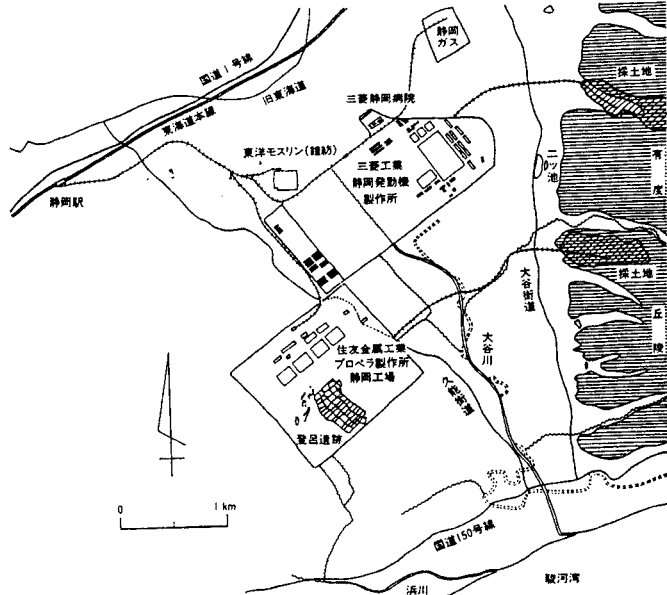
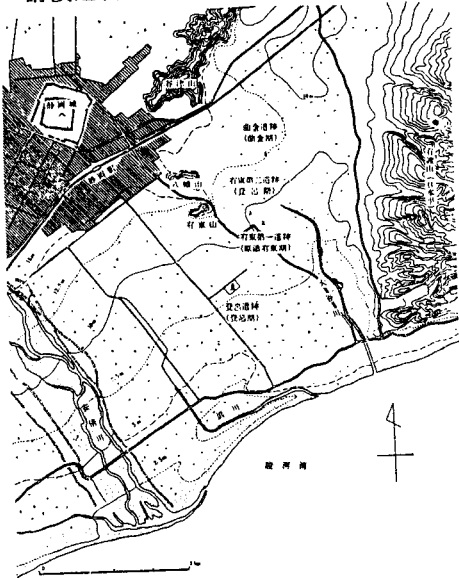
どうも、あんまり深い話は出来なかったのですが、大場先生を偲びながら、登呂の話をさせていただきました。御静聴有難うございました。

(平成12(2000)年3月25日、國學院大学常磐松2号館大会議室にて)

講演題目 大場磐雄博士と登呂遺跡

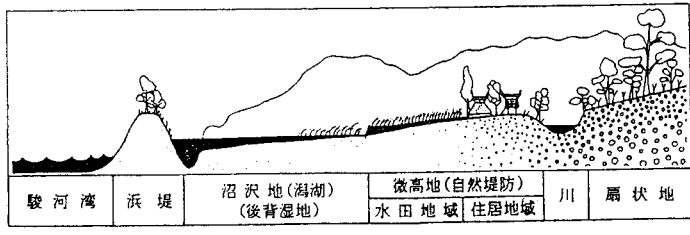
平成12年3月25日 大塚 初重

№1



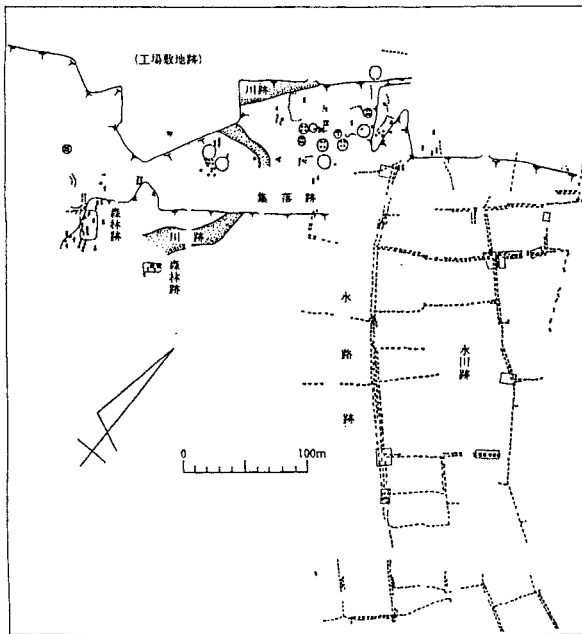
登呂遺跡附近図

▲製陶工場と登呂遺跡の位置 (静岡県埋蔵文化調査研究所『神明原・元宮川遺跡』より)

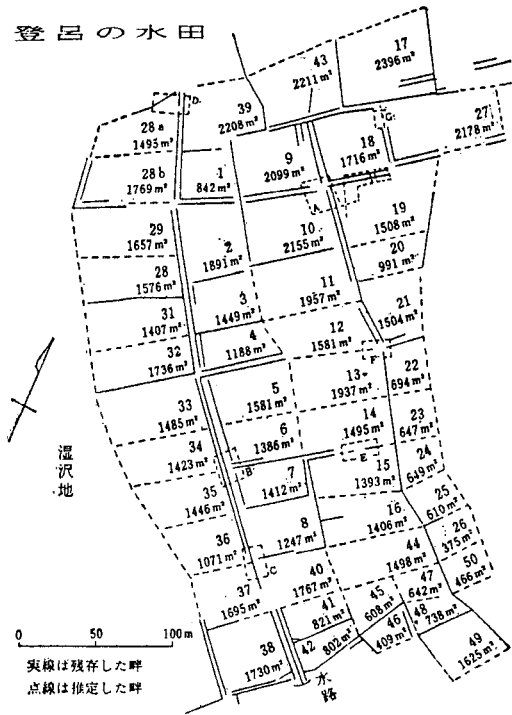


生活空間断面模式図

登呂の環境



登呂の水田



実線は残存した畔
点線は推定した畔

資料1

風来寺と静岡 ○延徳神社の社務調査に伴う調査旅行の冒険味

て本年に入り、三回三河行きをなせしが、最近風来寺を調査すべききもあるより七月末より八月にかけて社

○七月三十一日(土)、朝六時少し過ぎ、静岡市より新式式土器と木製品伴出

○八月一日(日)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

は見え、又遺跡の各所より柱跡らしきもの、又掘らしきもの多

○八月二日(月)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月三日(火)、六時半起床、七時頃國軍車にて出発、中田本町

○八月四日(水)、六時半起床、七時頃國軍車にて出発、中田本町

○八月五日(木)、六時半起床、七時頃國軍車にて出発、中田本町

○八月六日(金)、六時半起床、七時頃國軍車にて出発、中田本町

○八月七日(土)、六時半起床、七時頃國軍車にて出発、中田本町

○八月八日(日)、六時半起床、七時頃國軍車にて出発、中田本町

などもとて本堂へゆく。奥よりたる一室にて清風を浴び、汗を

○八月九日(月)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月十日(火)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月十一日(水)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月十二日(木)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月十三日(金)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月十四日(土)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月十五日(日)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月十六日(月)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月十七日(火)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月十八日(水)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

ここに大形の木造多。独木舟の形、小形六角、柱、板及

○八月十九日(木)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月二十日(金)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月二十一日(土)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月二十二日(日)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月二十三日(月)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月二十四日(火)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月二十五日(水)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月二十六日(木)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月二十七日(金)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月二十八日(土)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

約束手。費用に対しては何等級の援助を受けざる旨を表明しお

○八月二十九日(日)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月三十日(月)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○八月三十一日(火)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○九月一日(水)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○九月二日(木)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○九月三日(金)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○九月四日(土)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○九月五日(日)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○九月六日(月)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

○九月七日(火)、まうは伊藤三典と共に西尾文庫へゆき、地誌

資料2 『楽石雜筆』下より

(2)口注口木欄、破損甚しきにより、一部を仮に接合させて撮影す。なお別に口の注口部のみの破片を撮す。

- ◎各種木製品、高杯破片、曲物、茶碗片等
- ◎舟形木器その他、舟形木器二個、木製、その他
- ◎木材切口入の炭化、木材の一部を切りたる切口を示すも、これは一定の幅を有する鉄線を使用してしるを知る。又裏は恐らく腰板に繋ぎしもの破片なり。
- ◎腰板の裏に炭化皮、前記瓦葺製品の裏面と合せて曲物の破片の裏を拡大して撮影。

◎八月十三日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十四日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十五、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十六日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十七日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十八日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十九日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十一日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

(3)木製高杯四個、底部分二個、高杯部一、上部に脚部の痺れを計測す。人夫一人別なものを来る。谷守氏も来らず、午後八時、夕方天くもり夕立あり。幸うしてこの分を終り大休の調査を終る。

◎八月十三日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十四日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十五、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十六日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十七日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十八日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月十九日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十一日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十二日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十三日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十四日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十五日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十六日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

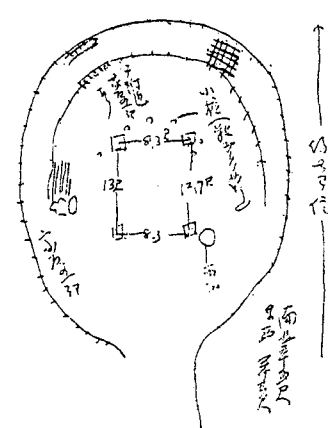
◎八月二十七日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十八日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月二十九日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月三十日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。

◎八月三十一日、きよは午後七時半頃同町内の下生蔵一氏を訪ね、先代正安氏の治末を見る。石碓と土器調査、土器片若干のみにて特に見るべきものなし。



資料3 『楽石雜筆』下より

入せるまま残れるもの

(2)木杓一箇、破片となれり

(3)木槌一箇、木の一部を欠

(4)削形品破片一箇

以上を主たるものとす。安藤源次郎氏に面会して、上田、河合兩氏の態度につき聞き、大いに同感なり。故にこの由果にゆきて報告し、別に発掘せんと約す。その間一度タリシにて復原船へゆき船長に面会書を渡して調査を依頼す。

なお当日遺跡は真季せざりしが、発掘の様子大体前記の如く明かに家の構造を窺はるといへり。即ち中央に四本の柱ありしことは客飯の存在によつて知り得られ、又西方に壁根の跡を認めしものと思はるるものあり、その下に切込みある板を存し、又木柱その下より出土、更にこれに接して土輪と壁角とが出せり。なお重要層に使用せし枘皮(杉皮)の加きもの存するを見る。なお間壁の一郭は北方の櫓付近にもあり。なお掘田君より聞くに南方入口の辺に縄代様のものありきといふ。なお杉下氏の調査によりて遺物に於いては杉の立木多かり。又東奥にはブドウ(野)の核あり、又切を破のままにおしつせしものあり。推の突あり。タリミあり(口形)。その他遺物の木材を多用ありといふ。

本日午後三時頃奥平へゆき杉谷村赤城神社に面会。西井内政部長に面談の上発掘に対する注意をい。又上田、河合両氏の調査を述べこの発掘が両氏個人の発掘となることを懸くまじし。本日帰京せんとせしが、明日豊田氏来朝の報あり。最初河氏よりこの発掘につき余を推察せられしといふ。故に一日予定を延長すること

著。宮城村有志、岩沢氏、大胡の高橋氏等出迎え、真指定の昭和館に入る。一同と面会挨拶して午後六時を相散し、又果より青木瀧米り打合せをなす。大体のプラン左の如し。
八月二十六日(木)、前橋市内寺院、天川、上川瀬村赤城神社。前橋泊。
八月二十七日(金)、保徳田西光寺、柏木沢、駒寄村三宮神社。駒寄泊。
八月二十八日(土)、三夜沢へゆき神社へ参拝―榎石調査。幸治一泊。
八月二十九日(日)、大胡―荒砥調査―赤山付近調査。大胡一泊。
八月三十日(月)、二宮赤城付近―上榎木赤城付近調査。赤城―伊勢崎一泊。
八月三十一日(火)、松川氏見学、付近調査。佐野一泊。
九月一日(水)、下ノ宮赤城―四神社参観。浦沢。かくして夕食は一同共に盗取、岩沢氏の気炎をまき七時半頃散会。
○八月二十六日、天少しくもれり。八時少し前高橋氏と藤塚二氏来り、種々打合せす所に岩沢氏来る。藤塚氏去り三人にて出発。先づ寺町の真徳寺へゆく。真言宗の寺なり。寺内に銅口一と石瓦あり。今より二年前の住職藤田黒屋師が、明治初年赤城小治より出土せしと友人より語り受けしものといふ。青銅製面鏡四七寸、厚一寸四分、鏡背を付せり。銘文は、武蔵國比企郡延喜郡地蔵堂常住

とす。

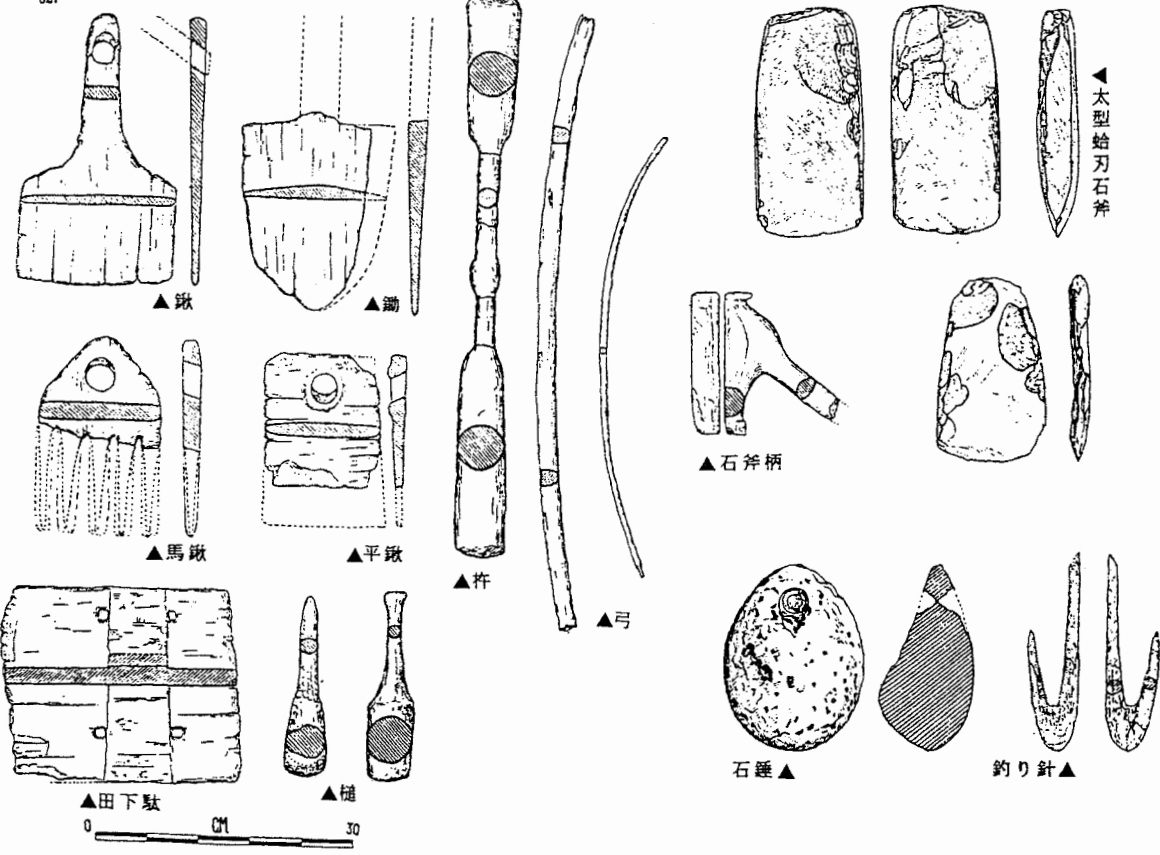
夜は杉谷氏の招待にて伊東氏と共にあじやにゆき夕食、うなぎを食して満腹せり。

○八月二十四日、天気よし。朝往友本社につき安藤氏と面会の上内政部長の意見をうたえ、協力調査すべきことを依頼しし。午後五時頃来り原田先生を迎へ、神林、広瀬、外一名、三名の同行あり。先生を案内し、内政部長休みにて面会出来ず。杉谷氏に意向をうたえおき調査の進捗を見る。

午後五時頃来り。先生も来れり。長崎君も共に東京の由、一週五時二十分急行列車にのり。途中広瀬より先生に送られし甘藷に關然となりて予定通り品川のりかえ九時少し過ぎ榎石に到着。小弓(鐘あり)一本、鉢形木槌一箇、木杓破片若干

○宮地先生より子て赤城神社の調査をすすめられ、急々実行すべく二十五日より出発。当日午前十一時三十分上野発、急行高崎のりかえ、十三時四十分前橋

とあり。拓影。
それより赤城山へゆき、次に紅雲町の御宮に丸塚を訪ねゆく。今は廢神社となれり。もとこに神社ありてこれに發し赤城神社ありしが、他に合併せられ、今は六供へ移転せり。この区長が地蔵堂にありし地蔵の手のみを預りしが昨年供出せりといふ。奥内に慶安三年の石宮あり(庚申意)。徒歩にて手青分へ出で、東路を通りて六供に来り、八幡社に参拝。次に神社へゆく。天台宗、ここに前記地蔵の臺ありといふ。石の地蔵ありたり。臺に供出せりといふ(応永の銘あり)。河内宿より宮地へ赴く途中路傍の墓内に車塔あるを見る。安山岩にて上より下迄字標す。総高七尺二寸。銘文に明正三とあり。この種の塔は上野管内特有にて二十数基あり。何れも室町時代のものなりとす。
宮地に入りて石倉等古民を問う。区長代理にて赤城神社氏子惣代なり。星食を美し種々神社につき問く。何物もなしといふ。云々に往昔三夜沢赤城神社へ本社より祭儀用品の貸借あり。中にも五段櫓は著名なり。今もその櫓を立てるといふ。神社へ参拝せんとてゆく。松の木の新々たる一角あり。墓墓の宮居あり。黒磨は朱塗の明神燈籠(ワラザン)にて額に「赤城大明神」とあり。本殿入母屋、檜葺も同様。東面せり。もと棟板に向かつて石方に



資料4 『築石雑筆』下より

15

現

金

年 日	摘 要	借 方	貸 方	借 或 貸	差 引 殘 高
		687720			687720
9	整理用藁繩一卷		18000		669720
"	八月初九日交替學生慰勞酒一升		90000		579720
"	" 女子學生菓子一袋		24000		555720
10	炊事用薪五十束		110000		445720
"	江坂調査員旅費		48000		397720
11	大阪銀行靜岡支店より引出	2000000			2377720
"	牧牛舎宿舍卵21ヶ分		29600		2368120
"	8/1=20x22, 8/9=20x23		90000		2278120
"	社団法人牧牛舎費下引		500000		1778120
"	D.D.T. BHC. 17.72等		48000		1730120
"	洗濯用練洗剤1缶		100000		1630120
"	草蓆乾板現像焼付代金		470000		1160120
"	酒一升五合代慰勞會用八月初九日		75000		1085120
"	8/1=20x22, 8/9=20x23 追加		94000		991120
"	鶏卵二十一個分(牛舎)		35200		956120
"	教習協會より借入金却		100000		856120
12	牛舎引上用老丁一本		24000		832120
"	" 木材, 3米板2枚		12000		820120
13	養田委員長, 帰系, 9/1晝食		8000		812120
"	臭気止, カンパシ油, ハツブ		42500		769620
"	大阪銀行靜岡支店より引出	1000000			1769620
"	八月初一日至三日延田人土賃金		1400000		369620
"	ヒオヘルミン一箇		5500		364120
"	養田委員長旅費		100000		264120
		3687720	3423600		264120

資料5

19

現金

年 月 日	摘 要	借 方	貸 方	借 或 貸	差 引 殘 高
8.20	前期繰越	46059.20			46059.20
8.20	米・麦 127kg 代		5016.00		41043.20
"	古島・村以兩人大坪旅館宿泊費		600.00		40443.20
"	八月十日慰勞會用酒=卅		88.00		39563.20
"	大場 繁雄 旅費		1000.00		38563.20
"	八月十日慰勞會用菓子		1750.00		36813.20
"	後援十一日間 旅費		920.00		35893.20
"	駒井和彦		920.00		34973.20
"	八幡一郎 十一日間		1000.00		33973.20
"	杉原莊介 十一日間		920.00		33053.20
"	青木 忠 七日間		760.00		32293.20
"	折 五十束 介		1100.00		31193.20
"	和島誠一 十日間 手当旅費		400.00		30793.20
"	江坂輝球		88.00		29913.20
"	才三郎 特種宿舎 追加 80x15		1440.00		28473.20
"	直良信夫 手当又旅費		560.00		27913.20
"	清水間三 十一日間		920.00		26993.20
"	前川文夫 三日間		600.00		26393.20
"	曾野壽壽 十一日間		525.00		25868.20
"	井口大介		525.00		25343.20
"	吉田幸一郎		525.00		24818.20
"	倉田 芳郎		525.00		24293.20
"	鈴木 八司		525.00		23768.20
"	櫻井 清彦		525.00		23243.20
"	大塚 初重		700.00		22543.20
		46059.20	23516.00		22543.20

資料6

講演記録『記録資料を後世に残す - 写真画像の保存 - 』

荒井宏子

(東京都写真美術館)

司会(小川直之):

文学部の小川と申します。学術フロンティアのこの事業、事業名は「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」というタイトルがついておりますが、私はそのメンバーの一員となっております。今日は、まさしくフロンティア構想のテーマに相応しい御講演を頂くこととなります。講師を御紹介いたしますと、現在は東京都写真美術館、この大学のすぐ近くでございますが恵比寿の駅横でございます。そこにお勤めになっております、荒井宏子先生に今日は御講演をお願いいたします。

簡単に略歴をご紹介致しますと、長らく千葉大学の工学部画像工学科で技官をお勤めになっておられて1994年から今の写真美術館の方で保存科学を担当していらっしゃいます。その間、ロチェスター工科大学画像保存研究所とジョージ・イーストマン・ハウス国際写真博物館などで、写真画像の保存や修復について研究をされたり、また、その仕事に従事しておられて、まさしくこのフロンティア構想の事業につきましてもお話を頂くのに相応しい内容をお持ちであろうと思います。

今日、荒井先生は、写真に関する専門用語が多分意識しないで沢山出てしまうけれどもと仰ておられて、専門用語を遠慮なく写真のイロハからでもいいと思いますので、また後で、御質問していただければ幸いです。

皆様こんにちは。御紹介いただきました写真美術館の荒井と申します。どうぞ宜しくお願い致します。皆様のお手元にレジュメが配られたと思いますが、非常に簡単に概略的なことを一応書いてございますので、大体それに沿ってお話しようと思っております。

意識しませんと、専門用語が出てしまう可能性が非常に高いので、もしお分かりにくいところがありましたら、その都度御質問頂ければと思います。小川先生もおっしゃって下さいましたが、なるべく気をつけて話を致します。

はじめに

写真画像の保存についてお話す訳ですが、写真は、まだ160年程の歴史しかございません。1839年にフランス人のダゲールがダゲレオタイプという方式を発表致しました。その年をもちまして、写真誕生の年となっております。それから丁度、今年(2000年)で161年、写真が芸術の領域にやっと入ったのは今日この頃です。

写真は情報容量が非常に大きい視覚媒体として記録とか、医学、科学、芸術等多方面に亘って使われてきております。写真の歴史161年間には幾つかの技術的な変遷がございまして、今日のように誰でもシャッターさえ押せば写真が作れる時代になってまいりました。

今までに、どれだけの写真方式が生まれては消えていったのでしょうか。現在の写真だけを取り扱う場合には種類も限られていますから分かり易いのですが、古い写真になりますと、どのような方式と材料で作られたのか、それが分かりませんとの確かな写真の保存方法を講じることが出来ません。古い写真が出てきましたら、まずどのような方式で作られたのか、見極めが必要になってまいります。

写真の種類

皆様のお手元のレジユメの5頁目に、「写真方式変遷の歴史」の表があります。これは1840年～1990年までの表ですが、太線は多く使われた期間、細線は使用量が少ない期間を表しています。ここに分類とは、銅版、バインダーのない印画、それからコロジオン乳剤、卵白乳剤、ゼラチン乳剤となっていますが、このバインダーとは結合剤のことで、写真には卵白、コロジオン、それからゼラチンが使用されております。

1839年、一番上にダゲレオタイプがありますが、日本では銀板写真と呼んでおります。日本人が、日本人を撮影したダゲレオタイプの写真は、鹿児島島の島津斉彬公を撮影したただ1枚しかありません。日本人が写っているダゲレオタイプは全体でも数枚、10枚前後しかありません。

日本に写真が入って来ましたのは、1848年、嘉永元年です。これは九州に渡来し、それから島津藩に伝わりまして、ダゲレオタイプの写真が撮られております。1862年、日本では最初の写真師、いわゆるフォトグラファーとして下岡蓮杖、上野彦馬の二人の写真家が出て、日本にも少しずつ写真が普及することになります。

バインダーの無い印画として - 印画というのはプリントという意味です - カロタイプとか塩化銀紙、プラチナタイプ、青写真などがあります。バインダーがないということは、紙の上に直接画像が載っているという状態になります。

この中で青写真というのがありますが、青写真は御年配の方だとご存知だと思いますが、日本では工業用に建築、機械の設計図面等に使われていましたので、ほとんどが図面です。青写真の画像の成分は鉄(Fe)です。この写真を保存する場合には、アルカリ性雰囲気中では劣化を起しますので、中性あるいは弱酸性の雰囲気中において保存することになります。

次にコロジオン乳剤があります。この中にはアンプロタイプ、ティンタイプ、コロジオン湿板ネガ、コロジオンポジ等があります。アンプロタイプは日本では湿板写真と言われており、桐の箱にガラス板に作られた写真として収められています。ティンタイプという方式がありますが、ティンとは錫(スズ)のことで、金属板に作られた写真です。次に卵白乳剤ネガには紙とガラスに作られたものがあります。卵白を使って作った印画紙には鶏卵紙があります。これは欧米では1850年代から1890年の半ばまで約50年間、工業生産されていきましたので、現存している19世紀の写真プリントの約80%は、この鶏卵紙になります。古い家で黄ばんで画像が薄くなっている写真がある場合には鶏卵紙が多いのです。鶏卵紙は、大変綺麗なセピア色(セピアとは烏賊の墨のこと)をしておりまして、劣化しますと黄色くなり、次第に画像は薄くなります。

コロジオン湿板ネガからのプリント材料として、鶏卵紙が用いられてきました。この鶏卵紙には卵白が使用され、これは蛋白質ですので、アルカリ性雰囲気中に置きますと画像全体が黄変します。従いまして、保存する雰囲気が非常に大事になります。

1870年代からはゼラチン乳剤が使われるようになり、現在まで黑白、カラー写真を問わずフィルム、印画紙にはこのゼラチン乳剤が使用されております。

ゼラチン乳剤は透明なガラス板に塗布・乾燥し、乾板として使われました。これは、昭和40年代の初めまで、写真館などでも使っておりましたので、大分残っています。ガラス板ですので、平面性が良いことから長期間使用されておりましたが、非常に重く、破損し易く、場所を取る等からフィルムに置き換わり、現在では姿を消しました。

多分ネガとポジの違いはご存知だと思いますが、撮影した時の被写体と明暗が逆なのがネガ、被写体と明暗が同じものをポジと言います。ネガ材料とは撮影するのに使用する材料、ポジ材料とはプリントするのに使う材料のことです。

今度はフィルムの話になります。イーストマンゼラチンフィルム、イーストマンペーパーネガ、硝酸セルロースフィルム、二酢酸アセテートフィルム、三酢酸アセテートフィルム等があります。このフィルムの関係で、注意しなくてはならないのは硝酸セルロースフィルムです。硝酸セルロースフィルムは可燃性、いわゆる自然発火し易いもので、現在では全然作られておりません。昭和25年頃で製造は中止されておりますので、それ以前のフィルムをお持ちですと、まず、硝酸セルロースフィルムであると言えます。保管に余程気を付けませんと暑い夏の時には、多量にありますと自然発火し易いので、注意を要します。

三酢酸アセテートフィルムは、現在の一般撮影用のフィルムに使われております。この三酢酸アセテートフィルムも保存に注意しなければなりません。後でまとめて申し上げますが、これは一般撮影用の黒白にも、カラーにも使われております。このフィルムベースを使ったマイクロフィルムが、劣化して大変困ったことがありました。

ポリエステルフィルムは比較的新しいもので、これが使われている製品は、X線フィルムや製版用フィルム、マイクロフィルム等です。また、一般撮影用フィルムの100フィート(30メートル)長巻にも一部使われております。

次に現像紙というものがありますが、銀ゼラチン印画ですから、この場合は黒白のプリントです。黒白のプリント材料のベースにはパライタ紙と、樹脂加工紙の二種類があります。現在は樹脂加工紙が主流になり、パライタ紙は少なくなっております。樹脂加工紙は、RC(resin coated)ペーパーとも呼ばれておりますが、展示条件により劣化を生じてまいります。

それからゼラチン透明陽画。陽画というのはポジ像ですのでここでは映画フィルムのことです。

今まで申し上げました写真方式では、最終的な画像は銀で出来ております。ご存知のように銀のスプーンを放置しておきますとだんだん黒ずんできます。銀画像は非常に周囲の大気の影響を受けやすいので環境によって劣化が左右されます。

長耐久写真には、ゴムプリント、カーボンプリント、フォトグラビア、ウズバリータイプ、コロタイプ等がありますが、これは顔料を使った写真です。顔料は非常に頑丈なので、これらの写真はきれいに残っております。ただ、顔料で作る写真は非常に手間がかかりますので、今は趣味的に作られるだけで殆ど見る事が出来ません。

カラー写真は、今までに色々な技法で作られています。ここに、スクリーンプレート、オートクロームというのがあります。オートクロームは、スクリーンプレート的一种でジャガイモの澱粉粒子を赤と緑と青色に染めてガラス板に塗布し、その上に写真乳剤を塗り、ガラス板を通して撮影、反転現像処理によって作るカラー写真です。1907年から33年まで工業的に作られておりました。古い歴史的な写真を所蔵されている所ですと、お持ちかもしれません。

色素転染印画は、ダイトランスファープリントとも呼ばれています。しかし、5年程前に材料が供給されなくなりましたので、現在は作られていません。ただ、過去には相当数作られています。次に発色現像とありますが、この発色現像は1935年に開発されたコダック社のコダクロームに実用されました。これを契機として、現在の発色現像によるカラー写真が確立されました。発色現像方式には2種類ありまして、現像処理中にカプラー(色素の素材)を供給する外式発色現像方式とカプラーを感光材料の乳剤中に入れて現像をする内式発色現像方式です。現在は、外式発色現像法によるフィルムはコダクローム(カラーライド)のみとなりました。

富士写真フィルム、小西六写真(現・コニカ)が初期に製造したカラーフィルムは、外式発色現像方式でした。発色現像によるカラー印画は、現在の一般的に使用されているカラープリントです。色素漂白印画はチバクロームあるいはイルフォクロームと呼ばれております。それから色素拡散転写、

これはインスタント写真のことで、ポラロイド社のインスタントカラー、富士写真フィルムのフォト
 ラマがこれに相当します。これら以外にも、いろいろな方式がありますが、主なものを拾えば、これ
 だけの種類のものがある訳です。ところが現在ではもう殆ど、三酢酸アセテートフィルム、ポリエス
 テルフィルム、黒白の印画紙、RCペーパー、映画フィルム、などとなりました。ダイトランスア
 ーは最早ありません。

ところが古い時代、1890年、1900年頃は色々な種類の写真方式がありました。明治元年が1867年で
 すから、この頃から日本には写真が多く入るようになりました。1848年には日本に写真が渡来して
 おりますから、先に申し上げましたように、多くの写真が日本で作られております。ですから、古写真
 を扱う時には写真技法を判別する事が重要になってまいります。

写真画像の構成と劣化

写真の材料的な構成について説明いたします。支持体とは、写真画像を乗せる台で、金属板、ガラ
 ス板、フィルム、紙等が用いられます。バインダーとは、結合材のことですが、バインダーが無いと
 は支持体上に直接写真画像が形成されています。一方バインダーがある写真とは、支持体の上に結合
 材の層があって、その上に写真画像が形成されていることです。支持体の上にパライタ層 - これは黒
 白のプリントですが - があって、それから結合材の層があって、その上に写真画像があるのです。こ
 のように大きく分けて写真材料には3つの構成要素があります。

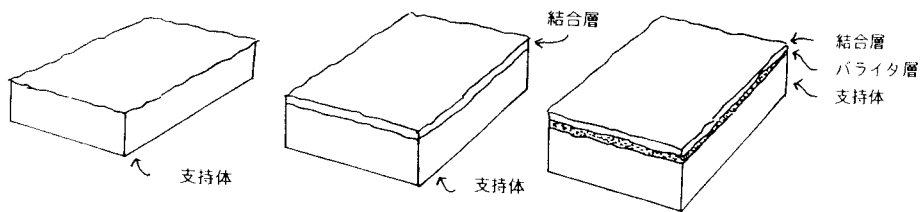


図1 画像と支持体の構成

写真の劣化ですが、支持体が問題になる場合、結合材と支持体の間で問題を生じる場合、支持体と
 パライタ層と結合材の総合的な問題、この3つで引き起こされることがあるわけです。その他に、古い
 写真ですと、非常に薄い紙の支持体で作ってありますので、カーリングしてしまいます。そのために
 台紙に貼ってあります。この台紙は外側には化粧紙が使用され、中側は非常に品質の悪い紙を使っ
 ている場合があります。台紙に使われている糊、写真を台紙に貼る時の糊など、台紙と写真、この間
 でいろいろと劣化を生じる原因があります。

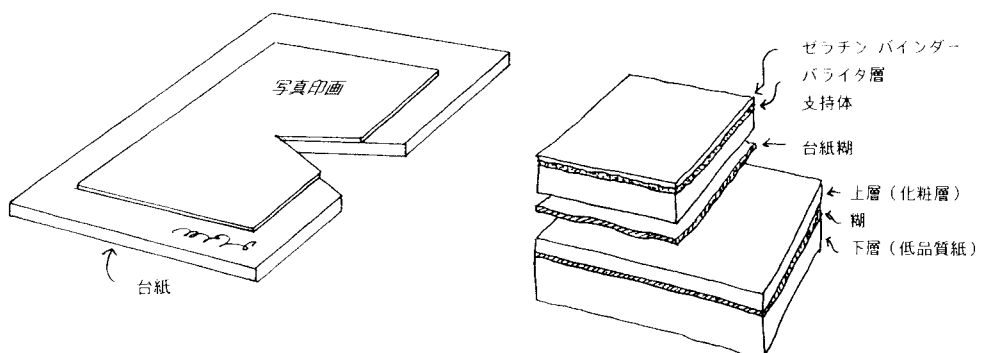


図2 写真画像の構成

写真保存の基本

写真の保存ということになりますと、まず、写真は材料と処理が問題となります。工業的に作られた写真材料は製造者の責任もありますが、現像処理後の画像に関する保存ということになりますと、利用者側の責任になってまいります。長期間写真画像の現在の状態を、あるいは劣化したならば劣化したなりの状態を、どのようにして保存するかについて考えましょう。劣化したものはもうあまり手を加えないで、画像が薄くなったものはそのまま保存します。その場合に適切な保存環境が必要になります。プリント、フィルム、乾板、それから黑白かカラーか、それらによって温度と相対湿度の条件、保存用の包装材料、包装の形体等が異なります。

さらに、非常に大切な写真が劣化してしまい画像が淡くて見られない場合にどうしたら良いか、という場合があります。その場合は、それ以上劣化させないように、環境を整えることにより積極的に補修は致しません。淡くなった画像を化学的に処理しますが、却って長期的に見ると画像全体の寿命を縮めてしまう危険性があるために、どんなに写真画像が劣化して見え難くても、絶対にその画像には化学的な手を加えません。光学的に複写などの方法による復元を考えることとなります。

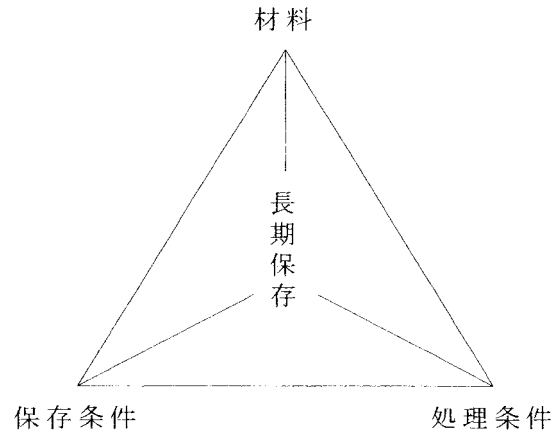


図3

写真劣化の原因

(1) 写真材料と処理

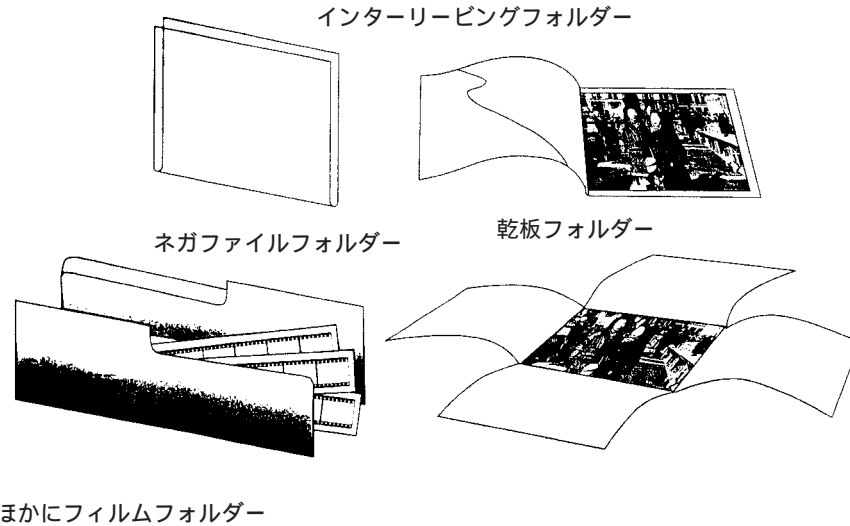
写真の保存に関しては、材料、処理条件、保存条件、など3要因を頂点とするトライアングルがありまして、この3つの条件が適切であれば、初期の画質を長期に維持することが可能で、材料も処理条件も良いが、保存条件が理想の条件の50%しか達成できないとしますと、この三角形の面積が小さくなり、保存期間も短くなることを意味します。

写真画像自身の安定性および長期保存を目的とする場合にはアーカイバル処理 - アーカイバルというのは半永久的という意味です - をします。黑白写真画像ですと、画像の定着に使用するチオ硫酸ナトリウム塩が残留しないように処理します。その後、銀画像は金調色、セレン調色など、いわゆる金メッキやセレンによるメッキを施し、外気からの影響を受け難くします。後は、それぞれの写真保存に対する工業規格の推奨保存条件の実現の程度によって、写真画像の寿命は変わってまいります。

写真の画像劣化の原因は、今申し上げた、材料、処理、保存方法、その他に観察照明と、取り扱い方、等があります。材料に関しましては、形成材料、いわゆる写真画像は銀だけでなく、カラーですと色素で作られていますし、それから顔料もあります。それと結合材です。結合材には、卵白、ゼラチン、コロジオン、アラビアゴム等があります。それと支持体の3つの組み合わせによります。それから処理方法は、今申し上げましたように、残留薬品とか未反応の残留成分、例えばカラーペーパーですと、未反応のカプラーが残っていると、保存中に白い部分がだんだん黄変します。保存には、保存用具、保存設備、保存環境などに留意する必要があるわけです。

保存用具としての包装材料については、国際規格 (ISO/FDIS18902) に細かく規定されております。例えば、包装用紙に推奨される紙の材質や水素イオン濃度 (pH 値)、テープ、インク、糊などについての必要条件が詳細に亘って記述されています。

・フォルダー類



・保存袋類

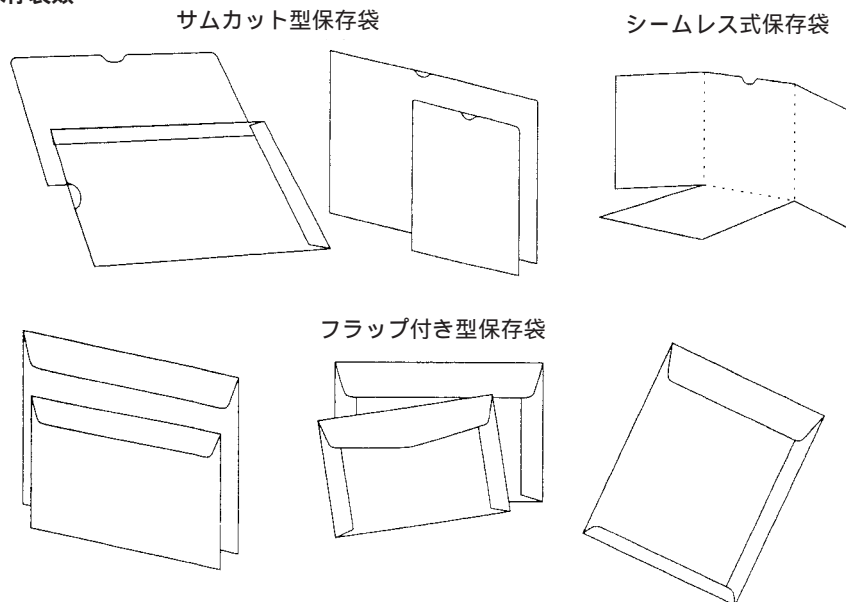


図4 写真保存用品各種(1)

(2) 保存環境

保存の設備ですが、収蔵設備の材質と収蔵場所の問題があります。収蔵設備の材質、例えば、コンクリート系の収蔵庫あるいは木質系の収蔵庫を使用するかによって変わってまいりますし、その場所が建物のどの位置にあるかが問題です。

例えば保存設備がなくて、部屋の一部を使わなくてはならない場合、これが非常に多いのですが、複写機や喫煙所がある様な場所は適切ではありません。このように場所を何処にするのかということでも保存の結果は変わって参ります。それと保存環境、これは温度と相対湿度になりますが、この内、相対湿度は非常に大切です。写真画像にはゼラチンが使用されている場合が非常に多く、相対湿度が60%を越えますと、ゼラチン乳剤層にカビが生えやすくなります。日本の気候風土、例えば東京ですと年平均の相対湿度が67%になります。相対湿度を60%以下に抑える、これが一番重要です。温度よりも相対湿度を抑える方が重要です。カビを生えさせないことが大切です。一旦、カビが生えた写真

は、非常に救済が難しいものとなります。

この保存環境中の雰囲気には、オゾンの問題があります。オゾンは、電子式複写機が帯電する時に発生します。それから窒素酸化物とか、過酸化物、硫黄化合物、いわゆる自動車の排気ガスなどガスの問題があります。それから今、火山が盛んに噴火しておりますが、火山生成物も問題です。それから化石燃料を使ったもの、石油とか、そういうものから出るガスなども問題です。また、過酸化物は一番身近なものとしてはダンボールの箱から発生します。ダンボールの箱に写真を入れていたらしゃるかもしれませんが、ダンボールの箱が古くなりますと過酸化物を出します。過酸化物は、写真の銀に影響を致します。それから物理的なものとして、塵埃ですね。ゴミが溜りますと、そこに湿気を溜め込むこととなります。湿気がたまりますと、塵が付着した部分の相対湿度が高くなり、その部分の写真画像は部分的に湿気の影響を受けます。

生物的には細菌類と虫です。

(3) 観察照明

さらに、写真の観察照明ですが、紫外線を含まないものが使われます。紫外線は非常に品物を傷めます。美術館では、放熱が少ないので紫外線吸収フィルターを付けた美術館用蛍光灯を使用しています。

さらに照射強度、つまり、明るさです。なるべく明るくない方がよろしいのです。明るくし過ぎますと、そこから変退色をしてしまう場合があります。例としまして、写真美術館では古い写真の場合、初期の写真ですが、この場合の照明は50ルクスでかなり暗い感じですが、現在の新しい黒白のプリントでは150ルクス前後の照明を致します。200ルクスには届かない筈です。その位に落として照明をしております。本来、写真は明るい程、暗部のトーンが分かり、綺麗に見えますが、作品保護のため、一応許容できる範囲内に照明の照度を落としております。それから照射時間、いわゆる展示期間によっても変わって参ります。

(4) 取り扱い

次に取り扱い方ですが、写真を傷める原因の大きなものの一つに取り扱い不注意があり、そのため傷めてしまう場合が多いです。物はいじると大体痛みます。特に指紋ですが、多くの写真はゼラチン乳剤を使っているため、画像部に直接手を触れて写真を取り扱いますと指紋の跡がついたり、其処にカビが生えたりします。それから落下と擦り傷です。写真の不注意な出し入れの擦り傷。それから運搬の問題です。一例として、台風の時に運搬するということがあって、写真が水を被ってしまったという例があります。

従いまして、保存方法が適切でも、取り扱いが不注意の為に、だめにしてしまう場合が非常に多いです。例えば、現在では乾板を取り扱ったことのない方が多く、特に、若い方は見たことも、触ったこともない方がいらっしゃると思います。落としたりして、ガラスが割れてしましますと今は修復が不可能です。嘗ては、ガラスが割れても乳剤面が付いていますと、それをきれいに剥がし、別のガラス板に移すことができましたが、現在は技術者もいらっしゃらないので復元は不可能です。乾板という、割れやすいガラス板を支持体とした写真は取り扱いに注意を要します。

材料と照明の関係ですが、一例として挙げますと、これは黒白の樹脂コートされたプリント、いわゆる RC ペーパーにプリントしたものです。全体に茶色くなっています。この作品はガラス板の代わりにアクリル板を使った額に入れましたが、一年で着色してしまいました。これは印画材料と展示方法の問題、両方を含んでおります。この印画の材料は樹脂コートされた紙で、樹脂層の中に白色材として酸化チタンが使われております。酸化チタンは光に対して活性です。それで、これを蛍光灯で照りますと、蛍光灯は紫外線を含みますから、ガラスよりも紫外線をよく通すアクリル板の中に写真

を密封した結果、銀が茶色になってしまいました。わずか一年以内で全体に色がついてしまった、という一例です。これは、材料の吟味、展示方法によって、写真の寿命が大分変わってしまう一例です。

(5) 保存方法

屋内には、写真にとって好ましくない色々な汚染物質があります。この汚染物質には、洗剤、電気製品、接着剤、塗料等々があります。今の新しい建物は、新建材を使っておりますから、新建材から出るガスも写真に影響を与えます。結局、新しい家に住むと人間自身がアレルギーを引き起こすシックハウス症候群が問題になっていますが、このような環境は写真にとりましても辛い状態であります。

それを少しでも防ぐ方法として、適切な包装材料に入れることとなります。包装は、防塵、防埃、物理的に丈夫で外圧により破損しないこと、検索や分類がしやすいことです。

それから写真保存の効率ですが、設備費用はどの程度かけられるか、保存の目標期間をどの程度にするか、10年にするのか100年にするのか、孫子の代まで永久に保存したいのか。これらに加えて写真の使用頻度との兼ね合いで保存条件と方法は変わってまいります。設備の方ですと、地震とか火災からの保護です。それから空気を適切に調節すること。空気の調節にはフィルターを使用しますが、大気汚染が、写真に直接影響しないようにすることです。このために、適切な保存場所が必要になってきます。

(6) 保存容器の役目

保存容器の役目ですが、写真の化学的劣化からの防御が大きな役目の一つだと思います。保存容器の多くは紙製です。紙は湿度を吸放出し、外からの悪いガスも紙が吸収してくれます。包装材料を厚めに使い、中に写真を入れますと、外気のガスは紙が吸収してくれますので、中の写真までは浸透し難いため外気の影響を比較的受け難くなります。温度と相対湿度の変化に対しても包装することにより、写真への影響は少なくなります。保存容器に入れることは、化学的な劣化からの防御には非常に大きな意味をもちます。

(7) 保存容器の形態

保存の容器の材質には、紙、プラスチック、金属などがあります。多くは紙です。一部プラスチックを使うこともあります。この場合には長期保存よりも、閲覧等の暫定的な保存として使っております。形態については現像処理済み写真乾板の保存方法（日本工業規格 JIS K 7644，対応国際規格 ISO 18918）の後半に解説図がついています。

インターリビングホルダーは、紙を半分に折ったものです。ここには乾板のホルダーとしてあります。先ほどお見せした例では、簡単な透明なシートに入れてありますが、見易いためにそうただけであって、本来、乾板のホルダーはこのように4つの袖があって、取り出しやすいように入れるものです。これは一例ですが、このような「たとう」を作っております。フィルムですと、図のようなフィルムホルダーがあります。勿論、これらの材質は、規格で決められています。袋ですと、一部、指で取り易いようになっているのもあります。封筒で気をつけることは、紙の合わせ目が必ず端にあることです。合わせ目は中央には絶対もってきません。真中にありますと、重ねた時に重みで写真に跡が付きますし、また、この部分には糊が使われていますので、糊の影響を防ぐために、紙の合わせ目は必ず端にもってきまして、写真にかからないように入れます。これをどの様に使うかは目的によって変わります。紙の封筒は、殆どの場合プリントを入れるのに用います。

スリーブ類ですとポリエチレンのシートで出来た透明フォルダーがあります。筒状になっておりますので、内容物が簡単に取り出せるようになっています。但し、日本では相対湿度が高いので、一旦湿度を袋の中に取り込んでしまいますと、写真がこのシートに付いてしまう恐れがありますので、必ず合い紙を入れて使うようにしております。これは、一時的な保存方法で、例えば皆様にお見せした

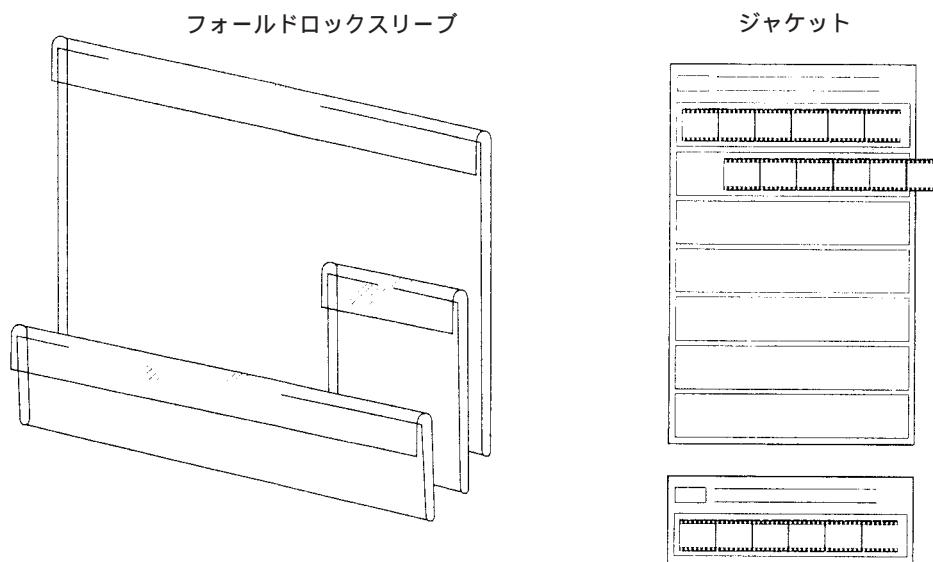
り、中身をチェックするときに見易い等、非常に暫定的なやり方です。これで長期間写真を保存することはお勧めしません。

台紙に写真を貼るオーバーマット、また、スライドボックスなどの保存方法があります。

これらの包装の形態には、それぞれ特徴があります。例えば、光からの保護が充分出来るもの、中身の確認がしやすいもの、出し入れの容易さ、保存時の傷の付き難さ、埃からの保護、というような色々目的によって少しずつ形態が違いますので、使う目的により選択すれば宜しいと思います。

写真を封筒に入れまして、次に、これを保存用箱に入れるわけですが、それには色々なものがあります。本体と蓋が別々になっていまして、前面が手前に倒れるようになり簡単に取り出し易いもの、本体に蓋が付いているもので、接着剤を使用せず組立式になっています。その他、ミュージアムソラダボックスとって、非常に頑丈な箱で中は合板の上に黒い布が張ってあり、欧米ではよくこれを使っています。ところが、これには少々問題があります。接着剤が使われているのです。使用されて

・スリーブ類



・ボード類

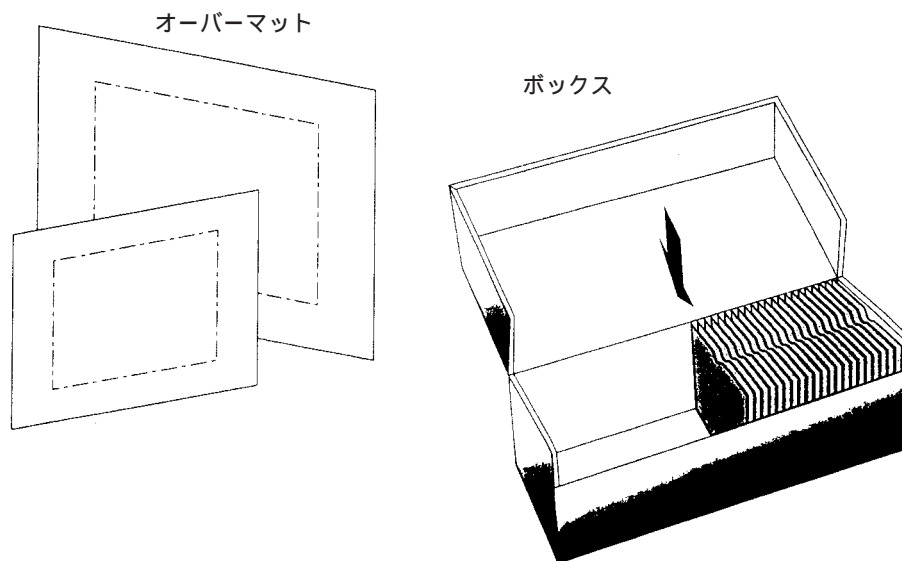


図5 写真保存用品各種(2)

いる接着剤は一応写真には適性があり、大丈夫だと言うことなのですが、写真美術館では恐いので使ってません。中性紙で作った紙箱を使っています。

紙製の箱を使用する理由は、一つは経済的な面もあるのですが、紙は使用頻度と共に汚れてくるものです。多量に写真がありますと、使う写真と使わない写真が必ず出てきます。使わない写真を入れた箱は蓋を開けることもなく、何年も眠っていることになりませんが、使う写真は比較的よく目に触れるので、写真の状態を観察することが出来ます。紙の箱は汚れますので、汚れますと箱を取り替えなければなりません、その時、中の写真を見ることになります。使わない写真も何年かに一度は必ず見るようになります。

(8) 保存条件

前に申し上げました紙の箱をどのような状態で部屋に置けば良いか、という事になります。先ほどセルロースアセテートフィルムの保存には、非常に問題があると言うことを申し上げました。現在使用されている一般撮影用フィルムの大部分がセルロースアセテートフィルムです。特に黒白のマイクロフィルムは長巻きですので、保存には注意しなければならないのです。15年位前にマイクロフィルムの劣化で非常にセンセーショナルな記事が新聞に載りまして、大変に騒いだことがあります。書籍などをマイクロフィルム化しておけば絶対に大丈夫だと言う保証の基に、1960年、アメリカの議会図書館では蔵書のマイクロフィルム化が行われました。20年後に、それが劣化しました。原因は、セルロースアセテートフィルムは加水分解、つまり湿度が高くなり水分が加わるとこのフィルムベースは分解します。フィルムが金属缶に入っていてその中の相対湿度が高くなると、水分がこもり加水分解して、お酢の匂いのする酢酸を放出します。その上、金属が触媒になりまして、さらに酢酸を放出する事で、フィルムのベース劣化が累進して、結果的にはベースがもろもろになってしまいます。それと同時に銀画像も劣化して、消失してしまいます。従いまして、セルロースアセテートフィルムの保存に関しましては、開放性の容器を使います。開放性というのは、いわゆる紙の容器です。ですから今は全部紙箱の容器に置き換えています。

一般的に使用される黒白のフィルムは、撮影後に透明あるいは半透明のプラスチックのシートに入っていますが、これは長期保存には危険です。密封の状態に近く、マイクロフィルムと同様に劣化致します。せっかく撮影したフィルムが保管中に駄目になってしまう例が多いのです。

写真をお撮りになる方で、日本は湿度が高い国だから、フィルムの保存は缶に入れておけば大丈夫だと思って入れている方がいらしたら、早速開けてみてください。もし、ぷーんとお酢のような匂いがしたら、それはもう劣化が始まっています。一旦、劣化が始まると、それを防ぐことはなかなか困難です。酢酸の匂いは開放しておけば抜けますが、劣化が始まったフィルムは開放性の箱に入れても、その進行をくい止めることは極めて困難です。

開放性の容器は安全と思いがちですが、それも保存の仕方次第です。一例ですが、黒白ネガを非常に大切にしている方が、日本古来から使用されている桐箱は空気の流通もあり、湿気にも強くネガフィルムを保存するのに最適であろうと判断し、桐製のネガ筆筒を特注しました。始めは余裕のある入れ方でしたが、徐々に量が多くなり、詰め込む様になってしまいました。ある時、その筆筒の前を通るとなんとなくお酢の匂いがするようになりました。結局どんどん詰めこんだために空気の流通が悪くなり、例え通気性のある桐の箱であっても、密閉状態と同じような状況になり、その結果、フィルムの画像は全然なくなってしまい、フィルムケースの紙もボロボロになってしまいました。桐箱を使用してから、わずか20年位でフィルムが劣化してしまいました。これがそのフィルムと袋です。これは、袋を開けて匂いを嗅ぎますと、大変に酸っぱい匂いがします。もう画像がなくなってしまっていますが、画像がたとえ残っていてもフィルムの平面性は悪くなっていますので、複製品を作るため

の複写も困難になります。

大切な写真は、複写をしてネガ・フィルムで保存するのが一番良いとされていますがその保管を誤りますと何10年後かには画像がなくなってしまっている、という状態が生じる可能性が非常に高いので、特に注意が必要です。

(9) 規格による保存条件

フィルムの保存条件ですが、これは日本工業規格 JIS K 7641 (対応国際規格 ISO18911) 写真 - 現像処理済み安全写真フィルム - 保存方法、に詳述されています。安全写真フィルムとは、可燃性の硝酸セルロースフィルムを除き、セルロースエステルやポリエステルフィルムのことです。

レジュメの表の中期保存とは10年以上を考えます。その場合に、相対湿度は60%以下、許容温度は25℃です。規格には、写真を永久に残したい場合は、相対湿度を50%以下に抑え、温度を21℃までとするように規定されております。これはベースがポリエステル、商品名ではマイラーと呼ばれていますが、この場合でも相対湿度60%以下、温度25℃で、セルロースエステルと同じです。

カラーフィルムの場合ですと、相対湿度30%以下、中期保存ですと10℃です。長期の保存になりますと、温度は2℃となります。これが規格で規定されているフィルムの保存条件です。

カラープリント、黒白のプリント、乾板に関しては長期も中期も規定はないのですが、黒白のプリントですと相対湿度30 - 50%、保存温度は15 - 20℃、カラープリントは2℃以下にすることが望ましいとされております。

ガラス板上に画像が固定されている写真、例えばコロジオン湿板、乾板、カラー乾板(オートクローム、スクリーンプレートなど)の場合ですが、相対湿度は20 - 50%とし、特に40%以下とするのが望ましいのです。温度は20℃以下にします。しかし、カラー乾板に関しては保存温度を2℃以下にすることが望ましいとされます。現実の問題として、2℃や20℃の保存が可能かどうか。現実には、この規格に準じて保存条件を満たしている施設はあります。

写真美術館の場合は規格通りには出来ておりません。相対湿度は50% ± 5%にしております。この数値は変動しますが、60%を越えない様にしてあります。湿度は、写真の種類に応じて変えなければなりません。資金の問題で困難でした。そこで相対湿度は申しましたような条件として、保存庫を三つ作りました。一つは、規定の温度2℃を実現できず、5℃としました。ここには硝酸セルロースフィルムを収蔵します。これは可燃性で、低温で保存する必要があります。それから古いコダクローム、1985年以前の発色現像方式によるカラーネガおよびポジフィルムならびにプリントなどを収蔵いたします。1985年は昭和60年です。カラーフィルムが出てまだ新しい時代です。この時代のフィルムも規定では2℃の収蔵に該当します。これには驚かれるかもしれませんが、実はこの昭和60年を境にして、日本も外国もカラーフィルム、カラープリント、などがかなり丈夫になっております。これ以前の発色現像方式のカラー写真は非常に色素が弱いので低温で保存することになります。

それから10℃の保存庫には昭和60年以降のカラー写真が収蔵されております。その他の写真、黒白とか古い写真の中でも銀画像の写真、それから顔料などで出来た写真などは全部20℃の収蔵庫に収納しております。一つの例ですが、このような実際の収蔵の状況もあります。

(10) 実現可能な保存方法

それでは、収蔵庫がない場合の写真保存はどうしたら良いか。収蔵庫というのはそれなりの目的で造らないと中々得られないものです。既成の建物の中で保存する場合にどのようにしたら良いか、ということになります。これはレジュメの方にもっと詳しく書いてありますが、まず保存容器は、通気性の良いものを使います。それから正常な空気環境の所を見付けます。正常、というのは事務室など複写機のある場所とか、喫煙所などを避けることです。年間を通して温度と相対湿度の変化の少ない

所を選びます。成る可くなら冷暗所が好ましいのです。レジユメに床上40cmと書いてありますが、床に直接置かないということです。また、積み重ねない。積み重ねるといのは、例えばアルバム等ですと、横にして積み重ねますと、下の方の写真は重みで圧着する可能性が非常に高まります。その他、相対湿度を60%以下に抑えることです。これは非常に大切です。温度よりも湿度のコントロールに重きをおくことが大切です。湿度のコントロールがどうしても出来ない場合には、写真の量が少なければ、低湿庫が市販されていますから、これに入れて保管する場合があります。これですと収蔵庫がなくとも実現可能と思います。

(11) 写真画像の堅牢化処理

その他に、これから保存用として写真を作る場合の事ですが、写真画像の堅牢化処理を致します。まず、写真の材質を選ぶことも必要ですが、カラー写真と黑白写真のどちらが保存性が高いかと申しますと、黑白になります。現在のカラー写真は、以前と較べると堅牢性が良くなってきておりますが、黑白のバライタ紙のプリントには太刀打ちはできません。実験的に、黑白のプリントは、長期間強制劣化を行ってもあまり変わりません。したがって、どうしても画像を残したい場合にはバライタ印画紙の黑白画像で残すのが一番よろしいと思います。その写真印画ですが、多硫化調色とか金調色を施すと長期の保存に耐えるようになります。調色というのは銀画像を他の金属に置換し、大気中の汚染ガスなどから保護することです。そうしますと、非常に綺麗に長期に亘り保存することができます。一世紀以上前の写真が良い状態で残っている場合は大体調色をしております。

(12) 規格、保存用品の購入方法

今までお話ししました現在のフィルム、印画紙、プリント、乾板の保存に就きましては日本工業規格 (JIS) に、詳しく保存の方法、温度と相対湿度の関係などが非常に細かく書れております。これは、

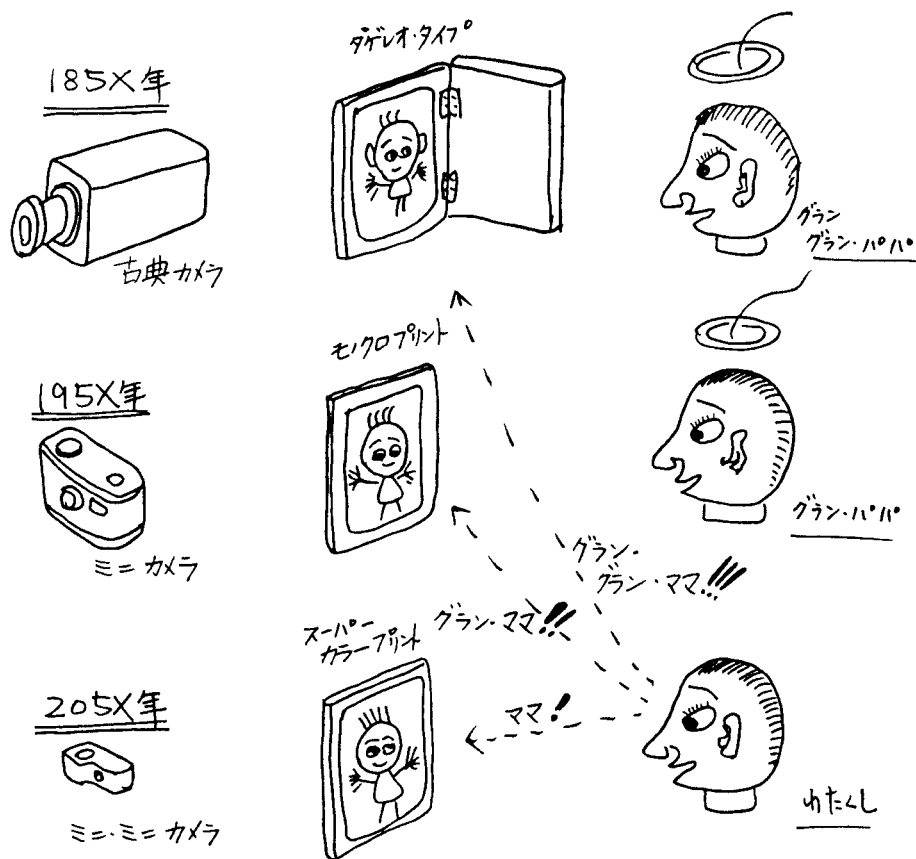


図6 ヒューマンリーダブルシステム

どなたでも買い求めることが出来、日本規格協会で一冊1,000円足らずで買うことができますので、ご興味があれば、もしかしたら勤務先の図書室に入ってるかもしれませんけど、入手されると良いと思います。

それと、写真の包材、つまり紙とかテープ等をどの様にして選んだら良いかということになりますが、現在は日本には3つの会社から市販しております。その殆どが輸入品です。国産品は極く限られたものしかありません。写真保存用の包装材料は、写真画像への影響度試験方法というJIS規格が有りまして、この試験にパスすることが必要とされます。写真用として市販されている物の中には、この試験でパスしない物も一部ありますので、写真用だからと安心して使うというのは危険が伴います。この試験をして、実際に良い物と分かったものを使うことになります。日本には古来から和紙が有りまして、和紙は千年の歴史をもっていますので、和紙を使うのも一つの方法であります。その場合もやはり、この試験に合格したものを使うことになります。

(13) 写真画像のデジタル化

写真画像の保管は大変ですので、デジタル情報として取り込み磁気材料、光ディスク、光磁気記録、などにしておいた方が保管場所もいらないし、一番簡単ではないか、と言う意見もあります。これに対しては、結論から申し上げますと長期の保存には向きません。この方法を採用する場合は、検索システムに使うとか、画像情報を全国ネットで公開するのには良いでしょう。

この場合には、記録された画像情報を読むのに装置が必要となります。同じシステムの装置がないと読むことも見ることもできません。装置やシステムは年々必ず変化して、新しいものが出てまいります。例えば録音機です。昔は、オープンリールの装置が使われていましたが、今それを聞こうとすると、オープンリールのリーダーの装置がないと聞くことが出来ません。それと同じように、装置やシステムは年々進歩して変わってまいります。もしこの方法で保存する場合には、装置を複数、少なくとも2台必要になります。メーカーはある程度その修理部品の保証に関して、スペアを取っておきますが10年位でしょう。機械が故障した時に、修理部品を取るために1台余分に保管しなければならないこととなります。それとシステムがどん

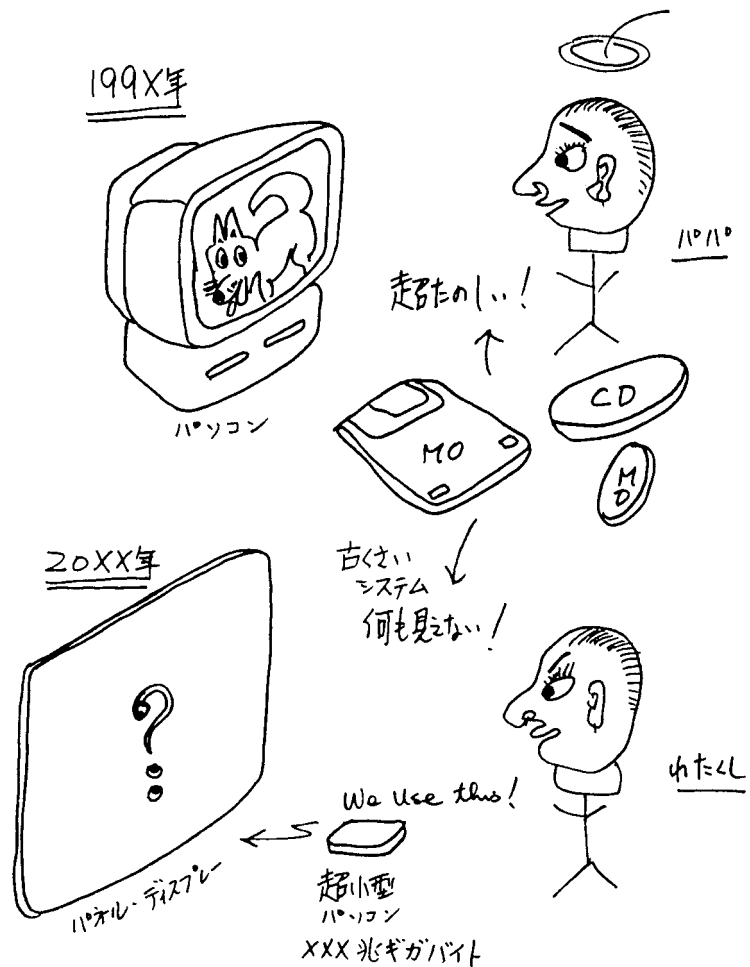


図7 デジタルメディアの問題

どん変わってしまいますから、次のシステムで読む、見る事が出来るかどうか、その保証もないで

すので、この方法は保存という点ではお勧めできません。

今申し上げたのは、現在は、パソコンで画像を再生できますが、これが何十年後かのシステムで、このフロッピーに記録された画像を見ようとしても、もうシステムが古くて見る事が出来ません。一方、人間読み取り型、ヒューマンリーダブルというシステムですと、1850年代の古いダゲレオタイプの写真、時代が新しくなって1950年代の黒白のプリントなど百年の年月を隔てても、直接人間は見る事ができます。何世代か前の、もう天国に行ってしまった人が残したプリントも、すぐ見る事ができます。装置読み取り方式ですと多分1世紀経つと見る事ができなくなります。そうしますと、現在、お金をかけて写真をデジタル化していますが、決して保存に向く訳ではありません。次の新しいシステムが出来るごとに情報を変換する必要を生じるでしょう。例えば、磁気記録のフロッピーからCDへ、CDからDVDへというように。今すでにそれが始まっていますし、今後も続くことでしょう。

以上、非常に簡単に概略をお話しました。次にスライドで古典写真をお見せしながらご説明いたしましょう。

スライドをお願いします(以下、スライドの説明)

ダゲレオタイプ・銀板写真

写真発明以来今日までに、どのような写真があったのかというサンプルですが、これはダゲレオタイプという写真です。殆どがケースに入っております。これは一回の撮影で一枚の画像しかできません。現物のダゲレオタイプを持ってきております。前の方に置いておきますので、後ほどご覧下さい。

初期の写真は、ダゲレオタイプ、アンプロタイプ、ティンタイプ、など皆このようなケースに入っています。ケースは革であったり、樹脂製であったり、後にはきれいに象嵌されたものなどがあります。当時、写真が非常に貴重なものであった事が分かります。初期の頃は、撮影時間が30分位の時代がありました。

湿板写真・アンプロタイプ

日本の場合は湿板写真以降からの写真が多く残っております。なぜ湿板写真かと申しますと、ガラスの上にコロジオン乳剤を塗りまして、湿っているうちに撮影をしたからです。出来上がった写真はガラスの裏面に黒い裏打ちをし、桐の箱に入れて保存します。

鶏卵紙・アルビューメンプリント

鶏卵紙は非常に長い期間使われてきましたが、鶏卵紙の元の色はセピア色です。この鶏卵紙は、黄色く変わってしまっています。多分これは処理が悪いためでしょう。これが、保存環境が悪いために変色する場合は全体的に変色するのではなく、周囲から変色します。画面の周囲から、黄色くなってきまして、普通は真中の辺りでは大体初期の色が残っているものです。これは処理が悪いために、全体的に黄変した例です。

これも鶏卵紙ですが、鶏卵紙の写真で作られたカードは名刺代わりに使われた時代がありました。台紙に貼ってありますが、これは台紙が悪いため、このようにぼちぼちと、茶色の斑点が出ています。大体、昔の写真の場合は台紙が悪いものが多いのです。多くの場合、表面には綺麗な加工紙が使われておりますが、一皮剥くと非常に汚い台紙が多くあります。台紙が悪いために写真が駄目になる例が多いです。

裏側にサインのあるこの写真は、名刺代わりに鶏卵紙が使われた例です。日本でも、古い写真です

と鶏卵紙が非常に多いです。大体は、このように黄色くなっています。銀画像の堅牢化処理として金調色などを施していなければ大体が黄色くなっています。鶏卵紙写真は、このようにアルバムに貼られておりました。その一例です。

これは欧米のものですが、名刺代わりに自分の写真を台紙に貼って使っていたものです。この写真は金調色してありますから、ほとんど劣化がないのですが、こちらの別の写真は部分的に黄変しています。やはり、調色つまり堅牢化処理してあるものとないものとの違いが、このような長い年月になると顕れて参ります。

プラチナプリント

これはプラチナプリントといえます。プラチナの印画像は非常に丈夫ですが、一方ではここに見られるように、うっすらと合い紙の方に画像が転写してしまう場合があります。

青写真

これは青写真方式で作られた写真ですが、日本では、建築や機会の設計図面に使われましたので良く知られております。しかし、このような一般的なシーンをプリントした写真は少ないです。欧米では、ごく普通のシーンの印画として使われていましたから、青写真印画が比較的多く残っております。

ゴム印画、湿板写真とゼラチン乳剤のネガ

長耐久写真の例です。これはゴム印画で顔料にカーボンを使用したカーボン印画です。その他の顔料も使われました。顔料で作った写真は画像が非常に丈夫なので、全然劣化してない写真の例です。

これは鶏卵紙の原板として使用されたネガ、いわゆるガラス板に作られた湿板写真のネガです。こちらが普通のゼラチン乳剤の写真画像です。これから古い資料などを見ると、このような湿板写真ネガが出てくる可能性が高いと思います。

ゼラチン乾板ネガと湿板ネガをどのように区別すればよいかについては、湿板ネガはコロジオン膜で作られてあり、処理、乾燥後は表面にニス塗ります。年月を経るとニスは銜色になります。湿板の時代は、自分でコロジオン乳剤を塗布しましたのでガラスの端に指で持った跡が残りますので、見分けられます。なぜこれが大事かと申しますと、湿板と乾板、つまりコロジオン乳剤とゼラチン乳剤は修復時、例えば清拭したい時、湿板はアルコールを使うと画像が剥がれますので多くの場合水を使います。乾板のゼラチン乳剤の場合は水で拭きますと、ゼラチンは水を含むと膨潤しますから、その跡がついてしまいます。

このように材料の見分けも保存には非常に大事になって参ります。

菊地東陽の作品

非常に良い印画ですが、約100年前のプリントです。撮影者はオリエンタル写真工業株式会社（現・サイバグラフィックス）の創設者、菊池東陽がニューヨークに写真館を開いていた時に撮影・プリントされたもので金調色が施されています。これらの印画は約70年間に亘り洋服の空箱に無造作に入れられ、土蔵の中に置かれていました。この印画は、何処にも画像劣化が見られず、非常にきれいな状態です。この例では、工業規格の規定に係わらず、日本の土蔵の中で無造作に保管されておりました。土蔵は、温度や相対湿度の変化が比較的少ないのですが、必ずしも相対湿度が60%以下と言うわけではありません。しかし、温度と相対湿度の変化が少ないという事により、このように写真が良い状態で残ったものと思います。この例のように、土蔵があれば収蔵庫の代用として使うのも一つの方

法と思います。

以上、非常に概略的ではありますが写真の保存についてお話致しました。

どうも有り難う御座いました。

司 会：どうもありがとうございました。基礎的な部分の知識からかなり専門的な部分まで、色々なことを教えて頂いたのですけれども、どなたか御質問等があれば、まだ時間は若干ございますので、お受けしたいと思います。

先ほど話がありました、バライタ紙の、なんといいましょう印画紙なんてものはあんまり使うことがなくてね、普通頼みますと全部 RC ペーパー（樹脂加工紙）といいましょうか、富士だったら WP ペーパーにプリントしてあってですね。ちょうど僕ら、つい最近ですけど出始めて、最初使いにくい印画紙だなあといいながら使った覚えもありますけれども。ただ乾燥が非常にやりやすいものですから、全てそれになってきているような感じですね。

荒 井：残念ながらそうです。やはりバライタ紙のほうが保存性は良いのです。これは強制劣化した場合でも、RC ペーパーよりもバライタ紙の方がいわゆる最高濃度が高いままで維持されます。RC ペーパーですと少し最高濃度が落ちてしまいますので、その写真を次に複写した場合、トーン不足が問題になるでしょう。ですから私は RC ペーパーに焼くことをお勧めしません。写真美術館も RC ペーパーでは受け付けておりません。作品は、全部バライタ紙にプリントし直してもらって、それで保存する事になります。RC ペーパーも非常に水洗時間が短くてすみやすいので経済効率が高く、それは使い方次第で保管や検索に使うとか、使用目的によって使い分けることが必要なのではないかと思います。

司 会：いかがでしょうか。どうぞ、御質問等あれば。

質問者：保存材についてですが、桐の箱とクリーニングする水、それから中性紙、それから土蔵という、非常に日本的な古来からあるものが出てきましたが、桐箱にしましても桐の材質というものがあると思います。それから水にしましても水道水もあれば井戸水もありますし。それから紙も中性紙ということで、pH の問題になる訳です。古来の方法で作ってる産地も当然あると思いますし、土蔵ですが土蔵も最近なかなか見る機会が少ない訳ですね。それで土蔵の構造ですね、土と藁でこねて作ってあるし、壁の厚さという問題もあります。それから地上からどの程度はなれているか。そういう中に貼ってある板とか、貼ってない場合とか、そういう個々の影響があるんですか？ 簡単で結構ですから、その点の、材質のことについて教えて頂けますか。

荒 井：桐の場合は、木質の問題があります。木は酸を出します。木酸を出しますから、桐を使う場合には相当枯れた桐を使わないと駄目だと思います。もし桐をお使いになるのであれば、酸が抜けきった枯れたものを使うことになるでしょう。それから紙ですが、紙に関しましては、これは国際規格 ISO/FDIS18902 に細かく規定されています。例えば、アルファセルローズが何%以上のものとか。現実の問題としてどういう紙がそれに相当するかは分からない訳ですね。保存用包装材料を取扱っている会社にお問い合わせ下さい。普通の紙屋さんではそのような品物はないと思います。それから土蔵ですね。やはり壁が厚いことで、温度と湿度の変化が少ない、年間を通して恒温ではなくても、いわゆる緩やかな温湿度サイクルであるということがよろしいのではないかと思います。写真に限らず何でもそうですが、温度と湿度の変化が激しいと、人間も体調崩すのと同じように、写真作品や芸術品などにもやはり非常

に辛いことになると思います。例えば、非常に湿度が低くなりますと、ゼラチンを使っている写真印画の場合は膜面にひび割れを生じてしまいます。湿度が高い場合にはカビが生えやすくなり、また、接触してる物と張り付いてしまいます。したがって、湿度・温度の緩やかな変化サイクルの土蔵は保存にも非常に良いと思います。どこでも土蔵から出てくる物は大体きれいな状態で出てきます。これで、よろしいでしょうか。

質問者：あと水を…。

荒井：水ですね、塩素を含んでいるものは避けて、蒸留水とか、精製水を使った方がよろしいと思います。

カラー作品のことを申し上げるのを忘れましたが、カラー感材についてはレジュメに写真画像の構成を簡単に書いてあります。黑白の場合は支持体の上に銀画像がありましたが、カラー感材の場合は支持体の上に3つの色素画像層があります。ネガやスライド画像の場合は上の層から、黄色、マゼンタ、シアンの層構成です。この3つの層構成がそれぞれに条件によって変化をします。まず、黄色の色素は、湿度が高いと水分を吸収して加水分解します。ですから、湿度の高いところに長く置おきますと、黄色い色素が破壊されて、画像の色調が全体的に青っぽくなります。あと、シアンの色素ですが、酸素の存在がないと安定しません。一番いい例が、フリーアルバム、アルバムの台紙に透明なシートをかけるものですが、それに写真を保存されている方がいらっしゃったら、長い保存では写真は赤っぽくなっている筈です。それは、シアンの色素が破壊された結果です。ビニールシートをかけることによって、酸素の供給が悪くなりシアン色素が破壊されて、全体的に赤っぽい画像になります。このように、3つの層で、それぞれ色素の挙動が違いますので、温度と湿度に留意すること、包装材料を選ぶことなどが非常に大事になってまいります。

質問者：質問は2つあります。広告会社の者ですが、35mmのカラースライド、殆どこれはロールフィルムで撮られた物なんですけど、GEPE社のスライドマウントを使用しています。

荒井：ガラスのスライド・マウントですね。

質問者：あれはいかがでしょうか？

荒井：長いと駄目だと思いますよ。多分長期には。

質問者：ああ、そうですか。我々はネガにしてもポジにしても、そう長期間はもたないという意識で付き合っているのですけれども、個人的には、なるべく自分の作品だったポスターなんかをスライド化して、保存しておきたいな、という気持ちがあるので。

荒井：傷がつかなく、平面性が良いことで、宜しいんですけども。多分、余り長い保存では空気遮断が心配です。

質問者：あとは、6×6とか、4×5とか、大きいサイズのフィルムでは空気が遮断されている、いわゆる写真フォルダーというのがありますが、ああいうクラシックスタイルで作られたようなものがありますね。ああいうものはどうなのでしょう。

荒井：多分保管の仕方だけだと思いますけど、長期の保存ということを考えた場合、私はお勧めしません。

質問者：あと、僕の場合は35mmのコダックの場合だとスリーブに入っていますよね？現在はそれを剥がしてフィルムだけをはずしてマウントに入れるんですけど、それをまあ、どっちがいいんですか？紙のまんまがいいのか、ゲペに置き換えての方がいいのか。単純に比較論なんですけど。こっちが15年で、こっちが20年だったらま、ま私は25年位のがいいかなと思っていますんですけど。どうなのでしょう。

荒井：多分、開放する方がよろしいと思います。ゲペ社のああいうガラスでサンドイッチするというのは多分、良くないと思います。

質問者：ただ、取り扱いが簡単だというのがありますよね。

荒井：保存を目的にするか、活用（利用）を目的とするかで、方法を変えますが。保存と活用とは、非常に相反するものでして、難しいのですが、あくまでも保存をしたい、というのであれば、保存用と活用用と、写真作品を別々にしないといけないですね。

質問者：なるほど。カラースライドをスライド枠に入れる時には手の垢とか、埃とかつくものですが、我々がやるときに、ゲペでプレゼンテーションをするのですけれども、保存する場合にはファイル、いわゆるファイルに入ったままの、元の出荷時、というか、紙のファイル、あるいは自分たちで紙マウントで糊を貼ってつけるやつがあるんですけど、そういうことでよろしいんですか？

荒井：その紙はやはり中性紙ですね？

質問者：まあ、売ってる物なので質まで分からないのですけども。ありがとうございます。

質問者：2つあるんですが、カラーとモノクロの保存の条件が違うので、分けて保存した方がいいとおっしゃったんですが、実際に保存する場所が1つしか実現できないといった場合には、一緒にそれを混ぜても、そのこと自体には問題はないんでしょうか？

あともう一つは、タトウ紙に入れて保存をされるという方法があるということですが、それは実際最後には棚に入れるとかするのでしょうか？

荒井：そうです。

質問者：それは箱に入れること自体に意味があるのか、それともその出し入れの問題とかそういったものがあるのか、その辺を教えてくださいたいと思います。

荒井：2番目の方からお答えします。これは保存箱ですが、これは一例ですが、このようにフォルダーにカラープリントをこのように包んで箱に入れます。フォルダーのまま剥き出しですと周辺環境の影響が大きいですから、必ず保存箱に入れて、そして棚に置くことになります。これが何段も、2段か3段に重なるわけですけども。

質問者：外からの影響も。

荒井：外からの影響、つまり周辺環境の影響もありますので、包めば包むほどその影響が少なくなります。大事な物はさらに包み、これを封筒に入れるなりして、二重、三重に包んで保存箱に入れる、という形になります。正倉院の御物も、今きれいに残っているのは、凄く包んであるのです。そして、また櫃の中に入れてある。いわゆる外からの影響を少なくしてあるわけです。そのように包み込みますと、温湿度の変化も受けにくいですから。それでも、外側の箱は、外気の空気を吸い取りますから、ある程度の年限が経ったら外側の箱は新しく交換します。それから、カラーフィルムと黑白フィルムを一緒に保存する問題ですが、それは分けた方が良いでしょう。

質問者：あの、同じ部屋で似たような…。

荒井：結局、場所がなければですが、保存箱を、カラー用と、黑白用の箱と分けます。まず第一に保存の温度が違うことが問題です。結局、温度が違う条件を満たすことがなかなか求められませんから、同じ場所に入れることになりますね。

質問者：物理的には別にしたって、実際には…。

荒井：もう、その場合には仕方がないわけです。

司会：時間が随分経っておりますので、あと御一方のみどうぞ。

質問者：写真包材の写真画像への影響度試験方法を日本で行う見通しみたいなのがあるんでしょうか。

荒井：どの様な形ですか？

質問者：例えばアメリカの IPI (Image Permanence Institute・ロチェスター工科大学画像保存研究所) とか。

荒井：あー、あのような形ですね。

質問者：公的な機関がやっているような見通しというか動きというか、いかがでしょう。

荒井：今のご質問は、写真包材の写真画像への影響度試験方法に関してですが、包装材料の材質が写真画像の保存に適しているかという試験ですが、これはアメリカではロチェスター工科大学の画像保存研究所が有料で受けております。例えば、自分がこういう材料を使って写真を保存したい、その材質が大丈夫かどうかという試験は、アメリカのそこに頼みますと結果を出してくれます。日本の場合は、今のところ公的な機関でその試験をする予定は全然ありません。その試験が出来る場所は、感光材料および製紙メーカーなどは当然出来ますが、公的な機関で出来るのは2つの大学と、東京都写真美術館、などです。恒温恒湿装置があればそんな難しい試験ではありませんが...

司会：それではどうも、先生ありがとうございました。いろいろご質問にもお答え頂きまして、一応これで荒井先生の御講演を終わりにさせて頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

荒井：どうもありがとうございました。

(平成12(2000)年7月15日 國學院大學百周年記念館AV教室にて)

講演記録『峠の祭祀 - 神坂 - 』

杉 山 林 継

(國學院大學日本文化研究所所長)

1 . 神坂峠の発掘調査

昭和43年 (35年前の発掘調査)

思い出話を、35年程前の発掘調査の事を喋ろうと思っております。少しレジュメは作っておきましたけれども、安易なレジュメでございます。神坂峠と入山峠 - 特に神坂峠のところを書いたものを2枚 - と、それから大場磐雄先生の「古東山道の考古学的考察」。これは実は、大場先生が亡くなられてから入山峠の報告書を作ったものですから、その時に再録させて頂いたものであります。

殆どの方はご存知かと思いますが、神坂峠は信州の入口です。信州の西から来ると入山峠が出口になります。東から来ると逆になるんですけども、入山峠で祭祀遺跡を発掘しております。また、神坂峠の発掘は、先程、村長さんが最初に挨拶されましたけれども、大場先生を団長に、そして副団長を名古屋大学の榎崎彰一先生にお願いして、更に当時、大沢和夫先生が会長をされていた長野県考古学会、この三者による共同事業、国庫補助金事業でやろうという話になりました。実は、中央道がもう関係していたのですが、神坂峠保存という事を考えまして、国の史跡にどうだろうか。その事を含めての発掘調査が、大場磐雄、榎崎彰一、大沢和夫をチーフにした調査団を結成するという事で行われました。もちろん、この陰には先程村長さんが言われた様に、林茂樹さんが関係していたんですけども、更に言うならば一志茂樹先生がバックにおられました。今ここに居られる方は長野県の方がかなり多いのでご存知だとは思いますが、一志先生という方も若い方にはもうあまりなじみが無くなってはきました。しかし一志茂樹先生とかあるいは原嘉藤先生とか、これらの先生方が、長野教育界では非常に重要な位置におられました。一志先生は、実は大場先生の事を「河童、河童」と言っていたのですが、大場先生は一志先生の事を「熊、熊」と言って、非常に昔から仲良しと言うか、お付き合いの古い方々でありました。神坂峠の方が1年早い訳ですが、昭和44年の入山峠の調査の時にもその一志先生が「地元だけでは駄目だ、ちゃんと中央の学者を交えてやれ」とかなり強い意見を言われました。

そして入山峠、実は発掘調査をした所はぎりぎりの事から言いますと、本当は群馬県側です。ちょうど向こうも県境でありまして、発掘現場でもって線を引いてみると、実は群馬県側がほとんどでした。しかし、軽井沢町が事務局を引き受けるという事で長野県側で調査するという事に話し合いの上で決まっていたのは、それには実はその1年前の神坂峠の調査があった、という事が大きな原因でありました。

話を戻しますと、神坂峠はその三者の人達が出て発掘調査をする。私がたまたま大場先生の助手をしておったものですから事務局的になりまして、國學院の学生、大学院生、それから榎崎先生のところの助手、大学院生等を含めて僅な期間でしたが調査をしました。

この調査にはもちろん大場先生の思い出も相当ありました。その前に昭和26年の調査をされていまして。後で大場先生の写真もちょっとありますが、その写真は遺物の写真しかないんです。ですけども現場の写真がある筈なんです。ある筈なんですけれども探してみたんですが見つかりませんでした。その昭和20年代にも登られて調査... その頃ですと昭和26年頃ですから試掘と言いますかつついてやっけていまして、神坂峠に関してはかなり思い出もあつた。重要な遺跡であるという考えが

あって、そして昭和43年の調査になったという事なんです。

調査の細かな事自身は一応報告書も出してあります。ただ、報告書はその年（昭和43年）の発掘の遺物、あるいはその時の調査のことだけしか書いてありません。ですから以前における調査の資料とか、あるいは周辺についてはいずれ改めてやろう、という話になっていたまま35年経っています。

実は先程、今村先生の方から資料を頂戴しましたけれども、あるいは岡田正彦先生からお話もありました様に、この地域には関連する細かい遺跡が非常に沢山あります。それを本来ならば一括して纏めて検討・考察する必要があると思うんです。ただ、あの報告書は補助金事業という事もあったものですから実は少々急ぎまして。その当時（昭和43年）の発掘に関するものしか報告していない、という事は未だ私も申し訳ないと思っております。

日本一高い調査費

今日は原田さんがおられるけれども、あの当時文化庁で平米単価のすごく高い発掘調査だと担当の方から言われました。申し訳ない。だけど標高1,500m... あの当時標高1,500mを掘っているところは滅多になかったものですから。「標高1,500mからのところを掘っているんだから勘弁して下さいよ」と私は言った覚えがあります。平米単価が高い。今考えるとそんなに高くはないんですけども、昭和43年当時の周りの調査からみると平米単価が高すぎるという事で「お前、事務局やっているんだろう。これ高すぎるぞ」と大分言われました。言われましたけれども、しかし仕方がないかなと思えました。さっき村長さんの話にちらっと出ました原教育長さん。毎日荷札が足りない、マジックが足りない、何が足りないと言うと発掘が終わってから、宿舎から山道をとととと下りられるんです。下りられてですね、朝仕事が始まるまでに何かしら調達して上がってくるんです。片道3時間半かかりますから、下りていった時には暗くなっているし、上がってくる時も暗い筈なんです。あまり申し訳ないから、あの当時もう既に林道が途中まで来ていましたので、西側を下りたらどうですか。こちら側だと30分下りると車を置いておけば... と言うんだけれども、絶対やっぱり自分の村の方へ下りられるんですね。これはもう、本当に私は感心して。教育長が毎日の様にそれをやって担いで下りて行って、また皆が足りないと言ったものを持って帰ってくるんですね。結構そういうのを見ていまして、長野県というところをご自分の地域というものを大事にされている。一つは、調査費の問題も色々関係していたんだと思いますけれども、それにしても大変な状態という風に私は思っています。

この三者が協力してやったという事には理由もあります。報告書にも出ていますが大場先生は割合早くから長野県に色々関係していました。それから榎崎先生も焼きものをやっておられましたから、その焼きものの関係で後に調査されていますけれども。大場先生の文章の中に出てきます（「瓷器の道」）。器の焼きもの、特に東海の焼きもの - 灰釉陶器 - の入ってくる灰釉陶器の道というものを榎崎先生が言われていますので、そういう様な事も含めて、調査した時の土器については榎崎先生の方で全部整理して頂きました。あと石製模造品その他については國學院の方で整理したという手分けをしております。

写真資料のデジタル化と活用

後で一部スライドに、人物としてはそのお三方だけは入っているんですが、本当は今日ご出席の宮沢恒之先生をはじめとして今日お見えの何人かの方が参加しているんです。考古学の写真を後から見るとつまらないものだなと思ったのは「皆邪魔だからどけ」と言って写真を撮っているんですね。そう言って写真を撮っていると、35年も経ってみますと何故人物を入れて写真を撮らなかったんだというのがものすごく感じられます。

実は昭和50年に大場先生が亡くなられて、先生の遺言で考古学関係の資料を全部國學院で貰ったんですが、中々全部整理がつかない。つかないうちの一番最大のものがガラス乾板だったんです。ガラス乾板が約4,000枚ばかりあるんですけども、そのガラス乾板が整理...始末が悪いと言えば始末が悪い。割れますし、場所は取るし、重いしですね。しかし、ガラス乾板というのは保存さえ良ければ非常に良く残っているんです。実は今、そのガラス乾板をこのコンピュータの中へ入れてデジタル化し、一応4,000枚入りしましたけれども、まだタイトルを付けたり整理している最中です。普通ですと中々出来ないんですけども、大場先生は全てのガラス乾板に夜になると酔っ払ってでも何でも書いているんですね。中には酔って書いているから中々読み難いものもあるんですけども、まあしかし整理魔だったものですから、一枚ずつ空封筒や何かに入れてですね、書いて、そして箱に入れて、その箱は箱でまた書いて保存されていた訳です。それを今回全部デジタルでやっています。時々酔ってられるというか、ガラス乾板が出来上がってきて手元へ来て整理するのと記憶と...と言いますが、かなりのメモ魔なんですけれども時々日付が少し違っていたりする事もありまして、それを若い人達の方で今苦労して整理してもらっています。

これは「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」というタイトルで、インターネットで流します、皆さんにも使って貰えるように流しますという事で予算がついた。実際に、既に平出遺跡や登呂遺跡、神坂峠・入山峠も始めています。ですからインターネットを開いて頂くと、まだ解説や何かは上手くいっていないと思いますが、一応コンピュータの方で見て頂ける様になり始めております。この神坂もそういう事で資料として出しております。それを見てもやっぱり人物がいないのは淋しいという様な感じがします。この中にも今、皆さんまだ考古学をやっておられる方がいるから、脇でも隅でも良いですから人物は是非入れておいた方が、後になると面白いと思います。その時はちょっと邪魔だと言って皆どけどけと言ってやっていますけれども、是非その辺を考えて頂くと良いのではないかと思います。

万岳荘と学習会

そんな訳で三者が合同で調査して、基本的には上手くいったんだろうと思います。そしてそれを受けた入山峠の方ではあまりそういう様な体制が作れなかった事も事実です。地元の応援もありましたし色々あったんですが、ただその時は昭和44年の秋という時期で、実は大変な時期でありました。70年安保で大学そのものがもう怪しげになっている様な時でした。それを入山峠の場合には所謂「緊急調査」という...当時、「緊急調査」と言った事前調査だった訳です。神坂峠の場合には保存を初めから考えていましたから、何とかして残すんだという事で始めたものですが、入山峠の場合はもうすぐそばまで道路が来ている訳です。道路が両側から迫ってきていてぎりぎり掘らなきゃいけないところだけが残っていた訳です。そこを発掘していたものですから、「大学から箆旗持って押しかけるぞ」と言われて調査したんですけども、結局は来ませんでした。とにかくそういう中でかなり緊急に調査を行ないました。その後入山峠の方は基本的に道路になってしまいました。ですからその場所は現在見る事は出来ません。しかし入山峠もまだ周辺に一部分は遺跡として残っている筈です。

そういう様な体制で調査しまして、私のは思い出すままに書いてあるんですが、宿舎の万岳荘...明日行かれるか、そこまで行くか行かないか...行かないのかな。今でもあるそうです。よほど昔と違うんだろうと思いますが。朝目が覚めるのは囲炉裏で火を燃しているのが消えて寒くなって目が覚めるか、一番先に起きた人がくべた薪がすぐに、ちゃんと燃えないで煙が部屋中に充満していぶさで目が覚めるかどっちか。もう毎日そういう状態です。

大場先生は、特別な一軒立てのバンガローが一坪。畳二枚分の一戸建てがあったんですね。畳一枚

分だけ棚になっていまして、そこへ、ベトナムの死体を運んできた寝袋だとか言って、その寝袋とペシャンコな毛布で確か寝たと思うんですけれども。それを置いて、大場先生の所に何かの時に行きましたら、狭く、一坪しかない小さい部屋ですからあと半分は土間になっている訳です。あとの半分 - つまり畳一枚分 - だけがその棚で、そこに寝られる様になっている訳ですけれども、行ってみたら大きなナメクジがいっぱいくっついていて。つまり山小屋ですから湿気ているんですね。それも大きいナメクジだらけで、よく大場先生こんなところにいるなあ、と思っていました。これなら万岳荘の大きい方の建物の方がまだ良いなあ、という様なところでした。

大場先生は何日かいるうちに「蕎麦が食いたい」とか言い出して、誰かに「上がってくる奴はいないのか、蕎麦を持って来させろ」とか言っていました。それと「風呂に入りたい」とも言い出した。「風呂に入りたい」と言っただけで風呂なんか無いですから。それでとうとう、ドラム缶をとにかくどこかから調達してきて庭に置いてとにかく風呂を作ったんですね。まさに弥次喜多そのもので、下駄履いて入らなきゃどうにもならないという風呂を作りまして。薄暗くなれば大場先生は「俺は早くから入ったって良いんだ」とか言いながら入っていましたが、暗くなったら何にも無いところですからそこで入っていました。

そんな思い出もありますけれども、万岳荘ではモーターで電気を一時間か二時間起こしてくれました。本当は暗くなると大体作業はもう終わりなんですけれども、それをやってくれてですね。発掘現場の事をやると同時に薄暗い中で、いわゆる学習会をやって、見学に来た人にも発表してもらったりしていました。そういう思い出があります。

そこから毎日通うんですけれども、「牛糞と山道」と書いておきました。今は分りませんが牧場になっていまして、牛もやはり人の歩く道のところを歩いている。山の中を歩けば良いかと思うけれども、それでそこへみんな糞があるものですから。山の靴ならば良いんですけれども、地下足袋履いて現場で作業するものですからね、ぐしゃぐしゃで糞を踏んで歩いて毎日通わなければいけない、という様な状態です。行き帰りは長靴を履いたりしていました。それでも時々皆疲れているだろうからって、マムシを捕まえてきたのをご馳走になったりしていました。あの近くにはかなりマムシがいて、今でもいるんでしょうね。水場のあるところにいる様です。

そんな訳でその山道を... どの位通いましたか。35年前で分からないですけれども、やっぱり30分位あったんじゃないでしょうかね。その途中である時に、帰りに雷を受けたんです。昭和43年の調査の前の... 確か前の年に松本深志の高校生がやられてるんですよ。その時は本当に死者が出ている筈ですけれども、我々はさっきの村長さんに「恐ろしい神様がいる」と言われて。我々は一人も、死者までは出ないで済みました。私なんかはもう意識なかったんですけれども、牛糞だらけの道を30m位後ろの方へ吹っ飛ばされましたね。谷底へ飛ばされなかったから良いようなものですが、道沿いに転がって、気が付いた時はずっと後ろの方で何だかもう全く分からなかったような状態です。小山修三さんなんかヤカンを持っていたのをほっぽりだしていき、皆それぞれ、腰抜かしたのはいるし、動けないのと、色んな人が。雷は一発でしたけれども、すぐ側の谷に落ちたから良かったんでしょう。赤紫色の雷がスパーンと、直接は何にも感じていないんですけれども、それでもやられていました。そんな事がありました。

それから調査も午前中は良いんですけれども、午後になると霧がかかるものですから写真はまず撮れません。図面も、今ならばもう少し良いかもしれませんが、当時やっとな紙を使って平板でとっていますから、図面がもうブヨブヨになっちゃうんですよ。しょうがなく、「午前中の作業しか出来んぞ」という位のつもりでないと駄目だという事で作業していました。そういう様な調査で、非常に思い出も深いものです。私が発掘調査した中では本当に印象の深い調査でした。

遺跡・遺物の検出状況

遺跡の事です。後でちょっと見て頂きますが、山のとっぺんでいながら沼状の部分がありました。湿地帯みたいなものがありまして、底が深い状態だったんですけども。しかし遺物はいずれもそんなに深いところまでは入っていませんでした。スライドを少し見てもらいながら話をしたいと思います。

スライド - 1 これは峠へ行く道ですけども、今私どの辺りだか分かりません。後でまた今村先生かどなたかに教えて頂ければと思うんですが、こんな道を登って行きました。

スライド - 2 真ん中のところが遺跡の現場です。奥は恵那山ですから、北東側から撮っている写真です。峠のぎりぎりのところに何か白いのが一本立っていますが、あそこを降りていけば向こう、岐阜側という様な感じです。長野側から見た峠です。

スライド - 3 これは恵那山側から見た峠でして、右手が伊那谷側ですね。南から見た形になります。左側がかなり急な崖になって岐阜側と言うか美濃側へ降りていくという状態のところがあります。白く、点々と見えているのが発掘中の現場ですが、こういう時は人物が入っているんですけどもこれじゃあ何にも分からない。今はどうなっているか分かりませんが、この谷側に向かって石敷きの道路がありました。今はどういう風になっているかを後で教えてほしいと思います。

スライド - 4 これは美濃側に降りてくる道で、あの時既に下から林道がかなり途中まで上がってきていました。あの当時30分降りればこっち側なら近かったんです。榎崎先生はその時、祭祀遺跡の山畑遺跡を調査されていて、その宿泊は下の温泉と言いますか、良い旅館に泊まっていたものですから一度一泊だけさせてもらったんですけども、これはまさに天国だ - 下が天で上が地なんですけれども - 。天地の差があるという風を感じた事がありました。

スライド - 5 その山畑遺跡の発掘現場から峠の方を見たところですよ。この谷筋を上がって行ってずっと... 何て言いますか。そろそろ私記憶が無くなってきているんですけども、地元の方ですとある程度お分かりかと思いますが、後でまたちょっとお話ししたいと思います。いずれにしても道路はこの上の棚を上がっていくんですが、川のギリギリではなくて、一段上のところを歩いていくんですよ。

スライド - 6 その当時美濃側からの林道が上がってきていてこれが突き当たりだったのかな。真ん中にちょっと高いところがあってその左右なんですけど、だいたい右手に上がっていくのが当時 - 昭和43年頃 - の上がり道です。ですから多少は違うところを上がっていくかもしれませんが、いずれにしても一番南部の低いところを狙い撃ちで上がっていくという形になります。峠というのは、逆に言うと山脈の一番低い、歩きやすいところへ狙っていく訳ですね。これはどの峠でも基本的には同じです。できるだけ人家が近い、あるいは水が近いところまで補給できる場所、そしてそんなに極端にきつくないルートが取れるところを選んでいくのだと思います。馬で越えようとしてひっくり返ったなんて事も平安時代の話で出てくる訳ですから、きつい事はきついんですが、そういう様なところが神坂峠でして、いよいよこれから美濃側から来て登る、という場所です。

スライド - 7 これは発掘現場の発掘直前の状態です。手向けが丘だなんて言って、発掘中名づけていました。一応グリットを組んであります。手前の道が万岳荘へ行く道で、越えていくのは、一番左手のところを降りて美濃側へ降りていくというものです。

スライド - 8 今のはちょっと南側から見たところですね。神坂峠という看板が左手にありますけど、あの左手のところ少し積石塚状になっています。これが積石塚であるかどうかは、実は結論を出していません。掘ったところはビニールを入れてそのまま埋めてしまったんです。もう一回位調査できるかなと思ってもらいたし、その当時はとにかく保存になるから、やれない部分無理してやる事

はないだろうという事で、実はやめました。積石塚的なものであるなら本当は確認したかったんですが、そこまでできないままになっています。

スライド - 9 先程沼状になっているという言い方をしましたが、その部分についてです。今神坂峠という看板があると言いましたが、その看板の、さっきの写真ですと手前になる部分になりますが、土層の状態を見ようとして2 m以上深く掘ったものなんです。この様に石が混ざっている地層で、左手の方に沼状の湿地帯があるという様な様子が分かるかと思います。

スライド - 10 これは写真8を比較的深く掘った状態です。土層としてはこれだけ。腐食土層もあるんですけども、具体的にはここの深いところに遺物は入っていません。この上の方20cm位の分にしか遺物は入ってなくて、あとはもう自然層になってしまっています。

スライド - 11 遺物は石製模造品で、刀子の柄が無いものとか、それから剣形、あるいは管玉が出ています。この様に地山には石がありますし、それらの石が何か組み合わせられていきそうにも思うんですが、石などを組み合わせた様な状況ではありませんでした。

スライド - 12 これは例の、包丁の様な刀子が奥にあります。それから手前には有孔円板や剣形があります。これらもある意味では石の間等から、あまり意識された状態で配置されたり、埋められたりしたものではない、という様な状態です。つまり何の意図的な行為も認められない様な形で発見されているという風に言った方が良いかもしれません。

スライド - 13 これは馬ではないだろうかと言われている石製模造品なんですけど、分かりません。

スライド - 14 勾玉の中ではこれが一番大きな勾玉でした。この形ですと古墳時代でも古い方と見て良いだろうと思います。綺麗な作りですが、石質は滑石質のものでした。

スライド - 15 馬の前半分です。上が頭、左が鞍、右手にきているのが前足です。スライド - 13が馬ではないだろうかと言ったのにはこれが出てきているからです。峠とか山の上で馬が出るというのは、ぼつぼつある訳ですけども、日光の男体山あたりでは鉄製の馬が出ていたりしています。こういう様な事から見て、峠が水に関係... 水に何かを願う様な関係があるのかどうか。あるいは先程岡田先生が言われていた様な馬の生産という事を考えると、この峠は馬が越すには中々大変であり、非常に難路だったと思うんですけどもそういう事に関係してこういう馬形品があるのかどうか。そのへんも明確には分かりませんが、この神坂峠ではこの馬形が出ている。これは明らかに馬ですからその点は非常に面白い。

つまり袖もぎ様と同じで、人間が命を取られない為に何かをあげるといふ。何も持っていかないと袖もがれるぞ。袖もがれるだけならいいけど命まで取られる。という様な事があります。袖もぎ様のような民俗信仰がありますとやはり馬を取られないように馬の代わりになるものを奉獻しているのかもしれない。しかし普通は山ですと水を貰いに行くといふ、水との信仰で語られる事が多いとは思いますが。

スライド - 16 須恵器の坏と、それから緑釉の陶器が出ています。灰釉の土器も出ていますし、土師器も出ていますが、基本的にはこういう様な色々な土器が通っている事は事実です。その中でもまつりに関係する土器... どれがまつりに関係する、どれがまつりに関係せず、たまたまそこへ落として割れてしまったから捨てていったとか、そういう事も絶対に無いとは言えないと思います。しかし坏とかあるいはこの緑釉等はやはりまつりに関係しているとみた方が良いのではないかと思います。須恵器の壘の出土は、これは土層が時代とはまるきり違う訳です。それにしても土層を分けて発見できる様な状態ではなかったという事です。

スライド - 17 大場磐雄先生です。大場先生は巻脚半で地下足袋で現場に立っています。毎日こういう格好で監督をしていました。やはりこの調査は物凄くやりたかった調査と言って良いと思います。

スライド - 18 大沢和夫先生です。あとはよく分からないですけれども、宮沢先生は分かる人がいますか？奥の日陰に立っているのが榎崎先生だと思えます。こんな様な状態です。発掘現場はそんなに深くなく、割合と浅い状態なんですけれども。これは南から北を見えています。

2. 神坂峠祭祀遺物の特徴

獣首鏡の発見

スライド - 19 これは中国の後漢の鏡で、獣首鏡の一部分です。左下の、ちょっと波状になっているのは、獣の首の髭ですけれども。それでこの鏡はですね、1 cm 位上のところと右手はすってあります。それで左と下は割れです。つまり完全な鏡ではなくて初めから鏡の部分を切り抜いて持っていたと思われま。鏡の部分として絵の方から言うと丁度一つの獣面のある部分が切り抜かれていたのではないかと思います。そうすると、基本的にお守り状態で持っていたのではないかと。それを峠のまつりの時に供えていったものかという風に思います。こういう風にすった鏡で。これは獣首鏡と言いましたが、日本列島の中で獣首鏡が出ているのは非常に少ないんです。宮崎県の六野原とかあるいは高知県の平田曾我山古墳。いずれも割れていまして、小型の獣首鏡です。その他にも数面あるんですが皆破片です。日本列島に入っている鏡はこれもそうですが銘帯が入っていない鏡です。ところが中国では比較的銘帯の多い鏡でして、年号も入っているものがあるというのが獣首鏡の特徴なんですけれども。そういう様な点で非常に面白い鏡であります。

石製模造品の傾向

スライド - 20 これは実は調査の不行き届きで、発掘直後に見学に来た森谷さん達が拾ってどなたか詳しくは分からないんですけれども「あったよ」と言われて持ってこられたものです。だからあげ土の中に入っていたと思うんですけれども。鏡の石製模造品ですが、鈕がついていますが鈕の穴が無いものです。

スライド - 21 これは勾玉類ですね。勾玉類はさっきも出ましたが、割合とちゃんとした作りからペシャンコのものまで一般的にあります。特に上の左から2番目のもの等はナイフか何かで削って作っているんですね。後でちょっとまた言いますが、その場で作っているものだと思います。一番右の下のもの等はこの場で本当に作られたかどうか、少し問題があるかと思えます。実はこの神坂峠、石屑と未製品が非常に多く出土しました。という事は現場でかなり作っているという言い方をして良いと思いますけれども。それにしても右下のもの等は正確に玉造の工程をふんだ作りであり、この現場で出来たかどうかちょっと疑問があるものです。

スライド - 22 管玉類も碧玉のものから滑石質のものまであります。一番右の上は碧玉です。篩を振るわない調査ではありましたが、いずれにしてもガラス玉があれだけ出てます。それから棗玉も右手ものは未製品なんです。つまりここで穴を開けるつものものだろうと思います。白玉は2,000個位ありますから省略しますが、こういう様な玉類もあったという事です。ガラスの玉は比較的古い様相を示していると思います。

スライド - 23 剣形品については先程岡田先生は篠原氏の資料を言われていましたが、この神坂峠でも比較的古そうな形をしているものから新しいものまでかなりあります。さっき古そうなど言われたのは左手の方にある... 左の上とか左から下の二番目の様な形のもです。それから確かに順次進んでいる事は事実だと思います。

スライド - 24 皆出す訳にはいきませんから、ごく一部を出しています。有孔円板につきましても、双孔のもの、単孔のもの、中には四角くなってしまうものと色々あります。穴の距離、穴と穴との

間の距離、その他がどう変化するか。一応全部そういう事もチェックしてみましたけれども、これという結果は出ておりません。

スライド - 25 刀子も下の様な、包丁みたいな刀子はあまり無いんですね。本来、模造品の刀子型と言っているものは皮袋に入った小刀を模造したものがほとんどです。ですから一番上の様な形のものが多くありますが、下や右の真ん中にある、包丁みたいなものも入っています。これはちょっと異例のものだと言って良いだろうと思います。

今の神坂峠の遺物はごく一部分です。神坂峠の遺物を少し見直さなければならぬと思っていると、先程も言いました。しかし土層が全く分からない状態で出ています。つまり新しいのも古いのも一緒たなんです。20cm 位の間に牛は踏むし、色々踏みつけて混乱している状態で出てきていますので、遺物で分けるしかない訳ですが、その様子から見ますと後で入山峠のものをお見せしますが、入山峠と比較してみると神坂峠の中にもかなり古いものが入っているのではないかという気がしはじめています。

3 . 入山峠との比較

昭和44年の調査

スライド - 26 入山峠の方は、これは南軽井沢の方から見たものですが、丁度真ん中のたるんでいるところへ道路が左手の方から上がっていつているのが見えていると思います。軽井沢の方から登っていくところでした。あの一番低い所が峠になっています。

スライド - 27 これは北側から南を見たところでした。発掘現場は少し黒っぽくなっているところです。もう向こうの白い擁壁等できているところは、下っていくと - 車で下っていくんですけども - 群馬県の方へ降りていくという状態のところでした。掘っている所が実は群馬側だという様な言い方をしました。あそこに本当はちょっと白いテントが張ってあるんですけども、あのテントから左手は群馬県、右手は実は長野県だったのですが、長野の方で調査しました。舗装していない道路のところでした。そのところが昭和30年に山崎義男さんが調査、報告されて。それ以来入山峠が特に注目された訳です。その前から勿論この入山峠は碓氷峠からみると楽な峠だった為に使われていた。そして数珠玉峠とも呼ばれて、白玉が拾われていた、という事を言われています。これはすぐ崖... 自動車が一台あるんですけど、そのところがもう崖になってしまっていて、遺跡の一部が崖で群馬県側に崩れる様な状態になっている。そういう様なところですので、そちら側は常に洗われてもいたと言って良いのかと思います。

スライド - 28 これは群馬県側から見たところでした。群馬県側から見ますと500m ずばっと上がりますけれども、長野県側から見るとゆるやかな状態になっています。群馬県側ではいわゆる関東構造盆地の縁辺部にあたりますので、500m ストン、と落ちる地形になっている状態です。

スライド - 29 峠から見た赤城山です。向こうにゴツゴツして見えているのは赤城山。そして峠の道は歩いて降りる時には、左下にちょっと白く見えています。あそここのところはかなりきつい道路で降りていきます。しかし、昔からもう少しゆるやかに回り道する道もあった様です。

スライド - 30 この入山峠は実は火山灰にバックされてしまっていて、遺物が出てくるのは上から3番目のところの黒い土です。この3層目と4層目が遺物の包含層で、4層目は基本的に遺物の包含層ではなくて、4層の上から入っているという見方をしたほうが良いと思います。3層目にはガッチリ遺物が入っている。そしてその後、2層目は - これは実は細かくは4層に分けられるんですけども - 20cm 位の火山灰でもって蓋されている。その為に入山峠の方は、私は古墳時代の後期にこの火山灰は降っているとみていますので、それ以前の遺物という風に考えています。前に銭が拾われ

たと言われていますが、下に遺物は何もありません。無遺物層です。

スライド - 31 これは軽井沢の熊野皇太神社 ... 半分群馬県で半分長野県。でも長野県の神社庁長もした水沢さんが今鍬入れ式をやっているところです。軽井沢関係とか群馬県とか長野県の人です。

スライド - 32 さっきも言いました様に、1層目は表土層で20cm位ありまして、これは基本的に遺物はほとんどありませんでした。その下に2層目のきれいな火山灰、その火山灰層の下から出ている状態でさっき言った3層目があります。これ3層を掘ってしまった位のところで、遺物だけ少し残してある状態です。

スライド - 33 入山峠の遺物で特徴的なのは実は管玉です。非常に大きい、7 cm クラスの凝灰岩の管玉等があります。その中で真ん中の勾玉がペシャンコの蛇紋岩質の勾玉がありまして、実はこれとほとんど似た勾玉が神坂峠からも出ています。それからその下が水晶の棗玉なんですけれども。水晶の棗玉でもやはりこれはどちらかという古墳時代の古い方から出ている形のものかと思いません。それにスカイブルーのガラス玉。これらは基本的に古墳時代でも私は古いとみています。石製模造品の方からはそんなに古い形のものはありません。

スライド - 34 入山峠の土器の特徴は「S」字口縁の台付甕が19個体確認できたという事が特徴として挙げられます。私はこの時代と石製模造品の時代を全く別だとは言えないという風に見ています。

スライド - 35 上は椀1個体で、下は2個体高杯です。これらの高杯とさっきの台付甕が本当に同じ時期にあっても良いのかという事になりますと、確かに問題はあるかとは思いますが、思いますがけれども、パックされる時期がいつかという事を含めて、須恵質のものは一点もありません。全て土師質のものです。時間とすればこれで押さえられるかな、ここまでで。今言った様に時期は幅があるんですけれども、その範囲内で押さえるしか無いだろうという風に思います。

スライド - 36 大場先生の、昭和26年か、網掛の写真です。これは確か今も遺物があるかと思えます、薙鎌。網掛峠から出た薙鎌を含めて、これらの遺物を大場先生が撮影した手札版のガラス乾板の写真です。

スライド - 37 これはどうでしょうか。(同じ時のもの)と思えますけれども、こういう写真が残っていて、実はこれと現場の写真があった筈なんです。その現場の写真は報告書の時に使っているんです。ですからどこかに残っているんだと思えますが。一応、こういう記録がやはり昭和26年に撮られているという事が今になると大事かと思ひまして。こういう様な写真が全部使えるものではないんですけれども、それでも大場資料として4,000点ばかりあります。その他に田沢金吾、柴田常恵のものも一部整理し始めています。

4. 全国的祭祀遺跡の分布と神坂峠

時期差

「古墳時代中期の日本列島」は省略。祭祀遺跡がどれくらいの時間差があるか。何故ここでこれだけの祭祀が行われているかという事だけ、一言だけ。これは想像ですから、一言だけお話しておきますと、一体これを誰がやったかという事なんです。全国の峠の中でこれほど石製模造品が出ている所はほとんど無いんです。神坂峠・入山峠にはあっても、今のところ全国の他の峠で石製模造品が出ているところが基本的に無いんです。今まだ発見されていないのかもしれませんが、それにしても無さ過ぎます。

祭祀の内容

そうすると、こういう様な峠のまつりをやっているメンバーというのは意外と、信濃に関係する人

達の可能性が大である、という風に見ざるを得ないだろうと思います。という事は何の為にかと言うと、一番可能性があるのは私はやはり防人集団等で行く連中。そうすると、西へ行くメンバー、あるいは時に東北方面へ向かう、その様な人達が私は... どうやら。祭祀遺跡は青森県までありますし、九州もあるし、最近では朝鮮半島からも出てきています。しかし峠に関してみる限りではどうもこの長野県に集中している。という事からすると、長野の住人がほとんど関係しているとみた方が良いんじゃないか。と言うのはちょっと極端な言い方なんですけれども、私はそういう風に少し見てみようかと思っています。

これについては実はスライド - 34に出てきている土器がどこの土器かという事がもう一つ問題となってきます。例えば入山峠の台付甕はどここの台付甕か。群馬県のものだとするならば、では群馬の人間ではないか、という言い方ができるんですけれども。いずれにしても群馬位は含めても良いと思うんですが、東国の人間が関係している。長野と限定してしまうと狭いですから、東国の人間がどうもこのまつりに関係しているんじゃないか、という風な言い方をしても良いんじゃないか。そうでなければ鈴鹿峠であろうと、どこであろうともっと出てきても良いと思っています。でも出てこない。

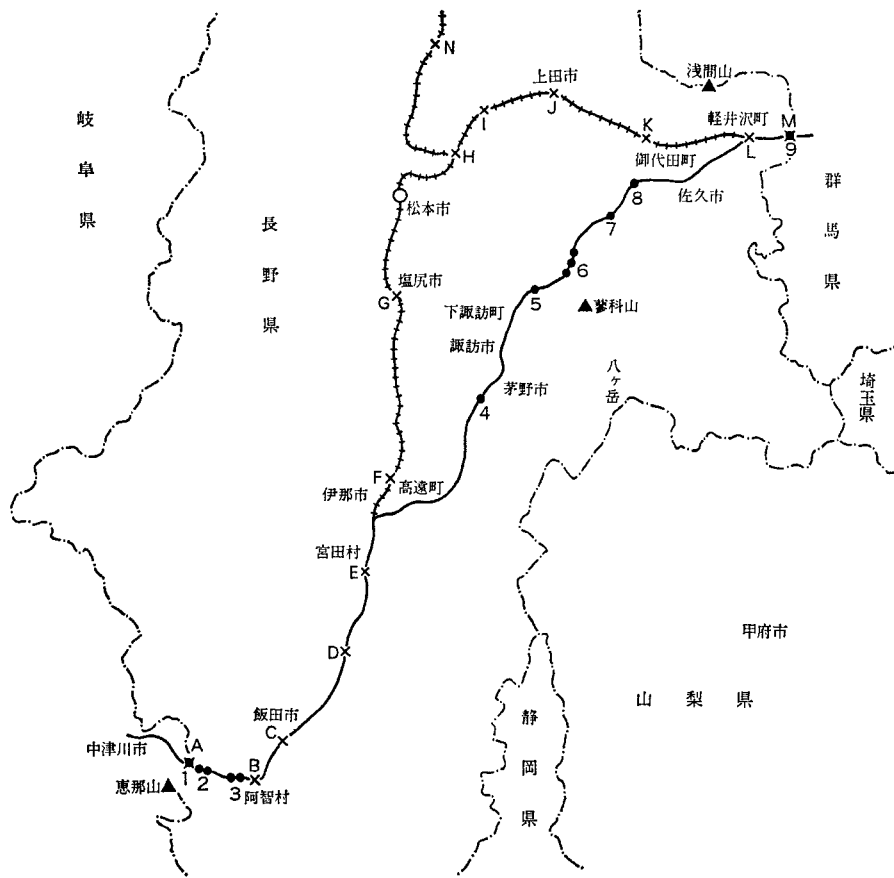
それから「周防なる岩国山を越えむ日は手向けよくせよ荒きその道」(『万葉集』巻4 567)と言われた岩国 - 山口県の錦帯橋のある - のところもきついと言われていながらいまだかつて祭祀遺物が出てきていない。そういう事をみますとどうもこれは東国の人間がまつりに関係しているとみた方が良いという風に思います。

峠の位置と当時の世界

この神坂峠というのはどういう峠か。先程言いました様に実は東国の境である。西の方から来ると東国の境であって。もう一つは、これは大場磐雄先生が銅鐸の予想をした事があったんですね。長野県から銅鐸が出る、と言ってそして後で出た訳ですけれども。あの銅鐸の文化圏がこの信州まできている。信州まで来て、天竜川流域から信州まできているという事は、大型銅鐸の分布圏である。という事が言える訳ですから。そしてその後実は前期古墳の文化 - 特に竪穴式石室の文化 - というものは松林山古墳から甲斐の大丸山古墳から、そして森將軍塚古墳、そのラインしかこないですね。群馬県に古い石室、竪穴式石室状のものもあっても、割石小口積の竪穴式石室は入らない。千葉県にあるんじゃないかと言っても、千葉県のはもっとずっと後です。内裏塚古墳の石室というのは非常に狭長ですけれども割石小口積の石室ではないという事を考えると、竪穴式石室の構築までの文化圏というのは長野で止まっているという事になります。ですからそういう意味では信州というのは東のはずれだった時が相当長い間あったという事も含めて、この神坂峠の持っている意味、あるいは碓氷坂 - 今入山峠と言いましたが - の持っている意味というものが非常に重要だったという事を考えると同時に、あれらのまつりがどうも全国の人が通る時に行ったものではなく、かなり地方的なものであるかもしれない。

私は韓国の竹幕洞の遺跡の石製模造品も東国のものだ、と言っているんですが、今日まだ来ていない篠原さんはそうではないと言われていました。石が違うと言っていますが、私は東国のものだという言い方をしています。

(平成14(2002)年9月22日 阿智村中央公民館にて)



凡例

—— 古東山道路線

+++++ 東山道(官道)路線

● 古東山道遺跡

○ 信濃国府

1 (神坂峠) 2 (朝日松と駒繋桜) 3 (小野川付近)

4 (杖突峠) 5 (白樺湖畔) 6 (雨境峠)

7 (春日村) 8 (爪生坂) 9 (碓氷峠)

A (神坂峠) B (阿智駅) C (育良駅) D (賢維駅)

E (宮田駅) F (深沢駅) G (覚志駅) H (錦織駅)

I (浦野駅) J (日理駅) K (清水駅) L (長倉駅)

M (碓氷峠) N (麻統駅)

図1 信濃国内東山道推定路線図

(大場磐雄 1969「古東山道の考古学的考察」『國學院大學大学院紀要』

第1輯より転載)

編集者註：本書には紙面の都合上、スライドの一部のみを掲載しています。Web サイトには全点掲載していますのでご参照ください。



スライド - 2



スライド - 3



スライド - 7



スライド - 11



スライド - 18



スライド - 19



スライド - 21



スライド - 26

写真図版 1



スライド - 27



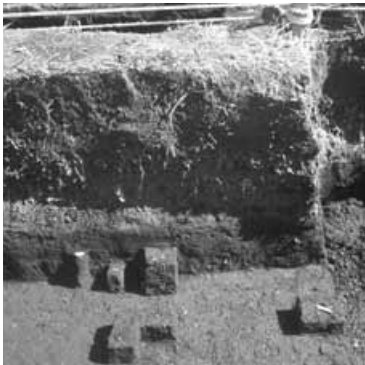
スライド - 28



スライド - 30



スライド - 31



スライド - 32



スライド - 33



スライド - 34



スライド - 36

写真図版 2

- 1 補論 1 : 神坂峠の現状と景観

1. はじめに

國學院大學学術フロンティア事業実行委員会では、杉山林継博士によって保管されていた神坂峠遺跡の調査写真のデジタル化を終え、平成14年度よりインターネットでの公開を開始したが、今回、遺跡の現状を確認するため神坂峠の現地踏査を行った。以下、その成果について簡単に報告したい。

2. 神坂峠調査写真について

(1) 神坂峠

神坂峠は長野県下伊那郡阿智村と岐阜県中津川市との境、恵那山と神坂山の鞍部(標高1,576m、北緯35°28'26" 東経137°37'55" (JGD))に位置する古代の東山道が通る交通の要所である。その険しい道程から東山道第一の難所として知られ、荒ぶる神の坐す峠として「神の御坂」と呼ばれた。

その一端は、日本武尊の東征の帰路、尊を苦しめようとした山の神が白鹿に変じ、それを尊が藪で撃つたという『日本書紀』景行天皇四十年祭の説話や「ちはやぶる の御坂に幣奉り齋ふ命は母父が為」という『万葉集』巻二十(4402)の歌によって窺うことができる。

その後も、神坂峠や山麓の園原の里、歌枕にもなった篇木などは『古今和歌集』、『源氏物語』、『今昔物語集』など多くの古典文学で取り上げられているほか、後に県歌となる「信濃の国」にも登場するなど文学の名所として知られていた。

(2) 神坂峠の考古学的調査

古典文学上に現れた荒ぶる神に対する祭祀は大正10(1921)年の鳥居龍蔵による「祝部土器」の採集(鳥居1925)や下伊那郡誌編纂に伴う昭和26(1951)年の調査での石製模造品等の出土(市村1955)によって考古学的に実証された。また、昭和42(1967)年の国鉄複線化に伴う分布調査では縄文土器(前期・中期)や陶磁器類が出土している(長野県教育委員会1968)。

以上の成果を受け、大場磐雄氏、榎崎彰一氏、大沢和夫氏らを中心に翌43(1968)年8月に本格的な調査が行われることになった。峠の頂上部付近の平坦面から石畳状の遺構が発見され、その遺構内外から剣形、有孔円板、勾玉、白玉、刀子形、馬形等の石製模造品約1,400点、獣首鏡1面、鉄製品などの祭祀に関わる遺物や須恵器、土師器、陶磁器類等が出土している。石製模造品の未製品や砥石の存在からその製作も行われていた可能性も指摘されている。

これらは古墳時代の峠祭祀の実態に迫るものであるとともに、交通史や物資の流通経路を考える上でも貴重な資料である。翌年、報告書(大場・榎山編1969)が刊行され、遺物は地元阿智村教育委員会で保管されてきた。遺跡は昭和56(1981)年に国史跡に指定されている。

(3) 神坂峠調査関連写真

既に昨年度の事業報告において概要を紹介しているように、杉山林継博士によって昭和43(1968)年の調査写真が保管されてきた。昨年度にデジタル化を実施し、インターネット上で公開している。また、大場磐雄氏によって保管されてきた35mmモノクロネガフィルムにもこの時の関連写真が計100枚含まれているが未整理である。この他、押野谷美智子氏によって当時の調査写真がその後の踏査写真と共に刊行されている(押野谷2000)。

杉山博士収蔵資料中の神坂峠関連写真は203枚で、調査期間中に訪れた長野県塩尻市平出遺跡や、平

行して調査が行われていた中津川市山畑遺跡の写真も若干含まれる。その内容は大きく遺跡の景観（54点）、遺構・遺物出土状況（87点）、調査風景（2点）、遺物（46点）、他遺跡（14点）の5種類に分けられる。

3. 神坂峠の現状

(1) 峠の現状

古代のハイウェイである東山道が通った阿智村は現在のハイウェイである中央自動車道も通る交通の要衝の地である。その交通アクセスと眺望を活かしたリゾート施設として「スキー&ゴンドラパーク ヘブズそのはら」がオープンしている。今回我々も、そのゴンドラを利用して一挙に標高1,600mを登ることになった。そこからマイクロバスに分乗し林道をしばらく行くと現在の神坂峠である。調査地点は舗装された林道から50mほど歩いて登ったところにある。

写真に示したとおり、遺跡は長野県側に向けて緩やかな斜面となっており、最も平坦な区域に調査区が設定された。この平坦面は絶好の休憩場所であり眺望とともに旅人の心を和ませたことであろう。その場所は現在、史跡を示す標柱が立ち、簡単な囲いがなされているが、立ち入りは可能である。そこから少し南に上った、最も標高の高い地点（積石塚とされた塚がある）には遺跡の概要を示す解説板が立ち、ここから中津川方面へと降る細い山道が伸びている。一方、遺跡の北側からは神坂小屋に至る細道が伸びている。

(2) 調査時との対比

古来、峠とその景観は旅人に大きな印象を与え同時代の文化を形成してきた。文学作品で取り上げられてきた峠は数多く存在し（野本1978）、入山峠や雨境峠、足柄峠などでは祭祀遺跡が発見されている（椋山1972）。交通手段の発達していなかった古代において峠の景観は大きな意味を持つものであるが、現在のハイカーなどにとってもその価値は大きいものといえよう。

神坂峠の景観について昭和43（1968）年の発掘調査時と現状とを比較してみたい。調査時の写真のうち景観写真は遺跡から周囲を撮影したもの（眺望6点）と、逆に遠方から遺跡を撮影したもの（遺跡遠景32点）、近くから調査地を撮影したもの（遺跡近景13点）、その他（峠道、峠の清水など）に分けられる。

中央自動車道や林道、ヘブズそのはらの建設によって麓から峠までの景観は変化している。これが遠景にどう影響するかは確認できなかったが、今回の踏査の結果、峠からの眺望や、近景については、地形や植生、構造物等は調査時とほとんど変化が生じていないことが確認された。

(3) 神坂峠・東山道を活かしたまちづくり

現在、阿智村では神坂峠を含めた「東山道」を地域活性化の中心に据えている。峠から麓までの古道を中心とした一帯を「園原の里」として村の史跡に指定し景観の保全を図っているほか、東山道サミットの開催や文学・伝説をまとめたガイドブック、ガイドマップの発行、遊歩道の整備などが行なわれている。

東山道サミットでは様々なイベントが実施されたが、その1つに勾玉や剣形模造品、有孔円板等を10cmほどの木片でかたどり、峠の木に吊るすというものがあった。今回の踏査時にも確認することが出来たが、古代祭祀を象徴する遺物を現代に活かしている事例として興味深い。

最後に見学した大垣外遺跡には「古東山道祭祀遺跡」という石碑が建てられていた。明治期に、熊谷直一氏を中心とした地元の人々（伊那平田学の国学者を含む）によって園原から神坂峠への道が再

整備（市村1934）されており、この地域では古くから文化遺産の顕彰と活用に意欲的に取り組んできたことがうかがえる。

4．おわりに

本稿では、神坂峠調査関連資料のうち景観を記録した写真を取り上げ、その資料的意義について現状と比較しながら考察してきた。峠の景観は古くから文化に影響を与えてきたもので、重要な文化遺産である。

今回の踏査の結果、神坂峠においては昭和43（1968）年の調査時点と現状とで峠自体の景観は大きく変わっていないことが確認された。そして、この文化遺産は、現在阿智村のまちづくりの基盤として重要な役割を果たしているのである。

今回の調査は平成14年9月23日に行ない、加藤里美・関根信夫・中村が参加した。調査にあたり祭祀考古学会・阿智村役場の諸氏には様々な便宜を図っていただきました。末筆ながら記して感謝いたします。

（中村耕作）

〔参考文献〕

- 市村威人 1934 「御坂越の今昔」『智里村誌』山村書院
市村威人 1955 「祭祀址」『下伊那史』2 原始時代上 下伊那誌編纂会
大場磐雄・椋山林継編 1969 『神坂峠』阿智村教育委員会
押野谷美智子 2000 『信濃国に於ける幻の古東山道と須芳山嶺道を求めて』
椋山林継 1972 「神坂峠」『神道考古学講座』5 祭祀遺跡特説 雄山閣出版
鳥居龍蔵 1925 『有史以前の跡を尋ねて』雄山閣
長野県教育委員会 1968 「神坂峠遺跡」『国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』
野本寛一 1978 『峠 文学と伝説の旅』雄山閣出版



南方より神坂峠を望む（1968年 ms141）



山畑遺跡から神坂峠を望む（1968年 ms010）



伊那谷方面の眺望（1968年 ms013）



伊那谷方面の眺望（2002年 関根信夫撮影）



木曾谷方面の眺望（1968年 ms142）



木曾谷方面の眺望（2002年 中村耕作撮影）

写真図版 1



遺跡近景（南 北 1968年 ms143）



遺跡近景（南 北 2002年 関根信夫撮影）



踏査風景（2002年 関根信夫撮影）



大垣外遺跡に立つ碑（2002年 関根信夫撮影）



模造品（2002年 関根信夫撮影）

写真図版 2

- 2 補論 2 : 古代東山道と神坂

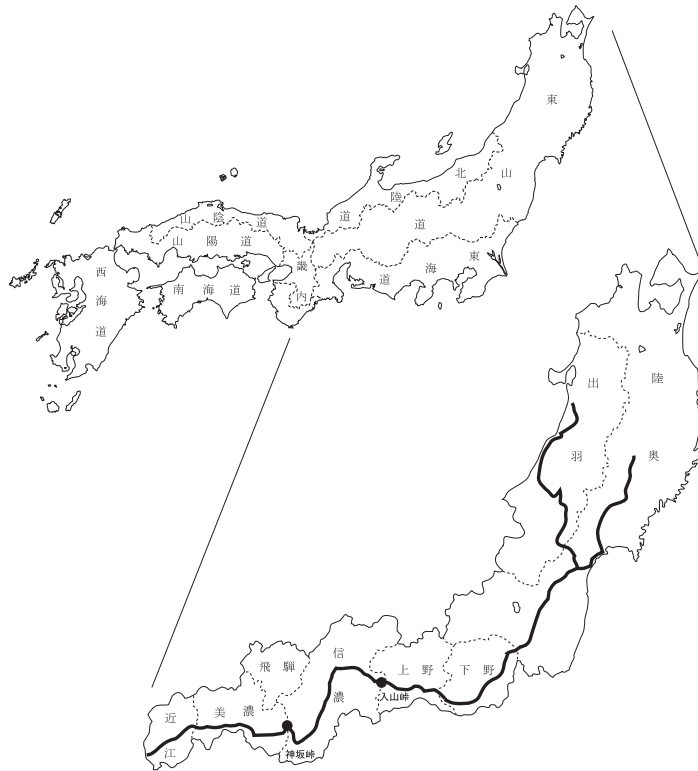


図1 七道界と東山道諸国 (作図：山添奈苗)

る(図1)。蝦夷征伐の為に軍士の簡閲や戎具の検校が行われ(延暦5(786)年8月甲子条)東国支配の中心地域であった。

神坂峠は信濃国伊那郡(現在の長野県下伊那郡阿智村。岐阜県中津川市と境を接す)にあり、東山道に属する。しかしながら、吉蘇路の開通を記した『続日本紀』和銅7年7月戊辰条には「美濃信濃二国之堺、径道険隘、往還艱難」とあり、神坂峠越えが容易ではなかったことが記録されている。『延喜式』兵部省式駅伝条によると信濃国阿智の駅馬は30疋であり、三関である伊勢国鈴鹿の駅馬は20疋である。また、『延喜式』民部省式免除徭役条では美濃国の坂本・土岐・大井駅と、信濃国の阿智(写本によっては「阿智」)の駅子の課役が免じられている。坂の傾斜が急な為に、關並に駅馬を配置し、課役を免じて駅の仕事の従事に専念させていた。

2. 古代交通に関する研究と発掘調査の意義

古代の交通については文献史学、歴史地理学、考古学から研究されている。文献史学では坂本太郎氏以降、駅伝制の解明が中心とされてきた。六国史は地域内での生活についてはほとんど記述されない。ゆえに『日本霊異記』の地域間交通を扱った説話と出土文字資料(木簡、漆紙文書)の研究結果、さらに遺跡・遺物の分析結果を合わせる形で「民間交通」の実態が明らかにされている。また、歴史地理学では諸地域の道路遺構から景観復元を行い、古代駅路は計画的に敷設された為に直線であった事を実証し続けている。ゆえに文献史学や歴史地理学による古代交通研究は考古学の調査成果に依存するしかないというのが現状である。

1. 東山道とは

東山道は古代の五畿七道の一つであり、その範囲に敷設された官道の名称でもある。

「東山道」は、彦狭嶋王を東山道の十五国の都督に拝したという『日本書紀』の記事(景行天皇55年2月壬辰条)が史料上の初見である。大場磐雄氏はこの十五国について「東方諸国を示す語として用いられたもので、古道そのものを意味してはいない」と述べている。実際に、現在でも個別の国名を当てはめるのは難しい⁽¹⁾。『日本書紀』天武天皇14年7月辛未条の詔は「東山道は美濃より以東」と記載されている。令制施行と同時期に範囲が確定したとされ⁽²⁾、『延喜式』民部省式上巻では近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、陸奥、出羽の八国を東山道としてい

例えば、記紀で「科野坂」あるいは「信濃坂」と書かれているのが神坂峠であることを明らかにしたのは大場磐雄氏である。大場氏は推定古道地域を調査し、そのデータを総合的に考える事で古道を確証していった。神坂峠は大場氏を中心として昭和26（1951）年に調査された。その際に祭祀遺物が出土した事により奈良時代に「径道険隘、往還艱難」とされた美濃・信濃国境の位置が確定した。さらに信濃坂の状況が明らかになった事で、古代東山道の具体的な研究が可能となったのである。

3. 文献史学から推定される「神坂」と神坂峠の祭祀遺跡

「神坂峠」と現在は呼んでいるが、「峠」の語は奈良時代まで使用されておらず、「坂」が使われていた。これは用語上の問題に過ぎず、奈良時代以前 - 令制施行以前 - にも自然地形を利用した峠は使われている。例えば、現在の神坂峠に比定されている信濃坂は日本武尊が東方征討の際に越えたと記紀に記載されている。

峠や国郡の境界等には神が鎮座するという信仰があったことは『万葉集』所収の歌や、境界部にあたる地域から祭祀遺物が出土している点からも明らかである。大場氏は4世紀の後半にはそのような風習があった事を神坂峠の調査から指摘した。

また、鈴木景二氏は文献史料を基とし、郡域を越えた民間レベルの交通を指摘している。すなわち、旧国郡域を越えていく峠のうち、主要ルートは「オオサカ」「ミサカ」の地名を冠していたこと。そのうち「ミサカ」は神が鎮座する、神を祀るところを示す呼称として使われていたこと。信濃国境で「ミサカ」を冠する峠は4つあるが、そのうち東山道ルート上の峠は2つで、近江国との比較から - 近江国は主要ルートの中でも特に重要な地の呼称である「オオサカ」と共に「ミサカ」が官道上にある - 信濃国の「ミサカ」は律令制を主体とした呼称ではなく、地域を主体とした呼称であることを述べている⁽³⁾。

大場磐雄氏と杉山林継氏が中心となって昭和43（1968）年および44（1969）年に行なった神坂峠・入山峠の発掘調査の成果⁽⁴⁾を再検討し、峠の祭祀について平成14（2002）年9月に講演の中で杉山氏が指摘した事例は、

- (1) 遺物から神坂峠・入山峠で祭祀が行われているのは明らか。
- (2) 峠で行われている祭祀は他に類例が無いこと。
- (3) 信濃国の人達によって祭祀が行われていたこと。

の以上3点であった⁽⁵⁾。

鈴木氏は歴史地理学の成果を日本古代史研究に用いることで、神が鎮座し、神を祀る「神の坂」 - 「ミサカ」 - が地域を主体としたものであるとしたが、それより約30年前に大場氏らの調査はこの仮説について示唆している。

境界領域の祭祀については武蔵国府跡の西北の隅の祭祀遺構が発見される等、文献上に記されない日本古代の信仰のかたちが近年を明らかになっている。

従来、峠への信仰は『万葉集』や六国史等の文献を中心に論じられることが多かった。神坂・入山峠出土の祭祀遺物は祭祀を生活の一部としていた実態を示しており、他に類例がみられないことから、東国の入口である信濃国に特有の境界祭祀であると考えられる。総合的な古代交通の研究を進めていく上で神坂・入山峠遺跡の意義は大きく、今後再評価が求められるであろう。

（宇野淳子）

註

1) 大場磐雄1969「古東山道の考古学的考察」『國學院大學大学院紀要』第1輯。以下、大場氏の論は本書による。

- 2) 武蔵国が宝亀2(771)年10月己卯に東山道から東海道に移管される(『続日本紀』)等の変更はある。その変遷については木本雅康1996「東山道 - 山坂を越えて - 」木下良編『古代を考える 古代道路』吉川弘文館を参照のこと。
- 3) 鈴木景二1998「古代交通の諸相」『古代交通研究』8、八木書店。
- 4) 関根信夫2001「梶山林継氏写真資料 - 神坂峠・入山峠について - 」『平成13年度 國學院大學學術フロンティア構想「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」事業報告』國學院大學學術フロンティア事業実行委員会、参照。
- 5) 本報告書所収 梶山林継氏講演「峠の祭祀 - 神坂 - 」。 (1)・(2)は調査当時から提示されており、(3)は講演時に杉山氏が指摘している。

刊行物

学術フロンティア事業では、年度毎の事業報告書以外に以下のものを刊行・作成した。いずれも各資料の一部であり、今後も継続して資料化する必要性がある。

画像資料をデジタルデータ化することと紙媒体の書物で資料化することの両方をあえて実行し、資料化におけるデジタルデータの有効性と限界、および資料における位置づけを試みた。これは、資料の性質と研究の目的に大きく関わることであるが、現状では紙媒体とデジタルデータの両方を作成することが最良と考えられる。

(加藤里美・中村耕作)

1 『柴田常恵写真資料目録』



平成16(2004)年1月21日刊行

A4版 397ページ

柴田常恵写真資料のうち東日本を中心とした写真資料とそれに関する情報を掲載。

2 『大場磐雄博士資料目録』



平成16(2004)年3月25日刊行

A4版 349ページ

大場磐雄博士資料のうち旧石器時代編・縄文時代編・弥生時代編・古墳時代編の目録を掲載。

3 『人文科学と画像資料研究 第1集』



平成16(2004)年3月20日刊行

A4版 200ページ

平成11年度から12年度までの研究成果は各年度の事業報告に収録してきたが、平成15年度から研究論考部門を独立させ、新たに研究報告として出版した。

4 大場磐雄博士写真資料データベース



平成16(2004)年3月

Windows版 444MB

大場磐雄博士写真資料のうち当初より整理を行ってきた約4,000枚の画像データと関連事項を収録。

研究成果と今後の展望

研究成果と今後の展望

1. 劣化画像の再生と研究

第 章以降で述べてきたように本事業のなかでデジタル化によって再生された画像資料は、総点数として13,951点に及ぶ。その内訳は次の通りである。

大場磐雄博士画像資料	平出遺跡資料など考古学画像資料（ガラス乾板）	4,276点
柴田常恵画像資料	遺跡・建造物・彫刻など文化財画像資料	5,837点
折口信夫博士画像資料	歌舞伎絵葉書など演劇史画像資料	2,547点
櫻井満博士画像資料	久高島イザイホーなど民俗学画像資料	303点
杉山林継博士画像資料	中央道関連遺跡資料など考古学画像資料	988点

大場磐雄博士は我が国の祭祀考古学の先駆者。柴田常恵は大正時代から昭和初期にかけて、文化財調査の実務者として重要な役割を果たし、その後の文化財保護活動の礎を築いた人物の一人であり、今日の文化財学の基盤形成にかかわっている。折口信夫博士は国文学の民俗学的研究の創始者であり、その活動は『折口信夫全集』全37巻・別巻4、『折口信夫全集ノート編』全24巻に集成されているが、本事業で対象とした歌舞伎関係画像資料（絵葉書・プロマイド）は、既刊全集では公開されていないものである。また、櫻井満博士資料の久高島・イザイホーは12年に1度の祭りであるが、現在は途絶しており、昭和41年撮影の写真は貴重なものである。

これら画像資料の存在は、学内では従来から知られてはいたが、その活用は劣化状態もあったため十分には行われてこなかったのが現実である。しかも従来の人文科学研究においては、古文書・古記録などの文字記録資料、土器や石器などの実物資料、伝承文化の文字記録資料が一次資料として扱われ、画像資料はあくまで二次的な資料として扱われてきたといえる。

しかし、1枚1枚の写真には文字記録とは異なった豊富な情報が含まれていることや画像表現が大きな可能性をもっていることは、本書の「一枚の写真から」や平成15年度に刊行した『柴田常恵写真資料目録』、『國學院大學学術フロンティア事業研究報告 人文科学と画像資料研究』第1集収録論文などによって明らかになってきた。

人文科学分野における近年の動向では、文字記録資料や造形物資料ではなく、絵巻物など図像資料の研究が進み、今までとは異なった文化研究の視点が提示されるなど、大きな成果をあげつつある。ところがこの先端研究においても、写真という画像資料にまでは対象が広がっていないのが現状である。

本事業のもっとも大きな研究成果は、喫緊に再生保存処理が必要であった大場磐雄博士によるガラス乾板資料の保存法の確立とデジタル再生処理法をもとに、広く劣化画像資料の再生活用の基礎研究が進められたことと、等閑視されていた画像資料の学術的価値がシンポジウムや研究会、フォーラム、さらに研究プロジェクト参加者の研究によって再認識され、人文科学の研究進展の基盤を形成できたことである。

國學院大學は、とくに考古学や民俗学、神道学、宗教学、歴史学などの人文科学分野では、多くの研究者を輩出し、博士号授与数も国内大学では最上位に位置している。こうした学術的特質をもつ大学において、文字記録資料や造形物資料に加え、画像資料の学術資料としての位置づけを進めたことは、さまざまな分野に大きな影響を与えているといえる。本事業の諸活動を通じて、各地の教育委員会・博物館・神社などでの劣化画像・古写真の保存、再生の資料化についての取り組みの重要性が喚起できたのは、その一つの現れである。

さらに研究成果としてあげられるのは、劣化画像の再生と資料化の過程では、画像に付随する諸記

録の資料化も行っており、國學院大學が所蔵する人文科学分野の諸資料についての認識が高まり、渋谷校舎再開発計画策定の重要課題の一つとして、画像資料も含めた諸資料の統括的な活用が法人理事会の懸案になって議論が開始されている。

2. 課題と今後の展望

本事業では学内外に所蔵されている劣化画像・古写真資料の再生デジタル化による資料化が進み、これらを学術資産として捉えなおすことができ、上記のように大きな成果があがった。再生・資料化した画像資料は、我が国の今後の人文科学ならびに文化財保護の進展に寄与できるものとなったが、事業推進過程ではいくつかの課題や問題が残った。

本事業の推進過程で実現できなかった課題としては、まず施設・設備面では、再生活用と資料化を行った原板であるガラス乾板やポジフィルムなどの専用収蔵施設の設置が予算的な制約で行えなかったことである。ガラス乾板やフィルムについては、防霉が重要な課題で、保存の湿度と温度に注意しなくてはならないのであり、平成18年度から渋谷校舎に建設が予定されているメディア関係の新施設のなかで計画していく必要がある。

画像資料の再生デジタル化は、前記のように当初に計画された目標を達成でき、平成16年度からは事業推進過程で新たに確認された大場磐雄博士資料や宮地直一博士資料などの再生デジタル化を進める一方、完了した再生デジタル画像個々についての資料学としての研究の深化、さらに有効活用のためのデータベース化を推進し、まだ国内では十分開発されていないメタデータによる画像検索システムの構築が急務となる。当該分野の研究者による専門用語による検索だけでなく、異分野研究者にも画像検索が可能なシステムを構築していくことが必要である。このシステム構築には産学共同の研究が必須であり、16年度からは新たな体制づくりをめざしたい。

また、本事業のプロジェクトには、国際的に文化財保護の技術指導を行っている研究者も実行委員として参加しており、海外機関などとの連携を進めることの立案も課題となる。

以上の課題を踏まえつつ今後の展望としては、16・17年度2ヶ年の研究継続を次項の図1のような事業展開で進めていく計画である。

事業展開の方向は4部門に分けて行う計画で、その基礎には画像資料の再生デジタル化を据えていく。これは研究・活用の基になる資料化とその蓄積であり、産学共同研究を行いつつすべての活動のリソースとなる基盤整備である。リソースされた再生デジタル画像は、もう一方ではデータベース化を行い、その検索システムの構築を行って、Web公開やCD配布を行い、これによる教材開発支援など活用促進をはかっていく。さらにリソースされた再生デジタル画像は、その資料論的研究を進めながらシンポジウムやフォーラム、研究報告・目録刊行によって研究統合を深めた研究発信を行っていく。また、画像資料は文字記録資料・造形物資料・図像資料などとの関連づけを行うことで、さらなる活用が期待できるのであり、本学に設置されている図書館、考古学資料館、神道資料館、折口博士記念古代研究所などとの連携をもとに統括的な人文科学資料論を構築し、学内に学術センター・総合資料館（仮称）構想を立ち上げ、学外機関との連携を視野に入れつつ日本研究の拠点形成をめざしていくというものである。

（小川直之）

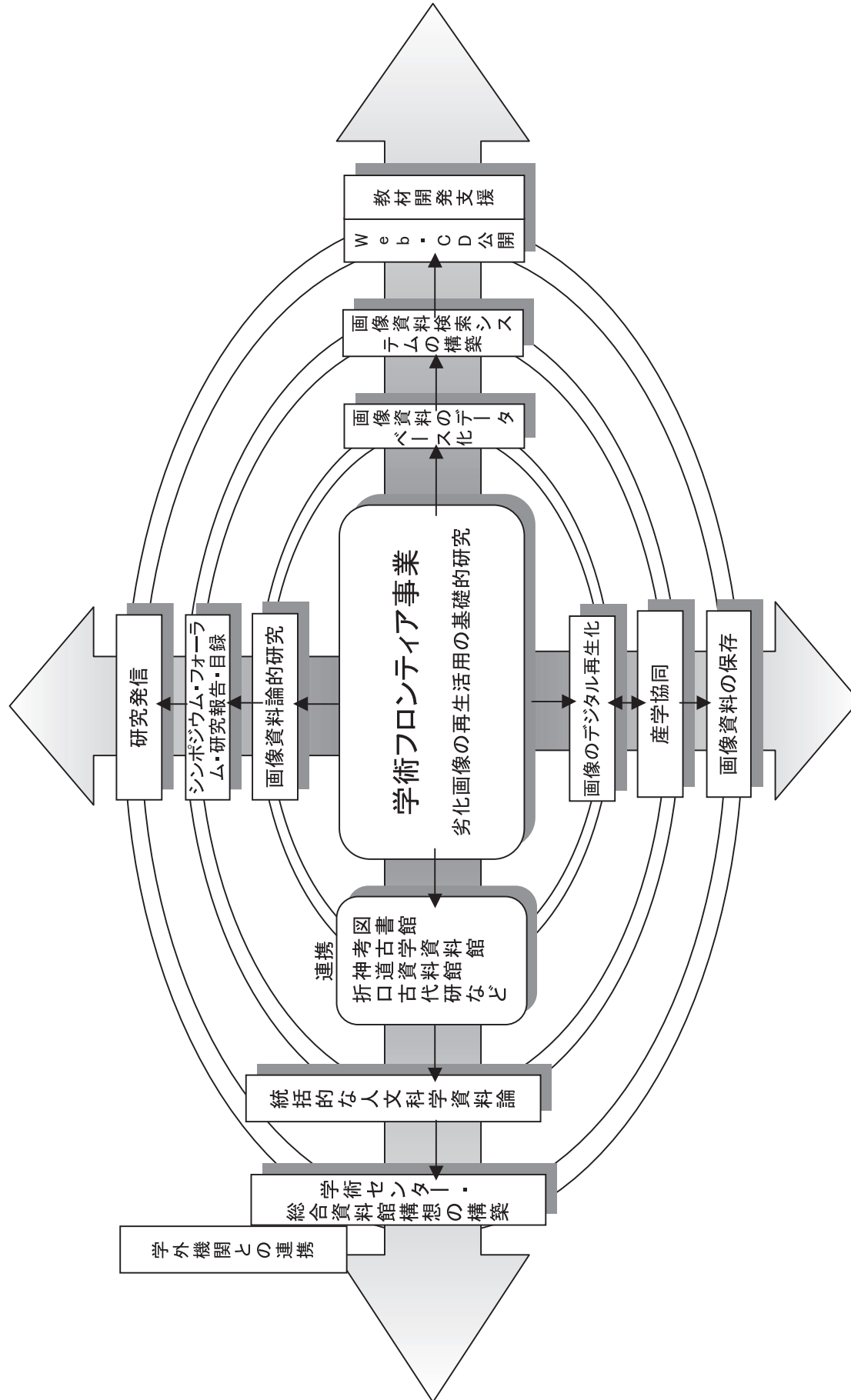


図1 國學院大學学術フロンティア構想 学術研究組織図

劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究
平成11年度～平成15年度 私立大学学術研究高度化推進事業
（「学術フロンティア推進事業」）研究成果報告書

発刊日 平成16年5月15日

編集・発行 國學院大學日本文化研究所
〒150 - 8440 東京都渋谷区東4 - 10 - 28

印刷 株式会社 秀飯舎